
チート能力を使って世界を救うはずが.....？！

いんてぐら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート能力を使って世界を救うはずが……？！

【Nコード】

N7803T

【作者名】

いんてぐら

【あらすじ】

それは全く予期せぬ突発的な事件だった。気がついたら変な場所。神様と名乗る訳の分からんジジイ。オレはどうやらとてつもなく変なことに巻き込まれたようだった。ジジイ（神様）の不時際でオレは救世主となって、滅亡の危機にあるマヴラヴの世界をチートな能力を使って回避しようと動き出そうとしたが……あのジジイ！またなんかミスリやがったなあー！！現在、光州作戦編を終了して内政パートに入りました。

機体解説集・「武御雷」追加

機体名： 夕雲

形式番号： M B F - T Y P E 9 4

所属： 日本帝国軍

製造： 富嶽重工・光菱重工・河崎重工

生産形態： 高級量産機

特殊装備： S A S（サポートAシステム）

機体説明： 帝国陸軍巖谷少佐の推薦の元、様々な革新的な技術を思いついた帝国斯衛軍所属の西園寺大和少尉のアイデアを全面的に取り入れ、帝国陸軍技術廠で組み上げられた新機軸の戦術機。従来の戦術機とは基本設計が大きく異なり、M B Fと呼ばれる内骨格構造採用による戦術機史上初めての機体となる。

軽量で従来の装甲板よりも強度が高く、さらにコストにも優れた新素材、発泡金属を全面的に使用し、構成した内骨格構造（M B F）を採用しているのが大きなポイントである。

内骨格構造を採用した結果、通常の戦術機とは比べられないほどの剛性と柔軟性、そして運動性の獲得に成功し、通常なら不可能な動きを可能とした（その例が西園寺大尉が乗った壱号機が繰り出した回し蹴りである。大きな負荷が全体に掛ったにも関わらず、歪みらしきものは見当たらなかった）。また重要な部分にのみ、従来装甲の約二・四倍の強度を誇る高い超鋼スチール合金を使用し、機体本体の防御力を強化。跳躍ユニットも新たに設計し直され、「陽炎」の推進剤消費量はほぼ変わらないのに対し、推力は約一・五倍にまで引き上げられている。ここまでだけでも機体の性能は現存する戦術機の中でも群を抜いていることには間違いないが、ソフト面では更なる強化が加えられている。

高性能な並列処理型の新型CPUを搭載する事で演算能力と即応性を強化した上、同少尉が整理し、入力されたコマンドをキャンセ

ルできる新機能を搭載した94式OSの搭載、そして各国が最も注目した補助AIシステム（SAS）である（最前線国家はこれと併せて94式OSにも注目している）。補助AIシステムは衛士の個人データを高速で学習し、衛士の操縦補佐及び軽減をOSと並んで行うシステムだが、もう一つ突出したポイントは、背部に装備された94式兵装稼働担架システムを用いて自動で敵を索敵、照準、射撃まで行える事である。その精度は高速で動き回る対戦術機戦では牽制射撃程度には使えるが、動きが鈍い対BETA戦では非常に効果的である事がJIVISで立証されている（ただし使いどころが難しく、高度な状況判断能力が必要である）。

これらハード、ソフトの面で次々と革新的な技術をつぎ込んだ結果、「夕雲」は日本が世界に誇る最強の戦術機候補へと認められていく。しかし、その革新的な技術と既存の設計とは全く違う構造に、一機本体に掛るコストの増大、現場での整備体制の不備などなど優れた性能に裏付けられた問題が上がり、結果日本の主力戦術機の座を「不知火」に譲る事になった。しかし、この機体が秘めるポテンシャルは魅力的である事は間違いなく、城内省で進められている斯衛軍専用戦術機開発計画『飛鳥計画』での機体が完成するまでの予備機、帝国陸軍は優れた衛士にのみ配備する上位戦術機として、採用された。

機体名： 撃狼

形式番号：TST-TYPE95

所属： 日本帝国

製造： 光菱重工、河崎重工、有澤重工

生産形態：改修量産機

武装： 大口径爆裂滑腔砲《雄琴》

ドラムマガジン付き74式支援突撃砲乃（日本帝国運用）

特殊装備：武器及び弾薬保持用アタッチメント

機体説明：各国が第二世代戦術機の配備、そして第三世代戦術機の開発に躍起になっている中、世界で最も普及しているF-4「ファントム」を利用して、「機動性を殺し、支援と火力に重点を置いた兵器」として開発されたTST（戦術支援戦車）は、最初こそその能力が疑問視されていたが、固定装備である有澤重工社製大口径爆裂滑空砲《雄琴》による面制圧能力と、圧倒的なペイロード能力は徐々に評価され、迎撃戦や防衛戦などでは移動砲台、侵攻戦などでは後方支援機もしくは補給支援戦車としてめざましい活躍を見せ始めた。

また各国が、「撃狼」のライセンス生産を希望した理由には上記のような限定した運用での高い性能の他に、操縦が比較的簡単であること。生産性が高く、使われている技術は低く、一定の技術水準を持たない国家でも改修が容易であることなどが上げられている。

弱点として、無限軌道を採用したことによる重量の増加や移動速度の低さや、最前線国家では必要な対BETA近接戦闘能力の低下などが上げられるが、割り切った運用をすることでその弱点をカバーしている国家が大半である。

ちなみに、各国では様々な呼び名が存在し、米国や欧州では直訳で「インパクトウルフ」、中華統一戦線では「砲獅」と名付けられている。

武装説明

大口径爆裂滑腔砲《雄琴》

有澤重工が開発していた兵器の一つ。砲身基部が折れて折り畳み

が出来る。戦術機に搭載するにはあまりにも重すぎるとして採用が見送られていた実弾兵器。広範囲殲滅を可能としている。弾頭製造費用が高いが、それに見合う威力を持つ。

AC4ファンなら誰もが一度は使う有名な武装の一つ（いんてぐら愛用）オープニングに登場したアリーヤにも装備されていた。

機体名：武御雷

形式番号：MBF-TYPE98（R・F・A・C）

世代：第四世代

所属：日本帝国ス衛軍

製造：富嶽重工・遠田技研

生産形態：量産機

固定武装：97式高周波振動短刀×2

特殊装備：内蔵型高周波振動発生装置

機体解説：日本帝国ス衛軍に相応しい戦術機を生み出すべく、1992年より始まったス衛軍次期主力戦術機開発計画『飛鳥計画』で開発されていた機体は幾つかの条件の元、その高性能を実現していたある意味での欠陥機でもあった。

將軍家の護衛を主な任務とするス衛軍専用機の為、十分な整備体制が整っている国内での限定運用を中心に置かれて設計されていた。しかし高性能を実現するために整備性や生産性、さらには操縦性すらも無視して性能を突き詰めた結果、あまりにも高価な調達費用に加え、維持費も馬鹿げたほどに掛かる。加えて職人レベルの技量をもつ整備兵でなければ完全な整備が出来ないと言う複雑かつ難解な

構造を持っていた。斯衛軍もこれらの問題に頭を痛めていた所、M B F - T Y P E 9 4「夕雲」と言う今までにない戦術機構造を生み出した西園寺大和に注目し、彼を主任開発者に据え、計画を再スタートさせた。

西園寺大和はこれまで開発に携わっていた全ての開発技師を集め、「全て組み直して、97年には先行量産機を完成させる」と言うとしてもないハードスケジュールを発表し、一時は各部門から無謀だと言う声も上がったが、彼はすでに具体的な構想を組み上げており、それをその場で発表。開発技師たちはその構想がかなり現実味を帯び、なおかつ完成度の高い内容に絶句しつつも、この構想であれば十分に97年に先行量産機を組み上げられると判断され、開発はすぐさま開始された。

西園寺大和が「武御雷」に求めた性能は、現時点における最高の性能とB E T A戦争の長期化の見越してのメンテナンスやアップグレード、改修なども比較的簡単に行える機体構造、そして背部装備換装システムによる格闘、射撃、機動型への特化機への換装だった。後に「武御雷」と名づけられるこの期待の主なコンセプトは以下の通りである。

- 1・完全な上位機種として製造し、整備性や生産コストをある程度無視する。
- 2・近接格闘能力も含め、現状における最高レベルの性能を求める。
- 3・加速性能に優れた高出力低消費の新規跳躍ユニットの開発
- 4・新型燃料電池搭載による稼働時間、出力の向上
- 5・現在までの運用されている日本製戦術機との互換性
- 6・B E T A戦争の長期化を見越しての改修やアップデートを行うための内部構造に余裕を持たせる
- 7・装備換装システムによる状況に応じた特化機への変更（背部接続の装備換装システムは部品干涉の影響で、全身にアタッチメントを装備することで全身装着型装備換装構想へと変更された）
- 8・対B E T A及び対戦術機としての運用

結果、96年に試作機が製造され、速足で97年に先行量産機、翌98年には斯衛軍への実戦配備が始まった。これは西園寺少佐が生み出した技術があまりにも完成度が高く、あらゆる状況下で致命的な問題と言える問題が発生していなかった事が最大の点である。後の戦術機開発史において日本のMBF-TYPE98「武御雷」は第三世代戦術機開発に躍起になっていた各国をしり目に、いち早く未知の領域である第四世代に到達した戦術機として後世に語り継がれ、数々の名機を生み出す始祖となる。

・腕部

「武御雷」の腕部の設計に対して、西園寺大和が何より重視したのは柔軟な可動性と十分な耐久性、軽量化、そして信頼性だった。近接格闘戦を基本とする日本の戦術機の部品損耗率や摩耗個所の統計を見ると、やはり腕部が常に上位にランキングしている上、熟練の衛士の操縦技量を生かし切れていない部分も見受けられた。加えて今後におけるユーラシア大陸のハイヴ攻略も考えても、既存の腕部では絶対的に耐えられないと判断した。これらの要素を考えつつ、設計された「武御雷」の腕部は消耗品には日本国内で流通している規格品を出来る限り採用しつつ、ケーブルや装甲デザイン、重要な稼働個所の部材は選りすぐりのパーツを使用し、各部をユニット化することでその性能と問題であった劣悪な整備性を高める事に成功している。また戦闘の長期化を見越し、メンテナンスやアップグレード、改修なども比較的簡単に行えるようにされているのも特徴的なポイントであった。

腕の外側側面には固定兵装として97式高周波振動短刀を内蔵し、手側に出して固定武装とする事も出来るし、肘側に射出する事でマニピュレーターで保持する事も可能である。加えてアタッチメント用のコネクタを腕部、肩に装備されている、これはAFP計画の一部を利用する為に先行量産機から急遽設置された代物であった。尚、指先のスーパーカーボンはコストダウンを目的に採用は見送ら

れている。

・脚部

腕部同様、「武御雷」の脚部も同じようなコンセプトで設計されているが、腕部以上に耐久性を重視して作られているに加えて、姿勢制御補助スラスタが設置されているのが特徴的なポイントだった。跳躍ユニットに推進剤が必要であるように、戦術機の三次元機動は有限であり、主脚での移動や戦闘機動は当然存在している。その為、ある意味では腕部以上の耐久性や可動性が必要なのであることから、新型発泡金属や超硬スチール合金などを多用することでの問題をクリアにしている。十分な剛性を確保した上、二又の爪先と踵に小型の高周波振動発生装置を内蔵させた事による、格闘攻撃も可能になったのも特徴として挙げておこう。

・頭部／胴体

「武御雷」は対BETA戦闘に特化していないが、対戦術機戦闘にも特化した万能機でもある。頭部には量産機で搭載できるコストぎりぎりの各種センサーや新たに設計された新型複合センサーなど各種最新技術がふんだんに取り込まれている。胴体部分は新たに製造された発泡金属と超硬スチール合金に二重複合装甲、三重に渡って予備回路が張り巡らされており、高い損傷復旧率を確保している。また新型燃料電池である水素燃料電池のおかげで、各部の出力向上が可能となり、「不知火」や「夕雲」との出力の競い合いでは、あっさりと二機を押し出している。

・ガ○ダムの説明書に書いてある感じに書いてみました。

武器解説（前書き）

徐々に増えていきます。

武器解説

主腕装備用兵器

・93式突撃散弾砲

西園寺大和開発の突撃前衛用200mm口径ショットガン。電動機構による自動装填から、ポンプアクションによる手動装填も可能。ロングバレル、ショートバレルへの換装が可能で、本体には六＋一発装填出来、連射も可能（ただし反動が大きく命中率は大きく低下する）。またオプション装備として補助照準システムがある。ヘリカルローディング方式のマガジンと大量の弾薬を確保できるボックスマガジンが用意されている。射程距離こそ短い、範囲内ではあればかなりの威力を誇る武器である。

弾種は小型BETA用の数百発の鉛玉をばらまくバードショットシェル。中型BETA用のバックショットシェル。大型BETA用のスラッグ弾の三種類が用意されている。イメージはコトブキヤから販売されているMSGのショットガン。

・97式高周波振動刀

次世代近接戦闘武器。74式近接戦闘長刀に、超小型高周波装置と小型高出力バッテリーを内蔵したモデル。高周波振動発生時には刃の部分が赤く発光する。その切断能力は突撃級の硬い外殻をあつさり、と真つ二つにする。連続仕様時間は三十分。高周波振動を使用しなくてもただの長刀としても十分に使える。「武御雷」はこの武器の使用を最初から想定されていた為、使用時間に縛りはない。

・97式高周波振動短刀

次世代近接戦闘武器。97式高周波振動刀の短刀ヴァージョン。

連続使用時間と出力が低いのが特徴。ちなみに刀身は赤く発光しない。

・97式突撃砲

「武御雷」正式採用の突撃砲。87式突撃砲のデザインを継承しつつ、機関部の剛性を十五パーセント向上させ、装弾数を十パーセント増量している。120mm砲口の下部に高周波振動銃剣を装備し、緊急時の近接格闘戦に対応している。ただし完璧に扱いには訓練が必要。

・97式重支援機関砲

口径60mmのロングバレル機関砲。耐久性と信頼性を重視して機関内部はシンプルな作りになっている。装弾数は長方形型のボックスマガジンで装弾数1800発。発射可能数は毎分300〜360発。各種多目的弾頭を使用可能。重量はあるが突撃級や要塞級に効果的。

イメージはゼク・アインの実弾マシンガン。

ブログ 神の間違い（前書き）

初めての投稿となります。いんてぐらと申します。前々からマブラヴ世界で、チートな能力を使って色々やってみたい物語を書きたくて投稿いたしました。かなり不定期更新になるかと思いますがよろしく願います。

あつ、ご意見、ご感想、誤字脱字報告は常に受け付けております。

ブローグ 神の間違い

大学四年生の春。オレは最期の大学生活を満喫しようとしていた。単位は問題なし、内定も地元の中流企業だがしっかりと頂いた。つまり卒業後の備えは無問題。

ならばこの一年、オレは何をすべきか。語る事もない。遊んで遊んで遊びつくす！そしてあわよくば心底惚れて、惚れられた彼女をゲットする！それがこの一年の目標だ。

時刻は八時半。優雅な春休みが終わり今日から大学が始まる。オレは教科書数冊とノートを鞆に放り込み、家の玄関の扉を開けた瞬間　オレの三年間待ち望んだ一年間は虚空の彼方に消え去った。

「はあっ？」

オレは確かに一人暮らししているマンションの、玄関を開けて廊下へと踏み出した筈だった。

なのに今自分がいるのは真っ白い空間。地平線なんて存在しない。ただただ真っ白い世界にいた。

「はっ？　はい？」

眼をぱちくりさせて辺りを見回した。まったく理解できない。一体全体何が起こったのでしょうか？

「あー……やっちゃったわい……」

ふと声がした。振り返ると、真っ白い服にたつぷりの白ひげを蓄えた爺さんが「あちゃー」って言うばつの悪そうな顔でしていた。

と言うか、完全に神様？ 何か杖みたいもんも持ってるし……しかしテンプレートだな。捻りがねえぞ。捻りが。

「あー……爺さん。悪いけどがここどこ？ それとアンタだれ？」

「うゝむ……おかしいの。座標は間違っていないかった筈なのじゃが……儂の特技の『うっかり』が出てしまったかのぉ……参った参った」

「おゝい、爺さん」

「んっ、おおすまんすまん。完璧に手違いじゃ。すまんの少年。早く帰して……あらっ？」

懐から小さなクリップボードを取り出し、眼を走らせた瞬間、爺さんは冷や汗をたらたら流しながら、実に拙そうな顔を浮かべた。

「あー、なんてことじゃ……よもや勝手に転生システムが作動してしまうとは……」

「爺さんー。一人で理解してないで状況を説明しろー」

「うっ、ああ。すまんの少年。実に言いにくい事なんじゃが……少年。君は今死んでしまったわ」

「はい？」

何言つてんのこの爺さん。痴呆症か？ ボケたか？

「玄関を出た直後に震度三の地震が発生し、落ちてきた玄関灯が頭に直撃。頭蓋骨陥没による脳挫傷で死亡……すまん。完璧に儂の手違いじゃ。ほんと、申し訳ない」

片手を上げて平謝りする爺さん。

これはいかん。爺さん完璧にボケてるな。なら若者としてやるべき事はただ一つ。

「爺さん……病院行こうか？」

警戒心を沸かせないように、オレは自分に出来る最高に優しい笑顔を浮かべて言った。

「かーっ！ 儂はまだボケとらんわ！」

「いやいやアンタ、程良くボケてるよ。訳の分かんない事言ってる時点でもうボケ老人決定。安心しろ、オレの親戚の姉ちゃんがホームヘルパーの仕事してるから、最悪紹介して」

「ええいつ！ 儂をボケ老人扱いするとは不届き千万な奴じゃ！ 儂を誰と知っているのか！？」

「神様ルツクのコスプレをしているボケ老人」

「違うわい！ 儂は本物の神様じゃ！」

「あーはいはい。おじいちゃん。掛かり付けのお医者さんから何か貰ってないかな？ 電話番号とか」

「かーっ、信じよ。本当にワシは神様なんじゃあー！」

涙目になってるよ自称神様……まあいいか。ここは頭ごなしに否定せず、まずはお話を聞くんだったよな姉ちゃん。

「あー、分かった分かった。信じるよ神様」

「優しい笑顔で語りかけてくるなあー！ まるっきり信じておらんじゃろ！」

「ううん。おじいさん。僕は信じているよ」

「口調が変わったとるじゃろうがぁ！ ええい。もうよいわ！ こうなってしまった以上、主に言って貰うしかないな」

そう言っつて、クリップボードの上の紙にさらさらと何かを書き込む自称神様。

「よいか。主がこやつの変わりに行くのは人類が滅亡しようとしているある世界じゃ。主はこの定められた人類滅亡のシナリオを書き換えなければならん」

「うんうん。それで……」

優しい笑顔をキープ。自称神様、弱冠半泣き。

「……その世界に行くに当たって主には幾つかの能力を付与させる事が出来る。これがその能力の一覧じゃ。好きに選べ。ただし最初に付与できるのは二つまでじゃ」

と、自称神様が持っていたクリップボードがふわふわと宙に浮き、オレの手元に舞い降りてきた。驚いたよ自称神様。アンタ、ボケる前は手品師だったんだな。

とりあえずオレはクリップボードに書かれている紙に目を通した。そこにはこんな項目が書かれていた。

操縦技術レベルS

機械技術レベルS

肉体強化レベルS

容姿レベルS

高性能専用兵器所有。

高性能サポートメカ。

本拠地強化。

初期ポイント十万。

なんじゃこりゃ？　それが第一の感想。意味不明だ。まあとりあえず前の二つにマルを付けた。

「決めたな」

再びクリップボードがふわふわと浮いて、自称神様の手元に。

「ほほっ、驚いたわ。本拠地やポイントに眼を向けず、自身に還元できるモノを選びおったわ。ふうむ、これは興味深い」

唸る自称神様。

「これはなかなか面白い事になりそうじゃな。よし、それじゃあ行つて来い。通称、マブラヴオルタネイティブの世界へと」

「ストーリーープ！！」

「な、ななんじゃ！？　急に大声を出すな。心臓が止まるかと思つたではないか！？」

「……爺さん。今、何て言つた？」

聞いた事のある単語だ。オレは腕を組み、眉を傾げながら尋ねた。

「心臓が……」

「その前。マブラヴとか言わなかったか？」

「言ったの」

「オレにどこに行けと言った？」

「マブラヴオルタネイティヴの世界に」

「……すまん。全然理解出来ない。だいたい、マブラヴの世界って仮想じゃねえか」

マブラヴオルタネイティヴ。

確か、友人がしつこく勧めてきた18禁のギャルゲーだ。オレはあんまりこういうの興味無かったんだが、あまりにしつこく勧めるんで借りてプレイしてみた所 見事にハマった。元々スーパーボット 戦やエースコ バツ、アーマー コ、天元突破グララガ などの熱いゲームが好きなオレはこのマブラヴの壮大なストーリーにハマりにはまった。桜花作戦出撃前のインド人？ 司令官の演説なんて胸に手を当てて聞いていたぐらいだ。

「仮想じゃと？ 誰がソレを決めたんじゃお主？」

「はっ？ だってあれはゲーム……」

「お主の世界ではそれがゲームにすぎないだけじゃ。世界は無限、可能性は果てし無い。数多に存在する世界の一つに、そのゲームと同じ世界があってもおかしくはなからう？」

……並行世界。パラレルワールドの理論か？

「……まあ百歩譲ってそれが現実だとして。だが何でオレがあ

の世界に行かなくちゃいけないんだ？　　と言つか元の世界に帰せ」

自称神様は気まずそうに顔を歪めた。

「帰してやりたくとも帰してやれないんじゃない？　お主と言う存在は、数多の世界の中でもたった一つ。元いた世界のお主の肉体が死んでしまった以上、別の世界で一度お主を定着させた後、再び転生と言う形で戻すしかない」

「……なるほど。じゃあ行つた瞬間に転生させる」

「無理じゃ。そう直ぐには出来ん。第一、主がその世界で滅亡のシナリオを描き直す役目を担っている。その役目を全うしない限り、転生は行えん」

つまりなにか。あの人類産つぷちの戦況をひっくり返してようや
く元の世界に帰れると？

……ふざけんな。

「ふざけんなあー！！　ジジイ！　オレの明るいキャンパスライ
フを返しやがれえー！！！」

「ぬおおお！？　胸ぐらを掴むな。血が、毛細血管が！？　動脈
瘤が破裂するうう！？」

「無茶でもやれ無理でもやれ！　自称神様あああああ！！！」

「自称じゃなくて神様じゃよ儂はああ！！！」

とりあえず怒りに任せて自称神様を振り続ける事十分。ようやく落ち着いてきたオレは、最後に残った怒りを大きなため息とともに吐き出し、改めてぐったりとしている自称神様に向き直った。

「改めて確認するけど、それしか元の世界に戻る方法はないんだよな？」

「う、うむ。ないの……」

「分かった。行こう。まあ、何とかなるだろう」

こういう時は前向きに考えよう。とりあえず目標と手段は分かったんだ。まあラブの世界に行くのは少し怖いが、戦術機を現実に見る事が出来るのには少し興奮する。……いややっぱ訂正。行きたくない。BETAは気持ち悪いし、群がられるのはすげえ怖い。でも、それしかないんだよな。はあ。

「おおつ、行ってくれるのか?! 感謝するぞ。それと間違っしまつて本当に申し訳なかったの」

「もういいさ。人を憎まず、罪を憎めつてね。やってしまったものは仕方ない。次からは気を付けてくれよ。ところで本来行く筈だった奴ってどんな奴だ？」

間違つてオレが選ばれたなら、本当に選ばれた人間がいる筈だ。何かすっげえ屈強で意志の固い奴なんだよな。

「見るか。こいつじゃ」

そう言つて、写真を一枚見せてくれた。その写真に移った人物を

見た瞬間、オレは思いつきり口元を引きつらせ、戦慄した。

「……正気か？」

「正気じゃが何故じゃ？　なかなか生命力がありそうな子じゃと思っただが……」

「ふざけんな！　こんな奴がマブラヴの世界に行ったら一週間と待たずに人類が滅びるわ！」

写真に写っていたのはでっぷり肥った中年だった。明らかに不衛生な姿でぴちぴちに張り裂けそうなアニメキャラTシャツがあまりにも醜い。自称神様。アンタ、本当に正気か？　頭のネジが十本ほど吹っ飛んでいないか？　いや、やっぱりボケてるなこのジジイ！

「……もういい。さっさと送ってくれ」

「う、うむ。それじゃあ行くぞ。主が行くのは白陵基地周辺じゃ。原作は知っているようじゃから、最初に何をすればいいのか言わずともよいだろう？」

「ああ」

と言う事は主人公の白銀武と同じ行動を取るのか。あの超絶美人の香月夕呼に合えばいいのか。どうやって会おうか。まあその辺も白銀を参考にさせてもらうか。

「じゃあ主が世界を救う様子を見させてもらっぞ」

「まるで救世主だな」

「その通り、主は救世主の役目を背負ったのだ。では、行って来い！」

真っ白い世界が漆黒の世界へと変わる。それと同時にオレの意識も薄れ、闇に同化した。

意識を取り戻した瞬間、オレが最初に叫んだ言葉は。

「あうあうー（じじいー！！！！！）」

「元気な息子だ」

「あなたに似たんですよ」

見知らぬ男と女がオレを顔を覗き込んでいた。二人の顔は至福に満ち溢れ、誕生した一つの命を慈しんでいる。

そう　　白陵基地に行く筈が何故かオレは赤ん坊になっていた。

くそじじい――――！　また何かミスりやがったなあ
ああ――！

「アンタ。この書類間違ってるよ」

「ほっ！？　しもたああ――！！　また『うつかり』しても
うたああ――！」

第一話 子ども時代のさっさと過ぎていく（前書き）

早くチート無双がしたいけど、我慢我慢。

と、言う事で第一話です。

第一話 子ども時代のさつさと過ぎていく

神様から貰ったチート能力を使い、このBETAが支配する世界を救う為に東奔西走する筈が、どこぞの馬鹿なお爺様のお陰で赤ん坊をする事になりましたオレです。

現在は何とか年月を重ねて四歳になりましたが、屈辱の連続で何度ベビーベッドから飛び降りて死のうと思った事か。

分かるかな諸君。体は赤ん坊だが、心は二十代の男のオレ。にこやかな顔で、それもびっくりするぐらいの美人の母親にオシメを変えられる屈辱。もう耐えられない。たぶんこの先、何度も思い出しではその恥ずかしさにのた打ち回るに決まっている。まあ……デメリットもあつたがメリットもあつたわけで、特に美乳を……げふんげふん！

「大和。誕生日は何が欲しいですか？」

優雅な藍色の和服を纏った母上が、しっとりとした笑顔で話しかけてくる。うん。オレの母上、本当に美人だ。流石は武家の奥様。礼儀正しく常に背筋が伸びていて、凛とした美しさの中にも優しさが見える。現代のチャラチャラ娘共よ。少しはこの古き良き日本伝統の美しさを見習えってんだ！

ちなみにこの世界でのオレの名前は西園寺大和。驚く事にこの西園寺家はあの五摂家に近い有力武家らしい。お陰で色は赤。原作では月詠中尉と同じですな。

「ははうえ。オレはせんじゅつきのほんがほしいです」

オレの言葉を聞いた母上が不思議そうに首を傾げた。それも当然です。四歳の子どもが欲しがるものじゃないですからね。

「戦術機の本……図鑑のことですか？」

「ちがいます。きょうかしよがほしいです」

「教科書……そんなモノが欲しいのですか？」

「はい！」

何故こんなモノを必要かと言うと、あのお爺様のミスはオレの転生先にもならず、最初に付与してくれる能力にも悪影響を及ぼしている。オレの呼び出しの声に反応して空間に投影されるステータス画面を見ると、操縦技術及び機械技術Sの筈が、六段階評価のCにまで下がっていた。

ちなみにこのステータス画面には気づいたのは三つの時。噂のお爺様が現れて、物凄く申し訳なさそうな顔で今回の不手際を謝罪したが、最期のほうでは何とも陽気に「まあ、そんなこんなで頑張ってくれ」と言いやがった。目標追加。元の世界に帰還とお爺様の貧相な頬に拳を入れちやる！

まあ、お詫びにニュータイプみたいな予知みたいなスキルを付与して貰ったが、現状ではそれが限界らしい。まあ、いい。過ぎた事を悔やんでも仕方ないな……男は懐と心を広くってね。

とにかく現状のオレのスキルは。

操縦技術：C

機械技術：C

未来予知：A

キャピタル：100

C判定は一般操縦者より少し優れているぐらいだそうだ。要は隊長クラス。未来予知に関しては何事にも関して、先読み出来るそう
だ。F A Eのイバーのスキルみたいなもんか。

キャピタルは文字通り、資産。これがあればオレに新しい能力を付与させたり、様々な兵器を開発できたりするんだけど……100程度じゃ何も出来ねエ！それにどこからその兵器がどこから出てくんだよ！？あーもう、あのシジイ。うっかりに加えて説明不足だろうがぁ！！

ああ。そうそう。このキャピタル100って言うのも、四歳になるまで何とか増やしたんだぜ。どうやら何らかの知識やら技術、経験を積むとキャピタルが増えていくらしい。ちなみに母上のお手伝いをしてこのキャピタル100を獲得しました。お駄賃か！

「ぼくはせんじゅつきにきょうみがあります。だからいちどよんでみたいのです」

とにかく何とか実戦に出る前までに知識やら技術やらを獲得しとかないと。目標達成前に戦車級とかに生きたまま喰われるなんて死に方絶対嫌だしな

「……珍しい子ですね。本当にそんなものでいいのですか？」

「はい！」

元気よく声を返す。母上はどこか納得していない様子だったが了承したらしく、後日、しっかりと戦術機教本二冊を頂きました。

時間は流れて五歳になりました。年号で言うなら一九八四年。米国の傑作機F-15C「イーグル」が配備され始められたり、BETAが南下してインド亜大陸に侵攻した年だ。だが、今のオレにそんな事はどーでもいい。身近なビックイベントのほうが重要だ！

何と妹が出来ました。こっちのほうかはるかに重要です重要です。大事な事なので二回言いました。それにしても……くそーオレが寝ている間にやることやってたな親父！あの美人な女性と！でもまあ一応この世界ではオレの両親な訳で……何か複雑だ。でも家族が増えた事は嬉しいな。

「大和。抱いてみますか？」

「はい」

母上に支えられ、誕生した小さな命を抱きかかえる。小さな顔と吐息。豆粒のように小さな手と足、そして生きる為に鼓動を繰り返す小さな心臓。

「おおっ……」

感動した。一人っ子だったから兄弟に憧れを持っていた。ガキの頃、親父やら母さんに頼んだらしいからな。兄弟をくださいってな兄妹がいる連中には分からないけど、一人っ子って意外と寂しいんだぞ。一人遊びが上手になるんだぞ。妄想とか得意になっちゃうんだぞ。

「重いです」

「それが命の重み。今日から大和は兄になります。朝陽あさひを守ってあげるのですよ」

……守りますとも母上！初めての妹。憧れた兄の立場。うおお！なおさら頑張れねば。こんな可愛い妹を戦場に出す訳にはいain！

それでは善は急げ。さっそく行動。

オレの父親、西園寺義久は斯衛軍第四大隊の指揮官な為、軍事関係の教本の入手は比較的簡単だ。その日の内に父親に頼みこみ、新しい戦術機の教本と整備教本、そして戦術概論、さらには和訳された孫子を頂きました。戦術機及び教本関係は整備知Cのお陰で理解

出来たけど、戦術概論はちょっと四苦八苦。この辺もスキルアップの必要があるな。孫子は前の世界で呼んでいたから復習みたいな感じで理解出来ました。

その頃から父親から「将来が楽しみだ」としきりに言っていた。どうやら父上の中ではオレの将来のビジョンが広がっているようだ。まあ確かに武家の嫡男な訳ですし、ゆくゆくは斯衛軍入隊となるわけですが……うーん……どないしましょー。正直、斯衛軍には何の魅力も感じてないんだよな。本土決戦以外に目立った戦績ないし、入るなら帝国軍が国連がいいな。そっちのほうがキャピタルを溜めやすそうだから。……自身のスキル強化以外、今のところ使い道がないけどな。ほんとマジで説明しに来い！ 無責任すぎるぞ！

一九八七年。八歳になりました。この時代、BETAによる欧州陥落の序章が始まる筈だ。欧州各国政府がBETAの西進を受けて

イギリスやグリーンランド、カナダなどの首都移転を開始。同時に日本では常任理事国入りが決定、そしてアメリカではオルタナティブ5に必要不可欠なG弾の起爆に成功する。ちつ……チート能力があるなら邪魔してやるモノの……。

『あー、てすてす。聞こえるかのお？』

檜山さんが帰って頃に、あの爺様の声が響いた。周りを見渡すが姿が見えない。今回は声だけらしいな。

あつ、檜山さんって言うのは西園寺家で長く教育係を務めている年配のお爺さんだ。だがお爺さんと言っても今喋りかけている爺様とは正反対で、六十代後半だというのに背筋が曲がってないし、体つきもしっかりしている。加えてめちやくちや賢い。何でも昔、帝国大学で教鞭をとっていたらしく、教え方もすげえ上手で初めて学ぶのが楽しいと思えましたよ。そんでもってこの檜山さん、柔術の達人でたまに修行を付けてくれる。キャピタルが溜まりますなあ。

『きこえておるようじゃな。どうじゃ順調か？ あつ、心の中で話しかけてくれれば儂に聞こえるから安心せい』

『何が安心せいだ。ようやく現れやがったな。今まで何をしていたやがった！？』

『色々と忙しかったんじゃ。儂、神様じゃしな 主に根回しじゃったが……』

『何か酷くオレに関係していそうな事が聞こえたが……まあいいわ。で、このステータス画面、オレのスキル能力アップ以外ろくに使えねえじゃないか。不良品かこれは！？』

『んなわけなかるう。ちゃんと機能しておるわ』

『じゃあこの兵器開発やら素材開発、本拠地強化の項目は何！？
試しにやってみただけど何も反応しなかったぞ！』

『そりゃそうじゃ。そう言ったモノを開発できる本拠地にお主がい
ないからな……いやな、今日はその件について謝りに来たのじゃ。
お主が赤ん坊に転生してしまったから色々と不都合連発で……今
回のコレもその一つじゃ』

『じゃあオレをその本拠地に移動させる手段ぐらい用意してくれ
よ。テレポートとかあるだろう？』

『無論するつもりじゃ……と、言いたい所じゃが色々理由が出
てきて、しばらくはお主に干渉出来んのじゃ。じゃから悪いが自力
で行ってくれ』

『無責任すぎるぞおい……』

あまりにも理不尽で無責任だ。これは殴られても仕方ないよな！
相手が爺様でも関係ねえよな！ 決めた帰還の際に二発殴る。両
頬を挟る様に打つべし！

『確かに無責任じゃ。謝罪の使用が無い。だが、お主ならこの程
度の逆境、乗り越えられると信じておる！』

『はいはいもういいよ。もう頼まないし、頼みもしない。で、そ
の本拠地はどこにあるんだ？』

『地球と火星の中間地点、アステロイドベルトに隠してある超弩級宇宙戦艦じゃ。じゃあ、そろそろ限界っぽいからまたのおー』

……はあ！？ 地球上じゃなくて宇宙！？ それも火星との中間地点だと！

「ふ……ふざけんなあー！ どうやってそこまで行けっただんだ！ 寝ぼけるのも無責任もほどにしやがれ ！！！」

思わず声を上げる。この現実には叫ばずにはいられない。

自力で行くにしても無茶苦茶だろうが！ 本当にふざけんな！！

後日、ステータス画面をくまなく調べた結果、緊急転送システムと言うのを発見しました。ただしキャピタルが三百万必要とのこと……どうやって貯めろちゅーねん。八年頑張つてトータルで七万ちょいだぞ。それもスキル強化に当ててほとんど残っていない。

本当に最悪だ……。

仕方無いこの鬱でイライラな気持ちを妹の朝陽の顔を見て発散させよう。

朝陽の部屋に入る。ちょうどお昼寝中の様だ。物音と気配を殺して接近。愛くるしい顔を見つめて……むふー。

シスコンなんて理解出来ねエ、と思つてたけどごめんなさい。今なら理解できる。いや、既にオレは同志です。世界中のシスコン達

よ！

SIDE・西園寺時子

私は部屋で一人、帰り際に檜山氏から手渡された一枚の紙を見つめていた。

複雑な数式が並んでいる。文学を専攻していた私にはその内容はさっぱり分からないが、檜山氏が言うにはこの数式は帝都大学の学生ですらおいそれと解く事が出来ない難問らしい。そしてその難問を、僅か八歳の大和がいとも簡単に解いてしまった。

『ご息は間違いなく天才です。このまま知識を得ていけば間違いなく機械工学……おそらくは戦術機関連で大きな成功を収めることでしょう』

檜山氏の言葉が頭を過る。夫にこの事を話せば、喜び大和の才能を伸ばそうと色々と助力してくれるでしょう。息子の才能を開花させる。それは親として当然の行動です。

ですが……ですが、そんな直ぐに開花させる必要はないと思うのです。慌てずゆっくりと開花させてやるのが一番なのではないか……。

いえ、違います。これはただの詭弁。私はただ、息子と

の時間を取られたくないだけ。

大和の才能がどのくらいのものなのか、私はきちんと把握できていません。ただ普段温厚な翁である檜山氏が興奮気味に言っていたところを見ると、並大抵の事ではないのでしょうか。もしかすると、ほんの数年で特例として軍に勤務してしまうかもしれません。そうなれば大和との時間が削られてしまう。

まだ一緒にいたい。まだ大和の成長を見守っていたい。

だから私はこの事を夫には伝えません。もう少しだけ大和と同じ時間を作りたいから。

もちろん、来るべき時が来れば、私はちゃんと大和を送り出す用意はあります。BETAとの戦争の時代、天寿を全うする事無く死んでゆく人々は大勢います。だから私は子ども達との時間を出来る限り多く作っておきたいのです。私ももしかすると天寿を全うする事無く、死んでしまうかもしれませんから。

SIDE・大和

九歳になりました。時代は一九八八年。教本読みまくって色々と考えて、母上の手伝いして、父上の修行と言う名のしごきに耐えて、操縦技術：B、機械技術：Aにランクアップできました。加えて肉体強化：C、プログラミング技術：Aを獲得。OSは必要不可欠なポイントですからな。

「大和。私の傍から離れるなよ」

「はい。父上」

父上の手に連れられて、オレは長年の夢だった斯衛軍の戦術機格納庫の見学にやってきました。ちなみに父上が来ている近衛の服は当然赤。それにしても何度見てもド派手な色だな。シャ　だよ。シア。目立って目立って仕方ないよ。

廊下を歩く度、城内省ひいては衛士や整備員の方々がびしつとこれは見事な敬礼を繰り返していく。さすがは赤ですな。そして流石は父上。オレも鼻がたかーいたかーい。

そうして戦術機のハンガーにやってきた。

思わずオレは「おおっ」と声を漏らした。

様々な機械音のハーモニーが奏でる広い空間。壁に沿うように設置されたハンガーには色とりどりの斯衛軍専用機82式「瑞鶴」が並んでいる。ちよっお、これは興奮するよ！　なにこれ、すっげえー！　プラモでは出せない迫力があるよおい！

「川鷺」

「これは西園寺中佐」

と、赤色の「瑞鶴」F型に近づき、近くにいた整備員の名前を呼ぶ。途端、周りで整備していた他の面々もその場でびしっと敬礼する。どうやらこれが父上の機体らしいな。

「仕事中スマンな。これが私の息子だ」

「こちらのご息が……」

焼けた肌と顔に付いたオイル。屈強な体格の川鷺と呼ばれた整備員の視線がオレに向く。悪い人じゃないな。視線が全然嫌じゃない。何て言うか、父上と同じ興味を持っている。

「西園寺大和です。よろしく願います」

ぺこりと一礼。武家だから礼儀作法は徹底してしつけられましたよ。あの優しい母上は礼儀となると事細かく、厳しくなりました。

「初めまして。私は整備主任の川鷺だ。 なるほど良い御息子に恵まれましたな中佐殿」

「ふふつ、褒めるな照れるではないか」

まんざらでもなさそうな父上。すげえ嬉しそうだよ。

「君の自慢話はよく聞いているよ。やれ息子は天才だ、息子は私

以上の衛士になるのだ……耳にタコが出来るほど聞いているよ。特に酒が入った時は完全の暴走状態に陥って……」

「お、おい川鷺」

武家と言うか、斯衛軍つて凄い硬いイメージがあったけど、父上とこの整備主任の人との関係は随分とフランクだな。いや、こういう関係のほうがおれはいいな。気を張らなくて済むから。

「はっはっ。これは失礼しました中佐殿。整備のほうはあらかじめ終わりましたので、御子息に自由に見学させてもらって構いませんよ」

「ああ。すまん川鷺。大和。私は川鷺と少し話があるから、自由に見ていなさい」

「はい！」

おれは父上の手を離し、「瑞鶴」に近づく。まずは脚の装甲に手を触れ、見上げた。

冷たい。そして何とも言えぬ重厚感と威圧感が漂ってくる。これが戦術機。人類の刃……やばいな。何かうまく言えないけどやばい……。

おれはコクピット 管制ユニットまでのキャットウォークを駆け上がり、中を覗き込んだ。確かガンムと違い、衛士強化装備に搭載されている網膜投影で外の映像を見るんだよな。おおつ、確かにモニターの類が見当たらない。

ふむふむ。なるほどなるほど。こうなって動くのか。機械技術：Aがあるからどうやって動くのは外から見ただけで構造が分かるぞ。何か気分は衛　士　な気分。トレー　オンってか。

だからかな。色々と手を加えたい部分が次々と湧き出る。

戦術機の基本構造は外骨格構造だけど、関節部分に電磁伸縮炭素帯を採用しているから外骨格構造のデメリットの一つである関節可動部の可動範囲を解消している。肘だけでも百八十度動かせるしね。でも強度の問題は解消されてない。だからガンダムMk？に採用されたムーバブルフレームを使えば強度の問題も解消されるんだけど……問題は材質なんだよな。現在使用されている戦術機の材質だと重くなるし、フレーム強度に問題が出てくる。ルナチタニウム合金があればいいんだけど、あれは文字通り月の特殊な重力下でしか生成できません。一応チート能力を使えば生成できるんだけど、地球と火星の間にある宇宙戦艦まで行かなくちゃならん。どっかの誰かさんのお陰でな！

と言う事で戦術機本体、つまりハード面の改良は一先ず先送り。今できるのはソフト面だけど……見せてもらえるだろうか。

「川鷺さん！」

キャットウォークの上から話しかける。

「何ですかな御子息？」

「戦術機に搭載されているOSを見てみたいんですけど、見せてもらえますか？」

「OS? また変なところを見たがりますな。中佐殿」

確認を取る様に川鷺さんが父上を見る。

「……一応軍事機密だが、まあ見せても分からんだろう。見せてやってくれ」

「了解です。おい小松」

「了解」

オレはキャットウォークを降りて、小松と呼ばれた眼鏡をかけた若い整備員の元に行く。

「どうぞご子息」

小さな端末機を渡され、オレはOSの中身を確認する。

無数に並ぶ文字の列。さすがは最新鋭の科学の結晶、戦術機を制御するOS。何とまあ膨大なプログラム。昔のオレなら分からなかったけど、今のオレなら分かる。そうして分かった事は一つかなり最悪だ。

きちんと整理せず、上書きの上の上書き。無駄な部分がかなり目立つ。わざわざ回りくどいプログラム設定の部分もいくつもある。流石はアメリカ。合理主義者。動けばいいとの事ですか。仕事が雑だぞ。日本の下町工場の職人さんを見習えこのヤロウ。修正は……一週間ぐらいで何とかなるけど……問題はそれをしていいものか。下手にここで改良して、重要人物なんてされたら実戦に出れなくなってしまう。それは困る。キャピタルを稼げない。オレのスキルも

もつと上げたいしな。

「ご子息。何か気になる事でもありましたかな？」

川鷺さんに声をかけられた。どうやらかなり集中して、OSのプログラムを眺めていたらしい。

うー、手を加えたい部分がめちゃくちゃあるがここは我慢我慢。

「いえ、ありがとうございました川鷺さん」

端末を閉じて、川鷺さんに手渡した。そしてオレは立ち上がり、今度は「瑞鶴」の背部。跳躍ユニットを下から眺めた。

戦術機の跳躍ユニットは、燃費のジェットエンジン、瞬間出力のロケットエンジンのハイブリットエンジンを採用している。機械技術の知識から見ても、これを最初に考えて形にした人は凄いよな。脱帽モノですよ。

「大和。そろそろ時間だ。もうよいだろう？」

「はい。今日はありがとうございました」

「いやいや、西園寺中佐のご子息ならいつでもどうぞ」

一礼して斯衛軍の格納庫を父上と出る。

「どうだ。大和。満足したか？」

帰り道。父上が話しかけてくる。

「はい。父上。僕も早く戦術機に乗りたいです」

「そうかそうか。ならしつかりと勉強に励み、体を鍛えねばならんぞ」

「了解です父上！」

下手くそな敬礼をする。父上も空いている右手で敬礼を返してくれた。さてさて、また頑張ってキャピタルを溜めますか。

一九九二年五月。いよいよBETAの脅威が日本に近づいてきていた。オレは十三歳になり今、大陸に向かう帝国軍の艦にいた。十二歳で受けた戦術機適性テストを歴代最高の数値を叩きだして、一ヶ月後には斯衛軍の戦術機教官をナイフ一本で撃墜しました。

この時、既に操縦技術はAに昇格。肉体強化もBまで上げているのでどんな馬鹿げた機動でも失神しません。いよいよチート能力が目立ってきましたな。

さて、何でオレが帝国軍に入隊したかと言うと、この大陸派兵が目的だ。一九九一年から始まった日本帝国軍の東アジア戦線への派兵。キャピタル大量ゲットのチャンス。これを逃す手はない。

ちなみにオレが帝国軍に入隊すると聞いて、上も下も大騒ぎ。武家の人間、それも赤を纏う人間が斯衛軍に入隊せずに帝国軍に入隊すると言ふ事で、斯衛軍のお偉いさんが怒って説得に來た。

「私は一人でも多くの人を助けたいのです」

その一言で何もかも突っぱねてたが、さすがに父上が切れて真剣を使ったチャンバラにまで発展、本当に死ぬかと思った。まあでも前もって母上に説明して、味方になってくれるように頼んだので何とか事無きを得ました。やっぱり家庭は母親が強いね。父上は母上のO・H A・N A・S H Iの前に敗北しました。それで所属は斯衛軍だけど出向と言ふ形で収まりました。

甲板に出る。潮の匂いが鼻に付く。どこを見渡しても水平線しか見えない。そして日本がある方向に視線を向ける。そしてポケットから出発前夜、妹の朝陽が作った手作りのお守りを取りだした。

『兄様……か、必ず帰ってきてください。朝陽と約束してください』

今にも泣きそうな顔と必死になって紡ぎ出した言葉。オレは黙って朝陽を引き寄せ、強く抱きしめた。

『安心しろ。必ず帰ってくるさ。約束する。お前との約束を破った事はないだろう？』

『はい……ぐすつ……』

静かに涙を流す妹を抱きしめる。鈍い様で勘が鋭い部分があるか

らな朝陽は。もしかすると大陸派兵部隊の危険性を何となくだが、感じているのかもしれない。

そして腰には出発の朝、父上が黙って渡してくれた刀がある。母上は小さく笑みを浮かべて「武運を祈ります」と言って送り出してくれた。ただ、その顔が酷く泣いているように見えたのが印象的だった。

それもそうだな。激戦区に赴く息子を心配しない親はいないものだ。でも安心してください母上。オレはきちんと帰ってきますから。

そして視線を逆方向へ。まだ見えないがこの水平線の先には、映画や本でしか知らない本物の戦場がある。そして今からオレはそこに飛び込むんだ。

心臓の鼓動が僅かだがいつもより速い。チート能力があるとは言え、本物の戦場に行くんだ。BETAと言う脅威がいて、死んでゆく人間がいる。生と死の狭間。この世の地獄。オレは耐えられるのだろうか。

「どうした。もう日本が恋しいのか西園寺？」

振り返るとオレが所属しているソード中隊の隊長新見少佐が立っていた。年齢は三十代半ばで日に焼けた肌が特徴的だ。

「新見少佐」

オレは敬礼をする。が、新見少佐はうっとしそくに手を振って、それをやめるように言ってきた。

「よせよせ。堅苦しいのはなしだ。お前だってそういうのは嫌いだろう？」

「……失礼しました少佐」

一つ苦笑して、敬礼していた腕を下ろす。

「それでもう日本が恋しいのか。西園寺のボーヤは」

手すりに肘を付いて、にまにまとした顔で尋ねてくる新見少佐。大抵の人は西園寺と聞くと委縮するのだが、この人はそんな事を気にせず、気軽に話しかけてくれる。有力武家出身という事で最初は中隊のメンバーとギクシャクしていたが、今では部隊の一人として皆が信頼してくれている。

「そうですね。恋しいと言えば恋しいですよ。特に私の妹にへんな虫が付かないかと心配で心配で……」

朝陽は見事に母上の遺伝子を受け継いでいるからな。本当に将来が楽しみだ。でも同時に、誰かの嫁にされると思うと胃がキリキリしてくる。この辺りは父上と結託して、『朝陽の婿となるべき男はオレと父上を倒さぬ限り、認めない！』と言う誓いを立てている。

「はっはっはっ！ 余裕だな西園寺。流石は我らのソード中隊期待の新人。初の実戦が迫っているのに怖くないのか？」

「怖いですよ。でも、守りたいんですよ両親や妹を
いや、違う。この世界を守りたいんです」

どこかの誰かさんのお陰でこの世界にやってきたわけだが、この世界は俺がいた世界と同じだ。尊い命がある。その尊い命を無慈悲に奪うBETAがいる。そしてオレにはこの世界を守る力がある

どこぞの爺様のお陰で不完全だけどな！

「こりやまたでかいな」

「笑わないんですね」

「笑うかよ。今は西園寺大和と言う男の覚悟と決意が籠った言葉だ。笑うなんて事出来るかよ」

ひらひらと手を振った後、視線を前へと向ける。

「正直に言っておくぞ」

新見少佐がオレを見ず、静かな声で呟いた。

「オレはお前を戦場に出したくねエ。まだ十三のガキに大陸の戦場はキツイ」

だろうな。そんな事は分かっている。戦線は徐々にだがBETAの物量に押され下がってきている。そして一年後の一九九三年の九・六事件では日本帝国の大陸派遣部隊二個大隊がBETAの奇襲を受け、壊滅する。

「百も承知です。ただ少しでも多くの人を守りたい……それが志願した理由では不足ですか？」

本当の理由はキャピタル大量ゲットだが、今言った理由がなかっ

たわけじゃない。少しでも助かる人がいるなら、助けてやりたいと思うから。

「死ぬなよ。死ぬにはまだ早すぎる。だから、お前は絶対に死なせないからな」

「その台詞、そっくりお返ししますよ少佐」

「はっ……良く言っ たな。この野郎」

お互い口元に笑みを浮かべ、海に視線を向ける。

もうすぐ戦場がやってくる。

第二話 そろそろ介入（前書き）

PVが4000を超えました。お気に入りも二桁に達しました。ありがとうございます

いろいろ突込みどころが多いと思いますが、暖かい目で見てくださ
い。

第二話 そろそろ介入

SIDE・巖谷 一九九三年二月二一日

最近、ある噂を耳にする。中国、韓国軍の衛士のみならず、日本帝国大陸派遣部隊でも噂でもなっている『血塗れ』と呼ばれる衛士の話だ。

曰く、「その衛士は頭のネジが二、三本吹っ飛んでいる」

曰く、「第二世代戦術機のパフォーマンスを完璧に引き出している」

曰く、「文字通り単騎で突進し、BETAを空へと斬り這う悪鬼」

曰く、「そいつは常に先陣に立ち、帰還する際はBETAの返り血で装甲を真っ赤に染めている」

などなど様々な噂を飛んでいる。そして私はその衛士が所属しているであろう帝国軍大陸派遣部隊基地へと転属になり、その噂を確かめてみる事にした。

吐く息が白い。日本とは違いこの寒さはかなり体に染み込んでくる。

どこもかしこも同じでありさまだ。無数のテントやプレハブ小屋が並び、野外格納庫では整備員達が「撃震」やまだ配備数は少ない第二世代戦術機「陽炎」の姿もある。

私は何となくそれを眺めていてある「陽炎」の違和感に気付き、

近づいた。

その「陽炎」は日本でライセンス生産されているF-15Jなのだが、細部が違う。現地改修機なのかと思ったのだが、それにしても大胆で手が込んでいる。

各部装甲を出来る限り外し、可動性を強引に強化して、重量軽減による機動性向上を目的にしているようだが……フレームが露出している部分もある。その他にも関節部分を強化して、管制ユニットにも手が加えられているようだった。

「君」

と、その「陽炎」を整備していた中年の整備員に声をかけた。

「はい？」

つ 巖谷少佐！？ お会いできて光栄です！」

「うむ。一つ質問してもいいか？ この機体は随分と極端な改良をしているのだが……こんな機体で戦えるのか。36mm数発でも当たり所が悪ければ墜ちそうなほど危ういのだが……」

その言葉を聞いて、中年の整備員はどこか誇らしげに答える。

「このぐらいしないと、こいつを操っている衛士の長所が生かせないですよ！ 正直、私も最初は死に行く様なものだと思っていましたが、六度の出撃でもこいつは被弾らしい被弾をしていません。唯一厄介なのは出撃の度にオーバーホールして手がかかる事ですね」

苦笑気味に答えるが、その顔はどこか嬉しそうだった。

「出撃度にオーバーホールだと？　それほど扱いが酷いのか？」

普通なら考えられない事だ。

「扱いは酷くありません。ただ全てのパーツ、特に駆動系が激しく摩耗して次の戦闘に耐えきれないからです。だからいつでも、私達ソード中隊の整備員達はこいつに掛りきる事が多いんですよ。でもまあ、こいつのお陰でどのくらいの衛士を助かってるのか如実に分かるんで、頑張れるんです」

中年の整備員は「陽炎」を見上げる。この機体を整備出来る事に誇りの感じている顔だ。

「知ってますか巖谷少佐？　私達ソード中隊の被害は最初の出撃での三機のみ。それ以降は被弾こそすれ、きちんとここに帰って来てるんですよ。整備員にとってこれほど嬉しい事はありません

それもこれもこいつが単身突撃して敵陣を切り崩してくれるからなんですよ。ほんとう、こいつとあいつには感謝しきれませんよ」

「もしかして……この機体の衛士は『血塗れ』か？」

その言葉を待っていましたと言わんばかりに、口元に笑みを浮かべる整備員。

「正解です巖谷少佐。我らソード中隊の秘密兵器。『血塗れ』と噂される衛士の機体です」

「私はその衛士に会いに来たのだ。どこに行けば会えるのかね？」

「えっと、あいつの場所は」

詳しい場所を聞き、私は居住区とされている無数のプレハブ小屋が並ぶ区画へと脚を伸ばす。整備員から名前も教えてくれと言ったのだが、「それは秘密です。まあ直ぐに分かりますよ。この時間だと屋根の上で何か考え事をしていると思いますから」と言われ、名前を覚えてくれなかった。まあ何か含みがあるようだが、面白い。どんな人物か短い時間だが色々想像させてもらおう。

目的の場所まであと一步と近づき、曲がり角を曲がった時、少年が帝国軍の軍服を肩に掛け、目的のプレハブ小屋の屋根の上に座っていた。手元にはメモ帳があり、何かを思案するように首を傾げた後、書き込んではまだ思案していた。彼が『血塗れ』か？

（若いな……いや若すぎる）

背は一六〇後半ぐらいかと思うが、全体の雰囲気はまだ幼い。まだ子どもと言ってもおかしくない。

「君。そんなところで何をしているのかね？」

「えっ？　　っ失礼しました。巖谷中……いえ巖谷少佐！」

私の顔を見て酷く驚いた表情を浮かべた後、慌てて下に降りて私の前で敬礼した。

若すぎる。一体幾つだ？

「若いな、少尉。歳はいくつだ？」

「今年で十三であります」

「十三?!」

思わず私は眼を大きく見開いて声を荒げてしまった。十三の子どもが戦場にいる。BETAを駆逐しない限り、いつかそんな悲しい時代が来てしまうと思っていたが、まだそんな時代ではない。

だが彼と相對して、相反するモノを感じた。彼には歴戦の衛士から漂う風格がある。間違いな彼だ。

「君が……『血塗れ』か？」

確認するように問う。すると彼は苦笑した。

「その呼び名はあんまり好きじゃないんですが、そう呼ばれます」

「名前を教えてください」

「西園寺大和であります。巖谷少佐殿」

「西園寺？ まさか武家の西園寺か？」

「はい。少佐と少し違いますが斯衛軍を蹴って帝国軍に、この大陸派遣部隊に志願しました」

風の噂で聞いた事がある。何でもある有力武家の嫡男が僅か一ヶ月で斯衛軍の教官を叩きのめし、斯衛軍の誘いを蹴って帝国軍に入隊したとか。所詮は噂だと思っていたが、まさか本当だったとは……

…。

「なるほど。君の噂は私の耳に良く届いているよ。会えてよかった」

「こちらこそ。「瑞鶴」の開発衛士巖谷少佐に会えて光栄です」

握手を交わす。ふむ。良い子じゃないか。はきはきとした口調でしつかりと私の眼を見て話しかけてくる。……だから余計悲しくなるな。子どもを戦場に出してしまう事が。

彼の眺めた後、彼が持つメモ帳が眼に入った。

「ところで何を書いていたのかね？ 何やら酷く悩んでいたようだが……」

「見られますか？」

そう言っって持っていたメモ帳を私に手渡した。紙を自分で均等に切り、クリップで止めた簡素なモノだが 私はそこに書かれている内容に総身が震えてしまった。

「こ、これは……！？」

しばらく夢中になってページを捲った。

そこには走り書きで読めない部分が多かったが、戦術機に関する革新的ともいえる様々な技術の理論が断片的だが書かれていた。新型電磁伸縮炭素帯の基本理論と製造工程、現在の戦術に採用されている装甲板よりはるかに丈夫で剛性の強い超鋼スチール合金や発泡

金属の生成方法、そして人間とほぼ同じぐらいの柔軟な稼働を行えるMBFと呼ばれる新型戦術機フレームの基礎理論……信じられない。既存の技術とは一線を画す革新的技術の宝だ。このメモ帳一冊でどれほど価値があるのか。そしてどれほど我が国の戦術機の性能が飛躍する事か！

「……さ、西園寺少尉。これは全て……君が考えたのか？」

「はい。昔から戦術機の教本や整備書類を絵本代わりに読んでいましたから、色々と思いついてはいたんです」

差し出された手に私は啞然としながらも、メモ帳を手渡す。

……彼を絶対に死なす訳にはいかない。生きて日本に帰さなければ！ここで彼を連れ帰れば純国産の戦術機開発に大きな進展を見せる筈だ！

「西園寺少尉。今すぐ帰国の　　なんだ！？」

その時、私の言葉を遮る様に警報が鳴り響いた。居住区画にいた人間が全てプレハブ小屋から出て、何事かと辺りを見渡している。

「　　巖谷少佐。連中が来たようです」

ふと視線を戻すと、東の方向を睨みつけている。

「BETAか！？」

「地下侵攻か……気づくのが遅れたか」

まるで見ている様な口調で答える彼の眼差しは鷹の様に鋭く、近づいてくるBETAの姿を見ているようだった。

「大和出撃だ！　せっかくの休養がパアだ。ちくしょうめ！」

「ああっ！　くそっBETAの野郎！　せっかく補給部隊の女落したってのに！」

「大和行くわよ！　アンタの『直感』で連中を喰らい尽くすわよ！」

「了解！　巖谷少佐。戦場でまた」

「ま、待ちたまえ西園寺少尉！」

部隊の仲間らしき大人達に交じって、彼は野外格納庫のほうへと走って行った。

いかん。私も急がねば。BETAを食い止めるのも重要だが、彼を失うわけにはいかん！

私も急ぎ、自分の機体の元へと走り出した。

SIDE・ソード中隊隊長新見少佐

『HQより帝国軍各機へ。BETAの大部隊は東より接近。数は不明。全機、全力で迎撃に当たれ』

「との事だ。各機、準備はいいか？」

三機欠けてしまったが、威勢のいい隊員達の声が帰ってくる。

「よしよし。良い子ばかりで俺はとてうれしいぞー。全員いつも通りに仕事をすればいい。そうすればいつも通り帰れて、本を読むなり、風呂に入るなり、女性諸君は疲れ果てた大和を襲うことだってできるぞー」

『ちよっ?! 新見少佐! 本当にそう言う冗談はやめてくださいて!』

焦った大和の顔が見える。いや、本当に一度襲われたらしいからなこいつ……。

『あー、それなら私も頑張らないとなー』

『私も私も。大和君。今日はお姉さんといい事しよっかー』

『野中中尉と上原中尉も新見少佐の言葉にのらないでください!』

『駄目よ。大和は私のよ』

『ぎゃあー! 山原中尉のは冗談に聞こえねえ!!』

さすがは大和を襲った山原。眼が雌豹だ雌豹。おつかねえおつかねえ。

隊員の笑い声が聞こえる。この空気……地獄に向かうって言つのに誰一人怖気づいちゃいねえ。これもそれも大和のお陰だな。

「おい、大和。お前の『直感』はこの戦いをどう感じている？」

そう、俺達が最初の戦いで三人死んで以降、誰ひとり死ぬ事無く六度の出撃を全て無事生きて帰ってこれたのは、大和の『直感』

BETAの侵攻を予測する力が半端ないことだ。いや、もはやそれは予知に匹敵する。最初は信じられなかったが、二度、三度と大和の直感は的中し、四度目には連中の大部隊を撃破する事も出来た。

「少し嫌なモノを感じます。みなさん、周辺警戒を厳に」

「よし。大和の『直感』がそう告げているみたいだ。全員、周辺警戒を厳にな」

『『了解！』』

「それじゃあ諸君。仕事の時間だ。さっさと終わらせて帰るぞ！」

「撃震」と「陽炎」で構成された我がソード中隊九機が戦場へと向かう。

さあ、BETA共。地獄へ帰る用意はいいか？

SIDE・巖谷

急ぎ私の部隊を引連れ、先に展開しているソード中隊と合流した。戦闘は始まっている。荒れ果てた荒野に引き締めるBETAの群が一心にこちらに向かってきている。

「こちらエッジ大隊。巖谷だ。遅れてすまない！」

すぐさま援護射撃を行い、戦線の維持に努める。

『こちらソード中隊指揮官新見です。巖谷少佐。伝説と戦場を一緒に出来て光栄です！』

『新見少佐。貴官の部隊に居る西園寺少尉はどこだ？』

『西園寺ですか？ 西園寺なら 』 斬り込みます。山口少尉。背中をお願いします！』 『おうよ。行って来い！ っか

り守ってやつからよ!」

今、突撃していきましたな」

なっ!? 確かに一機の「陽炎」が突出してBETAに突っ込んでいく。あまりに無謀だ。
。アレは死んでしまう!

「彼を引かせる! 彼をここで失うわけにはいかん。それは帝国の大きな損失となる!」

私の焦りとは対照的に、新見少佐は気楽そうな声で答えた。

「大丈夫ですよ。まあ言うより見た方が早いかな……」

「何を暢気 なあっ!?!」

岸壁に打ち付けられた波飛沫のように、要撃級や戦車級の肉片が空を舞っている。その肉片の雨の中を優雅に舞うように駆け抜ける「陽炎」の姿。彼の機体だ。

右手に持つ長刀が下段から振り上げられる。その瞬間、数匹の戦車級を巻き込んで要撃級の斬り裂く。さらに流れる様な動きで左手の八七式突撃砲を真後ろに向け発砲し、接近してきた要撃級の顔の辺りに弾丸を叩き込んだ。信じられない。何と言う操縦技術だ。驚くべきは機体の硬直時間がほとんどないようにみえる! 一体どんな入力をしているんだ?!

さらに私の驚きは続く。今までの動きが地上を駆ける獅子ならば、次は天空から獲物を狩る鷹だ。高度な姿勢制御と出力制御を行い、見事な三次元機動で巨大な要塞級を翻弄。そして、遠心力と加速を加えた大上段の構えから太い要塞級の首を切り落とした。

彼は止まる事の知らない暴れまわる削岩機だ。彼がいる場所は瞬く間に大地は赤く染まり、死体が積み上がって行く。

言葉が無い。噂通り、第二世代戦術機の運動性をフルパフォーマンスで使いこなしている！ アレだけ激しい戦闘機動を行えば、確かに出撃の度にオーバーホールが必要な理由も頷ける。

「彼は……本当に十三の子どもなのか？」

『子どもですよ。まあ多少は大人びていますがね。山口、仕事しているか？』

『仕事量が少なくて物足りません！ 隊長、援護しましょうか？』

『そうかそうか。なら仕事量が少ないなら丁寧にしやがれ！ 各機、ソード中隊の『血塗れ』の取りこぼしを喰らいつくすぞ。オレに続けえー！！』

『了解！』

威勢の良い声と共に、ソード中隊八機が西園寺少尉が切り崩した部分を起点に、BETAの群を蹴散らして行く。好機だ。ここで一気に押し上げる。

「エッジ1より各機へ！ 陣形をそのままに戦線を押し上げるぞ！ BETAを殲滅しろ！」

SIDE・西園寺大和

「おうおう……今日も随分と使いこんできたじゃねえか」

管制ユニットのコクピットハッチを開くなり、まず視界に飛び込んできたのは沈もうとする美しい夕陽。そして簡易整備ハンガーに上ってきて出迎えてくれた整備班長の顔だった。

「すみません。また整備のほうお願いします」

「ああ。そんな申し訳なさそうな顔すんな。お前はすっかりと仕事をこなしてきたんだ。俺達もちゃんと仕事をこなすだけさ。そら、さっさと出て手でも振ってやんな」

コクピットハッチから出て、ハンガーの上に出る。すると周りにいた整備員や先に降りていた衛士達がオレを見つけて、拍手や歓声を上げた。

やつ、ちよお、すげえ恥ずかしいんですけど！　そして全然慣れません。いやぁー見ないで！

オレは小さくなりながらハンガーを降りる。

「記録更新だな。西園寺」

「つと！」

投げ渡された飲み物をキャッチする。投げたのは新見少佐だ。

「ありがとうございます。少佐」

キャップを開き、さっそく一口、口を付ける。あーうまい。

「ほんと天性の衛士だな。十三歳でこれだ。オレと同じぐらいになった時のお前がどうなってるのか見当もつかねえ」

そりゃあ神様の付与能力を持っていますからね。操縦技術：A。もうこれは一流を超えて超一流。同じ操縦技術判定を持っているのは、紅蓮中将ぐらいじゃないでしょうか。死の八分？ なんですかそれは？

加えてほぼ未来予知に等しいスキルも持っていますからどれだけの乱戦だろうが、どこに行けば安全か、どのタイミングで仕掛けてくるのか手に取るように分かるから、さっきの戦いだって解き方が分かったパズルみたいなもんだ。

ちなみにオレの「陽炎」は現地改修で色々といじりました。劣悪なOSを整理してキャンセル機能を搭載。でも通常のCPUじゃ処理落ちするのは眼に見えているから、それに対応できるように修復不可能な戦術機からCPUを持ってきて、無理やり搭載して処理能

力を上げました。代償に脱出機能が使えなくなっただけ。後は装甲各部を削って重量の軽減させたり……まあ出来る限りの事はした訳ですよ。

それにしても「陽炎」……「イーグル」か。かなり使いやすいよ。「撃震」とは大違い。いや、「撃震」もいい戦術機んだけど、重いんだよねどうしても。だから動きにくいとかやりにくいというか。これが第一世代と第二世代の違いだね。

「下手すら人間戦略兵器になってんじゃないのか？」

「ははっ……褒めても何も出ませんよ少佐」

「じゃあ私が御褒美を上げるわよ」

ひたりつと背後から気配。気づいた時には既に遅く、オレの体は山原中尉に捕まってしまった。小振りだが形のいい、そして柔らかい双丘の感触を後頭部に感じる。キタア……！ じゃねえ！？

「や、やや山原中尉！？」

振り返るとにんまりと笑う端正な顔立ちがある。どうしてこの世界は美人が多いのだろうか？ 野中中尉や上原中尉もこの人とは違う美人さんだし、。普段のオレなら喜ぶ状況だが、この人はまずい。と言うか十三の少年とやるのは倫理的に問題があるでしょう！

「おおっ、よかったな西園寺。卒業おめでとう。明日の朝、湿布を貰いに行けよ」

「何の卒業ですか！？ と言うか助けてくださいいよ少佐！」

「山原。二枚出すわ。参加させて」

「いいわ。事が終わったら払いなさいよ」

「上原中尉？！　ちよつ、何の話ですか？！　本気ですか？！」

「うおつ、と……初めてで二人相手か……流石にオレも経験ないわ。山口、お前は？」

「ないですね少佐」

「山口少尉。助けてください！　このままじゃあオレ、食べられますつて。色んな意味で削られそうですつて！」

暴れるが二人はどこにそんな力があるのか、がっちりと掴まれて逃げ出せない。興味はありますよ。男の子ですから。でもやっぱりこの世界での初めては普通にしたいというか、いや、お二人は十分な魅力的なんですが……正直言いましょう！　お二人相手にしたら性も根も全て吸われそうで怖いのが本音です！

オレをよく援護してくれる山口少尉は黙って視線を外した。

「すまん……BETAの恨みならいくらでも買うが、女の恨みはそれ以上に怖えからな」

「山口。気が会うなオレも同じ意見だ。と、言う事だ大和。黙って喰われて来い」

にこやかな笑顔で手を振る新見少佐。　おおおおおおおい

い！！！！

「薄情者おー！！！！少佐の馬鹿ああああ！！」

「さあ行こうか大和」

「ご褒美の時間よ大和君」

「いやあああああああ！！！！」

ドナドナドゥナドゥナ。喰われてゆ〜くう〜。やばいやばい本当に次に日、干からびたミイラになってる自分が簡単に想像できる！ 誰か助けてー！

「西園寺少尉！」

天の助け来ました。息を切らしてやってきた強化装備姿の巖谷少佐だ。初めて見たな。この人の強化装備姿。でも助かったぜ。これで何とかなる！

「全員、敬礼！」

新見少佐の声にその場にいた、全員が敬礼する。上原中尉と山原中尉も同様だ。拘束を解かれたオレも遅れて敬礼する。

「話がある。ちょっとこっちに来てくれ。新見少佐。彼を連れて行っていないか？」

「返してくださるならどうぞ」

「……西園寺少尉。こちらへ来てくれ」

巖谷少佐は返事をせず、オレに付いてくるように促す。

さて、巖谷中佐と会えたのはなかなか幸運だったな。もしかしてと思ってたけど、まさか向こうから会いに来てくれるとは思いつかなかったさ。

そろそろ本格的に介入していきますか。具体的な計画は決まっています。が、とりあえずは九十四年に配備される予定の「不知火」を……いじってえ……いじってえ……いじりまくります！

第三話 斯衛の訓練生と国産機（前書き）

……おおっ、PV15000突破！　そしてお気に入りか50件突破だと！？

夢じゃないですね？　よっしゃあ！　やる気出てきた。がんばって、矛盾一杯だけがんばって書きますぞ！

ってな訳で三話目どうぞ。

第三話 斯衛の訓練生と国産機

SIDE・大和

一九九三年三月二十九日。オレは一年の任期より少し早く、巖谷少佐と共に日本に戻ってきた。

そろそろ本格的に歴史に介入する為だ。キャピタルもごつそり稼がせてもらいましたし、ステータスもかなり鍛えられました。心残りなのは本格的な介入の為に、約一年の間、共に戦場を駆け抜けたソード中隊の面々と別れてしまった事だ。新見少佐は巖谷のおじさん（帰りの船の中で物凄く仲良くなって、プライベートではこう呼んで欲しいと言われました）の言葉に耳を傾け、後、オレの言い分も聞いた後、笑顔で送り出してくれました。

「大和。一足先に帰って全員分の天然物のごちそうを用意しとけ。後、酒もな」

それが別れの言葉。新見少佐。もちろんですよ。ちゃんと全員生きて帰ってきてくださいね。みんないい人なんですから。

京都の舞鶴港に着くなり、すぐさま車に乗って移動。京都にある帝国陸軍技術廠へと直行して集まった高級将校及び企業メーカー相手に大々的なプレゼンを行った。

オレが発表したのは全部で四つ。

一つは二種類の新装甲素材。一つは一年戦争時代からジオンで使用されていた超鋼スチール合金。こいつは現在使用されている戦術機の装甲より重い、二倍以上の強度があるので被弾箇所の高い部分と盾に使用する予定だ。

もう一つはアストレイシリーズに使用された、軽量が売りの発泡金属装甲。これは主に戦術機の基本装甲材、そしてフレーム材として使用する予定。

二つ目は戦術機の内骨格を形成する基本フレーム、M B F。これもアストレイシリーズの流用だ。このお陰で前とは比較にならない柔軟かつ強度の高い機体が出来上がるはずだ。アストレイシリーズは人間並みの柔軟性や稼働性を上げた設計だから、近接戦闘を主眼と置く日本の戦術機にぴったりだと思った

三つ目は前々から製作していたオレ版X M 3。無駄ばかりの既存のOSを綺麗に整理整頓して、キャンセル機能を搭載した新型OS。コンボと先行入力をいれなかったのはちよつとした考えがあつての事だ。

そして四つ目に、そのOSを使うための処理能力が高い新型CPUと学習型の補助AI。この二つを採用することで衛士の操縦負担が大幅に軽減され、補強できる筈だ。

あまりにも革新的な技術の群に高級将校達は若干戸惑い気味だったが、メーカー三社は大興奮。瞬く間に提案した案は採用され、オレの純国産機開発計画「耀光計画」の参加が決定した。

SIDE

西園寺大和の耀光計画参加が決まった八ヶ月後の十一月二十九日、帝国陸軍技術廠第壱開発局の整備ガントリーに、異例とも言える速さで納品された先行試作量産機「不知火」が二機、技術廠に所属する整備士たちの手で実機稼働に対する最終チェックが行われていた。

（よくもまあ出来たよな……）

コクピット辺りのキャットウォークの上で、新OSと補助AIシステムの最終チェックを行っていた大和が感心した呟きを漏らした。

実は大和の耀光計画参加が決まったあの時点で既に日本の戦術機メーカー、河崎、富嶽、光菱の三社と第壱開発局で設計された本来の「不知火」が組み上がった直後だったのだ。大和としてはせっかく組み上がった試作機をむざむざ放棄するのはもったいないと思い、何とか試作機を改修して対応しようとしたがやはり基本設計がまったく違う為、断念。結局、その試作機は開発局の倉庫に行く事になり、三社は急ピッチで大和が新たに引いた設計図を元に部品を製造。そして異例とも言える速さで納品したのである。

（本当……今回ばかりはメーカーさんに感謝だな）

キーボードに指を奔らせながら、キャンセル機能搭載の新OSの調整を終了させる。後は実機で動かさなければ調整の使用が無い。

次は補助AIシステムだが……こっちはほぼ出来上がった状態で組みこんだから特に触る事はない。一応、中身が問題なく動くか、手持ちの端末で動かして確認を取るだけで終わった。

「さて、と……」

周囲を見渡し、遅れている部分が無いか、対応に困っている整備士がいないか見渡す。全員、大和が作った整備書類片手に整備している。既存の戦術機とは全く違う設計に多少戸惑ってはいるが、困っている人間はいない。みな、どこか楽しそうにも見えた。

「西園寺少尉」

と、下から声をかけられた。そこには第一開発局副部長として初めての仕事になった巖谷榮二中佐がこちらを見上げていた。大和はすぐさま下まで降りた。

「調整のほうはどうだ？」

「問題ありません。全てタイムスケジュール通りです」

「そうか…… なら後は二番機の衛士をどうするかだな」

九月には最終評価試験という事で、富士教導隊相手に実機を使った模擬戦を行う事になっている。その際には、軍、政界の上層部並び五摂家まで来賓としてくる予定だ。一番機には設計者である大和が乗り込む事になっているのだが、二番機に乗る衛士の選定がまだ行われていなかった。

「巖谷中佐」

大和は視線で向こうで話しませんかと訴えた。何か妙案があるのだろうか、と巖谷は思い、大和の言う通り格納庫を出て、廊下に出た。

「少しプライベートな事なので、プライベートな口調で話していいですか？」

出るなり、大和は巖谷にそう言った。巖谷は快く頷いた。

「ああ。構わんよ大和君。それで誰かいい衛士でも見つけたのかな？」

「はい。確か巖谷のおじさんには、眼に入れても痛くない自慢の娘がいましたよね？」

にやりつとどこかいたずらを思いついた様な笑みを浮かべて言った大和の言葉に、巖谷はその意味はすぐさま察した。

「……まさか、唯依ちゃんを二番機に乗せる気か？ 無茶だ。彼女はまだ訓練生の身だよ。戦術機へと搭乗時間もおそらくまだ三十時間もいっていないだろう」

「そこがポイントなんです。あのOSは旧式OSに慣れてしまった衛士が慣れるには少し時間がかかります。だから、まだ旧式OSに慣れていない衛士が乗ればすぐさま飲みこむでしょう。それにいいデモンストレーションになります。訓練生が最精鋭と言われる富士教導隊を撃破する。これ以上ない宣伝になります」

「ふうむ……」

確かにこの上ない評価になるだろう。それに大和もいるのだからサポートも問題ない筈だ。巖谷は一つ頷いた。

「うむ……よしやってみよう」

「お願いします。で、どのくらいで彼女は来れますか？」

「そうだな……明日までにはこっちに来れるだろう。ただし大和君。しっかりと唯依ちゃん的面倒を見てくれよ」

「了解です。巖谷のおじさんの自慢の娘ですからね」

大和は笑顔で答えた。その笑顔を見て、巖谷も安心したように笑みを浮かべた。

次の日。若くして譜代武家『簗』の若き当主となった簗 唯依訓
練生は女性士官の案内で帝国技術廠の廊下を歩いていた。

（一体、何だろうか……）

弱冠、緊張した面持ちで昨日の夜から何度も考えている疑問を呟

く。

昨日の夜の事だ。突然斯衛軍の訓練教官からの呼び出しを受け、急きよ技術廠への出向が言い渡されたのだ。明らかに養父である巖谷の叔父様が関わっているのは明白だが、いくらなんでもこれはおかしすぎる。訓練生である自分が、一般の衛士ですらおいそれと立ち入れない技術廠へ呼び寄せたのか。身内の特権を使うような人ではないのだが。

「こちらです」

「案内、ありがとうございます」

女性士官に敬礼を言って、ふと、部屋の横に書かれているネームプレートに眼をやった。そこにはシュミレーションルームと書かれていた。

「失礼します」

一言声をかけ、中に入る。どうやらここは管制室の様だ。五人のオペレーターが計器に向かって、幾多のモニターに眼を傾けている。そして彼らの正面、ガラス越しに向こうには二台のシュミレーターが置かれ、一台は誰かが乗っているようで激しく動いていた。

「斯衛軍第一八訓練小隊所属、篁 唯依訓練生。到着致しました！」

「む、御苦労」

オペレーター達の後ろで観察していた巖谷が振り返り、唯依に答

礼した後、休むように指示を出す。

「巖谷中佐。今回の呼び出しは一体……」

「うむ。今説明しよう。西園寺少尉。篁訓練生が来た。一度上がってくれ」

『了解』

天井に備え付けられたスピーカーから少年の声がした。今まで激しく動いていたシュミレータがゆっくりとその動きを沈めていく。

（西園寺……西園寺って確か……）

思い当る単語を聞いて、唯依はふと記憶を巡らせる。その間にシュミレータボックスから出てきた赤い帝国斯衛軍強化装備を纏った一人の少年が管制室から入ってきた。それを見て唯依は確信する。

”あの”西園寺の嫡男だ。

「紹介しよう篁訓練生。彼の名前は西園寺大和少尉。武家である者なら誰もが知っていると思うが、名誉ある斯衛軍の誘いを蹴った猛者だ」

「何とも酷い紹介ですね中佐。蹴ったのは中佐でしょうか？」

巖谷の紹介に、大和は肩をすくめて答えた。

「ははっ……確かにそう言われればそうかもしれんな」

唯依は少し驚いた。大和の問いに答えた叔父が見せた笑みは、上

官ではなく個人として見せた笑みだったからだ。その叔父の意外な反応に気を取られた事に気付いた唯依は慌てて敬礼し、自己紹介する。

「西園寺少尉殿！ お会いできて光栄であります！ 私は
」

「簗 唯依……さんでいいかな？ 君の噂は中佐から嫌というほど聞いているよ。それと敬語やら堅苦しい口調は必要な時だけいい。普段は階級なんて気にせず、気軽に話しかけてくれていいから。年も近いし」

優しい笑みだった。思わず亡き父親を思い出した唯依だったが、その言葉を真に受けるわけにはいかなかった。

「いえ、そのような失礼な口を訓練生である自分が、少尉殿にするわけにはいきません」

「……そつか。まあ、その辺りはゆつくりと近づいていこうか」

酷く残念そうな笑みを浮かべた大和に対し、唯依の心にチクリと小さな棘が刺さった。

（それにしても……まさかあの西園寺大和殿に会えるとは……）

西園寺大和。その名を知らぬ武家の人間はいない。戦術機適性試験を歴代最高の判定を得て、さらに一ヶ月後には斯衛軍の戦術機教官を短刀一本で撃墜した。その他の成績もほぼ問題なく、異例の一ヶ月で訓練校を卒業し、そのまま斯衛軍に入隊するものだ。誰もが思っていた矢先、何と志願したのは帝国陸軍。それも大陸派兵部隊

だった。

武家の人間は基本的に斯衛軍に入るのが古くからの伝統であったが、彼は『赤』を許された武家でありながらその伝統を無視し、最も危険な大陸派兵部隊に志願したのは武家社会でも大きな波紋を呼んだ。何度も斯衛軍の上層部、そして父親が説得したそうだが、彼は「多くの人を守りたい」の言葉を最後まで貫き通した。結局、入隊先は斯衛軍だが、出向という形で大陸派遣部隊へと配属された。

誰もが彼が生きては帰っては来れない、馬鹿で愚かな行為だと蔑んだが、彼は大陸派兵部隊で目覚ましい活躍を見せ、皆を驚かせた。さらに驚かせたのは革新的な多くの技術を思いつき、若くして名誉ある純国産戦術機開発の開発主任となり、今に至る事だ。

唯依は西園寺大和に尊敬の念を抱いている。多くの人を守りたいという言葉を書き通したその責任感と正義感も尊敬の念に当たるのだが、自分とさほど変わらない年齢で実戦を経験し、遠い日本にまでその名を届かせた武勇、そして念願の純国産機開発主任と言う重い責務を果たせるだけの優れた才能。唯依の一つの理想が具現化した姿が大和だった。

（私も早く、西園寺少尉の様にならなくては……）

再び心の中で決意する。

「それで私を呼んだ理由とは一体……」

「うむ。篁訓練生。君を呼んだのは他でもない。君に最高の贈り物を渡そうと思ってな」

「最高の贈り物？」

巖谷の言葉に僅かに眉を潜めた唯依だったが、次に言葉に思わずひっくり返りそうになった。

「そうだ。おめでとう。君はこの西園寺大和少尉が設計した純国産戦術機、開発機体名「不知火」二番機の開発衛士に選ばれたのだ」

「はっ……はぁー！ー！？」

外聞も恥じらいも無く、唯依は驚きの声を上げた。大和は巖谷の横でぱちぱちと暢気に拍手を送っていた

「一体全体どういう事ですかこれは！？」

「ま、まあ、落ち着くんだ唯依ちゃん……」

副部長室へと移動した唯依は、さっそく巖谷の叔父様を問い詰めた。唯依の凄まじい迫力に巖谷が完全にたじたじとなって、じんわりと汗が浮き出ていた。

「純国産戦術機の開発衛士なんて名誉ある任務を、何故一介の訓練生である私に任せるんですか！？ 本来なら斯衛軍の指揮官、もしくは富士教導隊の衛士に任せるべき仕事です！」

「わ、私も最初はそう思ったのだが……大和君がどうしても唯依ちゃんを推薦するから……」

「西園寺少尉が！？ 何故ですか西園寺少尉！ 納得する理由を頂けますか！？」

強化装備から帝国技術廠の制服を纏った大和に勢いよく迫る唯依。整った唯依の顔が近づいた結果、大和の顔が赤くなった。

「篁さん近い近い！！」

「あつ！？ ……し、失礼しました。西園寺少尉。……納得できる理由を頂けますか？ それと私の事は篁と呼んでください。位も階級も西園寺少尉のほうが上なのでから、さん付けは結構です」

「あ、うん。了解……。理由は単純。訓練生のほうが新OSに慣れるのが速いだろうし、戦術機のパフォーマンスには一番の土台だからね」

「新OS？」

「そつ。既存のOSをオレが綺麗に整理して、新機能を追加したOS。ちよつとばかり癖があつてね。既存のOSに慣れてしまった衛士が慣れるには時間がかかるけど、まだそれすら慣れてない訓練生なら飲み込みが早いだろうと思って」

「なるほど……ってオレが整理した?! 西園寺少尉はOSも開発なされたんですか!?!」

「うん。そうだけど?」

それが何か? と言わんばかりに首を傾げた大和に、唯依は啞然とした様子を口を半開きにした状態で硬直した。

(信じられない……衛士として才能に恵まれて戦術機開発も行い……その上、OSも開発したなんて……)

「唯依ちゃんが驚くのも無理もないけど、大和君が開発したOSは実に優れたものだよ。近接戦闘を主眼とおく日本の戦術機にはこの上ない強力な武器となるだろう」

巖谷の言葉にさらに唯依は驚いた。斯衛軍でも現在使われている「瑞鶴」の開発衛士だった巖谷が褒めたのだ。この上ない証拠だ。

「その機能とは一体……」

「まあ、それはシュミレーションで説明するよ。それでも一つ理由は未熟なパイロットでもこの戦術機のスペックとOSがあれば一定以上の戦力になるって評価を得るため」

「つまり……私は「不知火」の性能をより強く出す為の引き立て役という事ですか?」

「まあ、気持ちがいいモノじゃないと思うけどそんなところだね。あと、個人的な理由として 今の内に篁の才能を伸ばしておこうっていうのもある」

「えっ？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「どういう……意味ですかそれは？」

「そのままの意味だよ。篁には衛士としての才能がある。だからいち早くこの新OSに慣れて貰って、力を付けてもらいたいんだ。少なくともオレの見立てでは斯衛軍でも有数の衛士になると思うよ
篁は」

大和の言葉に嘘はなかった。原作でも彼女は天才的な操縦センスを持ち、斯衛軍専用戦術機「武御雷」を愛機としている。ここで才能をうまく伸ばしてやる事が出来れば、後のち有能な衛士になるだろう。

（本音を言えば、こんな美人な女の子を死んでほしくないんだよね）

対して、尊敬する大和から才能があると言われた唯依は嬉しさのあまり、その場で踊ってしまいたい気持ちだった。確かに戦術機に関する試験は好成績をキープしている。それを教官に褒められて嬉しかったが、尊敬する大和の言葉はその何倍も嬉しかった。

「あ、ありがとうございます！ 西園寺少尉からそのような言葉をいただけるとは思いませんでした」

「そう？ ……まあ、オレとしては女の子があまり戦場に立ってほしくないんだけどね……古臭いかな？」

どこか照れくさそうに言った大和に、唯依は黙って首を振った。

「いえ……。ですが今は戦時です。男も女も関係ありません」

「そうだな……なら早く終わらせないと」

「はい」

大和の言葉に柔らかい笑みを浮かべて答えた唯依。

と。

「うゝむ……」

と、巖谷が何やら難しい顔で唸り声を上げた。

「どうしましたか巖谷の叔父様？」

不思議そうに唯依が尋ねると、巖谷は嬉しそうにこう言った。

「いや……この分だと孫の顔も早く見られそうかな……と、思ってたな。いや、アイツの墓前にいいほうこ　　ぐほっあ!？」

唯依の眼にも止まらぬ一撃が、的確に巖谷の鳩尾を撃ち抜き、床に倒れ悶絶した。その傍には顔をこれでもかというくらい真っ赤にして肩で息をする唯依と、その一撃を間近で見て腰の引けた大和がいた。

次の日の朝から大和主導による唯依の新OSと「不知火」の完熟訓練が行われる事になった。一応、一連の基本動作を習得していた唯依だったが、

「えっ、きゃあ!」

シュミレーションでももの見事に転倒した。

『口で説明するより体験してもらった方がいいと思って何も言わなかったけど、前のOSと比べて操縦の遊びも少ない上、反応も速い。加えてCPUも換装させたから入力待ち時間もほとんどない。入力すればするほど機体は機敏に動いてくれるから、それを念頭に置いて動かしてごらん』

「りよ、了解!」

いきなり無様な姿を晒してしまった、と思いながら、手探りで機体の反応を確かめながらゆっくりと動かして行く。

『そうそうその調子。慣れてくるとかなり動かしやすくなるから。ああ、それと戦術機の搭乗時間が長ければ長いほど、機体が動かしやすくなるシステムは知っているよね?』

唯依の網膜に投影されたシュミレーションの平原、前方三〇〇メ

ートル先には何も装備していない一号機がいる。

「フィード、バックシステムの、事、ですね……くっ！」

『そう。強化装備に搭載されたマイクロコンピュータが、衛士個人のバイタルデータや操作ログなどの複合情報を蓄積、分析してそれを機体が学習し、動かしやすくなってくる。……と、言うのが今までだったけど、今回の「不知火」にはそれをさらに高速で学習して蓄積してくれる補助AIシステムが搭載されている。こうやって、篁が歩いているだけで補助AIは物凄い勢いで学習して、機体を補佐してくれている。そろそろ実感できるんじゃないかな？』

「あっ……言われてみれば……」

いつの間にか普通に歩いている。さっきと操縦は同じ感覚なのだが、機体はしっかりと安定して歩行を続けている。

『最初の内は補助AIによるサポートが大きいけど、慣れてくるとAIが判断してサポートの割合が減ってくるから機械的な動きが消えてくる。あと、このAIには音声認識による入力コマンド、そしてAIに命令して、AIの判断による新型稼働兵装担架システムでの自動索敵、照準、射撃が可能となっているんだ』

「そ、それはつまり……AIが自動的に判断して、攻撃を行ってくれるという事ですか!？」

『そう。それも衛士の個人特性データを分析し、衛士そっくりの射撃を再現できる。つまりね、「不知火」には”もう一人の自分”が乗っていて、戦闘の支援をしてくれるわけ。凄いだろこのシステム』

凄いという物じゃない。唯依は驚きの連続だ。何と言う技術だ。これも全てたった一人の人間が生み出し、実現させたというのか。

「すばらしい……すばらしいです西園寺少尉！　これなら米国の戦術機に負けて……いえ、勝っています。この機体こそ日本が世界に誇る戦術機になります」

『いや〜そう言ってもらえるとオレの鼻も高くなるな。ただ弱点として、それなりに学習させなければならぬ事と、前の「不知火」よりコストが上がっちゃったことなんだよね……まあ、巖谷中佐は『このスペックでこのコストなら何ら問題ない』って言うてくれたんだけどね。さて、機体の基本動作には慣れたから、戦闘機動は後回しにして新機能の”キャンセル機能”について教えようか』

「はい。ご指導お願いします！」

『キャンセル機能は文字通り、入力したコマンドを解除出来る機能だよ。例えば機体は何らかの原因で体勢を崩した場合、機体は自動的に安定を取ろうと動くけど、それを解除して射撃を行ったり、または入力したコマンドを解除して、別の入力を打ち込む事が出来る。まあ、これも見て貰った方が速いな』

前方にいた壱号機に武器が装備された。背中の兵装稼働担架システムには87式突撃砲を二丁、手には74式近接戦闘長刀が握られている。そしてその壱号機から約五〇〇メートル離れた場所にダミーが出現した。

壱号機がそのダミーに向かって突進する。長刀を大上段に構えて振り下ろすのかと思いきや、背中之担架システムが起動して87式

突撃砲の一斉射撃を加えた。なるほど。長刀での入力を解除して、担架システムの射撃を入力したのか。

『今のは分かりやすい例。もちろん機動をキャンセルしたり、近接戦でフェイント紛いな攻撃も出来るようになってくる。これも巖谷中佐は絶賛してたね。ただし新式のフレームを採用しているからと言って、機体には無茶を要求するから関節が摩耗しやすくなるのが注意だな』

「なるほど。本当に素晴らしいアイディアの数々です。敬服しました！」

『褒めても何も出ないよ。さてそれじゃあ今日は一日、シュミレーションだけで　　ついて来れるか？』

こちらに背中を向け、壱号機の頭部が窺うように貳号機に乗る自分を見ている。静かな言葉と背中から伝わってきたモノは篋　唯依に対する期待と信頼　　唯依はぶるつと全身が歓喜に震えた。この期待と信頼、裏切る訳にはいかない！

「はい！」

返事はなく、壱号機は動き出した。唯依は必死に貳号機を操り、その後を追った。

SIDE・大和

いやああああ！　言ってしまった言ってしまった！　一度は言ってみた漢の熱い台詞を吐いてしまった！

恥ずかしい。めっちゃ恥ずかしい。どの口が言っただよこんちくしょう！　でも、あそこでしか言うタイミングが見当たらなかったし……うん。オレは間違っていない。むしろ褒めるべきだ。「すみません、この棚からこの棚まで全部ください」と並ぶ一度は言ってみた台詞を言っただ。悔いはないさ！

さて、と、篁中尉は問題なく付いてくるな。やっぱりセンスがあるだな。よしよし。

それにしても「不知火」を些か改造しすぎたか。出来る限り見た目を残そうとしたけど……んー、やっぱり別な機体になっちゃったな。ようやく大きな歴史介入が出来たからつい調子に乗って色々つぎ込んでしまったが……下手したら「武御雷」より強いんじゃないか？　「不知火」が認められれば、間違いなく斯衛軍は次期斯衛軍専用機開発を打診してくるだろうし……あいやー……少々無計画すぎた。何か考えねば……。

あつ、そういえば倉庫に眠っている本来の「不知火」。持ったないから仕上げておこう。戦術機の中でも「不知火」は結構お気に入りだったからな！。

第四話 平凡な日常と最終評価試験（前書き）

（ 。 。 ） …

PV31000、お気に入り244件

（ つ ）ゴシゴシ

PV31000、お気に入り244件

（ 。 。 ）ポカーン

以上、ログインした私の状態でした。

なんですかこれは！？ 私が久しぶりにMGザク（連邦軍）を作りながら、いろいろと考えている中、こんなことになっていたとは驚きです。皆様ありがとうございます！ 後、感想へ書き込んでいただいた方々、これからも貴重なご意見のほう、お願いします。

ってなわけで四話目どうぞ。

第四話 平凡な日常と最終評価試験

ここ最近技術廠に缶詰だったか、ようやく一段落つく事が出来たのはオレは実家に帰る事にした。

「では西園寺主任。明日の八時にお迎えに上がります」

「あつ、はい。ご苦労様です」

「では失礼します」

送ってくれた女性士官に答礼で返し、車を見送った。

純国産機開発主任の肩書は伊達じゃなかった。久しぶりに京都の街をぶらぶらしながら帰ろうと思ったら、明らかに佐官クラスの間が利用する送迎車が止まり、送ると言いだしたのだ。どうやら巖谷のおじさんが回したものでらしく、最初は断ろうとしたのだが断り切れず、結局送ってもらった。

まあ、保安上の理由と言われれば送ってもらうしかない。何せ今のオレは少尉でありながら、純国産機開発主任。ぶらぶらと京都の街を歩ける筈はない。

「うーん。大企業の重役とかいつもこんな感じなのだろうか……」

一つそんな事を呟いた後、オレは門にくぐり、玄関に入った。この辺りはそれなりの武家の人間が住む屋敷が集まっており、その一軒一軒がそれなりの敷地を誇っている。庭もそれなりに広いんだよ。中庭は毎日庭師さんが手入れに来るぐらい、日本庭園を造っている

からな。うちは。

「母上、朝陽。ただいま帰りました！」

開かれた玄関で声を上げる。途端、廊下をととつと軽い足並みで走る音。そして

「兄様お帰りなさい！」

がばつとオレの胸に飛び込んでくる天使。あー、もう何かますます可愛くなったな我が妹よ。お前の為ならオレは師団規模のBET Aを単騎で滅殺出来るぞ！

「大和。お勤めご苦労様です」

その後をやってくるのは数人の使用人を控えた我が母上。あー、何かますます綺麗になってますな。三十代に突入した筈なのに全然変わっていない。何と美しい事が、マイマザー！

「はい。父上は仕事ですか？」

「ええ。大和。父上から言伝を預かっています。持てる才能を全て発揮しろ、と」

「そのつもりです。良い仕上がり具合になってきました。これなら父上も満足していただけるでしょう」

朝陽を抱きかかえ、母上と一緒に長い廊下を歩き、居間へと向かう。

「ところで大和。最近、無理をしていませんか？ 母はお前が体を壊していないか心配していましたよ」

「大丈夫です。それでも衛士ですから、体調管理は万全です。朝陽、今日は何して遊ぼうか？」

「兄様は休んでください。朝陽は兄様の傍に居られればそれだけでうれしいですから」

……みなさん。うちの朝陽がかわいいですよー！ と拡声器を持って叫びたくなった！ なに、この気遣い。そしてこの可愛い笑顔！ ビバツシスコン！ 最高だシスコン、ジーク・シスコン！

「兄様。どうされましたか？ 体が震えて……寒いのですか？」

違いますよ朝陽。兄様は悶えているのです。そして悶えさせているのは朝陽なのです。

「いや、大丈夫だ……朝陽は良い子だな」

「はい。朝陽は良い子なのです」

エンジェルスマイル！ ぶはっぐほえ！？ 駄目だ。生命力が大幅に削られた。マジで死ぬ。これはやばい。何と言う保護欲。何と言う愛らしさ。何が何でもBETAから守って見せる！

居間に着く。座卓に家族三人腰を下ろした。すぐさま使用人のおばさんがお茶とお茶菓子を出してくれた。

「ふう……やっぱり家で飲むお茶は美味しいですね」

ほっと一息。これ、天然物だな。まだBETAの本土進攻がないから、天然モノは何とか入手できるみたいだ。

「兄様お爺ちゃんみたいです」

「そうか？」

まあ、実際年齢は三十代中頃ですからね。でも朝陽、せめておじさんにしてくれ。

「大和はしばらく家でゆっくりできるのですか？」

「いえ、明日からまた機体の完熟訓練が始まりますのでしばらく帰ってこれません。申し訳ありません、家を空けてばかりで……」

「構いません。家を守るのは私の務めです。大和は精一杯、国に御奉公してきなさい。そして疲れた時はいつでも帰っていらつしやい」

……駄目だ。母上にもやられたぜ。こんな事言われて帰らない旦那がいるか？ いるわけありません。うちの親父だってしっかりと家に帰ってきますからね。

「ありがとうございます母上」

ぺこりと一礼する。

と、その時。

「兄様兄様」

と、朝陽がオレを呼んだ。

「何だ朝陽？」

ずずつとお茶をすすりながら尋ねる。

「聞きたい事があります」

「何だ？ 朝陽の質問なら何でも答えてやるぞ」

「はい。
すか！？」

どうすれば兄様みたいな立派なえーしになれるま

その言葉にオレは思わず、口に含んでいたお茶を盛大に吐き出してしまった。

い、妹よ！？ 今、何を言ったあーーーーー？！

SIDE・唯依

「不知火」にはだいぶ慣れてきた。最初は四苦八苦していたもの

の新OSにも慣れて、今では自分が思うがままに機体を制御出来ていると思う。

いや、思うだけではだめだ。もっと精進しなければ。未熟者である自分が”思う”では駄目だ。もうすぐあの日本が誇る精鋭富士教導隊相手の最終評価試験が迫っている。さらに上を。「不知火」の性能を、新OSの性能をしっかりと引き出さないと。

私は昨日の自主訓練で気になった事を西園寺少尉に尋ねるべく、彼の部屋に向かっていた。

それにしても彼は武家の人間らしくない。確かに必要な所ではきちんと礼儀や礼節を心がけるが、プライベートとなると途端にフランクになる。昔からの友人の様に気軽に話しかけてきて、技術廠の関係者では彼を知らないモノはいない。

私はそういうのに慣れていないせいか、未だ戸惑う部分もある。名前で呼んでくれていいよと言ってくれるのは、私の事を信頼してくれている証拠だろう。だが彼は五摂家の次に位の高い『赤』の武家の人間だ。そう気軽に名前を呼ぶ訳には……。

そんな事を考えている内に西園寺少尉の部屋に着いた。

「失礼します。西園寺少尉。篁ですが」

ノックをして声をかける。おかしい。確かもう出勤されているはずだ。それに部屋の中から人の気配がする。……まさか侵入者か？！

「曲者！」

私はそう思い、部屋に飛び込み、一瞬言葉を失った。

「さ、ささ西園寺少尉。何をしていらっしゃるんですか!？」

嘘でしょう!？ 何かをブツブツと呟きながら、西園寺少尉が首を吊ろうとしている。私は慌てて西園寺少尉の体を掴み、引きずり落とした。

「しょ、少尉! 落ち着いてください! 早まらないでください!」

「は、放せ! もうオレには生きている価値なんてないんだあー
――!」

泣きわめく彼は普段の彼とは対照的に、酷く子供っぽかった。ちよつとばかり、彼の意外な一面性を見られた事に私は驚きつつもどこか嬉しい気持ちだった。

「はあ……つまり、妹さんが衛士になりたいと言って、西園寺少尉がそれを否定して……ケンカをしたわけですか？」

「っ……ぐすっ……」

コクコクと頷く西園寺少尉。私はあまりにも馬鹿馬鹿しい内容で首を吊ろうした彼に呆れかえった。

「西園寺少尉。そこは妹さんの意志を尊重してあげるべきではないのでしょうか？ 西園寺家の人間であるならば、衛士になるのは当然の流れな訳ですし……」

「でも……朝陽には衛士なんて無理だよ。朝陽は戦いとは無縁の生活を送ってほしいんだよオレは……」

ぐずぐずと泣き続ける西園寺少尉。

ああ……私のイメージが崩れていく音がする……。

「ですが妹さんは西園寺少尉の活躍を聞いて、衛士を目指されたのでしょうか？ そこはしっかりと西園寺少尉が指導してさし上げれば、問題はないかと思えますよ」

「でも……やっぱり朝陽には無理だよ。朝陽には普通の女の子の生活を送ってもらって、普通の恋 いや、恋はなし。朝陽に男が出来たらオレは間違いなくそいつを半殺しにするな とにかく、朝陽には衛士にはなってほしくないんだよ！」

ああ……やめてください……これ以上、変な姿を私に見せないでください……

「そ、それじゃあ妹さん専用の戦術機でも作ってあげたらどうでしょう？ そこに西園寺少尉の指導が入れば」

もう投げやり気味で言った私の言葉に、西園寺少尉の動きがぴたりと止まった。えっ、あれ……何か私、変な事を言ってしまった？

「そうか……そうだよな。チートな能力もあるわけだし、出来ない事はない……そうか、そうか……くっくっくっ、そうだよ。作っちゃえばいいんだよ！ どうせ今回の「不知火」が正式採用されれば、開発者のオレにはそれなりの金が舞い込んでくる！ 企業とも太いパイプが出来た！ キヤピタルも八〇万ある！ そうだ、それでいい。作る、作るぞお！！ 最強の防御力！ 衛士の生存を第一にした防御型の世界最強の朝陽専用戦術機！ くくくっ……あっはははははははあ！！！！！！」

………ぱたん。

私は高笑いを続ける西園寺少尉の部屋から静かに退室した。明日にはいつも通りの少尉に戻っている事を信じて、自主訓練を再開した。

この後、何故か巖谷の叔父様の部屋で一緒に泣いて、慰めあっている二人を見て、私は大きく疲れ切った溜息を吐いた。

「分かる！ 分かるぞ大和君！ 私も唯依ちゃんに嫌われたと思ったら……！」

「分かりますか巖谷の叔父さん！ 当然ですよ！ 当然の事なんですよね！」

「そうだとも同志よ！」

「同志！」

がっちりと肩を組み合う二人を見て、何かもう全部放り出したくなる気持ちになった。

S I D E

一九九四年二月十五日。富士第一基地の広大な演習場で純国産戦術機「不知火」の最終評価試験が行われようとしていた。今回の最終評価試験には帝国軍の軍上層部は元より、榊総理を筆頭とした政界メンバー、さらには五摂家に有力武家の当主達の姿も見られた。

铮々(そうそう)たる顔触れだな、と日本帝国軍最強の衛士と名高い紅蓮中将は周囲を見渡し呟いた。

「紅蓮」

「はっ」

と、紅蓮に声を駆けたのは、内密に政威大將軍へと任命が決まっている煌武院 悠陽だった。

「此度の国産戦術機試験。お前は如何様に考えていますか？」

「実に興味深い……の一言ですな」

「わたくし私も同意見です」

悠陽が資料に目を落す。紅蓮も同じく、配布された最終評価試験の内容が書かれた冊子を見た。

（そう実に興味深いわ。この最終評価試験は……）

今から行われるのは最精鋭が揃う富士教導隊二個中隊を相手に、様々な革新的技術を投入した先行量産機「不知火」の二機編成が戦うのだ。数にして二十四対二。圧倒的な戦力差。単純に考えれば勝負どころか、評価にすらならないだろう。だが「不知火」を新規に再設計した西園寺大和は「問題ありません。私の設計した「不知火」の性能を示すには、このぐらいしていただかないと初陣には相応しくありません」と堂々と言い放ったのだ。

「ふふっ……」

思わず口元に笑みがこぼれた。

その時に言った顔の眼が実に紅蓮好みだった。彼の気持ちがひしひしと伝わってくる。

待っている。直ぐに度肝を抜いてやる。

紅蓮は大和の目からそんな言葉を読み取っていた。

「お集まりの皆様、これより第三世代戦術機「不知火」の最終評価試験を行います。前方のモニターの方にご注目下さい」

司会進行巖谷の言葉に全員の目が向く。

大型モニターに点灯する。そしてそこには廃墟をバックに鮮や

かなデモンストレーションカラーに染められた二機の戦術機の姿がある。どこからか感嘆の声が漏れた。

「本機は九十三年に西園寺大和少尉を新しい開発主任に迎え、既存の戦術機とは一線を画す様々な試みを投入した第三世代戦術機であります。MBFと呼ばれる内骨格構造、軽量かつ強度も高く、コストにも優れた発泡金属装甲を基本装甲として、バイタルエリアが高い部分にのみ、通常装甲の三倍の強度を誇る超鋼スチール装甲を採用し、衛士の生存率を高められています。また新型CPUによる処理能力の向上、それに伴う新OS導入など、本来計画されていた機体よりもコストは上がりましたが、それに見合う以上の性能を誇っております。なお、これらの革新的な技術や素材は全て、西園寺大和少尉が一人で考え出したものであります」

驚きの声が次々と上がる。それも当然だ。誰も考えもしなかった様々な技術を僅か、十四の子どもが考え付き、それを実現させたのだ。

と、様々な場所から拳手が上がる。質問したいことはたくさんあるだろう。巖谷は一礼して言った。

「ご質問は評価試験の後に西園寺少尉に呼びますのでその時に。まずは日本の独自戦術理論に基づき、技術力を結集した第三世代戦術機「不知火」の性能をご覧下さい」

「すう……はあ……」

篁 唯依は「不知火」式号機の中で何度も深呼吸を繰り返していた。心臓が胸から飛び出てしまいそうなぐらい、激しい鼓動を繰り返している。冷や汗が全身から吹き出し落ち着かない。操縦桿を握る手も震えて上手く握れない。

その原因ははるか二キロ先に並ぶ富士教導隊の二個中隊の姿だ。それぞれの機体から感じる言い様のない重圧が唯依を締め付けている。

さらに唯依を締め付けているのはこの絶望的な戦力差だ。二対二十四の模擬戦。いくら「不知火」の優れた性能は分かっているが、あまりにも数が違いすぎる。無謀だ。

『篁』

「は、はい!!」

思わず全身が大きく震えた。声の主は壱号機に乗っている大和だ。唯依の網膜に投影された映像には「不知火」壱号機がこちらを見ていた。

『息が荒いぞ。落ち着けよ』

「は、はい。了解です……」

(……声が裏返ってるぞ。かなり緊張しているな)

まあそれもそうか。と、大和は納得する。一応、実戦形式の模

擬戦も行ったがこれほどの数の戦術機をたった二機で相手にすることは普通はない。それこそ人類同士の戦闘を行わない限りだ。彼女が緊張するのも無理はない。

と、大和は脳裏にある言葉が閃いた。大和、一度は言ってみた
いセリフの一つ。

（むっ……………ここはあの言葉を言うチャンスか？ そうだよな
ここで言うべき台詞だ。それにこれはあんまり恥ずかしく……………ない
よな。うん。大丈夫なはずだ。よし、オレは成りきる！）

意を決し、極めて冷静な声で唯依に話しかけた。その時、手元の
操縦パネルを誤って触り、前もって設定していた通信と繋がって
しまった事に大和は気づいていない。

『
唯依』

「さ、さい、西園寺少尉。任務中は篁と……………！」

『人間だけが神を持つ
』

「しょう、い……………？」

通信用ウィンドには教えを説く高僧のような顔で自分を見つめ
る大和がある。思わず、その顔と瞳に捕らわれた。なにか、大切な
ことを伝えようとしてくれている。それがひしひしと伝わってくる。

『今を越える力……………可能性と言う名の内なる神を
』

「今を……………越える力……………内なる神……………」

思わず口走った。

可能性……その言葉がじわりと頭の奥に染み込んでくる。

彼は言っている。

己を信じろと。そして己が、人間が秘める無限大の未知の力、可能性を信じろと

！！

「すう……はあ」

大きく深呼吸をした。震えが止まった。呼吸も心臓もいつものリズムを刻んでいる。

そうだ。何を怯える必要がある。自分を信じろ。一人じゃない。やるべき事は全てしてきた。何も恐れる事はない。ここには西園寺大和もいる。そして、この式号機に宿る、もう一人の自分、もいる。

「西園寺少尉」

唯依の目に宿ったモノを感じ取ったように、大和は小さく笑みを浮かべ言った。

『いくぞ。相手はたかが富士教導隊二個中隊の「陽炎」。
オレ達に宿る神の敵じゃない』

「了解！！」

『人間だけが神を持つ』

『しょう、い……？』

『今を超える力……可能性と言う名の内なる神を』

『今を……越える力……内なる神……』

突然、来賓客がいる会場にあるスピーカーに彼らの会話が流れた。最初は僅かにどよめいた会場が、大和の言葉で静まり返った。

（人間だけが神を持つ……今を超える力……可能性と言う名の
内なる神を　　か）

紅蓮は静かに心の中で何度か復唱し、己の心に強く響いたのを確かに感じた。

「斑鳩」

「はっ」

と、隣に座っていた次期斑鳩家当主斑鳩　瞬永が答えた。

「良い言葉だな。己をひたすら信じてなければ出てこぬ言葉だ」

「この斑鳩、よもや十四の小僧に感服するとは思いませんでした」

どこか楽しげに答える次期当主の顔を見て、つい紅蓮も破顔した。

「同感だ。良い目をしていると思っていたが、心もすっかりと鍛えられていたか。西園寺は良い跡継ぎを得たな。将来が楽しみだ。はっはっはっ」

同じく、巖谷は満足げに口許に笑みを浮かべていた。

（なるほど。それが大和君の根源か……これは是非とも唯依ちゃんの前になつてほしいものだな）

まあそれを唯依に言えば、鋭いボディীবローを喰らうのは明白なので黙っておく。

巖谷は手元の携帯端末を操作し、とりあえず通信機の電源を切っておく事にした。

その時、巖谷が気づいた。

煌武院 悠陽が眩しい光を見るように眼を細め、じっと「不知火」壱号機を見つめていた事に。

『隊長。本当にやるんですか？』

「そういう命令だ。気を抜くなよ」

部下のどこかやる気のない言葉に、臨時に編成された富士教導隊の隊長、栗津少佐は生真面目にそう言葉を返した。本音を言えば彼もやる気が出ないでいた。念願の純国産戦術機の最終評価試験の相手に選ばれた事に言い様のない名誉だったが、いくらなんでもこの評価試験の内容はあまりにも馬鹿げている。向こうがいくら新型だと言っても、二対二十四の模擬戦をどう評価できるのか。新米の衛士で構成された部隊ならまだしも、我々は帝国軍のアグレッサー（仮想敵）も行う最精鋭にして最強の部隊、富士教導隊だ。勝敗はすでに決している。

『命令……と言われれば従いますが、正直、やりにくいですね』

女性衛士が答える。私も同じ気持ちだと言いたかったが、部下にそのような愚痴を言うわけにはいかない。

ただ勝敗が見えていても、手こずるかもしれないと栗津少佐は思っていた。式号機の衛士が誰なのか教えられなかったが、

ギ号機には壮絶を極めたとされる大陸での戦いで、若干十三歳で配属を希望し、無事帰ってきたあの西園寺家の嫡男が乗っている。

『富士教導隊の皆さん。今回の最終評価試験へのご協力、開発衛士、そして開発主任としても感謝しきれません』

噂をすれば、か。若いな。栗津少佐が言葉を返す。

「いや、こちらこそ名誉ある任務を受け、感謝している。お互い全力を出しきろう」

『はい。よろしくお願いします。あつ、そうだ少佐。一言よろしいですか?』

「何だ?」

『隊員の方々に伝えてください。負けても落ち込まないで下さいと』

「なっ!?!」

思わず声が漏れた。この戦力差でありながら彼は勝利する気にいるというのか? 馬鹿な。と栗津は思わず首を振った。

『中佐。例の御曹司は何と?』

「負けても落ち込まないで下さい……だそうだ」

『はっ?』

『それ、本当ですか？』

『へえ〜。驚いた。武家の坊やはオレ達に勝つ気なのか。はははっ、こりゃ傑作だ！』

隊員の嘲笑う声が響く。その中、栗津だけが静かに考え込んでいた。

自棄になったわけではない。彼の目は全く死んでいない。むしろ、あの目は。

『HQより各機へ。これより新型戦術機不知火の最終評価試験を行う。準備しろ』

「っ、了解したHQ。各機、聞こえたな。戦闘体勢へ移行。安全装置を解除しろ。フォーメーションはA1で行く」

『！』
『HQより各機へ。開始五秒前、四、三、二、一……状況開始』

その声を合図に憐れな生け贄が二匹、獰猛な獣達に突進してくる。

低い唸り声がする。

生け贄との相対距離がどんどん縮められていく。最前衛に位置する突撃前衛はすでに敵をマーキングしているだろう。

何の獣なのか分からない。ただそいつは静かに闇の中に潜んでいる。そしてその闇の中で、己の狂おしい程の狂暴性を徹

底的に潜ませ、舌舐めずりをしながらこちらを窺っている・

『ご苦労だったな。武家のお坊っちゃま!』

最前衛の「陽炎」が突撃砲を構え、フルオートで発射した。無数のペイント弾が蜂の群れのように鮮やかな塗装が施された「不知火」と言う名の生贄に向かっていく。

その瞬間、栗津は全身を逆立つのを感じた。同時に擽猛な唸り声の正体は何なのか、嫌がおうでも感じた。

見えるはずはない。だが彼には見えた。真新しい管制シートの上で、ひたすらに隠し続けてきた、いや封じ込められてきた圧倒的な力を振るえる喜びに支配された、あの少年の顔が。

「はっ……?」

そして今、目の前で起こった異常事態に栗津は思わず放心してしまった。

消えた。

突然、捕らえていた筈の生け贄が消えた。次は音だ。ドスンと言う発砲音が響き渡り、攻撃を加えた「陽炎」が鮮やかなペイント弾の赤インクにまみれていた。

『なっ!?!』

『きえっ

ぐわっ!?!』

『馬鹿な。何だあの瞬発性は！？』

『5右だ！』

『くそつ、やられた！？ 何だあの機体は——！？』

隊員達の驚愕の悲鳴が通信を支配する。最精鋭の富士教導隊二個中隊がたった二機編成の戦術機に翻弄されつつある。

一機、また一機と撃墜判定が下され、動きが止まってゆく。

そうか……憐れな生け贄は我々だ。我々は 魔獣の猟場に迷い混んだ獲物だ。

栗津は慌てず怯えず、ただ冷静に自分の存在を理解した。

『くそつ、何なんだあのスピードは！？ 加速性能が違いすぎる』

「志号機に装備されているあの長砲身の武器は

」

『ちくしょうちくしょうちくしょう！ たった二機編成に俺たちがやられるなんて馬鹿なこと がつ！？』

「西園寺少尉が前衛専用武器として開発した93式突撃散弾砲と呼び」

『3！？ 何だ何だそのありかよ！？ 戦術機で回し蹴りだと！？ ふざけるなあぁー！？』

「口径は200mm。射程範囲は極めて短いですがその射程範囲内ではあれば」

『6 奴の足を止めるー！』

「92式多目的追加装甲を破壊できる威力を誇り」

『ダメ！？ 何て速さ…… ロックが追い付かない！？』

「普通の戦術機の装甲では」

『何なんだこいつら。何でこんな機動が出来るんだよ！？ なつ、三方向同時射撃だ！？』

「一撃で撃墜できる代物となっております」

『それだけじゃねえ！ 後ろにも目があるみたいに担架システムを起動させて後方危険円錐域を殺していやがる！』

「装填は基本的にポンプアクションですが」

『化け物め！？ 機体の硬直時間がほとんどない！！ それ
にあの武器、何て威力 連射出来んのかよお！？』

「電動駆動による自動装填も可能です」

来賓室に響き渡る最精鋭富士教導隊の隊員達の阿鼻叫喚の声。
そしてモニターに写し出されているこの場の誰もが見たことない戦
場を蹂躪する二機の戦術機。

ある時は大地を支配する四肢の魔獣。ある時は天空を支配する翼
の魔獣。息つく暇のない連続攻撃。まるで戦術機が搭乗者の意思を
明確に読み取り、文字通り人機一体となって暴れ回っている

誰もが声を失い、釘付けになった。あの紅蓮でさえ目を離せず
にいる。

巖谷は予想通りの反応を見て、一つ咳払いする。何人かの将校
が巖谷に視線を向けた。

「いかがでしょう？ これが我が国の第三世代戦術機「不知火」
です」

薄笑みを浮かべて巖谷は宣言した。

「残り八機」

大和は確認するように呟いた。機体は問題なく動いてくれている。補助AIのサポートも強力だが何よりキャンセルを使えるのと即応性が高い事が、大和の操縦技術：Aを遺憾なく発揮させた。だがしかし、コンボや先行入力が使えない分、入力の手間が増えているが今は仕方ない。

93式散弾突撃砲のボックスマガジンにはまだ残弾がある。これだけで富士教導隊を壊滅させる事が出来るが、それではデモンストレーションの意味はない。魅せなければならぬこの「不知火」の凄さを。

「「不知火」。長刀装備。散弾砲放棄」

サポートAIの音声認識はその命令を直ぐに続行。突撃砲の牽制射撃をダミーのビルなどを盾にして回避しながら長刀を装備した。

「西園寺大和。推して参る……！」（これも言ってみたかったあ！）

射撃を勢いが僅かに弱くなった。その隙を残さず、「不知火」が一番端の砲撃支援の「陽炎」を狙う。跳躍ユニットも新たに設計し直し、推力もアップしている。「陽炎」は87式突撃支援砲を連射して近づけさせないようにしているが無駄な事。ここで大和の未来予知：Aが利いている。

「見える……私にも敵が見えるぞ！（これ鉄板。あーもう、とまんねえ！）」

ざんつと一閃。実際には斬られていないのだが戦術機のデータリンクによって、自動的に大破判定を受け、「陽炎」が沈黙する。

（快感だ……！）

すぐさま移動を開始する。残りは七機。一気に刈り取る。

「ナイトファング1よりナイトファング2へ。一気に勝負を付けるぞ！」

『了解。援護します！』

「不知火」式号機が後方に着く。大和は被弾らしい被弾をしていなかったが、「不知火」式号機の装甲は多少ながらペイント弾に染まっている。

「ナイトファング2。機動に支障はないか？」

『ありません。「不知火」が補佐してくれますから』

「そうか。終わらせるぞ篁」

『了解！』

五分後、式号機は右腕の損傷判定を受けたが、周りには無残にも大破判定を受け、動けなくなった富士教導隊の「陽炎」が散乱して

いた。

第四話 平凡な日常と最終評価試験（後書き）

機動 土ガンム Cは名作です。私は何度も読み返しています。
バージ、リーの成長、マリダさんの最後……はい。今回登場
したセリフは絶対にいれてやると思っていたセリフでした。
皆さんはどう考えますか。カーイアスのあの言葉を。

さて、今回はおまけとして大和の現在の所有スキルを発表します。

操縦技術：A

機械技術：A+

設計開発：B

未来予知：A

肉体強化：A

プログラミング技術：A

カリスマ：C

指揮官：D

所有キャピタル：815468

やっと四分の一に達しました。

第五話 戦術機発表と有名な大和。そしてあの国。（前書き）

こんばんわ。いんでぐらです。

ちよつと調子に乗ってうつとおしいまえがきを書いてしまつて申し訳ありません。友人にも「これは書き直せ」と言われて、書き直させていただきます。

ただいまオリジナルの歴史年表を作りながら、この先のストーリーを構想中で、少々更新が遅れてくると思います。その辺りは皆様、温かな目で見守ってください。

では、改めまして第五話どうぞ。

第五話 戦術機発表と有名な大和。そしてあの国。

S I D E

1994年。大日本帝国は二機の純国産戦術機の開発を成功させたとの報告を国連及び世界に向けて発信した。その報告を受けた国連及び各国は僅かに首を傾げた。元々、独自の戦術機理論を組む日本の戦術機開発は注目を浴びていたが、事前情報では一機だったはずだ。ただでさえ昨今の大陸派遣部隊の大打撃と、無限に積み上げられていくBETAとの戦費は日本だけでなく各国の経済を締め上げていく中で莫大な金がかかる戦術機開発を同時に二機やってのけるとは到底思えなかったからだ。せいぜいマイナーチェンジ、もしくは装備を削った廉価版だと考えられていた各国の考えは、あっさりと否定された。

一機は94式戦闘歩行戦術機(TSF-type94)「不知火」。新たに採用された新素材、軽量にして現在の戦術機装甲板以上の強度を持つ発泡金属装甲と、重量はあるが二倍以上の剛性を持つ超硬スチール装甲の部分使用により既存の戦術機とは一線を引いた軽量化に成功しつつ機体の強度を大幅に上げることになったのだ。さらに新型CPU採用による処理能力の向上、新OSによる操作性及び即応性の大幅な向上に加えて新機能として、入力されたコマンドを取り消し、別の入力を入れる事が出来るキャンセル機能によってさらに高度で柔軟な機動が可能となった。また整備性、コストパフォーマンスにも優れ、瞬く間に最前線の国家はこの「不知火」に興味を持った。

だが次に発表された機体には、最前線国家のみならず人類の兵器庫であるアメリカでさえ大きな関心を寄せた。

94式新式戦闘歩行戦術機（MBF-TYPE94）「夕雲」。

「不知火」に採用された素材と技術に加えて、既存の戦術機設計とは全く違う設計思想、MBFと呼ばれる内骨格構造を採用した新機軸の戦術機。ほぼ人間と同じ柔軟な稼働性と強固な剛性は、公開された富士教導隊との演習の中で見せた回し蹴りがそれを証明させ、各国の技術者は心底驚いた。戦術機は元々、人間と同じだけの稼働範囲を持っていたが蹴撃などの機体の手足その物を武器として使う攻撃方法は想定されておらず、またそれは戦術機本体に故障、もしくはフレームに致命的な歪みを発生させてしまうからだ。ソフト面でも「不知火」に採用された技術に加え、高性能な学習型補助AIシステム搭載による衛士の操縦技術の補強及び軽減、音声入力システム、AIによる自動索敵、さらには上下左右の稼働が可能な94式稼働兵装担架システム使用による射撃も行えると言う優れたもので、各国の注目を浴びずに入られなかった。

一体、日本はどうやってこれだけの技術を生み出し、そして完成させたのか。新しい一つの技術を既存の技術を融合させるだけでも大変な苦労が掛かると言うのに、今回発表された日本製の戦術機には「そんなこと知った事ではない」と言わんばかりに、大量に投入され、実現されている。技術者達は発表された二機の戦術機よりも、これらを開発、実現させた日本の技術力を賞賛し、興味を持った。

「大人の理論に凝り固まった発想には何も色がないが、子どもの奇想天外の発想は色鮮やかな色がある」

後の発表。これらの技術がたった一人の十四歳の少年が生み出し、実現させた事を聞いたある国の技術者は実に愉快そうにその言葉を吐いたと言う。

S I D E ・ 大和

結論から言うとオレが開発した「不知火」は、「夕雲」と言う別系統の高性能機として世に出ることになりました。

なんでこうなったかと言うと理由は単純明快。コストパフォーマンスの面からみればオレの「不知火」……いや「夕雲」より、日本の三社メーカーが開発した「不知火」のほうが優れていたからだ。最終評価試験が終わり、唯依の事や補助AI、新OSの事を説明した時は、軍上部は元より五摂家、そしてあの生身でも戦車級が倒せそうな紅蓮中将も絶賛して太鼓判を推してくれたのだが、待ったをかけたのは大蔵大臣とあの榊内閣総理大臣だった。

待ったをかけた理由は、前述の通りコストパフォーマンスの面で正確には今回の純国産戦術機開発計画『耀光計画』の予算が、予定の予算よりも大幅に少ない事からだ。1983年度の会計予算から調達し、現在まで予算が組まれてきたわけだが元々戦術機開発には莫大な開発費が必要な上、87年の琵琶湖運河の浚渫工事の費用、国産機開発の遅滞によるF-15Jの追加導入費用、そして極め付けが昨年の中国戦線での九六事件による日本大陸派兵部隊二個大隊壊滅による損害と遺族補償、それらが重なって予定数を揃えるには一機に掛るコストを予定されていたコストより低くしなければ

ばならないのだ。

いや、さすがにそれはオレも想像していなかった訳だよ。当然、軍部は「夕雲」の性能を認めていたから何とかしろって言うのだが、ないものない。金がどっからともなく出てくるわけないからな。

オレの「夕雲」は、最終評価試験に合わせるため生産体制がある程度出来ていた「不知火」のパーツを出来る限り採用したけど、どうしても設計思想及び構造上の違いから使用パーツ数は全体の四〇パーセント程度。結局、新規発注した部品が半分以上に達してしまったため、「不知火」が1で生産できるならば、「夕雲」は約16倍のコストがかかってしまう。こんな話を聞いたら、完璧に「夕雲」はチェックメイトだ。

紛糾する会場の中、オレが何か手はないかと思いを巡らせる事数分。頭の電球がぴかっと閃き、あることを提案した。

ここで登場したのがオレが開発の間、ちょこちょこいじっては完成された本来の「不知火」だ。元々拡張性や発展性を犠牲にして軍の無茶な要求に答えた機体の為、いじれる場所はあまりなかったが、何とか知恵を絞って削れる所をさらに削って、発泡金属装甲と超硬スチール合金の採用、新OS、新CPUなどをつぎ込んだ結果、あら不思議。第三世代戦術機の性能を十分に満たす性能になった上、コストも若干下がったのだ。

その結果、異例ではあるが日本の純国産戦術機として二機を採用。「不知火」は一般衛士向け、要は日本の主力戦術機として採用。「夕雲」は陸軍では指揮官機もしくは一部エース用の機体として使用し、斯衛軍でも城内省で独自に進められている斯衛軍専用戦術機開発計画『飛鳥計画』での開発中の機体が完成するまでの繋ぎの機

体として採用されたと言うわけだ。

まあ、当初の予定とは大きく変わっちゃったけど、新装甲板とCPU、OSのお陰で「不知火」の性能は向上した上、「夕雲」もある。結果良ければすべてよしと言う事で。

こんなそんな訳で大仕事を終えて、オレは少しは休暇でも取ろうかと考えていたが、そうは問屋が卸さなかった。

大手三社メーカーの「これから末永くよろしく願います」の挨拶やパーティーの参加から始まり、遠田技研を筆頭とした中流企業の代表が「何卒お願いいたします！」と手土産片手にやって来るわ、いざ発表されたら京都在留中の各国の大使がひっきりなしにオレに面会の予約を入れてくるわ、国連からはあの珠瀬事務次官がやってきて「君の知識は国連の技術開発局にこそ相応しい」と言っ国連軍にこないか誘ってくるわ、城内省、正確には斯衛軍から最精鋭部隊として名高い第十六斯衛大隊指揮官の斑鳩様が、父上と朝陽を連れて堂々かつ大胆に身内を使って「そろそろ斯衛軍に戻ってこないか？」とか「こちらは予算の縛りなどないぞ。西園寺」と笑顔で勧誘してくるわ、帝国国防省からは最大の便宜を図るから、技術廠にいろとこやかな圧力をかけてくるわ……この数週間、まともに寝る事が出来なかった！あまりの面会人の多さに巖谷のおじさんが気を利かしてくれて、秘書官を付けてくれたんだけど……初めて見たよ。分単位、秒単位のスケジュール。余白がほとんどないんだよ。文字ばかりの手帳なんだよ。手帳が初めて凶器に見えたさ！

そして今、オレは斯衛の制服を纏って車の後部座席でぐったりしながら京都の町並みを見つめていた。次の面会人は内閣総理大臣榊是親。どんな会話になるのか、何となく想像がつく。

……過労死って、一番つらい死に方だよなあ……日本の中間管理職の方々に敬礼！……。

side・榊

朝から各国からの電話応対に外務省は悲鳴を上げ、各国の大使の面会が相次いでいる。特に米国は、どこの国よりも単刀直入に技術を公開しろなど西園寺大和をこちらによこせと再三に渡って要求してくる上、政界に潜む犬どもも動き出している。国の為に動くのではなく、己の利権の為にだけに国の誇りを捨て、害虫の様に蔓延るクズ共め。許されるなら今すぐ排除したいが、その力がない自分に怒りを覚える。

今はまだ我が国の軍備増強及び「夕雲」、「不知火」の調整を理由に突っぱねているが、いつまで持つものか……。技術の公開は避けられないだろう。だがようやく勝負の席に座り、手札が配られたのだ。ここでどれだけ我が国の手札を強力に見せ、見合う対価を引き出すか、私の手腕にかかっている。

しかし、外交問題も重要だがさらに問題なのは二機の国産戦術機

の配備に関する予算が苦しいことだ。昨今の大陸派兵部隊壊滅による被害と遺族への対応と保証、中国大陸からの大量の難民問題とその対策、低迷する日本経済、対照的に膨れ上がる莫大な戦費などで大蔵省は火の車なのが実状だ。

故に私は今、己の感情を押し殺し、親米派と接触して技術公開に反対する軍部の説得を行っている。軍部としては私もアメリカに尻尾を振る犬に見えているだろうが、今は仕方ないのだ。紅蓮中將もそのあたりの事を分かっておられるため、僅かながら私の気を落ち着いている。彼らにも分かってほしい。国を、そして国民を守るためにも、今は堪え忍ぶときだ。分かってほしい。

と、私が大蔵省から送られた予算案に頭を痛めているとき、卓上の電話が鳴った。

『榊総理。西園寺大尉が来られました』

「分かった。通してくれ」

『はい』

私は持っていた予算案を引き出しの中に入れ、立ち上がり彼を出迎えることにした。本来なら私の方から出向きたいところだったが、どうしても時間の都合がつかず、彼を呼びだしてしまった。

ドアが開く。

「失礼します。帝国斯衛軍所属西園寺大和太尉、出頭いたしました」

赤い武家の正装を纏った西園寺大尉が敬礼を行う。

「忙しいところ呼び出してすまない。本来ならこちらから出向くのが筋なんだろうが、私も仕事が溜まっていてな。まことに申し訳ない」

正直、こうして彼と会うのにも一苦労だった。

彼自身、戦術機開発に優れた才能を持ちながら、同時に紅蓮中将与引き分けに持ち込むだけの操縦技術を持つ将来有望の衛士でもあるため、彼を帝国軍、斯衛軍のどちらの所属にするのか両者の間で激しい取り合いが行われている。

帝国軍。つまり国防省では、彼をこのまま斯衛軍からの出向扱いとして技術廠に所属させておきたい。配備され始めた「不知火」や「夕雲」のサポートや修正、93式突撃散弾砲に続く新たな武器開発、81式戦術歩行攻撃機「海神」の改修、そして国防省が力を入れている電磁投射兵器に関わって貰いたいからだ。

対して斯衛軍。城内省は彼を本来の所属である斯衛軍に戻し、主任開発者として、斯衛軍専用機開発計画『飛鳥計画』に参加させたいという目的がある。それに五摂家の一つ、九條家の若き当主が彼を自分の部隊に配属させる為に裏で色々と動いているらしい。おそらく最精鋭部隊を組織した斑鳩家の当主に対抗しての事だろう。斑鳩と九條はある意味ではライバル関係にあるからな。

「いえ、お気になさらずに。一介の大尉の元に総理が来て頂く訳にはまいりません。早速で申し訳ありませんが本題に入っていただけますか？」

「うむ。分かった」

私は隣の来客室に彼を通し、腰を落ち着けた後、本題に入る事にした。

「話と言つのも他でもない。現在の我が国の状態、そして状況。それらを理解しているかね？」

「はい。予算がない。それはつまり、ようやく完成させた「不知火」や「夕雲」の配備が遅れる事を示し、国際社会……いえ、米国は安保（日米安全保障条約）や国際社会での貢献を楯に技術の公表を打診して、自国の技術力強化による戦術機市場の更なる独占と確固たる地位を目論んでいる……と言ったところでしょうか？ やれやれ、実にお盛んな事ですな彼の国は……」

彼は肩をすくめてため息交じりに答えた。彼はアメリカの大使とも直に会っているのだ。どうやら懇切丁寧に説かれた様だな。

「概ねそうだな」

私が頷く。と、次の瞬間、彼はあっけらかんに信じられない言葉を紡いだ。

「いいじゃないですか。ここは従順な同盟国を演じましょう。技術を輸出して、外貨を獲得、国産機の配備を急ぐ事が先決です。そもそもあれ、未完成品が多いですしね」

「はっ……？ ま、待ちたまえ！？ 今、何と言った！？」

私は思わず身を乗り出し、彼に迫った。

アレらの革新的な技術が未完成品だと！？ 馬鹿な。信じられない！

「未完成品と言ったのです。超硬スチール合金は予定の強度とコストで生産できましたが、構造材としても使用した発泡金属装甲板に関してはまだまだ改良の余地があります。「夕雲」に採用したMBFもまた同じです。迫っていた最終評価試験に合わせる為に生産性を重視して性能を落していますし、MBFも「不知火」で製造されていたパーツを出来る限り採用して、妥協した部分も多かったですしね」

言葉を失うとはまさにこの事だ。では何か…… もっと時間さえあれば「夕雲」や「不知火」以上の性能を持つ戦術機を開発できると言うのか……？！

「……天才とはまさに君の事だな」

驚愕と称賛を混ぜた声音で私は呟いた。

「総理に褒めていただけるとは感謝の極みです。ただ今の話はここだけの話にしてください。技術廠の巖谷中佐にも話していない事ですから」

「分かった。約束しよう。それとその件について軍部がなかなか首を縦に振らん。君の方からも説得してくれるとありがたいのだが……」

「分かりました。巖谷中佐と協力して説得してみます」

彼は快く快諾してくれた。私は胸にあった重石が一つ取れた気分だった。まったく彼には心底驚かされる。そして絶対に彼をアメリカに渡す訳にはいかないと心に誓った。

「榊総理。それが今回の用件ですか？」

「いや、もう一つある。実はこれも今回の件に関係しているのだが、君に輸出用兵器の開発を依頼したい」

手札は出来る限り多い方がいい。相手に勝つにも出すにも、まずが自分の手札が充実していなくてはならない。

「……総理から直々の要望ですから何とか答えたいと思うのですが……」

彼はひどく疲れたように溜息を吐いた。

「国防省と城内省かね？」

「後各国の大使もですね。正直……殺人的なスケジュールです。加えて皆さん、置いていかないでって言っても大量の資料や手土産を置いていきますから。私の部屋が埋め尽くされました……」

ははつと遠い目で小さく笑う彼の心労はかなりのものだろう。それが痛いほど分かった。なんと不憫なことか。まだ若いのに……。

「国防省と城内省、そして各国政府に国連は私のほうで引き受ける。だから何とか頼めないだろうか？ それと出来ればその輸出仕様の兵器に関しては、君が考え出した技術は出来る限り使わず、既

存の技術で延長で対応してほしい」

「また難しい注文ですね……」

彼が難色を示した。無茶を言っているのは分かっているが、何となく彼なら何とかできるじゃないかと言う妙な予感がするのだ。それもこれも彼が言ったあの言葉に起因しているのだろう。

人間だけが神を持つ。今を超える力。可能性と言う名の内なる神を

彼が唸る事数分。何か思いついたように口元に手を当てて、考え込みだした。

「何か思いついたのかね？」

そう尋ねると、彼は小さく頷いてくれた。私の口元に思わず笑みが浮かぶ。

「……ええ。榊首相、その輸出仕様の兵器開発費はどのくらいまで出せますか？」

「だいたいこのぐらいが限度だな」

私は懷から大蔵省と協議して何とかひねり出した予算の紙面を手渡す。彼はそれを見つめた後、再び小さく頷いた。実に頼りになる男だ。

「全く問題ありません。これだけの予算をよく絞りだしましたね」

「一部、私と官僚達から提供して貰ったからな。それで何を作る気かね？」

「戦車です。90式戦車を改良し、砲塔二門、不整地でも最低八〇キロの速度を出せるように改良します。後は大陸派兵部隊にいた頃から考えていた新機軸の戦車を開発したいと思います」

なるほど戦車か。各国が戦術機開発に集中している中、あえて旧世代の兵器を改修して売り出そうという事か。

いい案かもしれん。戦術機が対BETA戦の主力兵器として位置づけがされているが、あくまでもそれは後方からの戦車隊による戦術機級の支援砲撃やMLRS（多連装ロケットシステム）のミサイル攻撃があつてこそ、発揮するのだ。それに彼の言う新機軸の戦車というのも気になる。「夕雲」のような新しい戦術機を開発した彼が作る戦車はどんなものか、想像もつかない。

「どのくらいで提出できるかね？」

「榊総理が次のスケジュール以外、すべて無効にしてくれるなら技術廠に戻って一週間の内にお見せできますよ」

早い。信じられん。もうすでに彼の頭には設計図や構想が完成しているのか。

「分かった。外務省と協力して話を付けておこう。よろしく頼む」
手を差し出す。彼はにこやかな笑顔で握手した。

「はい。榊総理。政界、軍、企業、人、全ての力を合わせて、こ

の国を、そして世界を守りましょう」

国を守り、世界を守る　　か。ふふっ……戦況は刻々と人類に不利になっていく中、何と言う明るい先を見せてくれる事か。なるほど……紅蓮中將が一目置くのも頷ける。

私がぐつと強く彼の手を握りしめる。すると彼も力を込め、それに答えてくれた。

ますます気に入った。共にこの国を守ろうとではないか西園寺大尉。

それにしても将来有望で気持ちのいい若者だ。出来ればこう言う青年に娘の千鶴の婿に迎えたいのだが……些か早いかな？

榊総理との面談が終わり、大和はそのまま次のどうしても外す事の出来ない面会予約者と会うことになった。自分の家である西園寺家とは比べられないほど広大な武家屋敷の大広間。ここは五摂家の一つ、煌武院家。三十畳はあろうかという大広間は、質素に見えながらも欄間の見事な彫刻や襖に描かれた模様などみると嫌でも高価なものだと伝わってくる。さらに左側、開け放たれた障子からは一流の庭師によって整えられた国宝級の日本庭園が広がり、大和の目を和ませた。

と、上座の戸が開き、一人の女性が入ってきた。大和を挟むように並んで座っていた側近らしき人々が一斉に頭を下げ、大和もそれに習った。

「よく当家に来ていただきました。まずは感謝を。そして頭を上げてください。西園寺大尉」

「はっ」

大和が顔を上げ、上座に座る一人の女性、いや少女に視線を向けた。今年、政威大將軍の任命が決まった煌武院家現当主、煌武院悠陽。

白の着物を優雅に纏い、金細工の冠のようなものを頭に戴いた彼女の姿は思わず息を呑むほどの高貴さと美しさを漂わせている。始めて彼女をモニターで見た瞬間、『変な頭だ。ああ、そうだあれって確かガーベラ・トラをイメージしてんだよな。ありええねー』とか言っていた自分を殴りたくなってくる。

「煌武院悠陽様。政威大將軍へのご就任、まことおめでとうございます。失礼にも煌武院様との面会が遅れてしまって申し訳ありません。平にご容赦を」

母親に厳しく躰られたお辞儀の動作を一つずつ再確認しながら、いつも以上に丁寧な頭を下げる。悠陽は小さく首を振った。

「そのようなこと気にする必要はありません。そなたの才は今のこの国に必要なものです」

「ありがとうございます。この西園寺大和、そのお言葉を聞いて

安心しました。煌武院様。それで此度の面会、如何様な事でしょうか？」

「はい。そなたにどうしても聞いておきたいことがあるのです。月詠」

「はっ」

背後に控えていた眼鏡をかけた女性月詠真耶が一礼し、さっと手を振った。途端、音もなく側近たちが部屋から退出し、部屋には悠陽と大和だけになった。

僅かな静寂と微かは漂うい草の匂い。悠陽が静かに言葉を紡いだ。

「『人間だけが神を持つ。今を越える力。可能性という名の内なる神を』」

「煌武院様？」

「わたくしが聞きたいのはこの言葉の意味。そなたはどのような意味を持って、この言葉を紡いだのですか？」

悠陽は尋ねる。今も尚、心に刻まれたこの言葉。彼は一体、何を感じ、何を思い、何を持ってこの言葉を生み出したのか。その理由がとても知りたかった。

対して大和は静かに目を閉じ、黙考している。それはどのようにして伝えようと考えているように悠陽には見えたが、大和の内心は大パニックだった。

格好つけて言った言葉が、まさかこんな風にして自分に跳ね返ってくるとは。これはやばい。何かそれらしい言葉を考えないと。口は災いの元とはよく言ったモノだ。

（こ、こうなりやあ出たところ勝負だ！）

この世界に来て感じた事。この言葉を聞いた時に感じた自分の気持ちとを考えをそのまま伝える。そしてゲームをプレイして思ったことを。内面の感情とは正反対に、酷く落ち着いた表情で大和は一つ一言葉を選んだ後、悠陽を見て口を開いた。

「煌武院様。これより少し失礼な口調で話してよろしいでしょうか？」

「かまいません。そなたの言葉で伝えてほしい」

「はつ。煌武院様には叶えたい夢や理想はございませんか？」

「夢……？」

「はい。五摂家の煌武院悠陽でもなく、政威大將軍の煌武院悠陽でもない。ただ一人の人間としての煌武院悠陽が叶えたい夢はありませんか？」

夢……。と、悠陽は口の中で自分に問いかけるように呟いた。

ある。いや、あったと言うほうが正しい。確かに煌武院悠陽が願った夢は確かにあった。でもそれは禁忌だと、あつてはならぬことだと周りから否定され諦めた夢が。

「私には明確な夢……理想があります。この世界からBETAを排除し、みんなが笑っている平和な日常を手に入れる為に私はここにいて、戦場に立ちます」

最初は神の間違いから始まり、元の世界に戻る為に頑張っていた。だが、この世界で生きて、もう一つの家族を得て、友を得た。喜びを感じて、怒りを爆発させて、悲しみに胸を打たれ、楽しさを知った。人が持つ優しさや強さをこの目で見てきた。

絶望的な戦場の中、一步も引かず、己の守りたいモノ、失いたくないモノ、かけがえのないモノの為に戦う兵士達。例えばこの先に己の死しかなくても恐れを無理やり封じ込め、銃を取り、戦う。

それを何度も見てきた。だからもう西園寺大和の目的は変わった。神がオレに救世主の役割を与えたとなれば、それを全うしてやる。この絶望的な世界を救って見せる。何が立ちはだかるかと、邪魔をしようと最期まで突き進む。そしてそれを達成するための原動力。未来を変える大きな力。他の生物が持ち得ない人間だけが持つ己の器を超え、広げる未知数の力。何かを成す為に、その頂に向かう為に何より必要なのは自分が持つ可能性を信じ、己を信じる心だ。

「人間だけが持つ。今を超える力。可能性と言う名の内なる神を……。この言葉は、人が望む理想へと通じる道を切り開く為の誓いの言葉だと思っています。煌武院悠陽様。もしあなたにどうしても叶えたい夢や理想があるなら、まずは己を信じて、己が秘める可能性を信じてください。そうすれば 自然と道は切り開ける筈です。私はそう信じています」

悠陽は静かに目を伏せ、自分の掌を見つめた。

（自分を……信じる力……そしてそれはわたくしの夢を叶える力となる……）

裂かれてしまった大切な人。それは災いだと言われ、いないモノと扱われた。取り戻したい。一人となってしまうた部屋。いつも隣にいたあの子。願わくばまた私の傍に。同じ場所で同じ時間を過ごしたい。

「煌武院悠陽様」

呼ばれ顔を上げた。大和がとても優しい笑みを浮かべ、諭すような口調でこう言った。

「伝統や風習は先人達が良いモノだと理想だと思い、後世にまで伝えられてきたモノです。それを否定する気はありませんし、従う気持ちもあります。ですが、それが人の大切な絆を断ち切るモノならば、私は否定し、ソレと戦う事を決意します」

ドクンツと、心臓が大きく高鳴り、思わず体が震えた。

彼は知っているのか、煌武院家の秘密を

?!

動揺する悠陽。大和は再び頭を下げ、夕陽の顔を見ないようにした。

「煌武院様。もし、煌武院様がソレと戦うと言うならば、この西園寺大和、微力ながら助太刀いたします。私に何が出来るか分かりませんが、これだけはお伝えしておきます。自分を信じる力、可能性に絆が加われればさらに大きな力となります。それこそ世界を変える力へと。それに」

「それに……？」

悠陽が問い、大和が顔を上げる。今度は年相応の満面の笑みを浮かべている。

「女の子にはいつも笑顔でいてほしいですから」

「」

囚われてしまった。その笑顔と言葉で。悠陽は小さく笑いだした。

ああ……何を迷って、何故立ち向かわなかったのだろう。何故従い、反抗しなかったのか。そんな事は知らない、我が俤を、意志を貫けばよかった。誰が何を言おうと知った事ではない。それが私の夢だ。私がその夢、未来を自分で否定するならまだしも、他人に否定されて受け入れるのは間違いだ。

「西園寺大和。そなたに深い感謝を」

悠陽は礼儀作法に則り、深く頭を下げた。ふすまの向こうでは月詠真那が絶句して思わず部屋に飛び込もうとしたが、直ぐに思いとどまった。煌武院家の秘密を知る数少ない人物でもある為、悠陽の心を痛いほど理解していたからだ。

大和も頭を下げる。

ここに煌武院悠陽は心強い味方を得て、西園寺大和は己が願った”カタチ”を実現できるかもしれないと言う期待を得た。

SIDE・大和

……いあやああ恥ずかしくて死にそうだああ！！！！なに
が女の子は笑っていたほうがいいですからだああああ！！！！ど
んな馬鹿だよ！？どんな格好付けだよ！？オレはホストか！？
いや、今の時代のホストでもこんな臭い台詞を吐くか！この口
か！？この口が言ったのかああ！？

あーだめだしばらく思い出しては恥ずかしさにのたうち回るぞこ
れは。完っ璧、調子乗りすぎた！！！オレの馬鹿ああああ！！

……………。

仕事しよ。仕事して忘れよ。しばらく没頭して忘却の彼方に吹き
飛ばそう……。

それにしても榊首相の申し出はかなりありがたかったな。戦術機
開発した後は後方から支援砲撃をしてくれる戦車やMLRSを開発
したいって申し出を国防省にするはずだったし。

とりあえずはまず、90式戦車はファートガンダである意味
実戦経験豊富な61式戦車の技術を利用して改修するだろう……大
まかな点は砲塔二門に速度と装弾数アップで……細かな事は技術廠
に戻って設計図と睨めっこしてしよう。またそこでいいアイデア
が生まれるかもしれないし。

後は……オレ式の”アレ”を作るために、あの人に連絡を取らなきゃな。まさかこの世界にいるとは思ひもなかったけど、自己紹介をされたときは思わずその渋さに惚れてしまいそうだったな。さすがは社長……………漢だぜ。

。

SIDE

アメリカ国防省のとある会議室。薄暗い会議室に居並ぶ者達が見つめる先には、先日公開された「夕雲」と「不知火」のスペック情報が表示された巨大モニターがあった。

「それは事実か？」

白髪の高官が報告した技術者に確認するように問いかけた。

「はっ……………まことに信じられませんが、先日出来上がったばかり

の先行量産型「F - 22A」と日本の「MBF - type 94」とのキルレシオ（撃墜対非撃墜比率）は35：1です。これは……認めたくありませんが、日本の戦術機が現在開発中の「F - 22A」を凌駕した機体の開発に成功した証です」

「バカな。そんな事はあるか！ あの機体は我が国家が総力を上げて開発を進めている機体だぞ！ イエローモンキー共が作った戦術機に負ける理由がどこにある！」

胸にこれでもかと言うぐらいの略綬リボンバーを付けた軍部高官が激昂して、机に拳を叩きつけた。周りに座っている軍関係者も同じ気持ちなのだろう。鋭い目つきに怒りを乗せ、技術者を睨みつける。技術者はその視線に耐えきれなくなった様に、持っていた書類に目を落し、小さくなった。

「よせ。怯えているではないか」

と、ここに集う高官達の中でも最大の権力を持つ人物が静かに声を上げ、抑え込んだ。

「確かに信じられぬ事実だが、事実は事実だ。受け入れねばならん」

「しかし！」

「受け入れる。二度は言わん」

静かだが有無を言わせぬ口調に吞まれたのか、小さく呻くと革張りのシートに背中を預けた。

「それで、帝国の技術を導入すればスペックはどのくらい上がるのだ？」

「……装甲やフレームをこのマテリアルに変更するだけで機体重量を大きく軽減させる事が出来る上、運動性や強度、さらには最大巡航距離も伸ばす事が出来ます」

「選択肢はないな」

「閣下！ 我が国の技術の粋を集めた「F - 22A」に、低俗なジャップの技術を組み込むのですか！？」

別の軍人が思わず立ち上がり叫ぶが、彼は表情を変えず言った。

「そんな下らぬプライドなど犬にでも喰わせろ。優れたモノは何であろうと使う。当たり前的事だ。長官。すぐさま日本に要請しろ」

「はっ。生成技術も含めて交渉中です」

「よろしい。今のところはそれでいい。……ジェームズ」

「はっ」

壮年の男が立ち上がり、直立不動で彼と向き合う。

「分かっているな？」

彼にして見れば、己の思惑を伝える言葉はそれで十分すぎた。常に己を持ちあげ、影で動き続けてきた腹心たる人材でもあるからだ。

「承知しております。全て滞りなく。情報局の人間が多少動き回っておりますが問題ありません」

「ん……」

彼は眼を閉じ、静かに頷いた。ジエームズと呼ばれた男が椅子に腰を落すと同時に、別の高官が立ち上がった。

「閣下。今回の件、”あの方”へのご報告は？」

「…………… 必要ない。”あの方”には崇高な義務がある。このよ
うな些事は我々の仕事だ」

「はっ」

「会議を終了する。皆、己の本分を全うしてほしい」

退出する高官達。そして残された彼。

世界の裏表を支配する王の国。そしてその王の国の神たる彼は、
肘かけに肘を置いて、顎を僅かにさすり、呟いた。

「ヤマト……サイオンジ、か。そうだな……そうでなくては面白
くない。何事も順調では何も面白みがないからな」

どこか愉悦を混ぜた呟きは、薄暗い会議室に不気味に響き渡った。

第六話 欧州での噂。結果報告（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありません。いんてぐらです。

今回はストーリー構成、そして若干のスランプに陥りまして文章能力が低下してしまったかも知れませんが、また文字数も少なく、内容もちよつと薄いですが、許してください。

では第七話目、どうぞ。

第六話 欧州での噂。結果報告

「諸君。こうして今日、この場に集まってもらったのは他でもない」

1995年。欧州連合盟主英国代表のロイ・アイランズは出席者達を見渡し、そう切り出した。部屋の中央には巨大な円卓のテーブルが置かれ、欧州連合に参加している各国の代表達が鎮座している。

「昨年。ようやく我々の悲願であつたECTSF計画におけるESFP（技術実証機）が完成し、現在ユーロファイタス社の協力の元ESFP運用部隊”レインダンス”中隊によって運用試験が行われているのはご存じかと思われる」

ECTSF計画。パレオロゴス作戦失敗によるBETAの欧州西進が確実となつた1978年、イギリス、西ドイツ、フランスなどの欧州の国家が当時使用されていたF-5改修機の「トーンード」や「ミラーージュ」の後継機となる新型戦術機を共同で開発しようとした計画である。

1985年の実用化に向け、第二世代機の傑作機であるF-15「イーグル」にも劣らぬ高性能な機体が完成する予定であつたが、BETAによる欧州大陸の蹂躪、主要参加国であるフランスの脱退など、様々な要因が重なり計画は次第に遅れを見せて始めた。そして極めつけは欧州で大々的な米国のF-15「イーグル」の売り込みが始まり、ついには参加国からECTSF計画そのものの存在が疑われる事態となつた。

だがそれでも主要参加国、最後の一国として英国はこの計画を

推し進め、1994年。ようやく一つの成果としてESFPを完成させたのだ。

「諸君。私は今一度、諸君に問いたい。我々の悲願、我々の戦術機を手に入れるため、米国からの間接的な支配から脱却するため、今一度、問いたい。我々の願いは同じか？ 違うというならばこの部屋から退出して欲しい。これより先、ECTSF計画に置ける重要な情報を話す。この計画に賛同しない国にこの情報を話すわけにはいかない。無論、これはECTSF計画のみの話だ。この部屋から退出した国が欧州連合で邪魔者扱いされることはない。我が誇りと女王陛下に誓おう」

アイランズがもう一度部屋を見渡す。

退出する者はいなかった。時計の針だけが静かに時を刻む音を響かせている。

彼らとてアイランズと思いは同じだ。出来れば自分達の力で取り戻したい。誰も米国の間接的な支配を望んでいない。だが奪われた祖国を取り戻すため、日々失われていく衛士の命を守るため、不馴れな異国の地で不自由な生活を強いる国民に報いるため、彼らにはその自分達の力で取り戻す力を得るための時間が惜しいのだ。

「では、ここに集った者達は皆、目指す場所が同じ同胞と見なす」

アイランズはそう言って立ち上がり、なぜか深々と頭を下げた。その行動に困惑の表情を浮かべる代表達。

「まずは謝罪する。我々英国は、独断でECTSF計画の全情

報を欧州より持ち出し、第三者にその情報のすべてを公開した」

その言葉に部屋がざわついた。

欧州連合が78年からずっと開発し続け、蓄えた貴重な極秘情報を見せた。それは未だに英国を信じ、参加し続けた国を裏切る行為だ。

「説明していただけますかな。アイランズ卿？」

フランス代表ハイベルト・シュライツが尋ねた。その声に怒りはない。いやある筈はない。フランスは新型戦術機開発に関する主機の利害関係で一度抜け、戻ってきた身分だ。だから彼がアイランズを弾劾する権利は存在しない。内にあるのは興味だけ。なぜそんな暴挙をした理由が知りたかったのだ。少なくともアイランズは様々な国家の集合体である、この欧州連合の盟主英国の窓口として長年引っ張ってきた存在だ。必ずそれ相応の理由があるはずだ。

「無論、きちんと説明させてもらう。この年は始め、私は最も信頼できる部下にすべての情報を持たせ、日本に向かわせた」

日本と言う言葉に再び部屋がざわついた。

昨年の94年。世界は日本から公開された情報に驚愕した。

元々日本は独自の戦術機運用理論の持ち、第三世代戦術機開発に躍起になっていたのは周知の事実だった。だが欧州連合のECTSF計画と同じく難航していたが93年、当時は未確認であったがある人物の主任開発者に抜擢したことで、計画は怒濤の如く進行し、翌94年には二機の純国産戦術機の開発に成功したのだ。

それだけでも十分驚くべき事である。だが日本はその完成した純国産戦術機に様々な新素材や誰も想像も出来なかった革新的な技術を次々と投入し、MBF-TYPE94「夕雲」に至ってはまったく新しい戦術機の流れを生み出したとされている。さらにその発表直後から日本は発泡金属、超硬スチール合金、新型電磁伸縮炭素帯などのライセンス生産の権利販売、新型CPU、新OSなどの新技術の輸出によって瞬く間に莫大な外貨を獲得し、日本は一躍経済大国へと押し上がった。同時に軍事力を強化。戦術機の世代交代を順調に進めている。

異常だ。あまりにもおかしすぎる。

それが各国の日本に対する評価だ。

通常、一つの兵器を完成させるのに最短でも数年単位の時間が必要だ。だが日本はその常識をあつさりと覆し、異例の速さで開発、実戦配備へと至っている。そしてその実戦配備された兵器群はまるで何年も検討、運用された様に問題点があまりないのだ。

そしてその異常事態たる日本の技術力の根幹。それはたった一人の人間が必ず関わっている事が判明した。

「ヤマト・サイオンジ……ですか？」

日本の武家出身者。僅か十三歳で日本が行っている大陸派兵部隊に志願し、目覚ましい戦果を上げた優れた衛士でありながら、日本の戦術機開発に深く関わっている若き天才。

「そうだ。私は彼に協力を依頼したのだ。個人的にな」

「……よく接触できましたね。彼には城内省や外務省の警護が二十四時間体制で付いていたのでしょうか？」

ベルギー代表の壮年の男が驚きの声を上げながら答えた。

事実、彼を拉致して自国に連れ帰ろうとした国家がいくつかあつたらしいが、それらはすべて阻止されている。今や彼は、莫大な利益と国力増強の卵を産む金の雌鶏だ。彼一人にどれだけの価値があるのか、日々BETAや米国の圧力に屈している各国には喉から手が出るほど欲しい人材だ。

「部下にはかなり危ない橋を渡って貰った。無論、彼にもな」

「……それで成果はあつたのですか？」

西ドイツ代表が尋ねる。重要なのはここだ。彼が素直に技術提供する理由はない。

アイランドは懷から一枚のデータディスクを取り出した。

「……彼は本当に天才だ。ユーロファイタス社や英国技術開発局がどうしても解決出来なかった重要な問題を解決し、発泡金属や超硬スチール合金に関する極秘資料、さらには彼自身が作成したと思われる94式OSの訓練用データも提出してくれた。このデータにより、おそらくETCSF計画はほぼ二年の内に完成するだろう」

各代表から驚きの声が上げた。

当然だ。彼の行動は全く採算が合わない。いや、それ以前に彼が

なぜ欧州連合の身勝手な要望にここまで答える理由が分からなかった。

「信じられない……彼は何を考えている？ 自分を危険にさらしているんだぞ」

はつきり言えば、西園寺大和がしている事は機密情報の流出に他ならない。発覚すれば銃殺刑だ。

「いや……既に日本は次の段階へと進んでいるのかもしれない……今回の発表も真実を隠す為のブラフかもしれない……」

「そ、それが事実なら、既に日本は第四世代の戦術機開発に成功している事になります……！」

「いくらなんでもそれは」

「だが、米国にそのような動きは……！？」

「
静粛に！」

アイランドが少し大きな声で円卓のテーブルを落ち着かせた。だが代表たちの顔は焦りと驚きに染まり、そして頭の中でこれからの方針をどうするか様々な可能性を考えては悩んでいる。

「彼の国の事は今はいい。まずは我々の戦術機を完成させる事だけに集中しましょう。今の我々に余分な事に気を回す余裕も時間も無い」

まずはしっかりと足元を固めてから行動しようと告げる英国の言

葉に、各国は納得する。派手さはないが、堅実なやり方だ。それに開発に成功すれば、米国に支払うライセンス料を減らし、その減った分は他の部分に回す事が出来る。

「最後に彼から私達へのメッセージが入っていました」

思い出したようにアイランドは言った。

「……何と言っていたのですか？ ヤマト・サイオンジは？」

「『報酬として欧州奪還後、各国の皆様にはVIP待遇での招待を期待しています』……だ、そうだ。こいつはとんでもない報酬を要求されたな我々は」

アイランズは肩をすくめてそう言うと、会場にいた全員が言葉を失った。

だが内心は別の気持ちだった。彼の最後の言葉は確かに本心だろう。だが思惑は別の筈だ。彼は何も無償で技術提供した訳じゃない。確かに欧州連合には何も要求しなかったが、英国には極秘に要求してきたのだ。英国としては本来ならそんなモノを一個人に渡せる筈はないのだが、切羽詰まっていたのは事実だった。仕方なく英国は技術提供の対価として、”あれ”を渡したのだ。

彼が”あれ”を使って何をしようとしているのか分からないが、少なくともアイランズも含め英国は、日本の監視体制を強化する必要はあった。

SIDE・大和

榊総理から依頼された計画、既存兵器近代改修化及び輸出計画『再光計画』は一先ず完了した。まさか一年ちょいで終わるとは思っても見なかった。これも榊総理が他の計画の勧誘を全て止めて、この『再光計画』に集中させてくれた結果だ。お陰でオレは思う存分、このチート能力を発揮できた。

さてその改修内容だが、まず日本帝国陸軍正式採用第三世代戦車である90式戦車をファーストガンダの61式戦車の技術を応用して改修。全体的にワンサイズほど大きくして、120mm二連装滑腔砲に小型高出力化に成功したガスタービンエンジンを装備。主機の小型化とサイズアップにより機体後方辺りに空間、つまりキャリアを作った。ここには人を数人乗せる事も出来るし、自動給弾装置の給弾リングを延長して総弾数も増加してある。あと時速90キロまで出せるようにもしました。

続いて87式自走高射砲とMLRS。この二つは外見的な変化は

あまりない。高射砲は総弾数の増加と機関部の耐久性アップ。MLRSは装填システムの円滑化と補給車の改造を行った。

そして最期。「夕雲」に続く新しいジャンルの始祖になった兵器。前線で戦う戦術機部隊の支援及び援護、戦車隊の護衛、拠点防衛を担当するその名も戦術支援戦車TST-TYPE95「撃狼」！

……まあもったいぶって言いましたが、比較的程度のいい「撃震」の上半身と戦車をくっつけたただけなんだけどね。要はマブラヴ世界の「ガンク」だ。

機動性は90式戦車より少し遅く戦術機と比べれば亀にも等しいノロマだが、火力は十分にある。背中の兵装稼働担架システムを外して、我らがガチタンの神様、渋い中年こと有澤隆文が社長を務める有澤重工社製大口径爆裂滑腔砲「雄琴」を右側に装備。左側には「撃狼」用に新しく開発した大容量ドラムマガジンとガンベルトに繋がれた支援突撃砲を左手に装備している。

他にもペイロード（搭載能力）は桁違いにあるから大量の武器を携帯、装備できるのが特徴だ。だから脚に当たる戦車の部分にアタッチメントを付けて、大量の36mm弾倉を搭載する事も出来るし、予備の突撃砲を装着することだってできる。つまりは戦術機用の移動補給車両にも使えるのだ。

……本当はジン公国の試作モビルタンク「ヒルル（戦狼）」を作ろうと思ったんだけど、設計段階で色々と問題が出ちゃってな。核融合炉がないからガスタービンエンジンで代用しようかと思っただけ、やっぱり出力不足。加えて狭い日本では致命的な大きさと重量、そしてコストパフォーマンス……チート能力を使っても無理なモノは無理でした。ちつくしょー！ 結果、「ガンク」

方式の「撃狼」になったわけだ。ちなみに「撃狼」って言うのはオレが命名しました。「ヒドブ（戦狼）」の名残として一文字頂きました。

そして軍部の反応だけど戦車にMLRSは上々、「撃狼」は興奮していた高級将校もいたな。何せ普通の戦術機と違い、複座型で操縦も通常の戦術機よりもはるかに簡単。戦車乗りも少し操縦を学べば直ぐに操縦出来るからかなりご好評でした。ちなみに前が機体操縦、後ろが火器管制となっています。

そんなこんなで後は実戦でその性能を確かめるのみ。先行量産機はすぐさま中国戦線へと送られ実戦検証される予定だ。不備や問題点が見つかれば、そこからまたオレのお仕事となるが……たぶん出ないと思うんだよね。十分にテストを繰り返したからな。

「さて、と。次はどうするかなあ……」

オレの部屋
帝国陸軍技術廠第壱開発局特殊技術開発室の
オフィスで呟いた。

そう……ついにオレは自分の開発室を持つことになったのだ。つまり一国一城の主。いやっほー！ 予算もしっかりと頂きましたし、人員もきっちり揃えましたので大体考えたことは実現出来る。いやったね 階級も少佐に昇進出来たけど……前にも増して嫉妬の視線や陰口を叩かれるようになったぜ。まあこればかりはどうしようもないよな。

まっ、そんな事はどうでもいいとして、次は何に取りかかるか……。とりあえず英国から手に入れたアレは有澤重工で厳重に保管して貰っているし、しばらくは使う予定はなし。軍からは『飛鳥計

画』、つまりは「武御雷」の開発に専念しろとの命令を受けているが、日本の軍事技術、ひいては世界の軍事技術の底上げをしていく必要があるから……武器は開発も並行して行った方がいいか。

となると……まずは近接武器だな。「夕雲」に乗っている衛士からの要望書に、近接武器の新規設計依頼ってのが意外と多いし、色々試してみたい武器もある。でも技術力には限界があるから実現可能なモノとして……高周波ブレードならいけそうだな。スーパーカーボンを流用すれば刀身は問題ない。後は電源と振動装置の製作だが……ふむ、ぱつと頭の中で設計図を描いてみたが何とかなりそうだ。来週あたりまでに設計図を引いて、第貳開発局に依頼するか。武器開発が専門だしな。

他には……「どんな装甲も撃ち貫くのみ！」のリボルビング・バスターなんかも作ってみたけれど、現実的に考えて対BETAではあまり使えないよな。弾数の問題もあるし、関節の負担やら機体のバランスも激しく崩れる。特機を作るなら話は別だけどね。まあ、そんな予算はないけどさ。

「あつ……待てよ」

赤繋がりで思いだしたけど、コードアスの輻射波動機構なら再現できるんじゃないのかな？ それにもしかすると富士山にサクラダイトが埋まつてかもしれない。何せ有澤重工があつたぐらいだ。可能性としてはある。さっそくチームを編成して調査して貰おう。

よおしよおし、何事も順調これ万歳。オレって、いい仕事してますねえ。

第六話 欧州での噂。結果報告（後書き）

質問なんですけど、マグネシウム燃料電池と水素燃料電池、どっちが優秀なんでしょうか？ あと狭霧の年齢とか知りたい。知っている方がいらっしゃったらぜひとも教えてください。

第七話 試作機完成にプロミネンス計画（前書き）

多くの感想、ありがとうございます。こんな更新が遅くなってきた、へばな文才しか持ちえない私に本当にありがとうございます。

第六話での質問に応えていただいた方々、すごく参考になりました。

では、第七話目どうぞ。

第七話 試作機完成にプロミネンス計画

SIDE・李大尉

96年。戦いはさらに陰惨さを増し、過酷となっていく。網膜投影で映し出される外の光景は、私の知っている祖国の光景ではない。ありとあらゆる場所、埋め尽くすばかりの異界の化け物共。都市を、村を、山を、森を蹂躪し、国民を皆殺しにしてきた外敵。奴らの圧倒的物量の前に、我々はただ迎撃と撤退戦の繰り返しで一矢も報いる事が出来ない。

あまりにも我々は無力だ。

「た、隊長。助け……あああああああああああ！
！！！！！」

「シンクー3！？　っ……！！」

「こちらシンクー5。これより、シンクー3の救出に向かいます
！！！」

「シンクー5。陣形を崩すな！　もうアイツは助からん！」

「ですが！？」

「命令だ！　反論は許さん」

「っ……ちつくしよおお！！！！！」

これで何度目だろうか。部下の断末魔を聞いて、戦車級の赤い波に呑みこまれていく戦術機を見るのは。

これで何度目だろうか。悔し涙を浮かべやり場のない怒りと憎しみを浮かべる部下の顔を見るのは。

モンゴル領ウランバートルに連中の巢が建設され始めて、ここでの戦いはますます酷くなっていく。撤退に告ぐ撤退。ただ増えていく戦死者達。本当に我々は無力だ。

と、IFF（味方識別信号）が反応を示す。援軍だ。ようやく来てくれたか。

『こちら日本帝国大陸派遣部隊フラッグ中隊だ。遅れてすまない。支援砲撃を開始する。シンクー中隊は今の内に後方へ下がり、補給を開始せよ。フラッグ1からフラッグ8、9、10、11、12、遠慮はいらん。焼き払え！』

戦車砲とは違う腹に重く響き渡る轟音が木霊した。同時に、私の視界を埋め尽くしていたBETAの群が爆炎に消えた。瞬く間に爆炎と爆風が次々に巻き起こり、小型種はその身を無惨な挽き肉へと変え、大型種を薙ぎ倒し、焼き払った。

圧倒的な面制圧攻撃。次々と大地ごとBETAを爆殺していく光景は圧巻であり、私の総身がぶるりと震えた。

『いいいいいいやつはあ！　すげえすげえよ！　何だあれは！　今度はどんなビックリ箱を持ってきやがったんだ日本は！？』

『ざまあみやがれってんだ！』

『戦車……じゃない？　あれは確か先日配備されたばかりのTS

T-TYPE95か!？」

部下達の歓喜の声を聞きつつ、私は視線を帝国派遣部隊が展開している方向に向ける。日本の第二世代戦術機「陽炎」や第三世代戦術機「不知火」が前衛を守る中、小高い丘の上にいるキャタピラを脚部に持つ戦術機を拡大する。

右肩に背負った長砲身の滑腔砲が火を吹く度にBETAの軍団に爆炎が咲き乱れ、容赦なく粉碎していく。言葉が出ない。各国が機動性や運動性を重視した戦術機の開発に躍起になって行く中、あえて逆のコンセプトで機動性を殺し、火力に重点を置いて実戦配備された戦術支援戦車「撃狼」。その火力は撤退戦を繰り返す中華戦線では心強い物になっている。

「シンクローよりフラッグ1。支援を感謝する。これは私個人の希望なのだが、出来る限り殺しておいてくれ。部下が三人やられた……」

『フラッグ1よりシンクロー。貴殿に哀悼の意を表する。私も貴殿と同じだ。弾薬が許される限り念入りにぶち殺しておく』

「感謝する。シンクローより各機。一度後方に下がり、補給を済ませた後前線に戻るぞ！ 仇を討つ！」

『『『了解!』『』』』

私の「殲撃10型」を先頭に補給地点へと向かう。

『隊長。オレ達の部隊にもアレ、欲しいですね』

噴射跳躍を繰り返している中、部下の一人がぼつりと呟いた。

『ああ。ありや最高だ。こいつも気に入っているが、日本のTY
PE95もいいよな。何て言っただってあの滑腔砲。最高だ！　連
中をまとめて吹っ飛ばせるんだからな！』

『確かあの戦術機……じゃなかった戦術支援戦車ってもう輸出さ
れてるんでしょ？　早く出回ってほしいわね』

我が部隊の数少ない花の一人の言葉に、全員がまったくと言
わんばかりに頷く。

「ああ。そうだな。どこぞのクソツタレな国と違い、日本は太っ
腹だ。いずれ我々の部隊にも配備される筈だ」

『そいつは最高ですね』

『配備されたら私が乗ります！』

『馬鹿っ！　お前じゃ無理だ。オレが乗るんだよ』

部下達の通信を聞き流しながら、私は口元に笑みを浮かべる。

部下を失った悲しみは、あの砲撃のお陰で僅かだが和らいだ気が
した。

S I D E

米国が世界に大きな影響力を持っている背景に、ただ世界最強の軍隊を保有しているだけが理由ではない。人類の刃たる戦術機に関する最新の開発技術、そして選択的に戦術機を販売できるのが大きな要因の一つと言えよう。故に米国は各国に対して強権を振るう事が出来る。それはこの先、米国がユーラシアと同じようにBETAの侵略を受け壊滅的被害を受けるまで続くかと思われたが、それはもう過去の話となった。

1994年2月。極東の小さな島国でその火種が付いた。日本初

の第三世代戦術機 T S F - T Y P E 9 4 「不知火」、様々な新技術を投入し、新機軸の戦術機の始祖となった M B F - T Y P E 9 4 「夕雲」。この二機の発表が米国の強権を揺るがし始めた。日本はこの二機の投入された新素材や新技術の一部を公開、各国に対しライセンス生産の権利販売と輸出を開始。各国は瞬く間に優れた新素材や新技術を購入し、日本はその高い技術力を世界に知らしめた。続けて翌 9 5 年には世界初の二連装滑腔砲を搭載した 9 0 式戦車改などの各種支援兵器、そしてコスト性に優れておきながら高い面制圧能力を持つ戦術支援戦車 T S T - T Y P E 9 5 「撃狼」を販売。これもまた異例の大ヒットとなり、世界は戦術機の更なる可能性を見出し、日本は経済力をさらに発展させる結果となる。

ここまで来ると各国の方針は決まってくる。様々な技術を生み出しては即輸出に踏み切る日本帝国と友好な関係を気付き、その恩恵にあやかりたいと思うのは必然だった。欧州奪還を目指し、第三世代戦術機の完成を目指す欧州連合を筆頭に、世界屈指の食料輸出国であり自国の軍事強化を行っているオーストラリア、モンゴル領ウランバートルでハイヴが建設され、さらに苦しい状況に追いやられ、切羽詰まった状況にある統一中華戦線や大東亜連合、果てには仮想敵国として認定しているソビエトまで技術提供を要請する事態となった。

そしてこれを面白くないと思うのが米国だった。今まで戦術機市場を独占し、ありとあらゆる場所で強権を振りかざしてきた地位が揺らぎ始めている。それも己が傀儡と定めた相手に。これほど腹立たしい事はないだろう。だが彼らの技術は 正確にはこれらの革新的な技術を今も尚、産み出し続ける技術者は喉から手が出るほど魅力的だ。

奴等ではない。我々が世界を守り、維持しているのだ。彼は本

来、我々の下でその力を発揮すべきなのだ。それが最善の選択なのだ。彼らは静かに動き出す。お得意の深い闇の奥からゆっくりと操り糸を伸ばすのだった。

晴天の空の元、圧倒的な轟音を響かせ、濃密な大気の呪縛を振り解く様に広大な富士演習場を駆け抜ける漆黒の機体。光菱重工で試作された新型跳躍ユニットが盛大な噴射炎を撒き散らし、轟音と共に全高約二〇メートルの機体を瞬く間に加速させていく。水平噴射跳躍で地表を駆け抜ける姿は遠目から見れば漆黒の流星に見えた。

『M B F - T Y P E X 1。跳躍ユニット安定。各部異常なし』

「了解。跳躍ユニットの試験を続行。最大噴射による高速巡航試験に入る」

開発衛士はフットペダルを踏み込む。大量の推進剤がロケットエンジンに流れ込み、爆発的な噴射炎と共に機体は禁忌の領域へと加速させていく。大気を切り裂くように奔る漆黒の流星は、転がって

いる小石やゴミを薙ぎ払い吹き飛ばす。戦術機の技師が見るまでも無い。衛士がこの光景を見れば啞然とするだろう。その圧倒的な加速性能に。

「っ……」

全身に重く押し掛かるG。管制シートに体が押し付けられる。だがそれでも彼は踏み込む足を緩めない。機体はさらに加速する。切り裂かれていた大気が徐々に鎌首を上げて、ぎしぎしと機体を締め上げてゆく。

その音を聞いて、開発衛士は口元に笑みを浮かべる。いい出来だ。加速性能も高速巡航も問題ない。全て設計通りの反応と出力を見せてくれている。

そして彼は同時につまらないな、と心の中で呟く。跳躍ユニットもこの試作機も十分な反応を見せてくれている。お上品に試験内容を消化するのは物足りない。そこで彼なりの方法でこの機体の限界を計って見る事にした。一から十まで自分が設計しているから、この機体の限界点は見当は付いている。が、それはあくまでも机上の空論。実際にその限界点を確認してみなければ本物ではない。

「オペレーター。これより高速巡航からの高速機動を行う。しっかりと各部のデータを取っておいてくれ」

『はっ？　しょ、少佐。その速度から高速機動は　　？！』

狼狽したオペレーターの言葉が終わる前に、彼は操縦桿を一度だけ握り直した後、機体を自分のイメージ通りに動かした。

脚部に新規配置された姿勢制御兼補助スラスラーを噴射して、減速及び姿勢変更。その僅かな間に跳躍ユニットのノズルを水平から下方へ向けて水平噴射跳躍から噴射跳躍へ。機体は踏ん張る様にして上空へと急上昇した。ずんつと前方から掛かっていたGが、一気に変換され、上から押しつけられるGとなる。

化け物だ……と彼の機動を観測カメラで見ていたオペレーターは語る。

常識もクソも無い。爆発的な加速と停止を繰り返し、地上を、大空を己の支配する場所とばかりに駆け巡る。その機動は子どもの落書きの様に無作為で無茶苦茶だが、常に送られてくる操作ログや推進剤の残量と比べると明らかに釣り合わない。出鱈目な機動だがその一つ一つの動作が洗練され、まったく無駄がない。

「凄い……これが『血塗れ』か……」

オペレーターの誰かが呟く。

十分に飛びまわれた事に満足したのか、漆黒の流星が超高高度まで一気に舞い上がり、くるりと機体を地表に向けると跳躍ユニットを全開で噴射した。噴射降下だ。高度計が物凄い勢いで地表に迫っている事を告げ、オペレーター達のモニターにアラームが点灯する。

「少佐！ 機体を引き起こしてください！ その高度では
」

墜落だ。オペレーターはそう思った。常識から考えて機体の引き起こしは不可能だと思ったが、それは杞憂に終わった。

何をどうやったかはなんて分からない。ただ漆黒の流星は恐ろしく鋭い機動で機体を立て直し、盛大な土煙を上げて滑る様に着地した。

オペレーター達の安堵の吐息が漏れる。

『さ、西園寺少佐。お願いですから……心臓に悪い機動はやめてください。富嶽重工の部長が卒倒しかけてましたよ』

「……すまない。あまりにいい出来だったからつい調子に乗ってしまった。許してくれ」

帝国技術廠第壹開発局特殊技術開発室所属、西園寺大和少佐は樂しげに笑ってそう答えた。

「跳躍ユニットは予想以上の出来ですね。あれだけの加速と出力を持ちながらこの燃費は驚きです」

「でしょう。跳躍ユニットは自信がありましたからね」

強化装備姿の大和は帝国陸軍のフライトジャケットを羽織りながら、富嶽重工から派遣されている若い技術者に答えた。

つい先ほどまで大和が操っていた漆黒の機体 斯衛軍専用

次期主力戦術機の試作機は整備ガントリーに納められ、技術廠とメーカーの技術者達が蟻の様に群がり、各部のチェックとデータの収集が行われている。

「ですが優れ過ぎている……と言うのも問題ですね。アレだけ高性能だと、例えば斯衛軍の衛士でも振りまわされる可能性があります。やはりソフト面だけではなく、ハード面にもリミッターを付けられはとうでしょうか？ いや……いっそのこと標準型のC型と一個上のA型だけ仕様を変えて跳躍ユニット参号基に変更しては？ コストを若干抑えられます」

「そうですね……」

口元に手を当てて逡巡する。

斯衛軍専用戦術機用に新規設計した試作跳躍ユニットは全部で三基。一号基はコスト度外視のハイスペックモデル。二号基はコストとスペックを両立させたバランス型。三号基はコストを優先したロースペックモデルだ。今現在採用されているのは二号基のバランス型だが、新しい技術を投入した上、構造材やエンジンにも改良を加えている為、「夕雲」の跳躍ユニットと比べると製造コストは約二倍の差がある。それに彼の言う通り、バランス型とは言え出力が「夕雲」と比べても格段に高いから、完璧に制御するには補助AIシステムの恩恵があっても十分な訓練が必要だ。

「検討……してみましようか。今度の実機テストまでに壱号機の跳躍ユニットを換装して、『黒』の斯衛衛士を乗せてみましょう。その案を採用するかしないかは結果を見た後で」

「分かりました。衛士の方はどうしますか？ 少佐の方で選びになりますか？」

「選びたいですけど、城内省に依頼しますよ。色々詰まっすしね……」

そう言つて、ちらりと隣のガントリーに収まっている戦術機に視線を向ける。正面から見れば壱号機とほぼ一緒だが、後ろに回り込めばその違いに気付く。背部の稼働兵装担架システムがなく、接続端子らしきものがぽつんと付いているだけだった。

「あー……そうでした。まだ解決していないんでしたね……」

「ええ。なかなかうまくいかないですよ……出来れば使いたいですけど……」

ふう……と溜息を吐く大和。

当初、大和が『飛鳥計画』において開発される戦術機に求めたのは、圧倒的とも言える高機動格闘戦に秀でつつも、装備換装によって幅広い戦術を行える高性能、凡庸性の高い戦術機だった。高機動格闘戦、機体本体の高性能化は「夕雲」に使用した「不知火」のパーツ混じりの未完成品のMBF（戦術機用内骨格構造）ではなく、完成品のMBFによる更なる運動性と関節の強化、新型バッテリー、各部スラスタの出力強化と新規増設を持つてクリア出来たのだが、次に重要な装備換装システムが設計段階でどうしても他の部品と干

涉してしまうのだ。一応無理やり詰め込んで式号機として試作したのはいいが、問題はそのまま。とても実戦で使える代物ではなかった。番号機は問題の装備換装システムを搭載しておらず、「夕雲」の94式稼働兵装担架システムを搭載している。

（やれやれ、戦車の時もそうだったがチートな能力も限界はあるって事か……）

全く違う二種類の技術を融合させているのだ。当然、ぶち当たる壁は存在する。こうなってくると地球と火星の間にある宇宙船の生産能力が羨ましくなってくるが、そこに辿り着くまでの道のりはまだまだ多い。色々とスキルアップさせているから、増えては減っての繰り返しだ。

「それが解決できれば、「夕雲」や「撃狼」に続く新しい戦術機の流れを生み出す始祖になりますね」

「完成すればの話ですけどね。まあ、せっかく試作機を二機も組んで頂きましたから何とか完成させますよ。後、武器の方はどうなってますか？」

「今月末ぐらいには試作品が出来上がるかと」

「じゃあテストは来月の頭に行いましょうか ところで例のあれ……どうなってます？」

大和が周りを気にするように、こそつと技術者に尋ねた。

「ええ。こちらからの運び込みはすべて終了しています。後は遠田技研からですが、それも今週中には完了すると聞いています。…

：それにしても何をするつもりなんですか？ 部長はおるか社長まで気になっているみたいですよ。たぶん、一枚噛みたいんでしょうね」

日本の三大戦術機メーカーである光菱、河崎、富嶽は大和が産み出した様々な兵器と技術のお陰で会社の規模を格段に広げ、アジア圏に点在する戦術機メーカーのトップ3を独占している。加えて大和は生産ラインなどにもアドバイスを行っているため、無茶なお願いも快く引き受けてくれるほどの信頼を得ている。無論、向こうは企業であるため見返りを求めてくるのだが、その度に大和は十分すぎる見返りを渡している。ちなみに第七位に有澤重工がランクインしている。

「まあ、ちよつと試したい事がありましたね。部長さんと社長さんにはよろしくと伝えておいてくださ」 「少佐」 つと、何だ塩川中尉か。びっくりさせないでくださいよ」

声を掛けたのは大和の秘書官を務めている塩川宮子中尉だった。切れ長の瞳と長方形型のシンプルな眼鏡、常に冷静で感情を表に出さないクールビューティー。最初は嫌われているのかなと思っていたがそうではなく、ただの性格でたまにお茶菓子を差し入れてくれる。塩川中尉は大和に敬礼し、大和は答礼した。

「西園寺少佐。通信が入っております。至急、通信室までお越しください」

「通信？ 巖谷中佐？」

「いえ榊総理からです」

「総理から？」

何だろう一体？　一つ首を傾げるが思い当る事が特にない。とりあえず大和は格納庫を後にして通信室へと向かった。

SIDE・大和

「プロミネンス計画……ですか？」

『そうだ。耳の早い君ならもう知っていると思うが、国連は元よりユーラシア各国から君の参加を要請された』

プロミネンス計画。確か正式名称が先進戦術機技術開発計画だったかな。1996年辺りからちらほらと外国からの調達やライセンス生産に頼らない国産機が出てきたけど、各国の技術水準に開きがあるから、次世代機の開発に難航している。そこで国連が情報交換と技術交換を目的に提唱したのがこのプロミネンス計画。の筈なんだけど、これ確か、日本の第四計画があまりにも現実離れしている、アメリカの焼き回しに近い第五計画に反論したユーシア諸国を宥める為に、国連の技術開発局が提案した奴だ。まあその辺りの裏事情はどうでもいいとして、ついに来たか。

「なるほど……ですが私にその余裕はありませんよ？　ただでさえ城内省には速く完成させろって急かされてますし」

溜息を吐いて答える。

実際、ここ最近は嵐のような忙しさだ。休む暇がない。技術廠として仕事も忙しいが、個人的な開発の方にも時間を割かなければならないしな。

『無論それは分かっている。君とこうして話す前に軍部や城内省と相談したが猛反対されてしまったよ。特に斯衛軍は刀を抜かれるかと思うぐらいの剣幕だった』

その理由はたぶん斑鳩様だろうな。他の衛士の意見も欲しかったから、斑鳩様に試しに乗って貰ったんだけど……何かすげえ興奮して感謝された。「これぞ斯衛軍の戦術機だ！　」とか「よくやった西園寺！　」とか「どうだ？　私の妹と結婚しないか？　年は少し離れているが器量が良く、料理もうまいぞ」とか……まあ喜んで貰えたのは何よりです。

でも驚いたのはこっちもだったな。試作機が出来上がってOSの調整がまだ済んでいない頃に乗って貰ったんだけど、何不自由なく動かしていた。流石は斯衛軍。流石は最精鋭の十六斯衛大隊指揮官。大和さんもびっくりだぜ。まあそのせいで催促の嵐を受けているのですか……。

「あー、軍部の反応はそんなものでしょうね……榊総理としては私を派遣したいのですか？」

『……このところ日本の快進撃を快く思っていない連中がいてな。ユーラシア諸国の真摯な要請を利用している。それに……今の我々には断りにくい理由がある』

あー、やっぱり。彼の国ですか。こちらの技術をほぼ無償提供に近い額で渡してやったのに、感謝はせずとも恨みはするってか。あーやだやだ。何かあの国が嫌いになってきた。それと榊首相の言う断りにくい理由ってたぶん第四計画のことでしょうな。

「そう、ですか……ところで日本は参加するつもりだったんですか？ 『プロミネンス計画』に？」

『いや、参加はしない方針だ。特に技術力で困っている事はないだろう？ まあそれが余計に君の参加に拍車をかけているのだ。日本は優れた技術を独占するつもりか、とな』

自分の事は棚に上げてですか？ あー、やっぱり嫌いになった。そんなに自分達を優先したいですか？ そんなに自分達の計画を押し進めたいですか？ ……ム力つくな。チートな生産能力があれば、衛星軌道上からGビ ト数十機を引連れてサ ライ キャノンをぶちこんでやるのに。

んー、でも彼の国の思惑は別として、ユーラシア各国の真摯な要請には答えたいよな。オレとしても世界の技術力を上げるのも重要な事だし。

……いつそのこと、輸出用と言うか各国の技術研究用にもう一機戦術機を作るか？ 各国からは前から日本の戦術機を輸出して欲しいと打診されているけど、「夕雲」と「不知火」は絶対に輸出など出来ないと国防省が猛反発しているし、輸出用の戦術機案は悪く

ないけど……時間がなあ。陸軍からは第三世代戦術機用の練習機開発の依頼と「不知火」の改修、海軍からは「海神」の改修機か新型機を作ってくれと依頼されている。とても時間がない。手が回らない。

それに技術研究用と言っても輸出する戦術機を作るから、出来る限り各国の運用理論やら戦場に対応できる戦術機を作りたいし……あつ、練習機の開発計画と合わせるか？ それなら何とかなるかもしれないが……ん、待てよ。思いきってこちらから計画を提案してみるか？ そうすれば色々都合がよくないか……？

「榊首相。『プロミネンス計画』に対抗して……と言う訳じゃないんですが、日本から共同開発計画を国連に提案する事は出来ますか？」

「君の引き出しには一体どれだけのモノが入っているのかね？ 出来ない事はないが……大丈夫かね？ そんな事をすれば君の負担が増す事になるぞ」

あつ、嬉しい。オレ個人の心配してくれている。榊首相。その言葉だけで十分です。

「あー……何とかしますよ。うちの特技開（特殊技術開発室）のみんなもいますしたぶん問題はないかと……」

また残業時間がすごいことになりそうだけど、これも世界を守るためだ。我慢我慢……出来るかなあ……。

『……分かった。一度、検討してみよう。近い内に具体的な内容を送ってくれ』

「分かりました。では失礼します」

通信を切る。

これですますます忙しくなってきたな。しかし、世界を救う為の下準備はゆつくりだが着実に積み上げられている実感はある……が、代償としてオレの癒したる朝陽と会えないけどな！　うう……もう一ヶ月近く会ってねえよ。我が胸に飛び込んできておくれ、マイシスター――！！

ぶんと、妄想の中で我が胸に飛び込んでくる黒髪の天使を迎え入れる為に両手を大きく広げた直後。

「……………何をやっているんですか少佐？」

「ほわああ！？　塩川中尉。いつからそこに?!」

「榊首相からの通信を終えてあたりからですが？」

ぎゃあああ！？　嘘マジ！？　汚れた私を見ないでえー！

「それで、何をやっているんですか？　少佐？」

「き……気にしないでくれるとありがたい……んで何か用ですか？」

訝しげに視線を向けてくる塩川中尉。あー……やめてください。オレのピュアなハートが砕けそうだぜ……。

「……はい。格納庫にお越してください。次の試験の準備が整いました」

「りょ……了解……」

うつつ……かなり恥ずかしい。自分の母親にハッスルしている所を見られたような気持だ。また一人、思いだしてはこの恥ずかしさのあまりのた打ち回るのだろうな……ははっ
はぁ。オレって何てドジなんだろう……。

溜息を吐きながら、オレはとぼとぼと格納庫に向かった。

「あれは駄目だな」

ある日の事。試作式号機の不具合やら「不知火」の改修などで頭を痛めている時、整備主任の瓜畑靖也さんに開発室に来るように呼ばれ、来た途端、惘然とした表情でそう言われた。ちなみにこの人は、あの 動 艦ナデ にいたあのウリバタケさんです。持ち前の改造魂と使い込みで部隊を転々としていたところをオレがスカウトしました。

「駄目って……マッスルフレーミングの事ですか？」

瓜畑さんには人工筋肉『マッスルフレーミング』の開発を頼んでいた。

このマッスルフレーミングが何なのかを説明する前に、一つ報告しておく事がある。少し前に富士山の地下にサクラダイトがあるんじゃないかと思って調査をさせた所……見事にありました。それが分かった時はオレは思わず飛び跳ねたね。サクラダイトがある。それはつまりコドギスに登場した技術を再現できるという事だ。

輻射波動機構にブレイズルミナス、フロートシステムにユグドラシルドライブ……夢が広がった瞬間だったね。オレは早速何かと世話をかけて、面倒を見て貰っている有澤重工に発掘作業を要請。現在発掘プラントの建造中ですが、少しばかりサクラダイトが手に入ったので、マッスルフレーミング……サクラダイト合金繊維の製作に取り掛かったんだけど……どうして駄目なんだろう？

「いや、確かにこいつはすごい素材だ。電磁伸縮炭素帯より丈夫だしおまけに発電も可能と来た。こいつを戦術機に搭載出来れば確かに画期的だが……如何せん手間が掛かりすぎる」

「手間……つまりコストが高いつて事ですか？」

「原材料に加工の手間を加えたら、明らかに電磁伸縮炭素帯のほうが効率的だ。まあワンオフに使うなら話は変わってくるけどな」

そう言つて瓜畑さんは肩をすくめた。

つまり問題点は加工機械の精度の低さか……。これは大変だ。また設計に改良しなくちゃならん。量産品として使えるようになるに

は結構時間がかかると言う事か。ユグドラシルドライブにブレイズルミナスとか使いたかったんだけどなあ……あいやー……ここ最近とんとん拍子で進まなくなってきたな。

「そうですか……新しい規格部品になるかと思っただけですけどね」

「いずれはなるだろうが今は無理だな。ところで共同開発計画の内容はもう決めたのか？」

「あー、それも結構難航しているんですね。なかなかまとまら
「ふっふっふっ……」 瓜畑さん？」

両肩を震わせて俯いていた瓜畑さんが顔を上げる。その顔は喜色満面だった。

「こんな事もあるのかと……ふっふっふ……こんなこともあるのかとオオー!!」

ピピピッと素早くキーボードを叩くと、壁に備え付けられていた大型モニターが点灯。そこに表示されたのはエスバス?!

じゃなくて、エスバスのフレーム換装方式を採用した戦術機の概要だった。あつ、なあるほど。この手がありましたな。

「お前さんが関わっている『飛鳥計画』の式号機を見て閃いた。バックパックだけに捕らわれずいつその事、体全体を交換してやれば手っ取り早い。加えてこの換装システムのお陰で戦術機は更なる汎用性を獲得できる! どうだ凄いだろ!? がっはははっ!」

うう、む。確かにこれは検討の余地ありだな。今現在の国際標準規格と言えば管制ユニットただけだけど、もしこれが実現できれば新

しい国際標準規格戦術機を開発出来るし、フレーム自体は各国の運用理論に合わせて作ればいい。さらにアメリカが独占している戦術機市場を塗り替える事が出来るかもしれない。

「素晴らしいですね瓜畑さん。これは一度皆で検討しましょう」

「あつはつは。お前にも負けず劣らずの天才ぶりだろう？」

「ええ！ 使い込みの件は会計部に言っておきますから、安心して下さいね」

ぴたりと高笑いをしていた瓜畑さんが硬直。油の切れた機械みたいにギギギツと首を動かした。

「……………ばれてたか？」

「うちの秘書官は優秀ですからね」

そう……………色んな意味だね。彼女は本当に優秀な人ですよ。

第八話 米国の闇、悠陽と大和、そしてトレンチコート（前書き）

よし。創作意欲がいい感じで湧きだってきました。

次回、いよいよ唯依姫が戻ってきます。その次あたりには年代を飛ばして光州作戦辺りの戦闘パートに入る予定です（あくまでも予定ですが……）。資料が少ないため、かなりオリジナルな内容になるかと思いますが、平にご容赦を。

では第八話目。どうぞ

第八話 米国の闇、悠陽と大和、そしてトレンチコート

SIDE

「由々しき事態だ」

「そんな事は分かっている。それをどう解決するのか、その為に我々はこうしてこの場所に集まっている」

闇の中、不安げに呟いた男の声に、苛立ちを隠そうとしない別の男の声が木霊する。決して歴史にその名が刻まれること無く、人々にも知られぬことも無く、ただアメリカ合衆国と言う強大な光を維持してきた権力者達が集う場所。それがこの闇の正体だった。

「実に厄介なことですな。日本が提案した開発計画は……」

アーマード・フレーム・プロジェクト

「新規国際標準規格戦術機共同開発計画AFP……そんなものが実現されれば我々の経済は大打撃を受ける。今や我々の経済は戦術機市場で保たれていると言ってもいい」

長引くBETA大戦に伴う莫大な戦費は最前線国家のみならず、後方支援国家にもその影響が出ている。中でも軍需市場で圧倒的なシェアを持っている米国などその影響を強く受ける。彼らが危惧しているのは軍事市場の中でも大きな利益を誇る戦術機市場の”標準”を取られることであった。

「概算ですが、その開発計画に置ける経済損失は膨大です。ただでさえ国債は増える一方。FRBの恫喝も二度目はありません」

「厄介なのは国連でさえ慎重に検討している事だ。ユーラシア各国は次々と賛成の意を表明している」

「こちらの手札でも少々辛いですな。欧州連合と統一中華戦線の参加の意思は固い。こちらのカードをチラつかせても動揺が弱い」

米国は様々な強力なカードを持つ。その中でも軍需関係と同等の力を持つ食糧のカードをちらつかせても、各国は難色を示している。それは背後に世界第二位の食糧供給を持つ国家が暗躍しているためだった。

「……その欧州連合の戦術機計画、ECTSF計画ですが予想以上に順調のようです。おそらく来年もしくは今年中には先行量産機が完成するかと……」

「……妙だな。我々の予測では後二年は掛かる筈ではなかったのか？」

「まるで”極東の奇跡”の再現ですな……いや、裏で彼が暗躍しているのでしょうか？」

「確証は得ていないが……その可能性は十分にある」

「その根拠は？」

「未確認の情報だが、欧州から何かの物資が日本に持ち込まれた形跡がある。国が管理するルートではなく非公式なルートでな」

「……ロイ・アイランズ辺りが関わっていそうだな。もし関わっていれば相当裏が深い。だが調べる価値はある」

「貴様に言われずとも分かっている。それを裏付けるように、英国の日本に対する監視体制の強化が確認されている」

「さてさて対価として何を渡した事やら……まあ監視を付けているのだ。それなりのモノなのだろうな。それとインペリアルロイヤルガード（斯衛軍）専用機の進捗状況は調査できたのか？」

「城内省が徹底した情報封鎖及び警備体制をひいている。調べるのは恐らく不可能だろうが、搬入される資材や部品から見て技術部門は間違いなく、MBF-TYPE94の改修機、もしくは発展機と判断している」

「アレ以上の高性能機になると言うのか？ 信じられんな」

「だが、もはや何が出てきてもおかしくありません。それだけあの国の技術力は一日単位で上がっていると言ってもいいでしょうね」

別に忌々しいげに言うのでもなく、ただ純然たる事実として告げる男の声。何故極東の島国でそれだけの技術を得たのか未だ持つて謎に満ちているが、彼らはもはやそんな議論はしない。見据えるの過去ではなく、現在と未来^{いま}だけなのだ。

「戦術機と欧州の事は一先ず置いて、統一中華戦線はどうなのだ？ 台湾から干渉すれば内部分裂を誘発できるのでは？」

1986年、中華人民共和国と台湾政府の間で結ばれた中華統一戦線は、米ソに続く歴史的な同盟とされ注目を浴びた。しかし膨大なBETA軍の勢いに中国軍は徐々に沿岸部へと押し込まれ、もは

や政府機能を台湾へと移すのは確実とさえ言われている。だがもし政府機能を台湾に移せば、それは中国政府の発言能力の低下が見込まれる。ただでさえ、中国軍は台湾や、台湾が抱えるフェリピンの援助がなければ軍の維持が難しい所にまで来ているのだ。もしここで政府機能を移せばもはや発言力の回復は非常に難しくなってくる。

「どうかしら……中国はソレを防ぐための今回の賛成なのよね。元よりあの二国は決して相容れぬ者同士。放っておいてもいずれは内部から対立していくと思うけど……この時点から天秤が傾けばそれは消えてしまうわ」

「その二つも問題だが、オーストラリアも放置できん。裏で害虫の様に動き回っているようだが、最近は酷く悪乗りが過ぎる。そろそろ抑えるか？」

「下手な干渉は事態の悪化を招きます。オーストラリアに関しては欧州連合、中華統一戦線以上に慎重な判断が必要かと思いますが……」

年配の人物が多いメンバーの中で、比較的年齢の若い中年の男性が発言した。初老の男がじろりとは虫類のような目で睨み付けた。

「若造が……知った風に口をきくな。私を誰だと思っている？」

「……申し訳ありません。出過ぎた真似をしました」

「よせ。彼はまだ若い。そう脅かすな。ソ連のほうはどう見ている？」

「とりあえず参加の意思を示していますが……何とも言えません

よ。あの国は」

「大東亜連合は言うまでもないでしょう。彼らが反対する理由がない」

「……そうか。これからどうなさいますか」サジタリウス」？」

「……日本の共同開発計画は阻止せねばならん。」キャンサー」、如何なる手段を用いてもかまわん。絶対に阻止しろ。これ以上の経済悪化と注目は回避せねばならん」

「了解した」

「忌々しい……ジャップ共のせいで計画が修正されてばかりだ。第五計画が認められ成功したとしても、我々の経済が悪化していれば元も子も無い！」

ダンツと机をたたく音が闇の中から響き渡る。

「世界と言う精密な部品で構成された構造物。そこに現れた歪みの歯車。調整者としては早急な排除が必要かと思いますが？」

「それはまだ早計だな」エアリーズ」。確かに歪みの大きな部品だが、思いがけない働きをしているのも事実だ」

「「サジタリウス」。私は引き続き、彼をプロミネンス計画に組み込めるよう手を尽くしてみます。」

「よかるう。”リブラ”やってみろ」

「はい」

「諸君、今後の方針だが、まずは日本の勢いを殺がねばならん。三流役者には三流役者の立ち回りがある。一流役者の邪魔をされてはたまらん。各々、己が最善だと思う行動を起こしてくれ。以上だ。会議を終了する。良い一日を　　”レオ”。お前は少し残れ」

闇が蠢く。再び彼らは仮面を被り、表舞台へと立つ。残された、ただ一人の人物は静かに視線を向けていた

「分かっているな？」

前置きも無く、ただ確認するように尋ねたサジタリウスの言葉にレオは頷いた。

「仰せの通り。いつ作戦を開始しますか？」

「調査結果を待つ。全てはそれからだ。子飼いに加えて役職の方も動員しておけ」

「……よろしいのですか？ 私の子飼いと役職の人員はどちらも優秀な人材です。長期間の監視は双方に存在を気付かせる切欠を生み出すかもしれませんが……」

「それが何とかするのが貴様の役目だろう。ジェームズ？ お前の手腕を信じているからこそこの采配だ。期待しているぞ」

「分かりました　　副大統領……」

CIA長官ジェームズ・アンダーソンは恭しく目礼し、闇に溶けて行った。

『ブラッディ1よりブラッディ2。高速巡航時は操縦桿を軽く握って角度を深くしないでください。視線は常に前方の目標物と進路方向へ。距離がある内に安全な進入コースを取ってください。』

はい。お上手ですよ殿下』

通信用ウィンドウで微笑む西園寺大和少佐の言葉に煌武院悠陽も僅かに微笑むが、直ぐに頬笑みを消した。物凄い勢いで前方から迫ってくる障害物に注意を払いつつ、操縦桿がほんの少し倒して機体をかわす。

「そなたと比べればわたくしなどまだまだです」

『いえ、これだけの時間でここまで出来れば十分です。後は経験と熟練が物を言います』

それは事実だろう。現に先行している大和の操る「夕雲」の機動は実に優雅で無駄がない。推力は常に一定。跳躍ユニットの推進方向を僅かに動かすだけで次々とダミーのビル群の間を駆け抜けていく。減速など必要ない。緩やかな曲線の軌道
弱冠十七歳の衛士に出来る芸当じゃない。

（天は二物を与えた……と言う事でしょうか）

僅か十四歳で大陸で武勇を上げ、間を置かずに日本帝国念願の純国産戦術機完成に大きく尽力した。さらには莫大な戦費による経済悪化にあつた日本経済を立て直し、米国と並ぶ戦術機技術大国へと昇華させた。天才と言ふ言葉ではもはや括れない。鬼才と言つてもいいだろう。もはや彼の存在は日本に無くてはならない存在だ。米国は未だにしつこく彼の引き渡しを要求しているが、国防省や外務省、城内省、ひいては政治家達まで彼を引き渡さないと弁護している。ある意味凄い団結力だが、そこには米国の影響力の弱体化と、彼が生み出す革新的な技術における莫大な利益が絡んでいる。

さらに加えて言うならば、五摂家を含む武家社会においても『西園寺家』の名はもはや知らぬ者もないし、築き上げた豊富な資産と政界、財界のコネを大和が形成した為、西園寺家を取り込もうと各派閥が水面下で静かな争いを繰り広げている。

（彼に比べてわたくしは……）

何も成し遂げられていない。何も出来ていない。どれだけ必死になつて努力しても、真摯に語りかけても言葉は響かず、届かない。

彼とは雲泥の差と言ってもいい。分かっていたが、本当にお飾りの存在だ。

自分への不甲斐無さとやるせなさに小さくため息を吐いた直後。

『殿下！！』

大和の鋭い声と共にコクピットにアラームが響き渡る。気付けば眼と鼻の先にダミーの障害物がある。悠陽はすぐさま機体に制動を掛けるが間に合わず、機体はダミービル群に突っ込み転倒した。

「きゃあああああ！？」

激しく揺れるコクピット。機体のステータスバーが瞬く間に赤く点灯している。「夕雲」に搭載された補助ＡＩシステムが自動的に壊れたアクチュエーターを切り離し、回路をバイパスさせ、機体の復旧に努める。

『殿下。ご無事ですか！？』

「っはい……大丈夫です」

何て無様な……ぎりつと悠陽は歯を強く噛締めた。考え事をする余裕も腕も無い。政威大將軍として任を十分に果たせていないのだから、せめて戦術機の操縦ぐらいは人並みになりたいと思い、斯衛軍の戦術機開発に忙しい彼に無理を言って指南を頼んだと言うのに。

「っ！！」

激しい自己嫌悪が心に渦巻く。思わず操縦桿を握りしめる手に力

が入る。

『……殿下。今日はここまでにしましょうか？』

「いえ、大丈夫です！ システムを復旧させますから少し待ってください」

彼に氣遣われてしまったのか、それとも自分の訓練に対する真剣さがないと判断されたのか、悠陽は慌ててコンソールを操作する。

『殿下』

「西園寺少佐。直ぐに ！！」

『何かお悩みがあるようですね。それを解決してから訓練としましょう。それに一生懸命頑張るのは分かりますが、たまには一生懸命のんびりすることも必要ですよ？』

優しげに笑い、諭す様な大和の声にコンソールを叩いていた指が止まった。

「 そう、でしょうか……？」

『そうですよ。さあ、お茶でも飲んで一息つけましょう』

シュミレーションの停止を告げる表示が悠陽に網膜に投影され、シュミレータボックスはゆっくりと定位置へと戻る。

「……一生懸命のんびりすること……か」

ぼすつとシートに体を預け呟いた。そういえばここ最近ずつと頑張っていた気がする。政治、経済、国際情勢、帝王学……ありとあらゆる学問を学ぶ合間、何とか妹を自分の手元に戻そうと東奔西走したが、古い風習に拘り続け、縁起を担ぐ連中は話を聞いても決して首を縦に振ろうとしなかった。それがどれ程歯がゆかった事か。風習が何だとなんな事は知らない。私は自分の夢を叶えたいだけだ。

シュミレータのハッチが開く。そこには既に強化服姿の大和が立っていて、手を伸ばしている。

「どうぞ殿下」

「感謝を。西園寺少佐」

その手を掴み、悠陽は外に出た。

『やはり部品干渉がどうしても解消できません。こうなるとフレームから設計し直すしかありませんね』

帝都城のシュミレータルームを出て、赤の斯衛服に着替えた大和が悠陽の私室へと向かう最中、手持ちの携帯電話が鳴った。出ると相手は富嶽重工の部長で、内容は大和が頭を痛めている案件の事

だった。

「誤魔化しは効きませんか……今の時点からフレーム設計をするとなると配備がかなり遅れてきますね。……仕方ありません。装備換装システムを切り捨てて、壱号機で開発を進めましょう」

やっぱり無理だったかと大和は内心で呟いた。元々背部の装備換装システムはGAT-X100シリーズの特徴だ。基本となるフレーム設計が違う。それでも何とかなるだろうと思っていたが、考えが甘かったと大和は理解した。

『残念ですね。実現できれば間違いなく汎用性に優れた素晴らしい戦術機になった筈ですが……いや、やはりそのコンセプトは捨てるのはもったいないので、我が社の方でもう一度検討してみます。決定はソレからと言う事にしませんか？』

「……お願いします。では私もスケジュールが空き次第、そちらの方に行きますので。そういえば「不知火」の改修案で何かいいアイデアが出ましたか？」

『いくつか出てはいるのですが……。ご存知通り、「不知火」は帝国側の無茶な要求を叶えるために発展性の為の構造的余裕を削いだ仕様です。ここからさらに上の段階に上げるにはやはり大規模な改修が必要となってきます。加えて』

「加えて、ソレを実現出来て帝国の仕様要求に答えられたとしても、コストの問題が出てくる……ですね」

『はい』

大和は小さく溜息を吐いた。完全に行き詰まり始めた。いや、今までが順調すぎた反動だろうか。

現場から送らてくる意見書や要望書を満たす「不知火」の改修は出来る。だが、次に問題となるのはそれを実行する為の時間と資金、そして運用コストが高騰してくる事だった。それならいつそのこと、「不知火」の後継機となる新造機を作るのも一つの手だが、その設計者には間違いなく大和が指名されるのは眼に見えている。しかし大和にはこれ以上の案件を抱える余裕はない。ただでさえオーバーワーク気味だからだ。

斯衛軍専用次期主力戦術機開発計画の『飛鳥計画』を筆頭に、海軍の「海神」と「夕雲」、「陽炎」、「撃震」の改修、新しい技術投入による試作機完成目前の第三世代戦術機用の練習機開発計画、次世代戦術機用兵装と艦船搭載用兵器の開発、特技開の全員で考え、国を通じて国連に提案、現在議論中の新規国際標準規格戦術機共同開発計画など、普通の人間ではとてもではないが抱えきれない量の仕事を抱えている。それに加えてコネクション作りの為のパーティ出席や政治家達の会合……もはやチートな能力がなければ過労死決定だ。

が、それでもやらなければならない。もうすぐ光州作戦に続くBETAの本土上陸がある。大和としてはせつかくここまで経済を活性化させ、各工場の規模を拡大した日本を蹂躪されるのは阻止したかったが、大陸での戦闘は芳しくない。90式戦車改やMLRS、「撃狼」が中華統一戦線へ優先的に輸出していると言っても、たかが戦車と戦術機もどきではせいぜい戦線の維持、もしくは後退を遅らせるのが限界のようだ。こうなれば広域大量破壊兵器 認めたくはないが核兵器や米国のG弾を使って一気にその数を減らさなければ、戦線を上げるのは難しいだろう。

そうなつてくると思いつくのは、爆発、熱反応、放射能などの二次被害がないサクラダイトを利用した新型核兵器『フレイヤ』が効果的だが……作って実戦で使用すればそれはまた世界に大きな波紋を生み、別の意味で日本は世界各国から狙われる事になる。

（やれやれややこしくなってきたな……）

二言三言、富嶽重工の部長と会話を交わした後、携帯電話の電源を切る。

（ テストパイロットをする余裕も無くなってきたし……
そろそろ唯依をこちらに引き戻すか？）

現在、篁 唯依は特例措置として斯衛軍に入隊。厳しい訓練を受けているが、その名は技術廠にも響いている。何せ現在標準装備となっている94式OSの開発者である大和の手ほどきを直接受けてその才能を早くから開花させたのだ。斯衛軍では『西園寺の再来』と呼ばれるほどめきめきと実力を磨いているそうだ。

（それに部隊の編成もしなくちゃならんし……ふう、やれやれだぜ）

長い廊下を歩み出す。要所要所で立っている警備に敬礼を行いながら、悠陽の私室がある最奥を目指した。

「遅かったですね。西園寺少佐」

「申し訳ありません。メーカーから電話が掛かってきています」

悠陽の私室で一つお辞儀をした後、部屋に入る。部屋はそれなりに広いが驚くほど質素だ。置いてあるものはほとんどない。せいぜい床の間に飾られた水墨画と薙刀ぐらいだった。

「富嶽重工からですか？」

「ええ。『飛鳥計画』の機体の事で」

悠陽の前に腰を下ろす。眼の前には小さなお盆に乗ったお茶とお茶菓子が置かれている。

「順調なのですか？」

「概ねは。ですが……色々と仕事が多くて」

お茶をすすり、大和は眼を丸くしてお茶を見つめた。かなり美味しい。鼻の奥まで突き抜けるほのかの香りとおと息を漏らしたくなる優しい味。かなりいい茶葉を使っているようだ。

「すみません。わたくしの我が侂に付き合わせてしまつて……」

「お気になさらずに殿下。私もいい気分転換に出来ました。殿下とマンツーマンで訓練出来るなんて、そうそうないことですからね」

「……感謝を。西園寺少佐」

「いえいえ。殿下。話は少し変わりますが、何を悩んでいらつしやるのですか？ よろしければ話していただけますか？」

またにつこりと笑う。彼には自分の夢を掴む気持ちを与えてくれた。ならばまた何か私に新しい切欠をくれるかもしれない。元よりあの時、あっさりと訓練をやめたのも彼に話を聞いてほしかったからかもしれない。悠陽は一つ頷き、手に持っているお茶を見つめながらぼつぼつと語り始めた。

「西園寺少佐。……少佐には感謝しきれません。私に夢を与えてくださって、そしてその気持ちを奮い立たせてくれた……。でも少佐、私とその夢を掴む為にはあまりにも多くの障害があつて、どうあつてもその壁を乗り越えられないのです」

古びた風習に固執する頑固な老人達。どれほど切実に声をかけ、訴えても決して悠陽の声は届かない。縁起が悪い？ 災いが起こる？ そんな事は知らない。第一、既に災いならBETAと言う現象が起こっている。それ以上の災いなどないし、大抵の事ならば、撥ね退けられる自信はある。

「私ほただ会いたいただけなのです。言葉を交わし、共に喜び、悲しみ、笑っていたい。私の隣には……あの子が必要なのです……！」

ぐつと湯のみを持った手に力が入る。熱さなど感じなかった。

フラッシュバックする別れの光景。何度も振り返る泣く事を必死にこらえる妹の顔。悠陽の手から消えた温もり。残されたたった一つの人形。

『これが正しい事なのだ。悠陽 煌武院家にとっても、お前にとってもな』

大人達の誰もがそう言った。悠陽は頷き、納得する事しか出来なかった。でも心は泣いて、苦しんで、暴れていた。どうしてこんな事をするのか。どうして大人はそんな安心した顔で私から大切なモノを奪うのか。

「私は」

「それで」

「えっ？」

どこか素っ気ない大和の声に、悠陽は顔を上げた。

「それで、私にどうにかしろとおっしゃるのですか？殿下？」

薄笑みを浮かべた大和はどこか幻滅したように悠陽に言い放った。

「い、いえ、そんなつもりはありません。私はただ？」

そこまで言っ言葉が止まった。

本当に話を聞いて欲しかっただけなのだろうか。何か解決の糸口が欲しかっただけなのだろうか。

今や西園寺家の力は武家社会でも絶大だ。彼が四方八方に手を回せば、もしかすると妹を取り戻せるのかもしれない。自分は、彼に助力を求めたかったのではないか。

「殿下。いくら私でも、それは出来ません」

大和の見透かした様な言葉に悠陽は息を呑んだ。

「殿下はこれより、更なる激動と混乱の時代において、日本帝国の象徴でありながら民の支えとならなければならぬお方。」この程度”の事で他人から助力を得ていては、この先の時代、日本の頂点に立ち、皆を引っ張って行くことなどできません 政威大將軍煌武院悠陽殿下、一つ……私からこの言葉を送りましょう」

一口、お茶をすすった後、大和は言い放った。

「強請るな。勝ち取れ。さすれば与えられん」

大和が帰った後、悠陽は一人、私室で考え込んでいた。

切実に願った夢を、妹との再会を”その程度”と評した大和。そしてその後に言われた言葉。。

「強請るな。勝ち取れ……さすれば与えられん……」

この先、世界はさらに大きな戦火に包まれる。それは悠陽でも分かっている。大陸の戦線は徐々に後退し、日本がその戦火に覆われるのは目に見えている。彼はソレと比べてそう酷評したのだろう。たかが古い風習、蹂躪されるかもしれない人々の危機と比べれば、確かに何と小さな事なのか。そして自分が何者なのか。その意味を改めて教えてくれた。

悠陽は一つ眼を瞑り、息を整えた後。

「月詠」

「ここに」

背後の襖が空き、赤い斯衛服を纏った月詠真那が膝について現れた。

「この後の予定は特にありませんね？」

「はい。特にご予定はありません」

「車を用意下さい。御剣家に参ります」

「殿下 それは」

月詠が口を開く。長年、悠陽の警護と面倒を見てきた彼女だが、彼女のやろうつとしている事は賛成出来なかった。悠陽の痛みも悲しみも知っている。だが、彼女がしようとしている事は禁忌に触れる。禁忌とは触れてはならないこと。禁忌を犯せばそれは災いとなる。その災いを悠陽と言う少女に振りかからせる訳にはいかない。

「 月詠」

悠陽がもう一度、名前を呼んだ瞬間、どくんと真那の心臓が大きく高鳴り、思わず息を呑んだ。

何、が……？

起こったと言葉が続かなかった。今、目の前で起こった明確な変化に頭が付いてこない。いつもと同じ声。だが声に秘められた言い様のない気　　王気と言っのだろうか。それが尋常ではない。思わず体が強張り、何故か平伏したい気持ちに駆られた。

「そなたの意見は聞いていません。私は政威大將軍煌武院悠陽。我が命に従うのが、そなたの役目ではないのですか？」

振りかえった悠陽から王気が迸り、真那はよろめきそうになった。突然の変化と成長。政威大將軍の威厳と権威がびびしと伝わってくる。

「っあ……はっ、ただちに！」

慌てて真那が下がる。襖を閉め、すぐさま配下の者に車を準備するように命令する。

（悠陽様……）

政威大將軍として素質がなかった訳でもない。悠陽には人を統べる才能があると真那は認めていたが、このあまりの成長は異常だった。その異常な成長を生み出した原因は直ぐに察しがついた。

「またあの男か……」

西園寺の後継者だ。また何か奴が入れ知恵をしたのだろうか。

余計なことを、と思う反面、煌武院悠陽の成長を促した彼に感謝する気持ちもあった。

「まさかこんなにも早くばれてしまうとはねえ。君を侮っていたかな？」

技術廠特殊技術開発室の来客用ソファーに腰を下ろしたトレンチコートの男。帝国情報省外務二課課長鎧衣 左近は苦笑交じりに答えた。

「まさか。たまたまですよ鎧衣課長」

大和は人懐っこい笑みを浮かべて、オフィスに備え付けられたポッドでお茶を入れる。

「ですが、流石は外務二課ですね。経歴を洗うのに少々危ない橋も渡りましたよ？」

天然物のお茶が入った湯のみを鎧衣課長の前において、大和も腰

を下ろした。

切欠は本当に些細なことだ。塩川中尉のログインで、特殊技術開発室のホストコンピュータにあるCPU関連サーバーに向けて、アクセスログを消した痕跡が幾つもあったのだ。このホストコンピュータは大和が組んだ独自の防壁が幾つも張り巡らされており、外部からハッキングに対してはかなり強固に出来ている。また内部犯行の可能性も考えて、表向きアクセスログを消したとしても、隠されたバックアップログが自動的に大和のコンピュータに送られる様になっている。

秘書官である彼女がCPU関連サーバーに向けてアクセスする理由はないし、アクセスできる権限はない。大和はそこで彼女に裏の顔があることを知り、秘密裏に彼女の経歴を洗ったのだ。そして各省庁のホストコンピュータに侵入。片っ端から検索をかけた結果、帝国情報省外務二課に彼女のデータがあったのだ。

「しかし驚いたね。各省庁のみならず情報省のデータベースにもハッキングをかけてくるとは。それもこちらに一切の痕跡を残さずに……いやはや、君がした事は重罪だよ？ 私が報告すればいくら君でもただじゃ済まないね」

「そうなったらその時です。まあ色々逃げ道は作っておりますので」

大和はすずしい顔でお茶をすすった。

「ほう……逃げ道か。それはさしづめ欧州辺りかな？」

「さあて、どうでしょうね。私の頼みごとを聞いてくれるなら教

えてあげてもいいですよ?」

「頼みごとか……やれやれ私は人気者だね。私に何か見返りはあるのかな?」

「既に渡したでしょう? ないとは言わせませんよ。証拠は上がってますから」

CPU関連のサーバーにコピーした証拠がある。鎧衣課長は小さく肩をすくめ、ソファに背を預けた。

「……これは困ったな」

「鎧衣課長。私の頼み事はたった一つです。これは貴方の雇い主達にも秘密で動いてほしいのです。無論、その秘密を守って貰えるだけの貴方個人への報酬と雇い主達への見返りも用意してあります」

「大盤振る舞いだねえ……だが、私はまだ引き受けるとは言っていないよ?」

「引き受けて貰いますよ。嫌とは言わせません」

湯のみは置いてじつと鎧衣課長の瞳の奥を見つめる。そして伝える。嫌だと言うならそれ相応の手段を持って従わせてやると。その為に各企業や高級将官達とのコネを作っておいたのだ。

それを敏感に感じ取ったのだろうか。鎧衣課長は小さく嘆息した後。

「……やれやれ鞭を入れるのが好きな人ばかりだ」

了承するように小さく頷いた。大和は口元に小さく笑みを浮かべる。

「ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる大和。

「それで私に何をさせたいのかね？ 西園寺大和君？」

「 1992年。スワラージ作戦」

鎧衣課長の眼がほんの僅かだが鋭くなった。何故この場所で、彼の口からそんな言葉が出るのかその理由を思案した。

大和は薄く笑みを浮かべ、鎧衣左近にその依頼内容を伝えた。

第八話 米国の闇、悠陽と大和、そしてトレンチコート（後書き）

クロニクル02クリアー。やばいな。ヨーロッパの面子と絡ませたくてうずうずしています。三人娘は良かった。久しぶりにグツと来たよ。さらにララーシュタイン大尉は良いキャラしていますね。憧憬のほうもまりもちゃんがひととき頑張っている印象と残酷な現実に涙……アンリミテッドは本当にダメだ。鬱になる……。

とまあ、クロニクルの感想を書いてしまいましたが、本題はここからです。後々、大和は「撃震」や「陽炎」の回収にも手を加える予定なんです、今回は「撃震」の機体改修案を募集したいと思います。翁さんのF-15・AGILE「アジャイル・イーグル」がごくよかったので、皆様のお知恵を拝借しようと思った次第です。

格闘、射撃、万能、いずれかの属性を持つ「撃震」機体設定を応募していただけると嬉しいです。

図々しいかもしれませんが、皆様のアイデアをお待ちしています。

第九話 女狐と斯衛軍の新型、水面下で進む計画（前書き）

少し更新が遅れました。申し訳ありません

「撃震」のアイデアを投稿してくださった皆様、大変参考になりました。ネタ帳が増えてニマニマしています（笑）

穴だらけで矛盾だらけの作品ですが、皆様のご感想、ご意見のおかげで頑張っていけます。これからもなにとぞ、感想掲示板のほうにご記入をお願いします。

では、九話目どうぞ！

第九話 女狐と斯衛軍の新型、水面下で進む計画

SIDE

「気に入らないわねー……」

帝国陸軍白陵基地の一角。厳重なセキュリティが幾重にも張り巡らされた建物の一室奥の部屋、様々な書類が散らばる乱雑な執務室の主、香月夕呼博士は手に持つ書類を見つめ、不機嫌そうに鼻を鳴らし呟いた。

クリップで留められた書類の束。それは結成されたばかりの香月夕呼直属の非公式部隊、特殊任務連隊A-01部隊に関する詳しい情報が記載されている。ようやく手駒を手に入れて気分はいい筈なのだが、夕呼の機嫌は全く逆だった。

「どういってもりなのかしら……」

その不機嫌の源は戦術機の配備だった。A-01部隊は、夕呼が総責任者を務める『オルナティブ?』に属する部隊で、通例としてA-01部隊に配備される戦術機は現地政府、つまり日本政府が提供する事になっているのだが、いざ配備される戦術機は驚くべき事にほとんどがTSF-TYPE94「不知火」で構成され、『搭乗士は日本人のみ』と言う条件付きでMBF-TYPE94「夕雲」も送られてくる事になっているのだ。

子飼いの戦力が充実するのはありがたい話だが、問題なのは何故こんな大盤振る舞いが出来たのかと言う事である。苦労を重ねて完成させた「不知火」と各国から輸出を要望される「夕雲」。それを

国連部隊に配備する。国防省や軍は間違いなく、国連を通じて情報流出を理由に激しく反発するだろう。オルタナティブ？を進める榊首相らが軍を抑えつけて配備したと言えればそれはそれで辻褄が合うが、夕呼はその裏にもう一人の人間が関わっている事を掴んでいた。

日本帝国において重要人物として位置づけられ、世界各国から常に注目を浴びる人物。そして今も尚、わざと夕呼の元に情報を流出させている技術者。

（西園寺大和……一体何のつもりなのかしら？）

夕呼は持っていた書類を様々モノで溢れている机の上に投げ捨て、椅子に座る。そしておもむろにパソコンを起動、西園寺大和のプロファイルデータを呼び出した。

直接会った事はないと言うのに、こちらを援助する動きを見せる大和に夕呼の不信感が増すばかりだった。複雑怪奇な権謀術数で溢れるこの世界で、不明瞭な善意ほど信じられないモノはない。

「まあ……元々こいつは異常なのよねえ」

頬杖を付いて、夕呼が画面の大和の写真を見つめる。

結果には常にそこへと至る為の原点があり、過程が存在する。夕呼が大和を異常と評したのはその原点と過程、つまり彼が生み出した新技術の完成度の高さだった。発泡金属装甲やMBF、高い並列処理能力を持つ新型CPU、ある程度の知能を持つSAS（サポート・AI・システム）、今年から実戦配備が始まった97式近接戦闘振動刀など、新技術にしては不具合などが普通よりも圧倒的に少ないのだ。新技術は新しい技術ではあるが、直ぐには実戦で使えな

い。何年も検証された後、初めて実戦で使えると判断されるのだが大和が世に送り出して来た技術はそれがほとんどない。つまりそれは原点と過程の段階においても、完成度が高いことを意味している。

（一体何が目的なの？ まさかこっちの計画を知っていると言うのかしら……）

ぎしりつと背もたれに体を預け、天井を見上げた。

夕呼が進めている『オルタネイティヴ？』は国連主導の超極秘計画。いくら鬼才と呼ばれようが、大和がこちらの計画内容を知っている筈はないし、知る事も出来ない。なら一体何が目的でこちらを援助するような動きをするのか。様々な仮説が浮かんでは自ら否定する。どうしても自分が納得できる答え……否、仮説すら立てる事が出来ない。

「ちっ」

思わず舌打ちが漏れた。

苛立ちが積もる。いつもなら直ぐに頭を切り替える事が出来るのだが、今日は少し違った。少し前に、国連のほうで絶対に認めるわけにはいかないクソツタレな米国が計画した『オルタネイティヴ？』が承認され、遠い空の上で箱舟の建造が始まっている。その事実が夕呼の苛立ちを生み出す原因だった。

（……まあこいつが何者なのかはさておき……欲しいわね）

もう一度パソコンのモニターに表示されている写真を見つめる。

多分野に技術者としての才能を持ち、衛士としても恵まれている。事実、素人目から見ても大和の操縦技術は馬鹿げているほど凄まじい。富士教導隊相手の演習、斯衛軍最精鋭部隊第十六大隊相手のシミュレーション……夕呼が欲しいと思った人材だった。

夕呼の権限、つまり『オルタネイティヴ？』の権限を使えば引き抜けることは引き抜けるが、その後の日本政府との関係が悪化するのには目に見えている。現在進行中の開発計画にはほぼ全て大和が噛んでいるからだ。

夕呼が一つため息をついた直後。

「おやおや、何やらお悩みの様子ですな。ここはアトランティス大陸で購入した神秘の水でも飲んで、英気を養ってください」

コトツとテーブルの上に何かを置く音がする。夕呼一人しかいなかった部屋に、芝居掛かった口調の男の声が響いた。夕呼は特に驚きもせず、うつとおしいそうに仮眠用に使っているソファアーに眼を向けると、トレンチコートに帽子を被った中年男性が座っていた。

「……アンタさ、気配も無くセキュリティを突破しないでくれる？ 次にやったら撃つわよ？」

溜息混じりに夕呼が答えると、トレンチコートの男は小さく笑みを浮かべ恭しく一礼する。

「それは失礼いたしました。次からはノックすることにしましょうか」

「是非そうして貰いたいわね」

外で動き回る夕呼の駒の一つ

外務省情報二課課長鎧衣

左近に向けそう言った。

「それで今日は何？ 私は忙しいんだけど？」

「いや本日お伺いしたのは他でもありません。このアトランティス大陸で購入した神秘の」

「時間の無駄。とつとと帰れ」

椅子を回転させ、夕呼は鎧衣に背を向けた。

「……相変わらず連れませんか。今日はなかなか面白いネタを仕入れてきたというのに」

「ふん……どんな？ 一応聞いて上げるわ」

「香月博士が気になっておられる男性の情報です。香月博士同様、裏でこそこそと動き回っているようですよ？」

「失礼ね……でも面白いわね。どう動き回っているのかしら？」

「タダでは教えられませんな」

「さつさと話さない。私は時間の無駄遣いが一番嫌いな。でないとその透かした頭を撃ち抜くわよ」

引出しにしまっている拳銃を取り出す仕草を見せた瞬間、鎧衣は

おどけた様に両手を上げた。

「おお。怖い怖い。入手した情報は二つです。一つは、日本政府から国連に向けて提案した新規国際標準規格戦術機共同開発計画 A F P をご存知でしょうか？」

夕呼が嘆息を漏らす。

「知っているわよ。ユーラシア各国の技術者を日本に迎えて、ユーラシア大陸での運用を主眼に置いた次世代装備換装システムを搭載した汎用性の高い戦術機を開発する計画でしょう？ でも、どうかの馬鹿はソレを承認させたくないって事で、必死に立ち回って否決させようとしている。本当馬鹿よね……そんなに自分達の利益が大事かしら？ そういふのは B E T A を追い出した後に好きなだけすればいいのに」

心底呆れたと言わんばかりに、嘲笑を混ぜて夕呼は言った。

「おつしやる通りで。現在、国連ではソレを巡って激しい議論が交わされています。長引く議論を無駄と判断したのか、それともそれが最初からの目的だったのかは定かではありませんが、彼が日本政府を通して、賛成していたユーラシア各国の説得を条件に、彼国にある取引を持ちかけました」

「へえ……何を要求したのかしら？ G 弾？」

「彼の国で 87 年に凍結された、H I - M A E R F 計画の試作機「X G - 70」と呼ばれる戦略航空機動要塞の譲渡です」

（ なんですって!?! ）

表情こそ平静を保っていたが夕呼は驚愕した。それは夕呼が、米
国に陰ながら存在する『オルタネイティヴ?』推進派からの情報提
供で知り、いずれは接收しようとしていた機体だったからだ。

（先手を取られたと言うの……？ でも、一体どこでアレの存在
を知ったって言うの？ まさか米国にもあのガキの協力者がいるっ
て事……ちっ……！）

「……どうかされましたか？ 何やら顔色が優れません？」

鎧衣が心配げに尋ねてくるが、目には鋭い光が宿っている。こち
らの動揺を悟られる訳にはいかないと、持ち前の自制心を動員して
夕呼は真つ正面から鎧衣と目を合わせる。

「別にい……。でも、あれは結構いろんな問題を抱えた欠陥機で
しょ？ ユーラシア各国の説得と莫大な国益、そして国際社会での
発言力の対価としては安すぎると思うわ」

「そうとも限りません。確かに様々な問題点を抱えていますが、
その機体の改修には”極東の奇跡”が関わるのです。もしその問題
を彼が解決できれば、日本政府は強大な兵器本体と技術を手にし、
何かと邪魔をしてくる彼の国の計画を挫く要因を得られるのです。
彼の国にしてはこれ以上の皮肉はないでしょうな」

鎧衣が小さく微笑む。確かに自国で凍結、放棄した計画が自分達
に害を及ぼすなんて冗談では済まされない話だ。

「彼の国では今現在、譲渡に関する話し合いが行われているそう
です。もうしばらくすれば香月博士の元にも情報が届くでしょうな」

米国としては何とも難しい選択を迫られていると言っている。いくら米国が国連での権力が強かろうと、ユーラシア各国が賛成しているこの共同開発計画を否決する流れに持っていくのには難しいし、それには多大な出血が必要となる。そこで手を差し出したのは薄笑みを浮かべる日本だ。

凍結された計画。米国の技術者たちがどうしても実現出来ず、放棄された試作機。これをただの国が要求するならば米国は渋りを見せながらも引き渡すだろうが、今の日本にはその失敗を撤回させる可能性を持つ人物と技術力がある。だがこの取引を蹴れば、共同開発計画は可決される見込みは高く、米国の戦術機市場は大打撃を受ける。ただでさえ、マテリアル市場であっても日本が徐々に勢いを付けてきているのだ。これ以上の痛手は避けたいところだろう。

「ふん……でも政府はよくそんな博打を踏んだわね。『XG-70』の問題点が解消される保証はどこにもないのよ。あくまでも可能性の話なのに」

「……裏はまだ取っていませんが、彼の国が取引になった場合、政府は今年実戦配備されたSMF-TYPE97「吹雪」をユーラシア各勢力に一機ずつ、技術提供と言う形で渡すつもりだそうです」

「……なるほどね。つまりどっちに転んでも日本にはメリットしかないわけか」

米国が取引に乗れば「XG-70」を手に入れて、各勢力への説得も簡単だし、裏で発言力を手に入れる事が出来る。米国が取引に乗らなければ共同開発計画によって各国の運用理論や技術を手に入れ、莫大な利益を手にする事が出来る。なかなか辛辣な手だわ、

と夕呼は感心するように心の中で呟いた。

「それでもう一つは何？」

大幅な修正が必要ね、と夕呼が思考を巡らしながら鎧衣に尋ねる。

「ここ最近、彼が遠田技研と何やら怪しげな研究を行っています。かなり厳しい情報規制と警備を引き、極秘裏に進めているらしいのですが……」

「それがどうかしたっての？ 極秘裏に言ったら斯衛軍の次期主力戦術機もそうでしょうが」

「いえ、この研究が他の研究との大きな違いは国防省や城内省を通さず、彼の資産を元手に遠田技研と極秘裏に進めているのです」

「……へえ。それはまた面白いわね。興味が出てきたわ」

つまり正規の手順を踏むことを拒む研究、もしくは決して承認されない研究だと言うのか。

「それでどんな研究な訳？ 全容を掴んでいなくても、手掛かりぐらいは掴んでいるのでしょうか？」

「いえ、それがまったく」

両手を広げて「お手上げだ」と言わんばかりに首を振る鎧衣。

夕呼が眉を潜める。

「情報省の質も落ちたわね。国内の事を把握できていないなんて、特技開の時と同じじゃない」

「手厳しいですがそれには理由があるのです。上からこの件に関して一切の調査を禁じるとのご命令を受けている為、表だって動く事が出来ないのです。我々は従順な飼い犬です。飼い主に噛みつくなんて真似は出来ません」

夕呼がはつとして、にやりと鎧衣が笑う。

「そういうことです。つまりこの件はトップのみが承認しているのです。そして私個人が調べた結果、この研究には驚くべき点はある一つあります。博士と同じく、前の計画の”生き残り”を利用してそうですよ」

荒野を無限とも言える数でひしめく絶望と虐殺の象徴であるBETAの群に、山吹色の戦術機が駆け抜ける。複雑な三次曲面と刃のように鋭いエッジで構成されたその戦術機は、総面を装着した鎧武者のような顔で四方八方から迫ってくるBETAを睨み付ける。そして邪魔だと言わんばかりに両手に持った銃剣付き突撃砲をBETAの群に撃ち込み、着実に肉片を生産していった。

「ふふっ

」

それを見て、少女が薄く笑う。どこか恍惚に満ちた声でありながら、妖艶に感じられた。

事実、少女は酔っていた。まだ実戦を体験していない未熟者が、斯衛軍の次期主力戦術機先行量産型を配備された自分が、そんな気持ちになるのは不誠実だ、不謹慎だと思い抑えようとしたが抑えられなかった。

操縦桿を動かす度に、フットペダルを踏み込む度に、体の奥底から湧き上がるこの興奮と期待を抑えつける事など出来ようか。未熟者の自分でこれなのだ。歴戦の衛士なら尚の事、抑える事は出来なはずだ。この戦術機 「武御雷」は実に痛快だ。動かせば動かすほど自分のフィードバックにマッチしていく。まるで自分が戦術機になった様な一体感すら感じる。

『後方より要撃級接近』

無機質な人工音声が場所の耳朵を叩き、網膜投影で視界全体に広がっている外部映像の一部に、後方から前腕を振り上げる要撃級の映像ウィンドウが自動的に開く。

「邪魔だ」

「武御雷」が空中を舞い、半回転。要撃級の歯を噛締めるしわくちゃな顔に向け蹴りを放ち、二又の爪先が実にあっさりと要撃級の頭を蹴り飛ばし、二片の肉片が地面に転がった。

体を一部を失いながらも要撃級は死なない。BETAの強靱な生

命力は人間の常識外だが、体勢を崩すことには成功した。着地した「武御雷」はもはや興味がないとばかりにメインカメラを別の方向に向けたまま、120mm散弾を近距離でぶち込み、今度こそその息の根を止めた。

「ふふっ

」

再び少女が笑う。

何と脆い事か。何と弱い事か。最初はその圧倒的な数の暴力に恐怖を覚え、震え、怯えた。何も出来ず、何度押し潰され、何度喰い殺され、何度悔しさをコンソールに叩きつけた事か。

だが今は違う。この「武御雷」がある。「夕雲」以上に高度で洗練された”もう一人の自分”がサポートしてくれる。負けぬ筈はない。負ける事は許されない。

「行くぞ「武御雷」」

少女がフットペダルを踏み込み、更にBETAが密集する地域へと飛翔する。光線級がない為、戦術機の特権である複雑な三次元機動が行える。それはつまり、「武御雷」の性能はさらに飛躍させる好条件。

背中に背負ったガンラック 94式兵装稼働担架システムが起動し、脇の下を通り突撃砲が出現する。120mmも使用した前方四門同時射撃を行い、着地点に群がる戦車級を一掃、主脚を大きく曲げて着地の衝撃を吸収する。

「AI。三時から九時の範囲をカバー」

『了解』

搭載されたSASが搭乗者の命令を承認。再びガンラックが動き出し指示された範囲に制圧射撃を実行し、赤い大波となって迫ってくる戦車級の進行を遅らせる。

その隙に「武御雷」が跳躍噴射の体勢を取り、正面から迫ってくる要塞級に狙いを付ける。戦術機をはるかに超える全高六六メートルの巨大は、動きこそ緩慢だがその防御力と耐久力は凄まじい。狙うポイントは三胴構造の体節接合部分とされているが、それはあくまでも昨日までの話だ。

「武御雷」の両手に持った突撃砲 97式突撃砲の120

mm砲口下部に設置された銃剣がウウンと言う低い音を奏で始める。そして跳躍ユニットを最大噴射。ズンツと新型の衛士強化装備でも殺しきれないGが少女をシートに押し付け圧迫するが、少女はそのGを心地いいと言わんばかりに笑みを浮かべる。

左右五本ずつ伸びて体を屹立させている装甲脚に狙いを付け、通り過ぎ間に一閃。強靱な硬度と靱性を誇る筈の装甲脚がまるでバタリ様にあっさり切断され、要塞級が地面に崩れ落ちる。同時にその巨体に押し潰されて数十匹の戦車級が赤い染みとなった。

足を潰し、尾節に收容された全長五〇メートルの触手にさえ気を付ければ、もはや要塞級など脅威ではなく、ただの的だ。じっくりと嬲り殺しにする事も出来る。

「ふふっ

」

少女が笑う。笑いが止まらない。興奮が収まらない。言葉がない。この戦術機は、本当に凄い。初めての経験。動かしてこれほど痛快極まりない戦術機は存在しない。動かせば動かすほど、乗れば乗るほど、この機体は己を熱中させてくれる。

「素晴らしい……本当に素晴らしいですよ少佐……」

山吹色の「武御雷」を操る篁 唯依少尉は微笑を浮かべながら呟いた。

「さて毎度お馴染みの感想を聞きたいと思うが……満足そうだなオイ」

「武御雷」の管制ユニットのハッチが開き、キャットウォークで唯依を出迎えたのは整備主任の瓜畑だった。

「何か注文はあるか？」

「強いてあげるならもう少し出力を上げてもいいぐらいです」

肩で息を吐き、興奮冷め止まぬ顔の唯依の言葉に、瓜畑は眼を丸くした後、にやりつと口元に笑みを浮かべた。

「流石は『西園寺の再来』と呼ばれる才女だな。F型はバランス型の跳躍ユニットを背負って制御が難しいって言うのに……まだ出力を上げたいってか？」

「武御雷」には、四つのバリエーションがあり、そこからさらに六種類の色によって分けられている。上から紫と青のR型、赤と黄（山吹色）のF型、白のA型、黒のC型となっている。細かな仕様はそれぞれ違うが、大まかに区分けするならR型とF型には大和が製作したバランス型の跳躍ユニットが装備され、A型とC型にはコスト重視型の跳躍ユニットが装備されている。C型の「武御雷」でさえ、その操縦難易度は高く、振り回される衛士は決して少なくはない。ましてやR型、F型の「武御雷」は一線を画し、その操縦はさらに難しく、繊細さを求められる。

「はい。むしろそっちの方が私には不思議と馴染むと思います。後」

唯依が二、三注文を入れる。

だがそれも全て最初だけだ。「夕雲」よりはるかに性能がいいSASに十分なデータが蓄積されれば、本当に一体化した思うぐらいの動きをしてくれる。つまり従来の戦術機以上に、「武御雷」は搭乗時間が長ければ長いほど、データが多ければ多いほど、その衛士にマッチした操縦と動きをしてくれるのだ。

「そうか。分かった。明日までに再設定しておく」

唯依が管制ユニットから出て、キャットウォークに立つ。そして大きく息を吸い込み、吐き出した。気が付けば額には汗が浮かび、全身に心地よい疲労感が広がっている。随分と長い時間シュミレーションを行っていたようだ。

「最高記録更新だな」

「えっ？」

携帯端末に統合仮想情報演習システム（JIVES）で採取したデータと機体ステータスデータをチェックしながら、瓜畑が言った。

「だから記録更新だって言ってたんだよ。時計を見てみ。昨日より三十分も長くシュミレーションに集中していたぞ」

唯依が壁に掛けられている時計に眼をやると、時刻は夕方に差しかかっていた。昼ごろからシュミレーターボックスに入ったから、実質四時間ほどぶっ続けてやっていたことになる。その事実には唯依は眼を見開き驚いた。そんな感覚はまったくなかったからだ。

「仕方ないと思います。衛士であれば「武御雷」の性能に熱中してしまいます」

「「武御雷」の顔を見上げる。まさに武家出身者が乗るに相応しい面構え。何度見ても惚れ惚れして、口元に笑みがこぼれてくる。」

「まあそうだろうな。技術屋から見ても「武御雷」はとんでもなく使いやすい高性能機だ。その分、性能を引き出すのは難しいけどな」

搭乗時間とデータさえあれば、「武御雷」は誰でも操縦出来るが「武御雷」の量産機としてあまりにも優れた性能を生かすのは結局衛士の腕となってくる。生半可な衛士では「武御雷」のポテンシャルを生かす事は出来ない。

ちなみに陸軍でも「武御雷」採用の意見があったが、「夕雲」に加えて、「武御雷」と配備されたばかりの「吹雪」の技術を流用し

た「不知火・貳型」の開発計画が始まろうとしているので城内省によつて握り潰された。実際のところ、製造と運用コスト、そして「武御雷」採用の意見が少なかったのも、城内省があつさりと握り潰せた理由の一つだった。

「ほほう。大和と同じように蹴りをかましたか。足先の高周波振動装置は思いの外使えるみたいだな」

「武御雷」には、足先や肩部のブレードベイなどに超振動発生装置を内蔵している。これは今年になつて配備が始まった、97式高周波振動刀（以後、97式振動刀）に内蔵されているモノと同じで、使用時間に制限はあるが突撃級の硬い外殻をたやすく両断出来る威力を持ち、次世代の近接戦闘兵器として注目を浴びている。また「武御雷」は97式振動刀の使用を設計段階から組み込まれていた為、マニピュレーターの部分に充電用のコネクタを装備している事から、使用制限の縛りはない。

「はい。それと97式突撃砲もかなり有効です。本格的な近接戦闘を行うには心許ないですが、一時的な近接戦闘を行うには十分な性能を持っています」

これまた「武御雷」から配備が開始された新型突撃砲である97式突撃砲は、87式突撃砲のデザインを継承しながらも、機関部の剛性を十五パーセント向上させ、装弾数を十パーセント増量している。また超振動銃剣を搭載しているのも特徴だ。この突撃砲の案は、日本帝国関係者が知る筈もないが、米国のYF-23用に開発されたXAMWS-24試作新概念突撃砲を参考にしていた。

「見事な新兵器のオンパレードだが、現場の受けもいいいな。西園寺印の兵器は実戦証明済技術と同じだな」

先行量産機は特殊技術開発室以外にも、斯衛軍第十六大隊や第九大隊に配備されており、これと言った不満が聞こえてこない。むしろ歓声やら歓喜の声が圧倒的に多い。

「流石は西園寺少佐です。日本はまた、新たな剣を手に入れました……そういえば少佐はどちらに？」

そういえば今日は一日見ていない。忙しい身である事は知っているが、今日は特技開にいて、唯依のシュミレーションは見に来る予定だった筈だ。

「大和なら今、靖国神社に行ってるぞ」

「靖国神社？」

「ああ。逝った仲間の挨拶と世話になった上官に会いに行ったのさ」

SIDE・大和

夕焼けに照らされた境内。オレは久しぶりに再会した新見少佐と共に靖国神社を参拝した後、境内で話しこんでいた。

「持てる男は辛いよな。また地獄に逆戻りだ」

やれやれと言った感じで、新見少佐は煙草に火を付けた。夕暮れの境内は人が疎らだが、参拝する人は意外と多い。それは多くの英霊が眠っている事を意味している。

「と、言う事は彩峰中将の部隊に配属ですか？」

「ああ。それもほとんど新人で構成された部隊を率いてだぞ。冗談じゃねえよ。大陸の内情はあの時とあんまり変わってねえ。最期の要である朝鮮半島の防衛ラインもいつ抜かれちまう事が……」

……光州作戦が近づいてきている。ただ原作と違い、今の状況を予測しておそらくは二月か三月頃に発動されるだろう。今は六月。残り七カ月だが……これもどうなるか分からないな。アラビア半島の戦線は原作通りに瓦解してしまったし。やはり戦線を押し上げるには、大量破壊兵器が必要だと言う事なのか？

「山口も逝っちまったし……やれやれどうしてオレはこんなしんどいのかね」

深い悲しみの混じった呟きに、オレは懷から一枚の写真を取り出す。ソード中隊の面々が映った写真。この写真に写っている人のほとんどもが英霊となってしまった。現実の世界とは比べられないほど、身近な人の死に近いこの世界……頭で納得できても、心はどう

する事も出来ない。

人間には「慣れ」と言うモノが存在するが、死だけはどうしても慣れない……いや慣れたくない。でも何れは慣れてしまふのだろうか。嫌だな……。

「ソード中隊はオレとお前だけになっちまったな」

「はい」

「まあ、順番から言っであいつらと再会するのはオレの方が早そうだよなあ」

前向きで明るい新見少佐の口から出た言葉とは思えなかった。

オレとは違い、新見少佐はみんなの最期を見てきたんだ。苦しみや悲しみはオレ以上だろう。それに次に配属されるのは大陸だ。

「……不吉な事言わないでくださいよ。少佐」

「わりいわりい……でもよ。流石に堪えるわな。いやなあ、BE TAに身内が殺されたなんてこの世界じゃ日常茶飯事なのは分かっているけどよ……やっぱりなあ、辛いモノは辛いよな」

オレは黙って、視線を空に向けた。茜色に染まった世界は物寂しげな雰囲気を持ちながら、どこか神秘的な印象を受ける。

死んだ先の事は分からないし、死ぬ気持ちも死ななければ分からない。でも遺される者の気持ち痛いほど分かる。言葉に表せない痛みと悲しみ、そして大きな喪失感。ああ……オレが生まれた日本

では決して感じる事は出来ないだろう。いい意味でも、悪い意味でも。

「なあ、大和」

ふうと紫煙を吐き出した後、携帯灰皿に煙草を仕舞い込む新見少佐。

「お前も俺と同じ階級になったんだ。お前も部隊を持つ事になるだろうが、大先輩からの忠告だ。死にじまった部下の為に悲しみ、悔やみ、嘆くのはいい。忘れずにいてやるのは生きている人間が背負うべき責任だ。でもな、必要以上に背負い込むなよ。冷たい言い方かも知れんが、死んだ奴は死んだ奴だ。生きている連中の足を縛るようならそいつらは亡霊だ」

……重い言葉だな。歴戦の衛士である新見少佐だからこそ言えるセリフだ。

それにしても亡霊か……はあそう思いたくはないな。

「心に刻んでおきます。少佐」

「ああ。刻んどけ刻んどけ。年上の言うことをすんなりと聞けるのはお前の美点だからな。大和。今晚暇か？ 飲みに行かねえか？」

「すいません。この後、用事がありまして……って少佐、オレまだ未成年ですよ？」

「構うかよ。飲める時に飲んどけ。女同様、酒の味も知らずに死

ぬのは勿体ねえぞ。そじゃあまた今度だな。じゃあな大和。また生きて会おうや。そんな時に一杯奢ってやる」

「はい。楽しみにしていますよ少佐」

ひらひらと手を振って、新見少佐が石段を下りていく。それを見送った後、オレは車を待たせてある駐車場の方へと足を向けた。

歩きながらさっきの写真をもう一度見返し、懷に大事に忍ばせる。まだ少し信じられない自分がいる。死んだなんて思いたくない。でも、あの人たちは死に、遺体は日本の土で眠る事無い。……嫌だよな。やつぱ……

駐車場に着くと一台の乗用車が止まっていた。メーカーや国防省に行く時に利用している防弾仕様の専用車だ。オレがドアに手を伸ばす前に、扉が開いた。

「ああ。ごめんなエレオノール。待たせてしまったな」

帝国軍の軍服を纏った十三歳ぐらいの銀髪の少女、エレオノール・アイゼンシュタインが責める様な視線でオレを見つめた。

……んっ、何この愛らしさ。ちよつと癒された。朝陽には及ばないけど、小さな子犬みたいで可愛いんだよな。まあ、見かけが某黒い王子様と一緒にいる妖精に似ているのがその原因だろうか。犬耳付けたら絶対悶絶するぞオレ。

「……………」

「ごめんごめん。帰りに何か甘い物でも買ってやるから、機嫌を

直してくれ」

「……………！」

甘い物に反応してか、急にニコニコと表情を変えて笑った。

ぶふっ！？　しまった！　カメラがない。このエンジンスマイルを撮れないとは。西園寺大和一生の不覚！　『オレとエレオノールの思い出アルバム』の中身を更に彩ってくれる最高の一枚を撮り逃してしまった。ああ。ちなみにこのアルバムは朝陽のもあります。エレオノールは四冊目、朝陽は一二六冊目に突入しました。オレの愛の深さが分かるだろう諸君？

「少佐」

「ん、ああ。すまない。基地に戻ってくれ」

「了解しました」

オレは後部座席に乗り込む。運転手兼護衛の軍曹が車を発進させた。

「……………」

発進して直ぐ、エレオノールがオレの膝を枕にして寝転がった。そして、ちらりとオレの方に視線を向け、眼で「駄目？」と訴えて来た。

……………誰が否定出来ようか。歓迎しよう。盛大にな！！

オレは小さく微笑み、頭を軽く撫でた。尻尾があつたら、たぶんブンブンと振っていただろう。エレオノールは満面の笑みを浮かべ、眼を閉じた。

ちつくしょう……かわええな。

表面上は微笑を浮かべているが、心の中ではガッツポーズで踊っている自分がいる。もし軍曹がいなければそれは間違いなく、現実には反映されているだろう。

さて、そろそろ説明しておこうか。エレオノールはオレが鎧衣課長に頼んで、ソビエトから引っこ抜いてきた人工ESP発現体、つまり社 霞やイーニヤ、クリスカと同じ存在だ。その理由は後々分かる事だから言わないが、遠田技研で開発中のあるシステムの実現の為に活躍して貰っている。そして今までの会話から察してくれていると思うが、彼女は声を出す事が出来ない。ある精神的な傷が原因で。そしてその原因が元で、ソビエトは彼女に『失敗作』の烙印を押しつけたのだ。

それにしても何が失敗作なのかねまったく。こんなに可愛いのに可愛いと言う事は全て許されるんだよ。美少女の特権なんだぞ。ああ、ちなみに引き抜き条件として、オレはソビエトに対価として低燃費高出力主機開発理論を渡した。向こうは欧州と同じ、低燃費高出力主機の開発に躍起になっていたからな。渡りに船だった。

ともあれ、これで計画は第壹段階をクリア。第二段階以降は米国の出方次第だ。まあオレとしては、米国がどっちを選択してもいいように計画を二つ用意してある。さてどっちを選ぶかな米国は……。

本音を言っちゃまうとAFPが採用されてほしいだけだな。特技開

のみんなと何日も徹夜で協議して完成させた計画だし。頓挫させるのは惜しいし……米国がAFPを斬り捨てたら、日本国内でそれを引き継がせてやるさ。

……そういやめつきりと家に帰る回数が減ったな。一番忙しい時期に入っているからそれは仕方ないんだけど……うつっ……我が身の朝陽成分の不足を如実に感じてしまう。この後、呉海軍工廠に行つて京都に帰るから、家に帰れるのは最低でも二日後か……仕方ない。エレオノールの寝顔で代用するか。むふっ！

SIDE

同時刻。有澤重工雄琴支社の地下に作られた巨大な空間に、専用ハンガーに納められた内部構造剥き出しの戦術機に整備員達が群がっていた。整備員達は黙々と予定されている作業を行う。誰も声を出さず、機械の様に己に課せられた仕事をこなしていく。

「経過はどうだ？」

その様子を、雄琴支社の視察に来ていた有澤隆文が観測所から見下ろし、背後にいる整備主任に尋ねた。

「概ね順調です。富嶽や河崎からの応援も来ましたからタイムスケジュールに遅れはありません」

「そうか。では予定通り、彼に納品できるな」

「はい……ですが社長。本当にこの機体を極秘裏に作る意味があるんですか？　だってこの機体は」

「それは我々には関係のない話だ。我々は企業だ。依頼された製品を作るのが仕事だ。不要な詮索は身の破滅を呼ぶぞ」

静かだが重い口調に整備主任は言葉を嚥む。

「……お前の言う事にも一理あるのは認めよう。だが、この機体に使われている技術はある意味では諸刃の剣だ。不要に手を出せばそれは容赦なく持ち手を傷つけてしまう」

実際なところ、有澤はこの機体を危険視している。使われている技術があまりにも飛躍しすぎているからだ。もし発表されれば、この機体は間違いなく世界を変えるだろう。

「パンドラの箱はまだ空けてはならないのだ」

宣言するように有澤は言った。

第九話 女狐と斯衛軍の新型、水面下で進む計画（後書き）

最近、多少ナツバテ状態になっています。皆様、水分補給とエアコンの恩恵で何とか乗り切りましょう。

今回は光州作戦に突入しようと思います。いんてぐらオリジナル設定と妄想が入った展開になると思いますが、皆さんの楽しんでもらえるような作品に出来るよう頑張ります。

さて、文章能力アップのためにガンダムUNとフェイトZEROでも読みなおそう。

第十話 光州作戦 はじまり（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした！

なんかいろいろと考えては書き直して、また考えては書いての繰り返し。スランプ状態に陥っていたと思います。更新をお待ちしていただいた方々、申し訳ありません

今回は少し、お話が短いですが前哨戦という事で勘弁してください。今回は皆様期待のチートな兵器とチートな大和達による、BETA虐殺シーンをお送りする予定です。

では十話目、どうぞ

第十話 光州作戦 はじまり

一九九八年二月十日〇八〇〇時 朝鮮半島南西部全羅南道光州広域市南区 第三軍用道路

(……鬱になりそうだ)

とりわけ急いで整えましたと言わんばかりの雑な軍用道路は、87式自走整備支援担架車両の後部座席に座る西園寺大和の体を何度も揺らした。だがそれは特に気にならない。今、大和が最も気になっているのは外の光景だった。

軍用道路の端を歩兵部隊の指示の元、僅かな手荷物片手に港へと向かって歩く人の群。朝鮮半島の人類生存圏内で暮らしていた民間人達だ。

「まだ……かなりの住民が残っているようですね」

「……のようだな。二日前から民間人と傷病兵の退避が始まっていったって話だけど、あんまり進んでなかったみたいだな」

大和は視線を外から離さず、話しかけてきた篁 唯依少尉に答えた。大和と唯依の間には小柄な銀髪の少女、エレオノール・アイゼンシュタイン少尉が座っていた。彼女は今の状況をよく理解していないのか、両手に抱えている大和お手製の人形 三頭身にデイフォルメされた赤い「武御雷」を抱きしめて満足そうにほほ笑んでいた。

「車両も回しているのでしょうか？」

「回しているさ。帝国と中華統一戦線からも随分と輸送車両を回しているらしい。だけど、残っている住民が半端ないからあまり効果が見えていないのさ」

大和達は今、日本帝国と中華統一戦線との共同で行われる『光州作戦』に参加する為、光州西区にある帝国派遣部隊第三補給基地へと向かっていた。

（唯一の救いは防衛ラインと各後方支援、支援砲撃部隊の体制が整っている事か……これも本来の歴史とは大きく違う所だよなたぶん……）

本来の歴史とは違い、一カ月遅れで発動された『光州作戦』は十分な準備期間が存在し、日本帝国と中華統一戦線の艦隊や前線増援部隊、支援砲撃部隊が揃っている。加えてBETAの大規模侵攻がないのも救いだっただ。よって全羅南道の境目に配備された防衛部隊は、今だ戦闘らしい戦闘が行われていない状況だった。

「このまま何事も無く進んでくれればありがたいけど……」

「そうですね……ですがBETAはこちらの都合を考えていません。少佐。ここの住民は未だに避難を拒んでいるとは本当なのか？」

「ああ。事実だよ。彼らの気持ちも分からんでもない。国を失い、難民となった民間人が行き着く先は劣悪な難民キャンプが軍しかない。どちらも嫌なら、いつそひと思いに母国の土になりたい……と思っているんだろう」

その気持ちは分からない事はない。どこの国家でも難民キャンプの環境は改善されていない。無論、国家としては改善する努力は見せてはいるが、追い付かないのが現状だ。それは米国であるうと、そして急激な経済発展を遂げている日本でさえ状況は変わらない。

「……彼らは気持ちは分かります。ですが、その行為が自分達を守ろうとしている各勢力の軍人たちを危険に晒している事実気付いているのでしょうか？」

「正直に言えば気付いていないんじゃないかな？ いや、気付いていても受け入れられないと言うのが正しいかな。……本来は見えない筈の未来が見えて、その未来が最悪なら希望は潰える。悲しい事だな ところで篁少尉。マニュアルは熟読した？」

「あつ、はい。問題ありません。全て頭に叩き込んであります」

僅かに怒りを滲ませていた表情が一変、軍人の顔つきになった唯依が言った。手元には電話帳を僅かに薄くしたマニュアル本があった。

「うん。それなら安心だ。今回の撤退作戦でもソイツは有利に事を運べるだろう。うまくいけば戦略級の成果だって得られるかも知れない」

「はい。私も期待しています。これは97式振動刀と並ぶ次世代戦術機兵装ですから」

唯依はどこか誇らしげに笑みを浮かべて、マニュアルのタイトルに目を落した。そこには『試製98式電磁投射砲運用マニュアル』と明記されていた。

今回の作戦において、大和はほんの一月前に完成した新兵器、本来なら九九年に試作品が完成する電磁投射砲を持ってきた。既に国内での試射は終わっており、問題は特に見つかっていない。つまりこれが最初の実戦運用となる。その引き金を引くのは唯依であり、その為のシュミレーションも受けている。

（手札は多い方がいい。特にこの作戦ならな）

電磁投射砲は大和が持つ手札の中でも切り札に属する。ローレンツ力で加速された砲弾は硬い突撃級の外殻をあつさりと貫通させ、火薬式では到底実現出来ない連射力は面制圧能力にも優れている。この武器一つで大量のBETAを殲滅出来る。対価として装備した戦術機の機動性低下に、砲弾の大量の消費という問題があるがこれはある程度の解決策が用意してある。

ふと横に置いていた携帯端末を開き、戦域データリンクに接続。作戦経過を確認した。

状況はそれほど好転していなかった。軍の物資や怪我人の輸送は計画通りに進んでいる。避難を決めた住人も続々と沿岸部に集まっているが、未だに前線近くの地区には住民が残っている事を教えてくれている。

（起きないかと思っていたけど、この状況だと起きる可能性が高いな）

日本帝国の重要人物と位置づけされている大和が、軍部や政界の反対を押し切ってこの光州作戦に参加した理由は開発した新兵器の実戦試験ではなく、この世界の誰もが知る筈のない未来の歴史を知

るが故の行動。『光州作戦の悲劇』と呼ばれる彩峰中将事件を回避するための行動だった。

彩峰中将事件とは、避難を拒む現地住民の救助を優先した大東亜連合軍に、大陸派兵部の指揮権を預かる彩峰中将が協力した結果、指揮系統の混乱と国連司令部陥落と言う大被害を受けた事件だ。国連本部は日本政府に猛抗議。日本政府は国連からの抗議を受ければ軍部の反発は必至、撥ね退ければ国際社会における信用と第四計画の失速という難しい状況。その結果、時の内閣である榊首相は直談判で彩峰中将を説得、彩峰中将は人身御供となり、投獄。そして銃殺刑に処された。この結末は一応の終息を見せたが、波紋は消える事はなく、後に一二・五事件とされる日本国内での軍事クーデターの原因の一つとなってくる。

つまり未来を変える意味でも、この事件は絶対回避しなければならない。その為に、大和は煌武院殿下に進言して帝国からの増援部隊の一部を救助活動に参加させてもらえるよう進言している。予定では後、一時間ほどで各地区に到着する予定になっている。

「そうだ。篁少尉、君に言っておく事があった」

「はっ。何でしょうか？」

「万が一の場合は装備の投棄を認める。その際は自爆装置の使用を忘れるな」

その言葉に唯依が目を丸くした。

「はあ？　ですが上からは絶対に持ち帰るように命令されているのでは　」

「どれだけ高価な兵器であろうと、所詮は消耗品だ。衛士には変えられない。それにそんな事を少尉が気にする必要はない。頭は立場が上の時に下げてこそ、初めて効果がある。違うか？」

にやりと笑って答えた大和に、唯依は一瞬、呆気にとられたが直ぐに小さく笑って「了解」と答えた。

軍において上からの命令は絶対である。だが時には上が下の状況を理解出来ず、命令を下す事もある。それでも従うのが軍人だが、根回しして現場の人間を動きやすくするのも上の役目だ。

（少佐。貴方の部下でいられて私は幸せです）

「それはそうと篁少尉。今回が初実戦だけど今の心境は？」

「……まだ本当の戦場を見ていない為、何とも言えませんが、心は平静です。この状態なら、無事任務を果たし、少佐のご期待に応えられると思います」

「うん……なるほど。極度の緊張や不安は見えないな。唯依。巖谷の叔父さんの言葉を忘れるなよ？」

「『気持ち熱くなっても、心は常に冷たく保て』ですね。分かっています」

「そうか。よし任せたぞ篁少尉」

「はっ！」

びしつと敬礼した唯依を満げに頷いた時、左袖をくいくいと引
つ張られた。

「ん？ どうしたエレオノール？」

「……」

左手に「武御雷」人形を抱きかかえ、自分を指差すエレオノール。
その眼が語っている。「私は？ 私は？」と。

その愛らしい仕草に、大和の全身に電気が奔る。思わずぎゅと抱
きしめたい気持ちをぐっと抑え込み、くしゃりと頭を撫でた。

「当然、期待しているさエレオノール。お前もオレの切り札の一
つだ」

ぱあと表情を煌めかせ、嬉しそうに笑ったエレオノールに大和は
また悶え、心の中で酷く悔しそうにこう言った。

（くそおつ……カメラがねえ……！）

（……………っ、私は何を考えているんだ！？）

ほんの少し……本当にほんの少しだけ、頭を撫でてほしいと思っ
てしまった唯依はその気持ちを追い出すように首をブンブンと振っ
ていた。

二月十日一三三〇時 朝鮮半島南西部全羅南道光州広域市西区 帝国派遣部隊第三補給基地 第二特設格納庫内

「……凄いな」

壁の両側に並ぶ戦術機ガントリ。そこに納められた戦術機が見る見る内に整えられていく光景は圧巻だった。元々ほとんど整備完了状態で運送され、することと言えば、跳躍ユニットの装着や再チェックだけなのだが、その速度が見るからに速い。流石は、帝国の最先端技術を開発する特殊技術開発室に所属する整備兵達だ。一人一人が己の役割を理解し、熟練の整備兵の様に動き回っている。

「見ていて飽きないとはこの事だな」

ブラッディ小隊の護衛として派遣されたストライク大隊隊長、柿崎少佐は小さく呟き、整備員の間を通り抜け、搬入作業の時から気になっている機体の前に立った。

（改めて見ても……こいつは凄いな。一斉射撃でもしたら、どんな奴でもトリガーハッピーになっちまうぞ）

柿崎少佐は静かにソレを見上げた。

各戦線で高い評価を受けているTST-TYPE95「撃狼」の後継機として試作された、TST-TYPE-X98「雷神」。上半身は柿崎少佐が良く知る「撃震」なのだが、下半身と両腕がまったくの別物だった。下半身は戦術機史上初めての四脚。それぞれの脚にホバーユニットを搭載することで高い踏破性を獲得し、背中のアタッチメント付き推進ユニットを使用する事で「撃狼」の弱点で

あつた移動速度を解消している。これだけでも十分に凄い装備なのが、それ以上に柿崎少佐の目を奪ったのは、全身にこれでもかというぐらいに施された重武装だった。

両腕には通常の人間に模した主腕ではなく、肘から先が重厚感たっぷりの36mm五連装ガトリング機関砲を変えられ、両肩の上部ラックには装弾数を増加させた97式多目的誘導弾システムを装着している。これだけでもかなりの火力を秘めているのだが、極め付けが背中への推進機関左右に搭載された二門の大口径爆裂滑腔砲二式《山鹿》の存在だ。

（これだけ重武装しても、ある程度機動性も確保されている………化け物だなこいつは。 しかし………一体誰が乗るんだこいつに？ あのソ連のお嬢ちゃんか？）

柿崎少佐は首を捻り、ずっと疑問に思っていた事を振り返った。この格納庫にブラッディ小隊の戦術機が運び込まれていたのを見ていたのだが、衛士と戦術機の数はどう考えても合わないのだ。

運び込まれたのは五機。だがブラッディ小隊に所属する衛士は三人。おかしすぎる。予備機として考えても、突貫整備の対象となっているのでそれは考えにくい。

「……分かんない」

そう眉を潜めた直後、

「だぁー！ー！綾崎いい！この「風神」の装備は突撃砲じゃないくて、突撃散弾砲だろうが！さっさとやり直せえー！」

「す、すすんませーん！！ 宮川、白石、散弾砲を運んで来い！ 他は装備を外すぞ！」

整備主任らしき眼鏡をかけた中年男性の咆哮。瞬く間に綾崎と呼ばれた整備班が大急ぎで、「雷神」の隣の戦術機ガントリーに群がった。

（そういえば、こいつも気になっていたな……）

柿崎少佐の視線が隣の整備ガントリーを捉える。「雷神」と同じような四脚の戦術機が収まっている。しかし重厚感が漂う「雷神」とは対照的に全体的に細く、軽量な外見だ。それに上半身が「撃震」ではなく、昨年に配備が開始された高等練習機SMF-TYPE 97「吹雪」が収まっている。

（「雷神」と「風神」。二機で一機……なるほどな。こっちは護衛機で機動性重視ってわけか）

五、六名の整備兵が機体に群がり、装備されていた突撃砲を外す準備を整える。その様子はぼんやりと眺めていたその時。

「大和 じゃねえ、少佐？ 何故強化装備を？」

基本的に大和は上の人間に対してはしっかりとした上下関係で接するが、下の人間に対してはかなり緩い。現に特技開に所属する開発技師や整備員の中には、君やさん付け、果てには呼び捨てにするものもいる（これには大和にも非がある）。だが流石にそれを外で、特に軍部内で行えば問題になるのは必至だ。故に暗黙のルールとして、外では整備主任瓜畑技術中尉を筆頭に、きちんとした上下関係で接する事になっている。

「ん……何て言うかオレの直感によるとそろそろ連中が来るんじゃないかな、と思つて」

斯衛軍の正式採用、正確には「武御雷」用に設計された、赤い衛士強化装備の着心地を確かめるように腕や足を軽く振っている大和。隣には同じく強化装備姿の唯依にエレオノールがいた。ちなみにエレオノールだけ、水色の特殊な衛士強化装備を纏い、頭には犬耳のようなヘアバンドを付けていた。

「連中……つてBETAですか？」

「うん。意外と当たるんだよ。オレの直感」

周りの整備員達が思わず手を停めて、大和達を凝視する。瓜畑も同様に困った様に眉を歪めていた

「（そんな馬鹿な……都合よく奴らが） 何っ？！」

あやふやな根拠で自信を持つて答えた大和に、流石の柿崎少佐も失笑を漏らした直後、基地内の警報が鳴り響いた。元々活発だった基地の動きが加速的に動き出していく。

「 ほおくらね」

どうだ参ったか。と、不敵な笑みを浮かべる大和。瓜畑以下整備員、柿崎少佐、そして半信半疑だった唯依ですらも、この状況に言葉を失った。唯一、エレオノールだけは純粹にぱちぱちと手を叩いて、大和を褒めていた。

二月十日一四三〇時 朝鮮半島南西部全羅南道絶対防衛線C
- 10ポイント

全ては順調にいくかと思われた。だがBETAは、その安堵を嘲笑うようにやってきた。

最初は小規模な侵攻だった。今日の作戦の為、一週間前に行った大規模な間引き作戦が功を奏したのだと、誰もが疑わなかった。防衛線に配備された部隊は、後方に位置する支援砲撃部隊の援護を持つて、たやすく接近するBETA共を目障りな肉片と変えた。

だが、事態は一変する。防衛線から一番近い鉄原ハイヴから突如として膨大な数のBETAが出現し、何かに引き寄せられるように防衛線へと侵攻。瞬く間に大規模な迎撃戦へと突入していく。

沸騰する無線。無数に放たれる砲火。爆音が大気を震わせ、爆発が大地を揺さぶる。

そして、その防衛線の一部を担う国連軍第十八戦術機大隊バームズ中隊は、既に六機の戦術機を失いつつも防衛任務を継続していた。前方からは仲間のF-15C「イーグル」を乗り越え踏み潰し前進するBETAの群。36mm劣化ウラン弾に120mm砲弾を惜しみなく撃ち込むが、敵の足が止まる気配はなかった。それもその筈だ。数が違い過ぎる。それが彼らの強み。そして人類が追い詰めら

れている原因だ。

「くそつたれ！ いい加減くたばれってんだ！」

バームズ中隊のガンスイーパー（強襲掃討）を担うエレネ・ロンメル少尉は、うつとしいとばかりに足元まで迫っていた戦車級の群に120mm散弾を放ち、大きく後方に下がった。

『バームズ3。残弾はあとのくらいだ？』

「バームズ3からバームズ1へ。36mmが三つ。120mmは今、使い切っちゃいました！ ついで言うと推進剤も三〇パーセント以下だよくそつたれ！」

隊長の言葉に、エレネはんは怒鳴る様に応答する。見かけは小柄で麗しい少女なのだが、口蓋から放たれる口調は酷く乱暴だ。

バームズ隊を率いる隊長は、エレネの乱暴な口調に気を悪くした様子はなく、苦々しい表情を浮かべた。

『くつ。支援砲撃があると言っても流石に限界か……』

十二機編成の中隊が今や六機。八機を割れば中隊として最低限の陣形すら組めない。急遽三機編成で隊を組み直したが、如何せん歯止めの火力が不足している。防衛線を守るところか、自分達の身を守るので精いっぱい状況だった。

『隊長。一度後方に下がって補給を！』

「バームズ6。後ろだ！」

エレーネの鋭い声。バームズ6の背後に現れた要撃級の姿。

『なっ ああああああああー?!』

要撃級の前腕がバームズ6の横腹に突き刺さり、吹き飛んだ。そして吹き飛んだ先が、運悪く数百匹の戦車級がひしめく海だった。それで終わり。バームズ6は十数匹の戦車級を潰したが、瞬く間に赤い海に呑みこまれていった。

『バームズ6?! ミリアリアあああ!!!』

『援軍はまだなのか?! 支援砲撃があってもこれじゃあ……
!?!』

『大尉。限界です。五機でこのエリアを守るのは不可能です!』

『 駄目だ。命令だ……後退は認められない』

『っ……ちくしょうちくしょうちくしょうおお!!! 本部は何を考えてんだ?! さっさと援軍を寄せよ! オレ達に死ねって言っのか!?!』

仲間の悲痛な叫び声。エレーネは、それをどこか他人事のように聞いていた。上がどういう考えを持って、防衛線に援軍を回さないのかは知らないし、興味はない。ただ自分は、自分がすべき事をするだけだ。

だが、確実に自分はまた一步、死への階段へと昇っている。この階段を上った先にどんな死が待っているのかは知らない。残酷な『

食事』か、それとも幸福な『プレス』か。

（状況は最悪……それでも……）

自分は死ぬわけにはいかない。どんな事をしてでも生き残って見せる。それがエレーネの矜持であり、責任だった。

じわじわと足元から滲んでくる恐怖を押し込め、気合を入れ直す。前方から迫ってくる要撃級に突撃砲の照準を合わせた直後
データリンクに反応が現れた。IFF（敵味方識別情報）によると
友軍反応。数は一つ。

「援軍……なわけないか」

命からがら逃げてきた戦術機だろうか。エレーネは何故か気になつて、前方の要撃級三匹に36mmをしこたま叩き込んだ後、その戦術機がいる方向にカメラを向けて
思わず息を飲んだ。

（何よあれは……）

エレーネは困惑する。彼女は戦術機に詳しい方ではなかったが、それでもその紅い人喰い鮫のような面構えの戦術機は見たことのない機種で、異形の姿をしていると言うことは理解できた。

エレーネが異形だと思った最大の理由は、そのアンバランスなシルエットだった。頭部や二の腕、太もも、腰部などは全体的に細く、そして絶妙とも言える優雅で力強い曲線を描いているのに対して、腕や脚、胴体は全体的に太く、それでいて無骨で直線的なラインを描いている。加えて背中に背負った二つのコンテナと大出力のスラスターにも目に付く。言ってしまうえば第一世代の重装甲、第

二世代の機動性を無理矢理合体させた機体のように見えた。

『な、何だよあの戦術機？　なんてむちゃくちゃな……どこの所属だ！？』

『分からないわ。少なくとも国連軍じゃない！』

『と、なれば日本か！？』

自分と同じ困惑する仲間の声。日本が米国と並び、優秀な戦術機開発国であり有名であるのはエレーネもよく知っているが、所詮は一機。出来る事はたかが知れている。エレーネは興味は失せたばかりに鼻を鳴らし、忌々しい敵に目を向けた直後、ぞわりと首筋に寒気が奔った。

（んっ……これって……！？）

よく知っている感覚だ。良い事も悪い事も含めて、エレーネ・ロンメルと言う一人の存在、人生において大きな出来事が起こる事を告げる前触れ。直感の赴くまま、再度エレーネはあの真紅の戦術機に視線を向け　その異形の姿をしている理由を知った。

『　　こちらブラッディ1。その小隊、下手に動くなよ。当たっても責任は持てんぞ』

ばくんと、背部のコンテナや両腕両足の側面に設置されたポッド、胴体上部が開く。そこには針鼠のように設置された無数の小型ミサイルが敷き詰められていた。

『ミサイルカーニバルだ！』

その光景は圧巻だった。全身から一〇〇発以上の近接マイクロミサイルが一齐に発射され、バームズ中隊を呑みこもうとしていたBETAを根こそぎ吹き飛ばした。その動きはまさに獵犬。一発一発にAIを搭載し、自動的に最も効果的な場所　密集している戦車級の群や突撃級の側面　に着弾するように設定されている為、その威力は絶大だった。

『おいおいおいおい！　何だよそれ！？　そんなのありか？　！』

『こ、言葉がないってまさにこの事ね……』

『何か……オレ達の「イーグル」が弱く見えるよな……』

所狭しといた筈のBETAが見事に吹き飛んでいる。完全に消えた訳ではないが、もはや脅威と言っ言葉は消えていた。

この一撃が、後世に長く語り継がれる戦いの幕開けだった。

第十話 光州作戦 はじまり（後書き）

今回登場した雷神と風神は、九拾九様の案を元にいんでぐらのオリジナル要素を込めて登場させてみました。

九拾九様、本当にありがとうございます。

次回には本編と、登場した戦術機や武器の解説、そして大和のチート能力のデータをのせていこうと思います。

……不定期更新でご迷惑をおかけしていると思いますが、これからもよろしく願いいたします。

第十一話 光州作戦・2（前書き）

……ふふふっ、止まらない。創作が止まらない。最速更新！

この調子でどんどん行くぜ！

今回、本編更新と同時に、「夕雲」と「撃狼」の機体解説、武器解説を載せました。本編後、読んでいただけると嬉しいです。

では、第十一話目、どうぞ。

第十一話 光州作戦・2

二月十日一四四五時 朝鮮半島南西部全羅南道絶対防衛線C -
10ポイント

（結果は満点ですよ。瓜畑さん……）

西園寺大和はにやりと口元に笑みを浮かべた。

真紅の大和専用「武御雷」に装着された瓜畑試作全身装着型追加装甲《咆雷》の威力は、予想以上の戦果を見せた。肩部から生える様に装着された左右のミサイルコンテナ、両腕、両脚の側面、胴体上部に設置されたミサイルポッドから放たれた近接攻撃用マイクロミサイル、計一九二発の飽和攻撃は瞬く間にBETAを効率よく殲滅してみせた。

（……いや、満点じゃなくて八十点かな）

役目を終えた近接攻撃用マイクロミサイル多連装ポッドをパージする為の操作を行いながら、思いなおした。確かに威力と性能は申し分ない。しかしこのマイクロミサイルは特殊な高性能炸薬とAIを使用して製造されている為、とてつもなくコストが掛かるのだ。92式多目的自立誘導弾システムに使用されているIR（赤外線）ミサイルの約三倍。いくら日本の経済が回り、ある程度資源に余裕を持っけていても、こんな高コストな兵器をぼんぼんと撃てる筈はない。

「改良の余地ありか……」

ずしんつと鈍い音と振動。機体ステータスで確認。ミサイルポッドは全て排除され、身軽になった。

（さて……とりあえずは崩れかけたこのポイントの防衛線を立て直せたが……BETAの侵攻が広範囲に渡っている。加えて、この大規模侵攻の中、一部の民間人は未だに非難を拒み、後方では混乱が発生して撤退行動が鈍くなっている……くっ、厳しいな）

統合情報戦術分配システム データリンクをフル活用して、大和は現状を確認して舌打ちをした。

準備期間が十分に合った為、撤退の為の交通路の確保や前線部隊を再配置する收容陣地、補給の用意も整っているが、その前線部隊を退かせる為の後方部隊の撤退行動が鈍くなつては、前線部隊はいつまでも危険に晒され続ける事になる。

（一番厄介なのは、避難を拒んでいる住民だ。大東亜連合の応援に行った部隊からは未だに悠長な話し合いが行われている状況……くっ……気持ちは分らないでもない。だが今の状況でもそんな事をしている軍にも民間人にも腹が立つてくるな……！）

真紅の「武御雷」が前進する。両手には97式突撃砲を携え、死骸の中を蠢く残敵に照準を合わせ、肉片を生み出していく。

「国連軍聞こえるか？　こちらはブラッディ1、日本帝国軍の西園寺大和少佐だ。そちらの指揮官と話がしたい」

『 サイオンジヤマト？ おいまさかあのサイオンジか！
？』

『「極東の奇跡」?! 正気か!? 何でそんな重要人物が最前線に出てくるんだよ!?』

『お前達黙っている! こちらは国連軍第十八戦術機大

隊バームズ中隊隊長ホールズ大尉です』

「ホールズ大尉。もうすぐここに戦術機大隊が到着する。到着次第、君達は後方に下がり、補給を開始してくれ」

『了解です。援軍が欲しいと思っていましたが、まさか貴官のような大物が来るとは想像もしていませんでしたよ』

「そうか? ならその大物は、大物らしく働くでしょう」

「武御雷」が突進する。狙うは仲間の死骸を乗り越えて前進する要撃級の集団。数は三〇。

『少佐?!』

ホールズ大尉の焦った声。しかし「武御雷」はぐんぐんと機体を加速させ、有効射程範囲に敵を捉えた瞬間、36mm劣化ウラン弾を最前列の二匹に叩き込み、敵集団の中枢に突入した。

『 凄え……………』

『技術屋だとばかり思っていたけど……………衛士としても優れていたのね……………』

それはマズルフラッシュ（銃口炎）が織り成す幻想的な光景だった。突撃砲を振りまわしながら発砲すると言うフレンドリーファイ

ヤー（味方誤射）の可能性が高い射撃だと言うのに、無駄弾は一切なく、全ての弾丸が吸い込まれる様に要撃級の肉を穿ち、地面に倒れ伏していく。時には、120mm砲口の下部に設置された銃剣で要撃級の一部を切り飛ばしているが、バームズ中隊の面々にはそれが東洋に伝わる神秘的な舞のように見えた。

（機体性能だけじゃない……ううん、確かに機体性能は「イーグル」に比べて格段に高いけど、何より凄いのはその性能を引き出しているあの少佐の腕だ……！）

エレネは生唾を飲み込んだ。国連の増援部隊として派遣され、様々な戦場を渡り歩き、様々な衛士を見てきた。が、目の前の紅の戦術機、そしてそれを操る衛士の腕は比べようがないほどの技量を持っている。各戦線でエースと呼ばれた衛士達ですら、彼の前では霞んでしまう。

（これが本当のエース……この人の元になら……）

私は自分の責任を果たせるかもしれない。エレネは確信した。

『西園寺少佐！』

後方から通信が入る。エレネがレーダーを確認すると、後方から戦術機部隊が近づいてきた。

「到着したようだ。バームズ中隊。ご苦労だった。ここの戦場は我々が受け持つ。早く撤退して、今度は君達が援軍としてここに来てくれ」

『了解しました。バームズ中隊各機、後方にて補給を終え次第、

この戦場に戻るぞ。私のケツに続け！」

『『『了解！！』』』

入れ替わるようにブラッディ小隊の四機、そしてストライク大隊が到着。ブラッディ小隊の四機が大和の側に付き、ストライク大隊が前面に出て残敵の掃討を行う。

『西園寺少佐！！ 何を考えていらつしやるのですか？！』

（うおっい？！ な、なんか滅茶苦茶怒ってるよ）

通信用ウィンドウが開き、怒り心頭の篁 唯依少尉が身を乗り出す勢いで怒鳴る。そのあまりの迫力に大和はたじろいだ。

「ゆ、じゃなかった篁少尉 な、何でそんな怒っていらつしやるのでしょうか？」

『怒るのは当たり前です。帝国の重要人物が護衛部隊を置いて、それも単独で最前線に先行するなど狂気の沙汰としか言いようがありません！ いいですか少佐！？ 少佐はご自分の立場を理解していらつしやるのですか？ 少佐は 』

「あ いや、でも、その オレが先行しなかったら防衛戦が破られたかも知れなかったし、結果オーライと言う事で」

『確かに結果的に見れば、少佐の行動は正しかったと思います。ですが、その行動は決して容認できるモノではなく』

『篁少尉。そのくらいにしておけ。西園寺少佐も十分に反省しているようだ。それに少佐が先行した結果、瓦解しようとしていた防衛線を持ち直す事が出来たのも事実だ』

『しかし柿崎少佐！？』

『軍では結果が優先される。だが西園寺少佐、貴官に何かあった場合、私にも責任を及ぶことを重々承知して行動して貰いたい』

「……………確かに軽率な行動だった。申し訳ない柿崎少佐」

『ああ。注意してくれ。それで当初の作戦要項と全く違う状況だが、どうするんだ？』

「……………少しお待ちを。ブラッディ1よりブラッディマム、塩川中尉、第二次防衛ライン前の埋設地雷の進捗状況と民間人の避難状況は？」

『ブラッディマムよりブラッディ1へ。現在、埋設地雷の進捗状況は八五パーセントを消化、民間人の避難は六五パーセントです』

「避難を拒んでいるエリアの住人の説得は完了したのか？」

『羅州市、務安郡は避難を開始。広域光州市、宝城郡は未だに説得を続けています』

「ちつ……………」

大和は忌々しげに舌打ちをした。宝城郡は脱出地点に近いからま

だいいとして、最前線にもっと近い広域光州市の住人が残っているのは厄介だ。これでは前線に配備されている部隊を容易に下げられない。

撤退戦は古来より最も難しい戦であると言われている。通常の攻める戦に比べて、どうしても主導権は攻める側に渡ってしまうし、味方の指揮も下がってしまう。さらに攻める戦以上に迅速な組織行動が要求されるからだ。

『ストライク1よりブラッディマムへ。強制退去は行っていないのか？』

『行われていません。帝国軍が大東亜連合に強制退去を提案したところ、却下されたようです』

『何を悠長なこと……！ 第一波、第二波は防げたとしても、支援にも限りがあるんだぞ』

事実、後方に位置する戦車やMLRS、「撃狼」で構成された支援砲撃部隊の弾薬は半分近くになっている。第二波はかううじて防げるだろうが、第三波になってくればおそらくは防ぎきれない。加えてその支援砲撃部隊の撤退時間も稼ぐ必要がある。時間はもうあまりない。

「塩川中尉。帝国軍の大陸派遣部隊の本体は今、どの辺りにいるんだ？」

『霊岩郡の国連司令部の防衛及び撤退準備に行っています。一部の部隊が防衛ラインBエリアで交戦中です』

（と、言うことはまだ彩峰中将は動いていない。増援部隊を送っているから動く可能性が低いが、前線が硬直すれば最前線に出てくる可能性があるな。やはり鍵を握るのは広域光州市の住人か．．．．）

地図を確認しながら、大和は自分たちが取るべき行動を逡巡する。

（D、Eエリアは国連軍に加えて中華統一戦線の部隊も配備されているから、防衛ラインはかろうじて保てるし、下がる事も出来る。問題なのは容易に下がれないA、B、Cエリアの部隊だな。AとBは黄海に展開している国連と日本帝国艦隊の支援が受けられるが、光線級が出てくれば瓦解する可能性が高い。こちらの切り札である電磁投射砲が使えるのはおそらく二回……なるほど、こいつは手厳しいな）

冷や汗がたらりと漏れる。チート能力、指揮官レベルAまで上げたから冷静に判断できる戦況。手札が足りない。

（こいつはマジでフレイヤの開発を考えた方がいいかもな。BE TAの物量の恐ろしさ、改めて身に染みるぜ）

戦術兵器では焼け石に水。戦略兵器を使ってようやく退かせる事が出来る圧倒的な数の暴力。数は力なりとはよく言ったものだ。

「柿崎少佐。補給に戻った国連軍が戻るまでこの戦域を死守します。国連軍が到着次第、戦況に応じて我々が機動打撃部隊となってBETAの侵攻を遅らせます」

『我々は一向に構わない。だが、本部が納得してくれるか？』

柿崎少佐が難しい顔で呻いた。何しろ、大和は日本帝国の最重要人物。本部としてはさっさと後方に下げて、その安全を確保したい所だ。

「納得させます。出なければここに来た意味がない」

この戦いは全ての始まりだ。ここで歴史を大きく変え、人を救えなければ世界を救うなんて事は出来ない。大和の決意は固かった。

『……………気になっていたのだが、西園寺少佐は後方で指揮するより前線部隊で指揮するのが好きなようだな……………いや、しつくりくると言った方が適切か』

「好きとか嫌いとかじゃないです。必要だからするのです。

将が動かなければ、部下は付いてこないでしょう?」

どこか挑発的な笑みを浮かべ、大和は言った。

二月十日一五〇五時 朝鮮半島南西部全羅南道広域光州市光山区

「もう限界だ。これ以上、前線部隊に負担を掛けさせる訳にはいかない! 強制退避させるべきだ!」

「それは承服しかねる。彼らはここで果てる覚悟がある。我々が強制退去の為の行動を起こせば、その場で自決する恐れがある!

頼む。もう少し時間をくれ！　もう少しで説得できるんだ！」

人員輸送車両の傍で言い合う帝国軍人と大東亜連合軍の軍人。その背後にはそれぞれの部下が控え、ある意味では一触即発の空気が流れている。

「既に時間は十分に与えた筈だ。いいか、ここから数十キロ先にはBETAのくそつたれが近づいてきている！　これ以上、ここでもたましていれば、民間人を輸送車に乗せたとしても追い付かれる可能性がある！　貴官らは前線部隊も含めて、我々を危険にさらしているのだぞ！」

「それは分かっている！　こうして帝国が民間人の避難の為に増援部隊を送ってくれた事には感謝している。だが、ここで彼らに集団自決などされれば、我々の苦労が無駄に終わる。我々は一生、後悔してしまう！」

「その後悔も、生きていればの話だろう！？　私は指揮官として任務も重要だが、部下の命も背負っている。それは貴官も同じはずだ！」

話し合いは常に平行線だった。何としてでも民間人を避難させた大東亜連合軍人と、任務を優先したい帝国軍人。相反する意見は決し混じり合う事はなく、この不毛な口論は既に二時間以上に渡っている。加えて、両軍の関係は険悪なモノになっている。

ぶつかり合う二つの意思。だがそんな事はお構いなしに、BETAはひたすら前進してくる。

タイムリミットは刻々と近づいてきていた。

二月十日二五一 時 朝鮮半島南西部全羅南道絶対防衛線B
05ポイント

「怯むな。帝国軍人としての意地を見せよ！ 我らの背後には無辜の人々がいることを忘れるな！」

日本帝国大陸派遣部隊第七戦術機大隊を率いる沙霧尚哉大尉は、このエリアに展開している全帝国部隊に向けて通信した。沙霧自身も最前線で、MBF-TYPE95「夕雲」を操り、BETAを葬り去って行く。

「「夕雲」よ。もうしばし無理をして貰うぞ！」

沙霧の言葉に答える様に、「夕雲」の跳躍ユニットが膨大な推力を吐き出す。瞬く間に要撃級との距離を詰めた沙霧の「夕雲」が、両手に持った74式近接戦闘長刀を一閃、要撃級二匹を斬り飛ばした。

それは傍から見れば実に無駄のない、そして洗練された動きだった。長くこの大陸で沙霧と共に戦い続けた「夕雲」。SASに蓄積された経験量は凄まじく、今や沙霧のイメージ以上に適切な動きをしてくれる。そのお陰で返す刀による二撃目の動きもスムーズだった。

（まったく……何度動かしても、素晴らしい戦術機だ。西園寺大和。天は我が帝国に御使いを下さったか！）

既に何度目か分からない感謝の言葉を呟き、沙霧が敵陣に突っ込む。長刀が舞う度に要撃級が斬り飛ばされ、戦車級が赤い染みへと変化する。その働きは一騎当千と言ってもいい程の戦果を上げている。

『大尉に続け！ 今の我らに下がる脚は必要ない！』

沙霧の部下達も、狭霧に感化される様に着実に戦果を上げて行く。だが決して無理はせず、隊列を崩さない。沙霧の単騎突進はエースと呼ばれる者達にこそ許される所業。普通の衛士が単独でBETAに立ち向かうのは自殺行為だ。

『こちら第三二支援砲撃部隊ミールズ1。これで撃ち止めです。補給の為、しばらく支援砲撃が出来なくなる。沙霧大尉。最期の命令をどうぞ！』

「ミールズ1了解した。我々は出来る限り、奴らを寄せる。支援砲撃ポイントは03 - 08エリアに頼む」

『了解しました。準備に五分かかりますが問題ありませんか？』

「問題ない。各機、聞こえたな。第二中隊は陣を死守、第三中隊は左翼に広がり奴らを足止めしろ。第一中隊は私と共に奴らの方向を変えるぞ！」

『『『了解！』』』

「不知火」の外見をさらに鋭くさせたような「夕雲」が先陣に立ち、部下の「不知火」が続く。素早い部隊行動で突撃級の側面や後方に回り込み、120mm弾を撃ち込み、要撃級の前腕が機体を捉える前にその肉を切り裂く。軍隊蟻のように押し寄せる戦車級には36mmの洗礼を浴びせた。

「大型種、中型種を出来る限り削るのだ！ 小型種は多少見逃してもかまわん。拠点陣地を死守する部隊に任せろ！」

右手に長刀、左手に突撃砲を構え、沙霧は矢継ぎ早に命令する。沙霧を頭に、一個の生物の様に働くこの部隊の攻撃力は目を見張るモノがあった。優れた指揮能力と、その指揮官に全幅の信頼を置く部下達。その二つがあつてこそ可能な結果だった。

「おおおっ……！」

沙霧が吠える。歯を食いしばる要撃級の頭を斬り飛ばし、無数に近寄ってくる戦車級の波に36mm弾を撃ち込み、大きく後方に下がる。

（そろそろ限界か……）

妙な手ごたえと力づくで引き裂かれた様な切断面。長刀に切れ味が無くなってきた証拠だった。本来なら投棄したいところだが、この長刀を失えば近接戦闘の武器は短刀のみになってしまう。

（もう少し持ってくれ　　）

『 支援砲撃準備完了。ポイント03-08、着弾三〇秒前。』

近接部隊は注意せよ。これで最期だ。景気よくいくぞ！」

「各機聞こえたな。全機後退射撃を継続しつつ、下がるぞ！」

『弾着一〇秒前……七、六、五、四、三』

「来るぞ。各機弾着中も小型種の接近に留意せよ」

『弾着、今！』

無数の何かが空気を切り裂く音。そして、砲火が大地を蹂躪する。オーバーキルと言うほどの集中火力が大地もろとも、BETAを文字通り粉々に粉碎する。大型種、中型種は何だったのか判別不可能な巨大な肉の塊へと変貌し、小型種はさらに細かい肉片となり、爆炎に焼かれ、焼却されていく。

着弾の振動は、戦術機を伝わって沙霧の体を揺らす。慣れ親しんだ揺れと爆発の音。それが対BETA戦では一種の揺り籠だった。沙霧が緊張の糸を僅かに緩めた直後。

『沙霧大尉！ 敵BETA群第三波の接近を関知。数は旅団規模と推測されます！』

その言葉に沙霧以下、精鋭ぞろいの部下達も僅かに息を呑んだ。

「くっ……あれだけ大規模間引きを行っただけなのにこの数……まさかユーラシアに存在する全てのBETAがこちらに向かってきているのか?! ミールズ1。再支援砲撃可能までどのくらいかかる!?!」

『早くても十五分は必要です！』

「十分で完了しろ。それまでは戦術機部隊と機甲部隊で持たせる」

『了解！』

無茶な命令である事は分かっている。だが圧倒的な数を武器とするBETAの群に、支援砲撃なしの戦術機部隊では何れ呑みこまれていくのは明白だ。

『沙霧大尉……』

暗い副官の声。その声は何を語っているのか、沙霧には痛いほど理解出来た。

「分かっている。泣き言は後回しにしろ。各機、一度後退し、弾薬と推進剤の補給を行う。急げ。奴らは待ってはくれないぞ！」

弾薬と推進剤は十分に用意されている。自分も含めて部下の機体も未だ問題なく稼働しているが、それを操る衛士の疲労は確実に蓄積されていく。

（このままでは何れ追い詰められてしまう……！）

ぎりつと歯を噛締めた沙霧はペダルを踏み込み、機体を補給地点へと急がせた。

二月十日二五二〇時 朝鮮半島南西部全羅南道絶対防衛線C
-10ポイント

「やれやれ……本当に同じ衛士かあれ……」

柿崎少佐。自分も同じ気持ちですよ……」

心底呆れた口調の柿崎少佐に、自分も同感だと言われるばかりに答える副官。彼らの網膜投影には先程からあり得ない光景が広がっていた。

真紅の「武御雷」が戦場に舞う。その両手には戦術機の近接格闘武器としてはあまりにも巨大な長柄武器　戦斧と言うべき武器が握られていた。両側に大きさの違う高周波振動発生装置を内蔵した三日月状の刃を持ち、柄の先には鎌のような刃が付いている。その威圧感と迫力は長刀の比ではない。が、武器は長く大きいほどに扱いは難しくなるのだが。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアーーーーー」

!!!!

真紅の「武御雷」はそれをいとも簡単に使いこなし、その広い間合いを最大限利用して、次々とBETAを両断していく。一閃する度に突撃級が硬い外殻ごと真横からスライスされ、振り下ろされた一撃は要撃級の体を真つ二つに断つ。さらに要塞級の素早い触手を紙一重でかわし、跳躍ユニットの推力を合わせた斬り上げは、要塞

級の頭の部分を裂いた。

試製対要塞級近接格闘戦斧と名付けられた武器は、次々とその切れ味と破壊力を持つてBETAをスライスしていく。その有様は赤い暴風と言つべき光景だった。

『柿崎少佐……オレ達は西園寺少佐の護衛の為に、ここにいるんでよね……？』

「言つな……」

確認するように言つた部下の言葉に、頭を抱えなくなった柿崎少佐。援護も護衛も必要なかった。むしろ彼が先陣に立つて、敵を次々と葬つてくれるため、ストライク大隊の面々は非常に都合な状況にあった。全面に対して非常に強固な突撃級や強靱な生命力と巨躯である要塞級を集中的に叩いてくれるおかげで、特に陣形を乱さずに迎撃を行えるからだ。

『あつ、要撃級の花火だ』

『ひいふうみいよお……九つだな。おお、新記録樹立だ』

次々と斬り飛ばされ、空を舞う肉片を暢気に数える隊員。最前線だと言うのに、僅かながら弛緩した空気が流れている。それも当然の事。眼の前の一方的な殺戮は興奮を通り過ぎ、呆れる域に達しているからだ。

『篁少尉！ エレオノール！ そつちに戦車級の団体様が言ったぞ。丁重にもてなしてやれ！』

『了解!』

唯依は声を張り上げ答え、「風神」式号機を操るエレオノールは頷いて了承する。

『柿崎少佐。援護は……』

『必要ないだろう』

『ですよね……くわばらくわばら』

何せ戦車級の群が向かった先には、一機で二個中隊規模の弾幕を展開出来る「雷神」と戦術機の全高に匹敵する長砲身の機関砲、大口径97式支援重機関砲を構えた山吹色の「武御雷」が待っている。

『残念だったな。ここは通行止めだ。他を当たれ』

初めての实战とは思えぬ強い口調の唯依。それは唯依がBETAに送る死刑宣告だった。

砲火が放たれる。

36mm弾よりも重く響き渡る発砲音。毎分約四〇〇発で放たれる60mm劣化ウラン弾は、オーバーキルと言う言葉通りの威力を発揮し、戦車級の群を容赦なく吹き飛ばしていく。放たれる一発が複数の戦車級の肉を穿ち、物言わぬ肉片へと変えていくが、彼らにはまだ尚恐ろしい鉄の洗礼が待っている。

「雷神」の両腕が敵を捉える。五つの砲身がゆっくりと回転を始め、既定の回転速度に達した瞬間、鉄の洗礼は始まった。

『うはあ……』

隊員の呟きが漏れる。

突撃砲とは比べられない発射音と圧倒的な連射速度は、大軍と押し寄せていた戦車級の群を一切近づける事無く、その方向の先にいる戦車級をさらに細かなミンチへと変えていく。その火力たるや、とても戦術機一機が行っているとは思えないほどの威力だった。

『すげえな……』

『確かにな。「雷神」を百機ぐらい並べればさぞ凄まじいモノになるだろうな……だが……』

『ああ……言いたい事は分かっているぜ。愛しの我が相棒よ』

ストライク大隊の突撃前衛部隊が視線を前へ。

『はい。ご苦労さまでしたー！』

真紅の「武御雷」が要塞級の巨体を這うように飛び越える。同時に戦斧を一閃。竹を縦に割る様に、要塞級の巨体が左右に裂かれた。

『……あれを見ているとなあ……』

『……ああ。重機関砲も「雷神」も霞んで見えちまう……』

嬉々とした感じで動き回り、次々とBETAの刺身を作っていく「武御雷」の姿に何故かため息が漏れる面々。

（西園寺少佐の操縦技術は確かに常軌を逸している。だがそれ以上には凄いのは　　）

『ブラッディ1より第三中隊の面々へ。そつちに要撃級と戦車級、兵士級のミックスが行った。掃討を頼めるか？』

『了解。仕事が少なくて退屈していた所ですよ。もう少し獲物を頂けるとありがたいんですがね！』

『では要塞級もプレゼントしよう。自分からオーダーをしたんだ。間違ってもやられてくれるなよ？』

『ははっ。了解です。各機聞こえたな。仕事の時間だ。西園寺少佐の様に派手ではなく、地味に確実に蹴散らすぞ！』

『『『了解！』『』』

恐れはなく、緊張に支配された声も無い。それどころか薄笑みを浮かべている衛士もいる。

（あれだけ激しい戦闘機動を取りながら、常に戦域のチェックやBETAの陣形、そして拠点陣地や我々の様子を確認している事だ）

まったく、技術屋としても衛士としても優れている上、指揮官適正も高いと来ている。もう何でもありだな、と柿崎少佐は肩をすくめた。

と、その時。

『ブラッディマムよりブラッディ小隊及びストライク大隊に緊急連絡！』

『ブラッディよりブラッディマムへ。どうした？！』

『Aエリアに多数の光線級が出現。防衛線が突破されました！
DエリアとEエリアに第四波、第五波の大規模BETA群が侵攻。
第二次防衛ラインまで後退を開始しました！』

『「っ？！」』

『ふざけんな！ まだ来るのかよ！？』

『冗談じゃねえ！ 何だよこの数は！？ 次から次に来るのは分かってたが、今回の侵攻は異常だぜ？！』

『西園寺少佐！ このままでは？！』

五つあるエリアの内、三つが突破された。これではBエリアとCエリアが突出してしまい、最低でも二方面から侵攻を受ける事になる。

『 篁少尉。重機関砲を投棄。そろそろ一枚目の切り札を使うぞ』

第十二話 光州作戦3（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありませんでした。

なんかいろいろ考えていたら、頭の中がぐちゃぐちゃになってしま
ってうまく書けなくなっていました。本当に申し訳ありません！
これからは一週間の目安に更新していけるよう、目標とします！
本編ではなく機体解説などで更新することもあります、その時は
多めに見てください。

では、第十二話目。光州作戦編3。どうぞ。

第十二話 光州作戰3

二月十日一五二五時 朝鮮半島南西部全羅南道絶対防衛線D

- 04エリア

防衛線に配置された中華統一戦線のある衛士は、目の前に広がる光景を限界まで溜め込まれた鉄砲水だと思った。

本当に一瞬だった。鉄砲水がありとあらゆるモノを一瞬で押し流すように戦場は塗り替えられた。前方をうようよと群がっていたBETA共を順調に蹴散らし、死骸のほうが多くなっただくらいだろうか。張り詰めていた戦場の空気が、僅かに弛緩して来た事を肌で感じた刹那、眼の前と言わず至る所で地面が火山の様に噴火した。奴らの地中侵攻だ。それも彼が見た事も聞いた事のない規模で現れたのだ。

『H.Q. 支援砲撃を寄越せ！ 早くしろ！ このままじゃあ全滅だぞー！』

普段は冷静で穏やかな大隊長の声とは思えぬ、激しい檄が通信から聞こえた。

敵をレティクルに捉え、突撃砲を撃つ。目の前の戦車級が爆ぜる。だが意味はない。次から次へと奴らは自分を殺そうと迫ってくる。武器ステータスの残弾が目まぐるしく減っていく。それは己に対する命のカウントダウンのようにも見えた。

彼は数年前、衛士の最初の関門である「死の八分」を、体中の穴からありとあらゆるモノを垂れ流してその関門を突破した。その時

の事は今も覚えていない。死に物狂いで機体を動かして、死に物狂いに戦って、死に物狂いに逃げ回って勝ち取った実戦に於ける最初の勝利であり、それを自覚したときの安堵は今も忘れられない。

衛士の世界では「死の八分」を無事越えることが出来れば、長生き出来るのが通説だった。いや通説ではなくそれは真実だろう。訓練学校ではどちらかと言えば落ち零れだった自分が、数年に渡ってBETAと戦ってこれたのが何よりの証だ。優秀だった班長は「死の八分」を越えられず死んでしまった。

『こちらH.Q. この状況では支援砲撃は許可できない。繰り返す。支援砲撃は許可できない』

『ふざけるな！ この状況下を自力で後退しろと言うのか！？ 貴様の目は節穴か！？』

レーダーを見る。嫌な光景が広がっている。味方を示す複数の青い光点。十秒もあれば数えられる。だが敵を示す赤い光点は十秒では到底数え切れない。おそらく一時間の猶予があつたとしても数えきれない数だ。加えてその赤い光点は、青い光点を逃がさないといばかりに完全包囲している。子供が見てもわかる。逃げ場はない。

『た、隊長おおー！！！！』

振動と轟音。そして断末魔。通信越しに聞こえた衛士がどうなったのか、容易に想像が付いた。

『くっ！？ リーレンフ、今助けてやるから突撃砲を撃つな！』

『く、来るな来るんじゃない！ 嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だあああ

ああああああ！！！！！！」

『きゃあああ！？』

絶望が更なる絶望を呼んだ。戦車級に取り付かれていた味方機が錯乱し、乱射していた突撃砲の弾丸が運悪く、カバーに入っていた味方機を誤射してしまった。背中から36mmを受けた「殲撃10型」が大きく体勢を崩し、前のめりに倒れた。そして高速で接近していた第二陣の突撃級集団に弾かれ、押し潰された。悲鳴はなかった。倒れた時に気を失ったのかどうかは分からないが、ある意味では幸福な死に方だった。

『つつつつくそおおおー！！！！ てめえらさえないなければ
てめえらさえないなければ、俺たちはあああー！！！！！！！！！！』

『リーレン5突出するな！ 一人で勝てる相手ではないぞ！！』

『死ねえ！ さつさと死にやがれえええ！！！！！！』

『もうやだあ……………もうやだああああ！！！！』

『こちらアールロン3。隊長がやられた至急応援を求む。繰り返す
至急応援を……………！！』

絶望と憤怒、痛哭に支配される戦場。ここには救いの手を差し出してくれる神はおらず、ただ何の理由を持って自分たちを殺そうとするのか分からない異形の化け物達による死しか存在しない。何て理不尽で最悪な場所なんだと、彼は舌打ちした。

『しよ、小隊長！ わ、我々も早く撤退を……………！！！！！！』

「……そうだな」

彼は酷く冷めた声で答えた。

通信ウィンドウに映る徴兵されたばかりの十代半ばの少年の顔。その顔は、必死になって込み上げてくる恐怖を殺して、生き残ろうとする意思を感じた。死ぬには早すぎる。まだ友人とこの世界の絶望に気づかない振りをして、暢気に遊んでいてもいいはずだ。

だが少年は衛士となって、戦場に立つてしまった。そして状況は静かに、自分と少年の残酷な運命をひしひしと伝えていた。

「各機。後ろを振り返るな。私に続け。道は私が切り開く」

その言葉に気丈に振舞っていた部下たちの顔に一抹の安堵が浮かぶ。自分を信頼してくれているのがよく分かる。だからこそ辛かった。虚像ともいえる希望を抱かしてしまった事実が。

「行くぞ！」

四機の小隊が後方の防衛陣地を目指し、虐殺と暴虐の海へと進入する。それが彼らの最後の姿であり、見送った者はおるか、語り継ぐ者もいなかった。

同日同時刻 朝鮮半島南西部全羅南道絶対防衛線C - 20工
リア

「97式支援重機関砲パージ。98式電磁投射砲発射準備」

心臓の鼓動が高まって行くのを感じる。唯依は静かに深呼吸を繰り返し、帝国国防省が威信を掛けて開発し、必ず次世代戦術機兵装の一角を成すであろう兵器のステータスを見つめた。

唯依の「武御雷」に搭載されたSASは命令を受諾し、持っていた97式支援重機関砲を手放す。そして背中の中専用ラックから戦術機の全高に匹敵する長砲身の大口径砲を両手に構えた。

通常の砲弾は、火薬が燃焼する時に発生するガス圧によって射出されるものだが、この98式電磁投射砲は文字通り、電力によって磁場を発生させ、それがもたらすローレンツ力によって砲弾を加速、発射する仕組みである。その威力は火薬式では到底実現出来ない貫通力と連射力を持ち、現在採用されている戦術機の射撃武器とはまさに一線を画す性能を持っている。

（また……あの光景を見れるのか）

唯依は生唾を飲み込み、緊張感と共に込み上げる高揚感に酔いしれた。

日本国内で行われた試射試験に唯依は同行し、この98式電磁投射砲の威力を見ている。強固な突撃級の装甲殻を粘土細工のように撃ち抜き、三重に重ねた超硬スチール合金製の装甲板すらも貫通させた。今思い出しても震えが止まらない。それは恐怖ではなく歓喜間違いなくあの瞬間、人類の勝利と言う文字を垣間見た。

『ブラッディ1より各機へ。ブラッディ2を中心にフォーメーシ

ヨンを展開。発射態勢と舞台が整うまでブラッディ2の保護を最優先」

『『『了解!!』』』

『西園寺少佐。死骸が多い。ミサイル攻撃で吹き飛ばし、射線を確保した方がいいのではないですか?』

『必要ありませんよ柿崎少佐。纏めて吹き飛ばします。あの武器の前に死骸などただの小石です』

『ふっ。期待させて貰いますよ西園寺少佐』

『では、期待以上の光景をご覧にいきます。”極東の奇跡”が太鼓判を押してますからね。こいつは』

指揮官同士のそんなやりとりを聞きながらも、唯依は武器ステータスを確認。準備は整った。

「ブラッディ2よりブラッディ1へ。準備完了。いつでも発射できます」

『ちょうど連中もこちらの射程範囲に入ってくれたな。いやはや、後退して正解だな。地中侵攻の連中も合わせてまさに選り取り見取り……照準を付ける必要はない。撃てば当たるな』

数えるのが馬鹿馬鹿しいほどの数だ。だがそれでも大和の表情からは恐れや不安は何もない。むしろもつと来てくれた方が好都合だった。

「はい。少佐の後退のタイミングは抜群でした。もし少しでも遅ければ私達は敵の地中侵攻を受け、包囲されていたと思います」

『オレの直感は大当たりになるだろう？』

「はい。少佐」

『よろしい。では篁少尉』

ふふんつと自慢げに話していた大和が眼を閉じる。そして眼を上げた次の瞬間には、唯依は全身を駆け抜ける何かを感じた。通信用ウィンドウに映る大和の顔は、静かな笑みを称えながらも容赦ない残虐性と獰猛性を兼ね備えた笑みだったからだ。

ぞつとする。あの笑みが自分に向けられてなくて本当にほつとする。たぶん向けられたものは容赦なく抹殺されるだろう。言うならば必殺を誓った笑みと言うべきか。

『命令はただ一つ。見敵必殺だ』

「了解しました。西園寺少佐」

篁 唯依は気付いていない。自分も尊敬する上司と同じ笑みを浮かべていた事は。

その光景は、エレネ・ロンメルにとって生涯忘れる事のない光景であり、また人類の生存を示す明朝のように見えた。

「綺麗……」

弾薬や推進剤の補給を終え、彼女が所属するバームズ中隊が戦場に帰った直後に目撃した。

山吹色の戦術機が構えていた、長砲身の大型砲から放たれた大気を切り裂く光弾。その数は突撃砲の比ではなく猛烈な勢いで砲口から放たれ、敵を種別なく撃ち抜き、吹き飛ばしていく。圧倒的な貫通力と衝撃力。十数匹のBETAを意図も容易く撃ち抜き、貫通できなくなってもその衝撃力は健在で、最期に直撃した要撃級の肉体が木の葉のように吹っ飛んだ。

山吹色の戦術機が射線軸をゆっくりと水平に滑らせる。放たれ続ける光弾は、その行く末にある全ての存在は許さないとばかりに蹴散らし、どこを見ても人類の敵たるBETAしかいなかった戦場が瞬く間に塗り替えられていく。

誰もが声を出せず、ただその神々しく、そして徐々に湧き上がってくる高揚感と歓喜に全身が震え、口元に笑みを浮かんでくる。

砲撃時間はおそらく三十秒となかっただろう。遠雷が止み、抹殺の光弾が消える。だがその三十秒未満の間に葬った敵の数はおそらく数千は下らないだろう。もしかすると万に匹敵するかもしれない。正面から津波となって迫っていた敵の群はなく、ただどこまでも死骸が続く無残で凄惨な光景が広がっていた。

『 うっ…… うおおおおおおおおおおお！
！！！！！！』

しばしの沈黙の後、その光景を見ていた衛士の一人が歓喜の声を

上げた。それは瞬く間にその光景を目撃していた全ての兵士達の咆哮へと変わった。

『すげえよすげえよ!! 何かよく分からないけどすげえよ!』

『ざまあみやがれクソ化け物!!』

『くそつたれ! ちくつしよう! くそつたれ! 今なら帝国軍人に熱いベーズをしてやるぜ!』

『勝てる……これなら勝てる!!』

『帝国軍万歳!!』

オープンチャンネルが瞬く間に沸騰する。その声を聞いて、唯依も思わず満面の笑みを浮かべ、大和は一つの希望を見せる事が出来た事に微笑んだ。

だが暢気に歓声を聞き、答えている訳にはいかない。他の防衛ラインは後退し、こちらで第二次防衛ラインまで後退する必要がある。推進剤に加えて、弾薬も心許ない。

「こちら帝国軍ブラッディ小隊長西園寺大和少佐だ。Cエリアに展開している全部隊へ。諸君、歓喜に震えているのは分かるが、司令部より後退の命令が来ている。今は一目散に第二次防衛ラインまで後退しよう。何、安心したまえ。今の光景はもう一度見られる」

大和の命令は瞬く間に各部隊へと広まり、司令部の命令も相まって防御陣地に展開していた機甲部隊や支援砲撃部隊の車列が後方へと下がって行く。

「ご苦労さま箕少尉。大型弾倉を投棄し、後退しよう」

『了解しました！』

「柿崎少佐。期待以上だったでしょう？」

『ああ。西園寺少佐。君が救世主に見えるよ』

「救世主……ですか。なるほど、悪くありませんね」

その為に自分はこの世界に来たのだ。大和は部隊と共に第二次防衛ラインを目指した。

二月十日一五四五時 朝鮮半島南西部全羅南道第二次絶対防

衛線 補給陣地

電磁投射砲の威力は大和の想定通りの威力を見せてくれた。お陰でCエリアからの敵の侵攻に時間を稼ぐ事が出来、支援砲撃部隊や機甲部隊をBエリアやDエリアに一時的に回す事が可能となり、結果、多くの部隊の後退に貢献する事が出来た。

「とりあえず切り札は成功だな……」

大和は広域戦域図を見ながら、次の手を考える。その間にも大和

の「武御雷」は補給をてきぱきとこなしていく。SASのお陰だ。命令さえしておけば勝手にやってくれる。自分で開発しておいて何だが、実に便利な奴だと思いながら大和は頭の中でシュミレートを行う。

と言っても一介の前線指揮官の立場にある大和が実現できる勝利など、所詮は戦術的勝利が限界だ。だがその戦術的勝利が、戦略的勝利の足がかりになってくれればいい。例えば、さっきの電磁投射砲の発射がいい例だ。その光景を目撃した部隊の士気は恐ろしいほど高まっている。

「何はともあれ、やっぱり一番のネックは光州広域市の住民だな」

第二次防衛ラインは光州広域市の北区に存在する。避難を拒む住民が立て籠るエリアとは目と鼻の先だ。これ以上の後退は、住民が避難してからだ。

「ブラッディ1よりブラッディマムへ。塩川中尉、聞こえるか？」

「はい。聞こえています少佐」

「住民の避難状況は？」

「依然、進展を見せていません。交渉は続いてはいるようですが……」

「……悠長なことだ」

ため息交じりに呟く。

『まったくです。司令部の方でも一部の将校が怒り狂っているようです』

「だろうね。他のエリアの状況を教えてくれ」

『はつ。Aエリアは黄海に展開していた艦隊の援護もあって何とか持ち直しました。ですがDエリア、Eエリアは時間の問題かと思われます。防衛線の再構築の為に、司令部に展開していた最期の予備戦力である在韓国軍と帝国派遣部隊の一部が先程出撃しました』

「彩峰中将貴下の部隊だな。司令部の防衛は問題ないんだな？」

『はい。問題ないと思われます。司令部の方でも退避が始まりました』

「もう猶予は残されていないな。分かった。何か変化があったらすぐに連絡してくれ」

『了解』

大和は再度、戦域図に視線を向ける。状況は悪化の一途を辿っている。98式電磁投射砲は確かに戦術的勝利を約束できる優れた兵器だが、使えるのはあと一回。エレオノールが操る「風神」二号機が背負っている大型弾倉が最期だ。他の切り札も使いどころを間違えれば、状況を打開する事は出来ないのだろう。冷静かつ慎重にタイミングを見極めないといけない。

「ブラッディ1よりブラッディ2へ」

『こちらブラッディ2。何でしょうか西園寺少佐?』

通信ウィンドウに唯依が映る。

「電磁投射砲に異常はないか?」

『ありません。現在二度目の自己診断を行っていますが、問題ありません』

「よし。弾倉の搭載を急いでくれ」

『了解』

次に大和はデータリンクを利用して、ブラッディ03から05のステータス一覧を呼び出した。

「（弾薬と推進剤は元通り。損傷は「風神」一号機だけが、戦闘には何ら支障はなし）
ブラッディ1よりブラッディ3へ。
エレオノール」

『……』

なに? と言わんばかりに小さく首をかしげるエレオノール。相変わらず心をくすぐってくれる仕草だ。絶対に死なさないぞと大和は再度、心に誓う。

「どこか痛いところはないか? 頭痛とかないか?」

エレオノールは子犬の様にふるふると首を振った。確かに表情を見る限り、時たま訓練の時に現れていた頭痛に苦しむ様子はない。

システムに慣れてきた証拠だろう。

「そうか。もし頭痛を感じたらすぐに言ってくれよ?」

エレオノールが僅かに考える仕草を見せ、再びふるふると首を振った。

「……まだ役に立っていないか思っているのか? 馬鹿、エレオノールは十分にオレを助けてくれているよ。むしろエレオノールがいないと、困っている所だ」

ほんと? とこちらを窺う仕草を見せる。大和は心の中で、その愛らしい仕草に再度悶えつつも、表情には出さず、微笑む。

「ああ。本当だ。この任務が終わったら少し休暇を取って、一緒に家に帰ろう。朝陽とも会いたいだろう?」

その言葉にエレオノールの顔に満面の笑みが広がる。

始めて彼女に会った時、実に感情に乏しく人形のようなだった。何を言っても表情に変化はなく、反応も薄い。どんな環境で今まで過ごしてきたのか何となく察した大和は、軍と両親の了解を得て自宅に連れ帰り、氷結した心を溶かそうと努めた。

どのような方法を持ってエレオノールの心を溶かしたかと言うと、色々長くになるので省く。ともかく今では朝陽とは双子の姉妹の様な関係を築き、母親はもう一人の子どもが出来たと喜び、父親は陰で大和同様に悶えている。なお、朝陽と同じくエレオノールにも「夫となるべき男の最低条件として、生身と戦術機戦闘に置いて、自分と大和を倒さぬ限り認めない」という鉄の掟が結ばれている。

「よし。じゃああと少しだ。頑張ろうな」

『……！』

大きく頷くエレオノール。喜びを隠そうともしないその笑顔は、天使ですら籠絡されてしまうほど愛らしさだった。

「ぐっはあ……！」

通信が切れた後、一人コクピットの中で激しく悶えた後、大和は深呼吸をして暴走している自分の心を落ち着かせる。やばいやばい。萌え死にしていまいそうだったぜと、一人呟く。

（さて……例のシステムはエレオノールとうまく同調しているみたいだな。他の二機も問題なく稼働している。だが、まだ戦闘は続く。気を付けておかないとな……）

ちょうどその時、補給が終わった事をSASが知らせてくれた。大和は機体をチェックし、問題がないか確認を始めた直後、護衛部隊であるストライク大隊指揮官の柿崎少佐から通信が入った。

『西園寺少佐』

「どうかしましたか柿崎少佐？」

『先程Bエリアの帝国派遣部隊から救援の要請が入った。どうやら囲まれているらしい』

「それはいけませんね。救援に向かいましょう」

『部隊はどうしますか？』

「ここの守備を減らす訳にはいきません。柿崎少佐。第三中隊をお借りしてもよろしいですか？」

『好きに使ってくれてかまわない。それにしても、これほど護衛の必要のない護衛対象は初めてだよ』

苦笑気味に笑う柿崎少佐。大和の奮戦のおかげで、未だストライク大隊に戦死者はいない。情けない話だが、護衛するはずが護衛されていた状態だったからだ。

「ふふつ、惚れないでくださいね」

『生憎だがその気はありません。第三中隊、西園寺少佐に付いていけ。残りの者はこの第二次防衛ラインとブラッディ小隊の護衛に回る』

『少佐。ご武運を』

本音を言えば唯依は付いていきたかった。だが自分は電磁投射砲の射手であり、機動力が物を言うこの救援任務に付いていくのは場違いだと理解していた。

「ありがとう。篁少尉にそう言って貰えると嬉しいよ。第三中隊、私に付いて来い。友軍に救援に向かう！」

真紅の「武御雷」を先頭に、三機の「夕雲」、九機の「不知火」が後を追うように救援要請を求められたポイントへと駆けた。

二月十日一六〇〇時 朝鮮半島南西部全羅南道絶対防衛線
B - 15エリア

噴射跳躍で移動する事しばらく、レーダーに敵を示す光点が徐々に増えて行く。まあたく一体全体何匹いるんだろうな、と大和は小さくばやきながら、戦場を注意深く観察する。

「第三中隊各機に連絡。不要な戦闘を行つな。推進剤と弾薬を節約しながら友軍の元に向かう。敵は倒す必要はない。行動不能にすればそれで十分だ」

現在、大和の「武御雷」の装備は両手に97式突撃砲を装備し、背中のアタッチメント付き増設スラスターには試製対要塞級近接格闘戦斧が固定されている。

散発的に大和は射撃を繰り返す。無駄弾は一切なく、全ての弾頭がBETAの肉を穿つ。惚れ惚れするような機動射撃に、第三中隊に属する衛士達は感嘆の吐息を漏らさずにはいられなかった。

「いたな」

この戦域に置ける十五匹目の要撃級を蜂の巣にした後、大和は見慣れた「不知火」の姿を正面に確認した。データリンクによると大隊規模だった筈だが、ざっと数えてみるとおそらく二個中隊規模しかない。加えて三分の一は損傷しており、動きが鈍く仲間を守らている。

「フォーメーション・アローヘッドワン（楔壱型）で行く。先陣をオレが務める！ 突入後は小隊戦闘を開始。ここまで来て死に急ぐなよ」

『了解！！』

真紅の「武御雷」が加速する。両手に構えた突撃砲は120mm APCBCHE弾（劣化ウラン貫通芯入り仮帽付披帽徹甲榴弾）を選択。一番邪魔で脅威となりそうな要塞級の頭部に向け、四発ずつ、計八発を集中射撃で撃ち込む。

八発の120mm弾の威力は並ではない。要塞級の頭は見事に吹き飛び、醜惡な傷口をこちらに向けている。普通の生命体ならば致命傷と言えるべきダメージだが、BETAにはその道理が通じない。

「そうかいそうかい。まだ喰らいたいかい……！」

容赦はしない。元より妥協なんてするつもりはない。大和は36mm弾を選択。傷口に向け一斉射撃。二門の36mm砲口が盛大なマズルフラッシュ（発射炎）を噴射させ、36mm砲弾は吸い込まれる様に傷口に叩き込まれる。

「悪いな。お前に構ってばかりじゃいけないんでねっ！」

尾節に収納された全長五〇メートルの衝角付き触手をかわし、右手の97式突撃砲を空高くに放り上げ、左手の突撃砲は背中のアタッシメントに素早く固定。空いた両手には試製対要塞級近接格闘戦斧を装備し、胴体部分を一閃した。流石の要塞級もこれらの攻撃に耐えきれず、その巨体を大地に横たわらせた。そして最後には落下

してきた突撃砲をキャッチして、戦斧が固定されていたアタッチメントに固定した。まさに神業と言つべき芸当だった。

『……西園寺少佐。ほんとう……あなたはなんでもありですね……』

第三中隊の大尉が、ぼつりと引きつった笑い声を上げながら呟いた。

「こちらは帝国軍特殊技術開発室西園寺大和少佐だ。救援に来た。帝国派遣部隊。後退の道は作った。急ぎここから離脱しろ。殿は我々が引き受ける」

『西園寺っ！？ お会いできて光栄であります！ 私は帝国派遣部隊第七戦術機大隊を指揮する沙霧尚哉大尉であります』

「ぶっ?!」

通信ウィンドウに映った指揮官の顔を見た瞬間、大和は思わず噴き出した。

『……西園寺少佐。いかがなされましたか？ 私の顔に、何か？』

「い、いや、失礼した。気にしないでくれ」

動揺をすぐさま隠し、大和は答えた。

驚くのも無理もない。大和の知る本来の正史では、沙霧尚哉はこの光州作戦では負傷し、内地送りになっていた筈である。加えて階級も確か大尉ではなく中尉であったはずだ。

（歴史介入の影響だろうか……たぶんそうだろうが、今はそれについて考えている場合じゃないよな）

私案は後回し。味方部隊の後退を援護しなければならない。

「沙霧大尉。部隊の状況は？ 第二次防衛ラインまで後退できるか？」

真紅の「武御雷」が縦横無尽に戦斧を振るう。振るわれる度にBETAの肉片が舞い、体液が大気を汚す。通信していても敵は待つてはくれない。どこを見ても気色悪いBETAだらけだ。

『損傷している機体の中には、跳躍ユニットをやられた機体もあるため、通常戦速での後退は難しく、多少は時間を稼ぐ必要があります』

「分かった。ブラッディ1よりブラッディマムへ。支援砲撃要請。現在、我々がいるポイント周辺に攻撃を要請する」

『ブラッディマム了解。直ぐに手配します』

『少佐。私を含め、三機も共に殿を務めます』

その言葉に大和は僅かに眉を潜めた。

「沙霧大尉。確かに見た所損傷している様子は見えないが大丈夫か？」

機体は確かに損傷している部分はない。だが沙霧自身はどうだろ

うか。疲労が溜まっている事は予想が着いた。

『問題ありません!』

「……いいだろう。許可する」

確かに疲労はあるだろう。だがそれを補うだけの覇気を纏っている。この状態で後方に下がれと言っても下がらないだろう。

『ありがとうございます!』

「誰か、沙霧大尉に97式振動刀を」

『はっ! どうぞ沙霧大尉』

『これは?』

第三中隊に所属する一機から渡された97式振動刀を興味深く見つめる沙霧。

「衛士ならば聞くよりも試す方が早い。超振動によって突撃級の外殻ですら容易く切断できる優れモノだ。連続使用時間は三十分。それ以降は通常の長刀として使用できる」

『何と……もしかこれは西園寺少佐がお作りになられたのですか!?!? なんと素晴らしい!』

「褒めるのは後回しだよ沙霧大尉。各機、こんな所で死ぬなよ。私と沙霧大尉で敵を引き付ける。沙霧大尉。悪いが付き合ってくれ」

『承知しました!』

大和は自然と口元に笑みを浮かべ、操縦桿を握りなおした。

「では諸君、無駄に危険を冒すな。戦果を欲するな。此度の戦いは、生き残った者が勝ちと心得よ! 行くぞ!」

『『『了解!!』』』

この後、大和達は光州広域市の住民を退避させ、激しい後退戦闘を繰り返しながら朝鮮半島を後にした。本来の史実にあった悲劇は回避され、世界は日本の最新兵器である「武御雷」の驚異的な機体性能、次世代戦術機兵装の地位を得た97式振動刀や98式電磁投射砲の性能に、惜しめない賞賛と羨望を送る。また大和の活躍は国連軍を通じて瞬く間に広がり、いつの間にか『赤い流星』、『紅の閃光』と言う異名が名付けられた。

だが同時に、内外を問わず新たな陰謀がゆるりと動き出した事をこの時の大和が知る筈はなかった。

第十二話 光州作戦3（後書き）

なんかむりやり完結させたようですが、はい、むりやり完結させました。本当なら切り札と定めた残り二つの描写を入れようと思ったんですが……どうしてもイメージを描写することつなげることができず、このような終わり方になってしまいました。まだまだ私も未熟者です。

残り二つの切り札の描写は日本国内での話に引き継ぐと思います。

……もつと勉強しないとなあ。

第十三話 次世代の可能性と立ち込める暗雲（前書き）

週一更新第一回目、無事更新できました。

PVはいつの間にかミリオンを超え、お気に入り件数は2000件の突破、感想数も150件も超えました。皆様、本当にありがとうございます。ございます。感想を読むたび、頑張らないとはりきっています。

今回、あとがきに皆様から投稿していただいたアイディアの中で、翁さんの提案してくれたアジャール・イーグルの機体データの試作版をのせてみました。何かご意見があれば、一言でも良いので感想掲示板かメッセーじボックスにお願いします。

では、第十三話目、どうぞ。

第十三話 次世代の可能性と立ち込める暗雲

光州作戦から数週間経ったある日。報告書を一切合切まとめ上げて、進行中の計画にも指示を出した後、大和は溜まりに溜まった休暇を使つて自宅に帰省していた。

「参ったなあ……」

時刻は七時を回ったぐらいだろうか。布団の中で大和は困ったように呟き、むつくりと体を起こした。休暇に入つて今日で三日目。体は惰眠を拒み、常に六時か七時に目を覚ましてしまう。精力的に仕事をこなし続けてきた影響だろうか。なんてこつたい……と心の中で苦笑混じりに呟いた。

「まだ寒いな……」

朝の清々しい寒さの中に、冬がまだ感じられる。だがそれも後少しだろう。今は三月の最初。二週間も経てば、今度はこの寒さの中に春を感じられるはずだ。

布団から出て、障子を開ける。大和の部屋は中庭に面しており、障子を開けると家の周りを這うように続く長い廊下とそれなりに手の込んだ日本庭園が見える。

「うん……やっぱり落ち着くな」

大和はこの庭が好きだった。見ていると心が落ち着いてくる。庭園の形こそ変わらないが、春夏秋冬、それぞれの季節で違った顔を見せてくれる。もうすぐ冬の顔が消え、春の顔を見せてくれる筈だ。

楽しみで仕方ない

と、廊下を歩く音がした。

「兄様。おはようございます」

「……」

「おはよう朝陽。エレオノール……は、まだ眠そうだな」

苦笑混じりに大和は言った。妹の西園寺朝陽は簡単な身支度を整えているに対し、ソビエト連邦から大和が引き抜いてきたESP発現体であるエレオノール・アイゼンシュタインは、未だ眠そうにこっくりこっくりと首を揺らしていた。

黒曜石を思わせる艶やかで綺麗に切りそろえられた黒髪を持つ朝陽と、月の光を思わせる柔らかな銀髪を持つエレオノール。髪の色、そして人種こそ違うが、寝ぼけている妹を引っ張る姉と言う表現がしっくりくる光景だった。

「相変わらず朝陽は朝早いな」

「兄様こそ今日もお早いんですね。日々激務をこなしていらつしやるのですから、少しは寝坊しても誰も文句は言いませんよ？」

「したくても体が受け付けてくれないんだよ。難儀なことだが」

「それは困ったものですね」

肩をすくめて答えた大和に対し、朝陽はご愁傷様と言わんばかり

に、裾で口元を隠してくすくすと笑った。やはり母上の娘だな。他愛ない仕草の中にも気品が感じられる。我が妹ながらGJ！と心の中で親指を立てる大和。

「では兄様。先に居間に行っています。エレちゃん。行きましよう」

「……」

エレオノールの手を引っ張る朝陽。エレオノールの表情からはただ「眠い眠い眠い眠い……」と言う感情が伝わってくる。歩き方もふらふらとおぼつかない。それが何とも愛くるしいのだ。

（朝陽同様、エレオノールもオレを癒してくれるな。これまたGJ！）

二人の背中を見送りながら、今度は心の中ではなく、現実で親指をたてた。

休暇中と言っても完璧に仕事をオフにすることなど、既に大和の立場では不可能な話だった。ポケットには常に携帯電話が納められ、着信音は数時間に一度のペースで鳴っていた。だがこれでもまだマシのほうだ。仕事に復帰すれば、またあの恐怖の着信履歴を拝見出来ると思うと溜息を禁じえなかった。

「はい。西園寺です」

『休暇中申し訳ありません。西園寺中佐。実に早急に対処しなければならぬ問題が発生しまして』

「構いません。どうされましたか？」

じゃあ電話してくるなとも言えず、既に何度聞いたか分からない謝罪の言葉に飽き飽きしながら、大和は表向き、まったく気にしていないと言わんばかりの口調で答えた。

大和は光州作戦での武勲と電磁投射砲、そして次世代近接格闘兵装である97式振動刀の功績が認められ、中佐へ昇進、同時に帝国技術廠副局長の地位を得た。ちなみに大和の、公私も含めて良き相談相手である巖谷中佐は大佐に昇進して、局長となった。

『 分かりました。一度その方法で試してみます。お休みのところ、申し訳ありませんでした』

「いえいえ気にしないでください。では……」

とりあえず現状で思いついた方法を提案して、大和は電話を切った。さて次にいつ電話が掛かって来て、どんな内容だろうか。いっその事、隣の部屋に置いてある予備の資料をかき集めて、対応できるようにしておくか？

「いや……それは後でいくらでもできるしな」

つくづく仕事人間になってしまった様だ。大和はっ肩をすくめて携帯電話を畳の上に置いた。

やはり仕事を抱えすぎているようだ。休みの日でもこつもひつきりなしに仕事の電話が掛かってくるのは、大企業の社長でもそうはないだろう。

改めて頭の中で関わっている仕事を確認してみると、やっぱり数が多い。

対BETA用次世代戦略兵器開発計画の提案、遠田技研で開発中の特殊システムの調整、帝国海軍呉工廠で建造が進んでいる新機軸の戦艦に、海軍の戦術機開発計画、「不知火」の後継機である「不知火・式式」の開発、「武御雷」の正式量産機の最終調整……ぱっと思いついただけでも、かなりの数だ。いや真剣に思い出せばもつと出てくるだろう。肩に重みが増した気がした。

（まあ、昔よりは楽になったけどね……）

大和はふつと笑みを浮かべた。

それは大和の努力と、貪欲に新技術を吸収し続けた技術師達のお陰だった。その為、現在まで運用されている兵器の細かい雑務や修正、調整を任せられるのは非常に助かっている。

（目下のところ……一番重要な計画と言えば対BETA用次世代戦略兵器開発計画と、HI-MARF計画の機体だな）

ごろりと自室で寝転がり、天井の木目模様を見つめた。

光州作戦で改めて実感した圧倒的と言えるBETAの物量。あの物量を相手に戦線を押し上げるのは、戦術兵器では難しい事を改めて理解した。撃ち殺しても斬り殺しても、次から次へと湧いて出てくる。大火にじょうろで水を掛けても意味はない。アメリカの対BETA戦略である「戦略兵器（G弾）で根こそぎ吹き飛ばして、戦術兵器（戦術機）で後始末」という方法は実に理に適っている。何

れ実行するユーラシア大陸奪還作戦において、この運用理論は重用するだろう。

だが戦略兵器は使う事には注意しなければならない。メリットが大きければ、デメリットも大きいのが普通である。現に使用後、長期間の重力異常を起こすG弾や、放射能を発生させる核兵器などは良い例だろう。「奪い返しましたが、人類が住める環境ではありません」なんて冗談じゃない。高い広範囲殲滅能力を持ちながら、二次被害が少ない兵器を開発しなければならない。

（と、なると一番に思いつくのはフレイヤなんだよな……………）

爆発や熱放射、放射線の被害もなく、第一次影響圏に巨大なエネルギー球体を産み出し、存在する全ての物質を消滅させる事が出来る上、影響範囲を精密に制御可能と言う良い事尽くしの戦略兵器。空気すらも消滅させるため、第二次影響圏や第三次影響圏では突風が発生するが、長期的な後遺症は存在しない。改めてその有効性を再認識できる。

（実用化は可能だ。でも問題なのはサクラダイトを使ってしまうことだな）

各国で地質調査をしていないため、何とも言えないが現状において地下資源としてサクラダイトを発見、確保しているのは日本だけだ。フレイヤの製造にはサクラダイトが必須である。他の国でも見つければ問題ないが、見つからなかったらフレイヤの製造は完全な日本の独占技術となる。そうなると外交上や軍事上で他国との軋轢を産み出すのは明白だ。

有澤重工からの報告によると、サクラダイトの発掘は順調のようだ。ただし原作にあるように膨大な量があるわけではなく、不純物も多く、少なくとも大和が要求するレベルまで持っていくのには、時間が掛かりまた手間も必要らしい。チートな能力を使えば機械は改造できるが、原料はどうする事も出来ない。

（うーむ．．．．．フレイヤは最終手段としておいといて、別の戦略兵器を考えよう。現存する兵器の延長、もしくは強化で考えていけば何か思いつくだろう。仕事に復帰したら直ぐに会議を開くとして．．．．．あつ、H I - M A E R F の件も進めないとな）

長い長い討論の末、アメリカは光州作戦が完了して間もなく日本の提案を飲んだ。それは光州作戦で投入された次世代戦術機兵装に対する各国の注目度が決定打となったようだ。三月の中頃にはアメリカから分解輸送された「X G - 70」が搬入される手はずになっている。ただし一番重要な部分である動力部分を抜いてのことだが、大和にしてみればさして問題とは感じなかった。必要だったのは機体本体と、荷電粒子砲の技術だったからだ。

（A P F（新規国際標準規格戦術機共同開発計画）が流れたのは仕方なかったが、日本としては「X G - 70」と言う戦略兵器を手に入れたんだ。「吹雪」も各国に提供されたし、M B Fの研究がされている筈だから、実装は速い筈だ．．．．．）

「吹雪」にはM B Fを部分的に使用したS M B Fが採用されている。少なくともこの技術を利用すれば、各国の戦術機は間違いなく強化できる。後は研究を重ねていけば、完全体であるM B Fに近づくことも可能だろう。ただし日本と同等の性能を持つM B Fが出来るのはずっと後の話ではあるが。

（薄々は分かっていた筈だけど、少しずつ動きにくくなってきたよな……）

大和としては「武御雷」に使用した完成型は無理でも、「夕雲」に使用した不完全なMBFを提供したかった。だがそれは不可能な話であった。政府としては技術的有利という外交上の強力な切り札を安々とは切りたくないし、軍はどの国も実現していない軍事機密を公開するわけにはいかない。その二つの強大な壁に加えて、西園寺ブランドに関する強大な利権も複雑に立ちはだかっている。またその影響は私生活にも表れている。要人として、家の門の前には常に警備の兵士が立っていて、巡回している上、ぶらりと京都の街に出ようとしたら、そろそろと護衛は付いてくる。さらに極めつけは、何か問題が発生すれば最寄りの基地から戦術機小隊が緊急発進する手はずにもなっているそうだ。武家屋敷が並ぶこの地区で、誰を相手に市街戦をやるうても言うのか。

「やれやれだぜ……」

色々と邪魔が入っているが、各国の技術力や軍事力は、正史に比べて強化されているのは間違いない。多少の不自由は我慢我慢。これも全て、この世界を救う為の代償だと思えば安いモノだ。

時計を見る。時刻は十時半。何をしようかと思案していると、障子が開いた。

「ん、どうしたエレオノール？」

「……………」

エレオノールは大和のシャツを引っ張る。そして大和の頭には、

朝陽の顔と土蔵の影像が飛び込んできた。自分のイメージを相手に伝えるプロジェクションだ。

「あゝ、朝陽が呼んでいるのか？」

こくこくと頷くエレオノール。なるほど用件は分かったと、大和は立ち上がりエレオノールと共に土蔵を目指した。

《赤》を纏う西園寺家は、それなりに歴史を積み重ねてきた武家である。そのため、先祖伝来の骨董品を筆頭に様々な物に溜まり、それらの収納する土蔵の規模はかなり大きかった。昔、何か掘り出し物がないかと思って粗探ししたのは懐かしい思い出だ。

庭に降りて、土蔵に入ると明らかにこの場に不釣り合いな機械的な物体が置かれ、無機質な機械音を奏でていた。戦術機のシュミレーションボックスである。Gを再現することは出来ないが、操縦システムはほぼ軍で採用されているものと同じで、観戦用の大型モニターも完備している。ここで大和はOSの開発やプログラムの修正などを行っている。そして朝陽も利用して、腕を磨いている。兄と同じ優れた衛士になるために。

大和としては大事な大事な、そして目に入れても痛くない朝陽は衛士になどならず、城内省務めをしてもらいたいところだが、朝陽の意志が固く、父親と大和の説得は無駄に終わった（大和同様、朝陽が母上を味方に引き込んでいたのが大きな要因である）。

大和はコンソールを操作して、観戦用モニターに電源を入れた。

舞台は平地。敵の数は数千。味方部隊は一個中隊。砲撃支援あり。

朝陽のポジションは砲撃支援。
インバクト・ガード

（戦況は．．．．．まずまず。朝陽の援護射撃も悪くない）

モニターに表示されているのは、戦場を上から見た図だ。一個中隊は戦線を維持し、BETAをせき止めている。そして後方に位置する支援砲撃部隊は、データリンクを用いて、敵が溜まった場所に向かつて砲弾を撃ち込み、効率よく敵を葬っている。「夕雲」を操る朝陽も自分のポジションを重々理解して、刻々と変化する戦況に応じて97支援重機関砲で味方機を援護する。

（結局、朝陽に最適なポジションは砲撃支援に落ち着いたか）

朝陽が望んだのは、大和がかつて務めていた部隊の花形にして、最も危険な突撃前衛である。だがどうにも朝陽は近接格闘より中距離射撃のほうが相性が良く、全体を見通す目も持っているため、このポジションが最適であると大和がアドバイスしたのだ。

『むう．．．．．兄様がそうおっしゃるなら．．．．．』

とても不満げだったが、なくなく朝陽は納得した。何せアドバイスしてくれたのは、尊敬する兄であり実践経験者の衛士でもある。そのアドバイスに間違いはない。

「ふゝむ．．．．．」

朝陽の操縦技術はなかなかのものである。昨年の五月頃から朝陽はこのシュミレーションボックスを利用して、操縦技術を磨いてきた。訓練時間はもうすぐ三桁に達するほどの熱心ぶりであるが、これはあくまでもシュミレーションである。実機となると勝手が違う。

無事BETAを駆逐して、シミュレーションが終了する。ゴクンツと言う音と共に、長方形のシミュレーションボックスが二つに分かれた。

「お疲れさん朝陽。これで士官学校に行っても安心できるな」

大和が手を回して手に入れた、赤の斯衛強化装備を纏った朝陽が出てくる。完璧に横流し品であるが、愛しの妹の為ならば何のその。誰が何を言おうと知った事ではない。と言うのが大和の持論である。

「はい。兄様。それで今日の操縦はどうでしたか？」

朝陽は今年の四月から特例入学として、帝国斯衛軍士官学校への入学が決まっている。本来、帝国の徴兵年齢は十五歳だが、大和が目覚ましい活躍と類まらない才能を発揮した事を前例に、望めば一年ないし、二年早く軍への入隊を認められている。それを良しとするかは別の問題であるが、今年は特例入学が多いらしい。これも大和の影響である。

「悪くない。でもシミュレーションと実機は違う。それを重々承知しておくんだよ」

「はい！」

この辺りは何度も言い聞かせている為、朝陽も理解しているようだ。

「それで何の用だ？」

「はい。まずはこれを見てください」

朝陽がコンソールを操作して、観戦用モニターにある情報を表示した。

「これはオレの操縦ログだな」

「はい。兄様の入力は凄いです。コンマ何秒かで複数の入力を当たり前のようになしています。私も兄様を真似てやってみたのですが、どうしても実現出来ませんでした。エレちゃんにも試して貰いましたが、結果は同じでした」

「うん。それで？」

「私は少しでも兄様のような立派な衛士になりたいです。だから兄様の操縦は凄く参考になります。兄様の操縦を習得すれば、私は兄様のように多くの人を助けられると信じています」

胸に手を置いて、強い意志に満ちた声で語る朝陽。立派だが、やはり大和としては朝陽には戦場に立つてほしくない。複雑な気持ちだった。

「私はずっと考えていました。どうすれば兄様の操縦を習得できるのか……試行錯誤の繰り返しでした。そんな時、兄様の言葉を思い出したんです。『物事は一方から見ると難しくなくて、多方向から見れば当たり前の事でも新しい発見が出来る』……それで思いついたんです。入力を真似るのじゃなくて、結果的にその動きが出来ればいいんだって」

（……こいつは驚いた）

操縦技術の基本を、帝国軍が作りだした教本ではなく、大和の操作ログを教本として見てためだろうか。発想が柔軟だ。

「なるほど。つまり朝陽は過程を変えて、目指す結果に向かうとしているんだな。その方法は？」

「うまく言えないのですが……今の戦術機は、衛士の入力を素直に受け取って機体を動かしています。ですが、それは衛士一人の熟練に依存していて、私が兄様の操縦技術を習得するには長い時間が掛かります。なら、どうすれば兄様の操縦技術……いえ、動きを効率よく再現できるのか……戦術機のOSを改良してみたらどうかと思いました」

「……続けて」

「例えば、この操作ログと映像を見てください。大きく後方跳躍しながらの射撃。映像にしてみればたったこれだけです。これを再現しようと思えば、思いの外複雑な操縦が必要です。跳躍ユニットの繊細な噴射制御、機体の安定制御、照準、着地点の確認……膨大な入力を行わなければ実現できません。ならこの入力をどうすれば減らせられるか、OSにある一定の入力をすると、別の動きをするように登録しておけば、入力の手間を減らす事が可能になると思います」

「……朝陽」

大和を微笑む。ようやく新しい芽が育った。そして新しい可能性を示してくれた。

「よく気付いたな。まさか自分の妹が見出すとは……自慢の妹だな」

「兄様……それはどういう意味でしょうか？」

「現状に採用されている94式OSは、完成品に見えて実は不完全品なんだ。朝陽の言った理論に加えて、先行入力を加えれば本来の完成品となる」

大和があえてキャンセル機能のみを搭載したOSを世に送り出したのは、慣れさせるのが最大の目的だ。新技術は慣れるまでに時間が掛かる。故の判断だった。そして今、大和が示すのではなく、見出した者がいる。完成品を発表する時期が来たのだと、大和は直感した。

「先行入力？」

大和は手短に内容を説明する。朝陽は少し考え込み、「なるほど」と呟いた。

「確かに有効ですね。確実に今より操縦の負担が減ります！」

思わず顔がほころぶ朝陽。だが、直ぐにはつとずる。

「では……兄様。兄様がそれを知っていたとなると、兄様の操縦技術は……」

「そういうことだよ」

朝陽は愕然とした。今でさえ誰もが一目を置く操縦技術を有し

ていると思われていた兄の実力に、まだ上が存在していた事実。

「……兄様の本当の実力は、一体どこまであるんですか？」

「さあ……一体どこまでなんだろうね」

苦笑する大和。チートな能力を使って得た反則だが、経験だけは別だ。それに大和自身も一体自分がどれだけの技量を有しているのか、分からなくなっていた。操縦技術：Sは伊達じゃない。

「さて、それじゃあ朝陽にはご褒美を上げないとな」

大和はコンソールを操作して、作っておいた完成品たるXM-3のOSをシミュレーションボックスにインストールする。

「インストールが完了すれば、オレが目指した完成品のOSがこのシミュレーションボックスに反映される。自由に使いな」

「っ！？ いいのですか？」

「構わんよ。それにこれは朝陽へのご褒美だ。ついでだ、エレオノールも慣れておきな」

近くの椅子に座って事の成り行きを見つめていたエレオノールが頷く。

（嬉しい事だが、これでやるが増えたな。新OSの発表に加えて、新米衛士への訓練メニューにも手を加えなきゃならん……それにオレの部隊も本格的に編成した方がいいか）

現在、大和の直接的な指揮下にある衛士はエレオノールと篁唯依少尉のみであり、大和としても最低でも一個中隊、欲を言えば一個大隊は欲しいと思っている。だが、普通の衛士はいらない。大和が目指す部隊は、底知れぬ可能性を秘め、確固たる強い意志を持った衛士で構成された”世界最優”の部隊。手段は問わない。必要とならば国内外から引つ張って見せる。

(……となると沙霧大尉はやっぱり欲しいな。操縦技術だけでなく、指揮官としても優秀だ。でも、沙霧大尉は彩峰中将閣下の懐刀だし、引つ張るとなると……)

大和が思案を巡らせていると、入口に誰かが立つ気配がした。

「父上？」

振り返ると、赤い斯衛軍の制服を纏った現西園寺家当主西園寺和正が立っていた。

「あー……大和。少し話があるのだがよいか？」

「あつ、はい。構いません。ですが父上、軍務の方はよろしいのですか？」

「いや、構わん。ある意味ではこれも軍務らしいからな……」

実に疲れ切った溜息を吐く父親の姿に、大和は眉を潜める。珍しい姿だ。疲れているのだろうか。

「私の部屋に行こう。朝陽、すまないが母上に私の部屋に来るように伝えてくれないか？」

「分かりましたお父様」

母上も来る？ 何だろう？ オレなんかしたかな？ と眉を寄せるが思いつかない。大和は父親の後を追った。

これが、大和の悲鳴がご近所に響き渡るのは五分前の出来事である。

同時刻、朝から特殊技術開発室にあるシミュレータールームで腕を磨いていた篁 唯依に、技術廠のトップとなった巖谷榮二大佐から呼び出しを受け、局長室に訪れていた。

「失礼します。篁 唯依少尉出頭しました！」

「楽にしてくれ」

部屋では、木目調の大きな机に座って、何かの書類を熱心に見詰めている巖谷大佐がいる。

「巖谷大佐。ご用件は何でしょうか？」

「……唯依ちゃん」

「大佐。今は任務中です！」

「いいんだ。今日の呼び出しは巖谷の叔父様として呼んだんだ。職権乱用だな。ははっ」

「……何ですか巖谷の叔父様？」

少し咎めるような視線で見つめた後、肩をすくめて唯依は尋ねた。

「うん。まどろっこしい話は抜きにしよう。唯依ちゃん。大和君の事、どう思っている？」

「優秀な衛士であり、指揮官。類まらない才能に恵まれた技術者であり、武家の人間の誇りです。私は中佐の部隊、中佐の指揮を受けられる事に誇りを持っております」

不審げに形のいい眉を曲げた後、唯依は淀みなく答えた。

「ああ、違う違う。男としてだ」

「……はあっ?!」

呆けた後、規律に忠実な士官と言う表情が、一瞬で年相応の少女の顔へと変化した。顔が赤い。

「な、なな何ですか突然っ!？」

これでもかというくらい激しく動揺する唯依。

「どうなんだい唯依ちゃんよ？」

「いや、その……叔父様には関係のない話です！！」

「いや、関係ある。オレはあいつから唯依ちゃんを頼まれたんだ。逝ってしまったアイツに変わって、唯依ちゃんの幸せを見届ける責任がある」

うんうんと腕を組み頷く巖谷大佐。

「いやでも、それは……！？」

「……ふむ。脈あり、か……」

「か、勝手に判断しないでください！」

「じゃあただの上司の間柄なのか？」

「そ、それは……」

唯依は俯いた。

実際、自分はその人に対して、どういう気持ちを抱いているのだろうか。素直な感情を言えば、分からない。

憧れの存在。理想の象徴。弱き人々の為に持てる力の全てを持つてBETAに立ち向かうその雄姿を、唯依は光州作戦で間近に見てきた。

戦に置いて最も難しい撤退戦でも、彼は殿を務めながらも味方

部隊の士気を高めつつも統率し、多くの兵士や兵器を撤退ポイントへと導いた。その勇猛ぶりは目を閉じれば、鮮やかに甦ってくる。

あの時ほど、彼の姿を眩しく、そして頼りになる存在だと思っ
た事はない。それは唯依だけではなく、途中から合流した帝国派遣
部隊や国連軍の兵士も同じだろう。圧倒的な数のBETAを相手に
恐怖や絶望を抱かず、ただ漠然と「この人がいるなら助かる」と感
じた筈だ。

だから余計に分からない。憧れの気持ちはある。目標としてい
る。尊敬もしている。だがそこに男と女が入れば、頭の中がぐちゃ
ぐちゃになってくる。否定したい様な否定したくない様な感情があ
る。何故そんな感情になるのか、何故、そんな感情が生まれてくる
のか唯依は分からなかった。

「……少々意地悪かったかな？」

唯依の苦悩を見て、巖谷大佐は苦笑した。

「すまないな唯依ちゃん。少し急ぎすぎたようだ。忘れてくれ」

「……はい。ご用件は、それだけですか？」

「ああ。急ぐ事はない。ゆっくりと考えて結論を出すの良い。
それと唯依ちゃん。出来る事なら大和君を支えてやるんだ。
……彼の前にはこれから大きな壁が立ちはだかろうとしているよう
だ」

「……どういことですか？」

動揺していた唯依だが、巖谷大佐の言葉に影がある事にかろうじて気付いた。

「唯依ちゃん。大和君の今の立場がどのようなものか知っているかい？」

「いえ……」

「政界、財界、軍、武家社会、国際社会に置いて、西園寺大和の力は光州作戦での武勇と功績を持ってさらに強化された。軍もプロパガンダの意味を込めて派手に宣伝している。今や「赤」の武家の中では筆頭だ。実力もある。名前も知れ渡っている。十分なコネと資産も持っている。そうなると自然に付いてくるのが、権力と言うモノだ」

「権力……」

「権力には毒がある。だがそれも使い様によって妙薬にもなるし、猛毒にもなる。彼はその使い方を知っているが、周りは違う。彼が妙薬として使おうとしても、いざ作用すれば猛毒になってしまう事も考えられる」

情報によると彼の国に呼応するように、何かと軍部や政界で話題になる雌狐も動いている。

「それは……西園寺中佐に対する反対勢力が何かしらの妨害をしてくるという事ですか？」

政界の事は分からないが、軍部と武家社会の動きは、唯依の耳にも多少入っていた。

軍内部の一部派閥、特に大陸派遣部隊に従軍していた兵士の間では、見事な撤退線を指揮した大和の才腕を認め、信奉する下士官は多い。またそれとは逆に光州作戦で大和があの手この手を尽くして投入した各種最新兵器の持ち込み、戦功を得た事を例にして、危険視する勢力もある。

武家社会でも同じような状態だ。大和を武門の誉れ、武家のあるべき姿として評する一派と、西園寺家、そして大和の増大する権力を危険と評する一派と分かれている。あくまでも噂だが、五摂家の間にも激しい対立が発生していると聞く。

「一人の人間が強力な権力を持った時、自然と反対勢力は生まれてくるものだ。それは仕方ない事だが、彼の場合はその功績に比例して、規模が大きく速過ぎるのだ。少し言いすぎかもしれないが、帝国社会、経済は彼を中心に動き出そうとしている」

政界、財界、国際社会。それぞれに権力者たちが、多方面に強力な影響を与える西園寺大和と言うジョーカーを手札に加えようと、さらに動き出そうとしている。中には西園寺大和をあえて上へ押し上げようとする勢力が生まれつつあると言ってもいい。

（そしてそれが動き出してしまった。大和君。私は不安で仕方ないよ……）

一体この先、どんな罠が仕掛けてあつて、どんな敵が待ち構えているのか。巖谷大佐は胸の内に広がる暗い不安に抱えたまま、小さく溜息を吐いた。

第十三話 次世代の可能性と立ち込める暗雲（後書き）

翁さん提案のアジャール・イーグルの試作設定です。

機体名	アジャール・イーグル
形式番号	F-15・AGIL
所属	米軍
製造	富嶽重工・ノースロックグラナン社
生産形態	試作改修機
動力源	蓄電池・マグネシウム燃料電池
跳躍ユニット	F100-PW-200JH（JHは日本の富嶽重工の意）
固定武装	CRK-1×2（コンバットラチェットナイフ）
特殊兵装	IFCS（知的戦闘制御システム）
機体解説	ボーイング社が主契約企業として推し進める「フェニックス」構想に対する形で、ノースロック・グラナン社が富嶽重工に技術要請した結果、実現した日米企業戦術機共同開発計画である。ノースロック・グラナン社は「ATSF計画」において米国軍次期主力戦術機として提出した「YF-23」の雪辱をを晴らす意味で力を注いでいる。

本計画の正式名称は「アジャール・イーグル・プロジェクト」と名付けられ、「F-15」を基本に、日本と米国の戦術機運用理論を合成した改修機を開発する事を目的にしている。「YF-23」で投入された第三世代技術に加え、日本帝国の独占技術とされているSASを模倣したIFCS（知的戦闘制御システム）を試験導入、SMBFを標準装備している。どちらかと言えば米国製新技術の実証機と言う印象が強いが、スペック上では「F-15ACTV」を超えている上、スペックと比較すればコストも安価である。

しかし、日本製の低燃費高出力主機、近接機動戦闘の為の即応性と瞬間加速性能を重視、改修した敏感な跳躍ユニット、操縦系統に導入したIFCSなどの影響でとてつもなく癖のある戦術機として評され、一部関係者の間からはその扱いにくさから「CRAZY EAGLE」とも呼ばれている。

だが一度扱いに慣れると、その運動性はとてつもなく”面白いモノ”になり、文字通りの「CRAZY EAGLE」に恥じない機動性を発揮すると言われている。

固定兵装として、両大腿部側面に富嶽重工製の高周波振動発生装置を搭載したラチェットナイフを装備している。なお、本機体においては特例だが、日本で発表された97式突撃砲の有効性を再検証する意味で、「YF-23」で開発されたXAMWS-24試作新概念突撃砲を標準装備として認められている。

・翁さんが提案してくれたアイデアを元に考えてみました。まだ試作の段階ですが。いんてぐらのイメージではイーグルを限りなく「YF-23」に似せた感じでしょうか。かつこいいですもんね。正直、ラプターより好みだし。

本来の歴史によると、このアジャール・イーグル計画はACTV計画の前身でボーイング社が仕切っていたようです。ですが、マブラヴ世界ではボーイングにはフェニックス構想によるACTV計画があるし、アメリカ企業同士を競わせるのはそれはそれでまた面白いかなと思って、ノースロック・グラナン社に変更して考えました。他の理由としてはどこかで「YF-23」の流れを作りたいからです。

第十四話 仕事の山と人材発掘、そして忍び寄る戦いの予感（前書き）

……申し訳ありませんでした。

約一カ月の間更新できず、そして自分から言い出した週一更新もろくに守れず……本当に申し訳ありませんでした！！

何かうまく書けず、そしてストーリーを組めずに放置気味でした。でも、なんとか創作意欲を取り戻し、再び更新をさせていただきました。かなり久しぶりに書き上げたので、不自然な点が多いかと思いますが、お許しください。

では第十四話目。どうぞ～

第十四話 仕事の山と人材発掘、そして忍び寄る戦いの予感

「こちらが中佐に処理していただく書類となります」

「……」

悪夢だ。西園寺大和は心の中でそう呟いた。

一週間の休暇を終え、技術廠副局長室のオフィスに出勤した大和の前に運ばれてきたのは、これでもかと言うぐらいの書類の山だった。

「……悪意を感じる量だな」

休日返上で健気に働き続けて、ようやく手に入れた休暇。だがその休暇中も完全に休むことは出来なかった上、出勤してみれば、この山積みされた書類。国に尽くしてきた筈のオレにこの仕打ちは何だ？

「うわぁ……」

頬杖を付いて、ぱらぱらと書類をめくった。

自分が重要なポストにいる事は重々承知しているし、休暇が終われば書類仕事は避けては通れないと分かっていた。だがこの量はおかしい。その上、仕事はこれだけではない。備え付けのパソコンのメールフォルダには、企業や各部門からの嫌がらせとしか思えない程のメールが送られてきている。正直受信数を見るのが恐ろしくてたまらない。

「中佐。これは必然です。光州作戦での投入された各種新兵器の報告書や新たに発生した問題点、進行中の各計画の経過報告書……私にしてみればまだ少ないと判断します」

「……この量で少ないと言う塩川中尉の常識にオレはびっくりだ」

大和はジト目で塩川中尉に視線を送るが、彼女は特に表情を変えなかった。いや、僅かだが、何を今更、と非難めいた顔をしている。

「そうおっしゃいますが、私の常識を壊したのは中佐です。お気づきですか？ 書類仕事だけでも毎日毎日常人の二倍、三倍の量を処理しておられたのです。今ではどれだけ優秀な軍人の書類仕事を見ても、仕事をしていないと言う感想が出てきてしまうぐらいですから」

淡々とした口調だが、最期の方で嘆息が漏れた。

「何か、オレが悪い様に聞こえるのだが？」

「いえ。そういう意味で言った訳ではありません。中佐が抱えておられる計画が、滞りなく進んでいるのは中佐の事務処理能力が高い事も一つの要因と言えます。ですが、この量はその要因によって引き起こされた結果とも言えます」

「……つまり何か？ オレが頑張って書類仕事をしてきたせいでこの書類の量があるの？」

塩川中尉は「はい」と答えて頷いた。

なんということだ。素晴らしい。大和は思わず両手を広げて自分を讃えなくなった。

要は自分の書類仕事の速さがこの現状を産み出したという。ひたすら頑張つて、各計画の進行を滞らせないようにしてきた結果がこれか。本当になんと素晴らしいだ。

（チートな能力も全て自分に味方してくれる訳じゃないってか？）

再びパラパラと書類を捲った。

こんな事になるなら、チートな能力の『事務処理能力』をAまで上げるんじゃなかった、と心の中でばやいた。

しかし泣き事や文句を言っても事態は変わる訳じゃない。大切なのは 溜息が漏れるが 行動を起こす事だ。

かくして大和は気合を込める意味で腕を捲り、一番上の書類に手を伸ばし、眼を通していく。

「では中佐。本日の予定のほうを連絡させていただきます」

「……よろしく」

塩川中尉がぱらりと手帳を開いた。

「本日一〇〇〇時より城内省第三会議室におきまして、MBF-TYPE98の量産モデルの最終会議。一三〇〇時から、国防省第一会議室で中佐が休暇前に提出されました対BETA次世代戦略兵器に関する検討会議が行われます。また本会議においては、巖谷

大佐も出席なさる予定となっております。一六三〇時から

ー

（えぐい……）

手を止める事はなく、大和は口元を引きつらせた。

明らかに大和の事務処理能力でも二日は掛かるであろうこの量に加えて、会議が幾つもある。加えてそれが幾日も続くらしい。

（どうやらオレを過労死させたいらしいな……）

チートな能力の肉体強化：Sがなければ間違いなく病院に直行しているのは確実だ。いや、それ以前に労働基準法はどこへいったのだろうか？

（でも頑張らないとなあ……もうすぐBETAの本土上陸戦だ。それまでに何とか戦力やら防衛体制を強化しないと……）

大和の歴史介入のお陰で、山場の一つである光州作戦は無事”悲劇”を回避する事に成功した。強力で優秀な指揮官たる彩峰中將を死なす事も無く、実戦経験を豊富に積んだ大陸派遣部隊の戦力も半数を撤退させる事に成功している。さらに次世代近接格闘兵装たる97式振動刀と、戦術機の搭載兵装なら最大級の威力を持つ98式電磁投射砲も満足のいく成果と、各国に対するデモンストレーションも行えた。結果は間違いなく良しと言えるだろう。

だが安心する暇はない。大和の言う様に、次に待っているのはBETAの日本本土上陸戦だ。大和の知る本来の歴史では、この大侵攻によって西日本は壊滅的被害を受け、実に約三六〇〇万人と言う

国民の命が犠牲となる。大義名分も無く、意味も無く、理由も無く、ただ人々を虐殺するBETAに好き勝手させる訳にはいかない。さらに現在の日本帝国は本来の日本帝国と大きく違う。大和の技術の恩恵を受け、世界でも類を見ない巨万の富を得て、史実ではありえないほどの生産拠点を築いている。BETAの侵攻を許せば、ここまでの苦勞が泡と消えてしまう。

時間がどのくらい残っているのか分からない。だが、確かな事は一つだけ言える。大和の歴史介入によって若干の誤差はあるが、少なくともBETAの侵攻は半年から一年の間にあると大和は見ている。どう考えても時間が足りない。だが時間が無い事を理由に手をこまねくのは愚策中の愚策。今、打てる手を全て打っておくのが最善の策だ。

現在、帝国海軍第二艦隊が中心となって、特殊技術開発室で改良した複合センサーポッドを日本海域に大量に敷設している。これで連中の侵攻を敏感に察知できる筈だ。帝国軍による九州沿岸部、そして本州日本海沿岸部の防衛体制も順調に進んでいるから、現状で打てる手は全て打った筈だ。後は打てる手を増やし、使えるかが勝負の鍵なのだが、それらと並行して、父親が持ってきた問題も解決する必要がある。

（と、言うか一番厄介な問題だよなあ……）

何がどうなって、あの結果が生まれたのかは知らないが、間違はなく権力争いの一端の筈だ。

書類の最後にサインを描いて、次の書類に取り掛かる。ちょうど塩川中尉の朗読も終わった。本日の予定は二十一時まで。ほぼ国家や企業の重役相手の会議の連続。移動時間まで分刻みとは。内閣

総理大臣でもこんなスケジュールはあり得ない。

「そういえば塩川中尉。オレの「武御雷」の改修はどのくらい進んでいるんだ？」

ふと、思い出した事を口にした。

光州作戦で大和が操縦していた「武御雷」は、篁 唯依が操っていた先行量産型の「武御雷」ではなく、試作機をF型に改修した言わば試作改修機なのだ。これはただ単純に高品質の部品を多用した試作機でなければ大和の操縦技術に耐えられない事と、戦術機関連の新技术評価試験機体としての目的の為だ。

「腕部の改造は既に完了しました。現在は機体各部の運動性及び剛性強化の為の改修作業に入っています。しかし、本当に使えるのですか？ あのアンカー兵装は？」

「何事も試してみるのが一番さ」

塩川中尉の言うアンカー兵装とは、ナ トメ フレーム標準装備のスラッシュハーケンである。ただし普通のスラッシュハーケンではなく、試作兵器と言う事で色々と手を加えている。スラッシュハーケン自体は超硬スチール合金を特殊改良した材質を使い、ワイヤーは単分子繊維を芯として、内蔵された特殊高分子ポリマー溶液で皮膜する極めて強靱な二重構造。腕部の強化も十分にする予定だから、かなりの重量でも耐えられる筈だ。

「……正直に言いまして、よくも色々と思いつかれますね。一度、中佐の頭の構造を調べてみたいものです」

相変わらず表情に変化はないが、明らかに呆れている口調で言う塩川中尉に大和は、不満げに口を曲げた。

「塩川中尉……人を奇人変人みたいな言い方をしないでくれな
いか？」

「天才も見方を変えれば同じようなモノです」

「……実機試験はタイムスケジュール通り？」

相変わらず容赦がないなと思いながら、大和は尋ねた。

「はい。何事も問題が起こらなければですが」

「起こらない事を祈ろう」

まあ何となく色々と起きそうだが、と言うかもう起こっている
が……と、心の中でため息交じりに付けくわえた。

「はい。それと中佐。休暇前に私に申し付けられました例の資
料が纏まりました。今、ご覧になりますか？」

その言葉に大和は眼を丸くした。

「もう？ まだ一週間だぞ？」

「早急に、と申されましたので、早急に纏めました。どうぞ」

そう言って、数冊の薄い電話帳程に膨らんだファイルを大和に
手渡した。

大和が塩川中尉に依頼した資料とは、帝国軍は元より各省庁、更には在日国連軍から集めた個人データだった。目的は人材確保。いくら自分がチートな能力を持っていても一人である以上、限界は直ぐに見えてくる。故に自分をサポートしてくれる優秀な人材を揃える事は重要な事だった。

「在日国連軍本部は思いの外協力的でした。背後にどのような思惑があるのかは存じませんが、少なくとも中佐に恩を売っておきたい狙いがあるでしょう」

「だろうな。国連の研究開発団は今も熱心なお誘いをくれるくらいだから」

添えられた写真と経歴にざっと目を通し、しばらく無言でページを捲る。と、帝国軍内務省の項目で、一人の人物に目が止まった。長い髪の温和そうな女性が映っている。

「伊隅、やよい……」

聞き覚えのある名前だ。いや、自分の記憶が正しければこの女性は伊隅 みちるの姉、伊隅四姉妹の長女ではなかったか？

（現在は内務省地方局に勤務。経歴、人格共に問題なし。勤務評価、業務成績も軒並み優秀、と……しかしまあよくもここまで詳しく、これだけの人数を調べたもんだな）

波はあるが、一人当たりの個人データの内容がかなり濃密だ。それが約数百人分。それを一週間でこまできっちり調べ上げ、纏め上げた塩川中尉の事務及び分析能力は、希有な才能と言えるよう。

いえ、もはや必要不可欠だ。

「さっそく中佐の毒牙に掛かる人材を見つけられましたか？」

「……最近、さらに塩川中尉の言い方に容赦がなくなっているのは気のせいかな？」

「気のせいです」

「あつそ……」

嫌われていない。これも彼女特有の上司への敬愛表現であると信じたい。

（とにかく、事務処理能力は高いし人当たりも良いみたいだから……二人目の秘書官としては適任じゃないだろうか）

二人目と言うより秘書交代と言ってもいいだろう。塩川中尉は類まらない才能の持ち主の上、もう一つの顔　むしろ本業　を持っている。そっちの顔も使えるように鎧衣課長と交渉済みだからこれからしばらく塩川中尉には本業のほうで動いて貰いたい。この先に待つであろう、BETAとは別の戦いの為に、情報の入手と成否が重要になってくるからだ。

（この際だから、もう一人ぐらい秘書官を付けるか。ますます仕事は忙しくなるだろうし、分担させた方が効率もいいだろう……あつ、いつその事、伊隅　みちるを抜いた伊隅四姉妹を揃えてみるか？）

三女の伊隅　まりかと伊隅　あきらのデータは載っていないが、

記憶が正しければ伊隅 あきらのほうは本編終了後も衛士として活躍する筈だ。それにこのご時世、出来れば家族との時間は作っておいた方がいいだろう。伊隅 みちるも出来れば指揮官として欲しいが、既に魔女の手の中だ。

（そういえば、伊隅四姉妹は一人の男を巡って争っていたんだよな。名前は……えっと、誰だっけ……前なんとかだったよな）

ついでだ。そいつも引き込んでやるか？ 他人の色恋沙汰ほど眺めていて楽しいモノは無い。日々激務に追われている自分の癒しの一つなるだろう。

そんな他愛もない事に苦笑したのもつかの間、大和は自重した。いかんいかん。お遊びじゃないんだ。そういう事を考えるの不謹慎だ。自分が目指す”世界最優”の部隊にそう言ったものは不要だ。

（いや、待てよ……）

閃いた。ただ人材を”収集”するだけでなく、”育成”してはどうだろうか？ 流石に全ての分野を大和の手で”育成”するのは無理だが、操縦技術と言う衛士の一分野だけなら何とかなるんじゃないだろうか？

「（再考の余地ありだな） 塩川中尉。人材のリストアップだけど、訓練生のほうにも目を向けてくれないか？」

「……中佐。人材育成でもなさるおつもりですか？」

察しが良い。やはり彼女は優秀だ。大和は「まだ考え中だけどね」と言った。

塩川中尉が難色を示した。

「中佐。流石にそれは無茶です。たださえ帝国の国防計画のほとんどに関わっている中佐の仕事量を考えれば、とてもじゃありませんが人材育成にまで手が回りません」

「まだするとは言っていないさ。あくまでも予定。でも……打てる手は全て打っておきたい」

「……了解しました。それでリストアップの条件は？」

大和はその条件を伝える。塩川中尉は懷から取り出したメモに書き留めてゆく。

「了解しました。近日中に候補のリストアップを行います」

「急がなくてもいい。気楽にやってくれ。今、塩川中尉に倒れられたらお手上げだ」

大和の仕事量も膨大だが、塩川中尉の仕事量も膨大だ。いや、塩川中尉のサポートがあるから、大和は仕事を円滑に進められると判断している。言わば彼女は縁の下の力持ちだった。

「ご配慮感謝いたします」

「それで早速だが、この伊隅やよいを引き抜きたい。連絡と予定の調整を付けてくれ」

「了解しました」

「もし、彼女が引き受けてくれたなら、塩川中尉は彼女に業務一式の引継を」

「私は用済みですか？」

どこか愉しむ様な声に、大和は苦笑した。

「残念。塩川中尉のような優秀な人にはもっと働いて貰わないとな」

「……情報収集ですね」

「話が速くて助かる。流石は塩川中尉。これからオレの周りが騒がしくなってくるだろう。それを納める為に、塩川中尉にはオレの”眼”となり”耳”となってほしい。その為に手の掛かるオレの世話は別の人に任せたいんだ」

「なるほど……。武家と政界は当然の事、軍上層部にもキナ臭い動きがあります」

流石は情報省。そして鎧衣課長の部下だ。

「情報が早いな。まあオレの持っている情報網より、塩川中尉の情報網のほうが正確に掴んでいるみたいだな」

「分かりました。伊隅やよいが引き受け次第、そのご命令をお受けいたします。ところで中佐。一つ確認してもよろしいでしょうか？」

「何？」

「”眼”と”耳”だけでよろしいのですか？」

動いていた手が止まった。大和は塩川中尉の言葉の真意を、敏感に理解した。いつもと同じ淡々とした口調だが、その言葉の奥に秘める暗く冷たいモノが確かにある。

「西園寺中佐。既にご承知かと思いますが、私は”眼”と”耳”だけではなく、”手”としての訓練も受けております」

「塩川中尉。自分が言っている事を理解しているのか？」

「重々承知しております。ですが、正道だけでは成し得ない事があります。私はその方法を提案しているだけです。選択肢は多い方がいいでしょう？」

「……分からない」

ぎしりつと、大和は革張りの椅子に深く腰掛け、不可解だと言わんばかりに眉を曲げた。

「分からないな。塩川中尉。貴女の真意が見えない。どうして今になって自分の手札を見せたのか……」

「中佐。私には弟がいます」

「えっ？」

大和が目を丸くした。塩川中尉が大和の秘書官になって数年、初

めてプライベートを口にしたのだ。基本的に彼女は公私の区別をきっちり付けていて、家族やプライベートな事を聞いても何も答えてくれなかったからだ。

「先天性の病気ですつと病院暮らしです。父も母も既に他界した私にすれば唯一の肉親であり、かけがえのない大切な存在です。その弟が最近になってよく言っんです。『病気が治ったら、立派な衛士になって西園寺中佐みたいになりたい』と」

「……」

ずしりつと重い何かが大和に覆い被さってきた。それが何なのか、大和は嫌でも理解した。技術廠に出勤してこのオフィスに辿り着くまでに、幾多の人々から向けられてきた感情。”期待”、”希望”、”憧れ”などの穢れ無き思い。最初こそ、それを心地よく感じていたが、今は違う。優れた薬も使い過ぎれば毒になるように、この思いもそうだ。今では酷く重く、自分をじわじわと締め上げてくる。

「驚きました。狭い病室で、何も抱かなかった弟が、きらきらした目で私に言ったんです。本当に驚きました。あの時ほど、嬉しいと思っただ事はありません」

塩川中尉が笑った。普段の冷淡な印象は消えて、小さく、そして愛情の籠った優しい笑み。

思わず大和は見惚れてしまった。普段とのギャップの差があったが、それ以上に彼女の頬笑みが美しかったからだ。

「中佐。私は西園寺大和こそが人々を救える最良の選択であり、そして希望だと思っています。中佐の為にお役に立てる事は光栄の

極みです。どのような命令も喜んで実行します。 ただ、もし私に万が一の事があつたら……身勝手な事で申し訳ありませんが弟の事をお願いします」

塩川中尉が敬礼する。大和は無言で彼女のじつと見つめた後、体の力を抜く様に肩を軽く動かした。

「買い被り過ぎだよ塩川中尉。オレは自分が出来る事をやっているにすぎない。気持ちだけ受け取っておくよ」

「ですが 」

「塩川中尉。これ以上、この件に関しての議論はおしま 」

と、その時、部屋をドアをノックされた。

「どうぞ」

「失礼します。おはようございます西園寺中佐。塩川中尉」

「おや、おはよう。そして久しぶり。唯依」

「西園寺中佐……。軍務中は篁少尉でお願いしますと、何度も申し上げている筈ですが？」

「そうだったな。すまない」

むっとした顔の唯依に、大和は小さく笑みを浮かべて答えた。相変わらず堅苦しいほど真面目だ。必要最低限の規則さえ守ってくれば大和としてはとやかく言う事はないのだが。

「それでその手元に持っているのは報告書かな？」

「はい。試製対要塞級近接格闘戦斧の運用評価試験報告書です。提出が遅れて申し訳ありません……凄い量ですね」

机の上に山積みされた書類の山を見て、唯依が呻くように言った。

「帝国軍はオレを過労死させたいらしいよ」

大和を肩をすくめた後、唯依から報告書を受け取った。

「それで、使ってみてどうだった？」

ざっと報告書に目を通し始める。

「性能は申し分ありません。ですが、中佐の報告書と同じくある程度、慣れが必要です。SASがあつたとしても重量のせいで機体が振り回され、不必要な負荷が機体に掛かっています。詳しくは報告書に記載してあります」

「ふむ……長刀と比べて重さも長さも半端じゃないからな。やっぱり改良の余地ありか……」ご苦労さま。下がってくれ」

「はっ」

「あつ、ちよつと待った篁少尉」

唯依が敬礼し、部屋から退出しようとして踵を返した直後、大和が思ひ出したように声を掛けた。

「はい？ 何でしょうか？」

「これから少し付き合ってくれ。城内省で「武御雷」の最終会議が行われる。ぜひ参加して欲しい」

唯依は目を丸くした。

「よ、よろしいのですか？ そのような重要な会議に一介の衛士である私が参加しても？」

「構わない。むしろ是非参加すべきだ。「武御雷」で実戦を体験した貴重な衛士だからな。ぜひ意見が聞きたい」

「私の意見など参考になるとは思えませんが……」

「オレにしか見られない一面がある様に、篁少尉には篁少尉にしか見られない一面がある筈だよ。まあ、何も意見が出なくても参加して損はない筈だ。何れ、篁少尉にはプロジェクトの一つを任せようと思うから、今のうちの上層部やメーカーとのやりとりを見ておいたほうがいい」

史実では、若輩の身でありながら日米共同開発計画『XFJ計画』の日本側の開発主任に任された才女だ。今のうち、いろいろと教えておいた方がいいだろう。

「プロフ……？！ 私が！？ 本当ですか中佐？！」

「うん。何れだけだね。っと、そろそろ出ないと拙いかな？」

「はい」

塩川中尉が頷く。大和は立ち上がり、ぐっと体が伸ばした。

「さて……楽しい楽しい会議に行くとしますか ん、塩川中尉、何をしているんだ？」

「車中で処理していただく書類を仕分けしています」

「……わぁお」

大きめのアタッシユケースに書類を詰め込んでいく塩川中尉を見て、大和のやる気が失せたのは言うまでも無い。

（疲れた……）

斯衛軍次期主力戦術機「武御雷」の量産計画に関する書類を纏めながら、唯依は体に蓄積された精神的疲労を吐き出すように大きく息を吐いた。

初めて出席し、終わった軍の重要会議。だがその重要会議は極上と言えるほどのメンバーで構成されていた。城内省、斯衛軍、帝国軍、政府、企業の上層部が軒並み出席している上、唯依が座っている場所が大和の隣り。会議中から様々な視線を向けられ、緊張の連続だったのだ。意見するなんて到底不可能だった。

「感想は？」

富嶽重工の開発部長と話し合いを終え、戻ってきた大和が唯依に尋ねた。

「くくつ……聞くまでも無いか」

顔を見れば一目瞭然だった。

「中佐……」

「悪い悪い。でもいい経験になっただろう？ 篁少尉は体験したこれは最高の経験だよ。何せ、これ以上の豪華メンバーが一堂に会する会議は無いからな」

確かに。あれほどの高官達が集まる機会はほとんどないだろう。

「まあここを乗り越えたんだ。後は数をこなしていけば、空気に呑まれる事はないだろうさ。とにかく、これで案件が一つ消えた。少しだけ肩を荷が下りたよ」

「お疲れ様でした中佐」

「ああ。ありがとう。後は富嶽重工の頑張り次第だな。うまくいけば、半年で一個中隊規模の「武御雷」を揃える事が出来るだろう」

これは富嶽重工が急速に成長してきた事と、「夕雲」との部品共通があつたためだ。

「さて、と……もう昼か。篁少尉。一緒に食べないか？」

「はい。同席させていただきます」

唯依が書類を纏め終え、アタッシユケースに納める。いざ城内省の食堂へと向かおうとした瞬間、こちらに近づいている人物が目に入った。

「久しぶりだな西園寺大和」

「これは斑鳩様。お久しぶりです」

「っ?!」

大和がゆつくりとした動作で、唯依は慌てたように敬礼した。二人の前に現れたのは五摂家の一つである斑鳩家の現当主にして、斯衛軍最精鋭部隊を率いる指揮官、斑鳩瞬永であった。

「すまんが大和。少し私に付き合ってくれぬか？」

「はっ、了解しました。篁少尉。すまないが荷物を塩川中尉に渡しておいてくれ」

「了解しました中佐」

唯依と別れ、斑鳩を先頭に廊下を歩き始めた。そして廊下の一番奥にある小会議室に入った。

「どうだ？」

「問題ありません」

小会議室には、斑鳩の護衛らしき赤を纏った屈強な武人が二人、立っていた。

「よし。外にて待機せよ」

「はつ。失礼します」

敬礼してきびきびした動きで会議室を後にした。それを見送った後、斑鳩は大和に振り返った。

「用心に越した事はない、と言う事だ」

意味は分かるだろうと言う斑鳩の意味深な笑みを見て、大和はその意を理解したが、僅かに困惑した。

「盗聴ですか？　ですが城内省における盗聴行為は厳しく禁止されている筈です」

「表向きは、な。だが所詮は表向きだ。それに判明しなければ問題にはならん」

極論だが、まさにその通りだ。パンドラの箱を開けた事を知られなければ、開けた事にはならない。そして今、自分がそのパンドラの箱に開けようとしているのだと大和は理解した。いや、正確には開けさせられようとしている。

「……それでご用件とは何でしょうか？　斑鳩様」

「何、お前が抱えてしまった厄介物について、教えてやろうと思

つてな」

「厄介物……何のことでしょうか？」

「そうしらはつくれるな。お前の家にやってきた例の娘
煌武院家の存在しない娘の事だ」

大和は僅かに目を細めた。

第十五話 真相、悠陽と榊総理、そして唯依の気持ち（前書き）

もう……好き勝手にしてやる……。

もう……悩まない。

書きたいように……書いてやる……！

と、言うことで、第十五話、どうぞ。

第十五話 真相、悠陽と神総理、そして唯依の気持ち

正直に言えば、あれほど驚いたことはなかった。

休暇三日目。何故か少し困ったような顔を浮かべていた父親に呼ばれた。何だろう？ と首をかしげた大和だったが、書斎に通された瞬間、この場所に居るはずのない人物がいて目を丸くした。

誰が彼女を忘れることが出来ようか。白銀 武のヒロイン候補の中でも凜とした美しさと強さを持った少女のことを。そして原作の最後、劇的に散っていた彼女の事を大和が忘れる筈はなかった。

『双子を世を分ける忌み子』として、現政威大將軍 煌武院悠陽の妹として存在が認められなかった少女 御剣 冥夜が背筋を伸ばして座っていた。

えっ。なんで？ どうして彼女がここにいるんだ？

混乱し立ち尽くしていると、冥夜は大和に気づき、何か神々しいモノを見たような顔を浮かべた後、小さく笑って深々と頭を下げた。

そして母親も書斎にやってきて、座卓に腰を下ろした直後、父親はこう言った。

『今日から我が西園寺家で預かる御剣 冥夜さんだ。皆、仲良くしてくれ』

一瞬、何を言われたのか理解出来なかった。

だが徐々にその言葉の意味を認識した瞬間、大和の口蓋から悲鳴にも似た叫び声が木霊した。

「お前の元に御剣 冥夜を寄越したのは言うまでもなく、煌武院家だ」

五摂家の一つ、斑鳩家当主斑鳩 瞬永は小会議室に置かれていた机にもたれかかるようにして、話し始めた。

「……斑鳩様。今、煌武院家と仰いましたね？」

確認するように、西園寺 大和は尋ねた。

表情こそ落ち着いているが、内心は困惑し、無数の疑問が浮かび上がっていた。

なぜ、他家である斑鳩が煌武院家最大の秘密とされている冥夜
の存在を知っているのか。

なぜその冥夜が西園寺家に來た事を知っているのか？

いや、それよりも気になるのが、斑鳩の目的だ。何を理由にこ

の情報大和に伝えるのか。様々な過程を想定し、結果を想像する。だが情報が不足している為、予測が出来ない。それに真相は大和も知りたい所だ。ここは受身に回ろうと決めた。

「そうだ。煌武院 悠陽の思惑だけではない。煌武院家の思惑は二つ。一つは妹を守る為の姉の行動だ。数多い武家……いや権力者の中でも、西園寺家はもはや五摂家でも早々に手が出せぬ領域だからな。帝国内でこれほど安全な場所はあるまい？」

斑鳩がそう言い切る根拠は二つある。

一つは大和自身の影響力。

様々な新技術、新理論を生み出し、帝国に莫大な富をもたらした上、大陸派兵部隊と光州作戦での戦功は、軍のみならず世間からも完全に英雄視され、支持されている。これには軍がプロパガンダとして利用した影響も含まれている。

もう一つが、大和の背後にいる者たち、後援者と言つべき者達の存在だ。

大和を英雄視して持ち上げようとする軍と武家の派閥。政界では現内閣総理大臣の榊派。大和の技術とテコ入れによって急成長した日本三大軍需企業の富嶽重工、河崎重工、光菱重工、そして有澤重工などを筆頭とした財界の有力者達。

つまり、西園寺 大和と事を起こすなら、それらすべてが敵に回す覚悟が必要なのだ。

「今現在、帝国内部は今後のBETA戦略の方針の違いで、煌

武院家と嵩宰家を中心に対立している。煌武院派は帝国最大の武器であるお前の技術を利用して、国力を増強し、他国と連携して対BETA戦争に挑むに対して、嵩宰派は、これ以上の技術流出を危険と判断し、必要最低限の輸出のみに限定、自国の力を中心に対BETA戦争へ挑むことにある。要は目先は一先ず置いておいて、足元に集中するか。目先を考えて、足元に対応するかだな。状況は……拮抗している。ほんの僅かな力を込めれば、天秤は傾くだろうな……まあその僅かな力は、とんでもない力だが」

斑鳩はふつと笑みを浮かべて、大和を注視した。

つまりはオレか。と大和は心の中で呟いた。

これですべて理解できた。

要は煌武院派を切り崩す意味で冥夜を確保しようとしたのが嵩宰家で、それを察知した悠陽が手を回して、冥夜を大和に託したのだ。

そして冥夜を託すと同時に、大和を煌武院派に引き込む切欠を作ったのである。おそらくは西園寺家が、煌武院派に入ったであろう噂は密かに流れているだろう。冥夜が来た経緯を調べようと、大和が動いてしまっている行動も察知され、利用されただろう。

天秤は傾き始めている。

(……再確認と言ったところか。まあ、ここまで話せば誰でも分かるが、こいつはその先も見据えておるだろう……ならば気づくだろうよ。煌武院派のもう一つの思惑を……)

面白くなりそうだ。斑鳩はほんの一瞬だけ、口元に笑みを浮かべた後、話を続ける。

「それで大和。お前の方針を聞かせてくれぬか？ お前はどちら側につくつもりだ？ 私の予想では煌武院派だと思うのだが？」

「……夕食の用意ができていないのに、明日の朝食について論じても始まりませんよ」

「ほほう……なるほど。面白い返し方だ」

軽く肩をすくめて答えた大和に対し、斑鳩は満足げに頷いた。

先を見据えることは大切だ。それが戦略であるならば。だが今は目先よりも、足元に迫っている危険を全力を排除すべきだ。少なくとも大和はそう考えている。

それに悠陽と冥夜。引き裂かれた二人をあるべき姿に戻したいとも思う。

「なるほど。あい分かった。では我が斑鳩家はこのまま煌武院家を支援するか……。安心したぞ大和。お前がここで嵩宰派に着くと言い出したら、大慌てしていたぞ」

まあ、それはそれで面白そうだが。と斑鳩は内心で付け加えた。対して、大和は斑鳩の言葉を聞いて、少し呆れた表情を浮かべた。

「失礼かと思いますが……随分と軽いですね斑鳩様」

「軽くはない。お前と言う札がそれほどまでに強力だからだ。裏だと分かっている筈のコインを、強制的に表として認識させてしまっただけだ」

「……そこまでの力は流石にありませんよ」

「謙遜も度も過ぎると……だな。まあ建前ではそうだが、本音を言えば……権力争いもこの国がどうなるうとあまり興味はない」

「はっ？」

大和は耳を疑った。

「何だ？ それほどまでに不思議がる事か？ 武家だから、五摂家の斑鳩家だからと言って、皇帝陛下や政威大將軍、帝国、帝国臣民の為に戦わねばならないのか？ 生憎だが私の場合、そういうモノは外面にしか無くてな。私の本質は快樂主義者だ。自分が愉しければそれでいい。それ以上でもそれ以下でもない」

「……では、斑鳩様が煌武院派に着いた本当の理由とは何ですか？」

「お前だよ」

斑鳩が無邪気な子供のようになんて笑った。

「西園寺 大和と言う稀代の英雄が、これから何を成し、何を生み出し、何を招くのか……それを考えるだけでも、十分に私を愉ませてくれる。ああ、それにな、お前が作った「武御雷」

「。あれも良いな」

斑鳩が部屋の出口へと向かう。

「そうだ。一つ忠告とまではいかないが……九條のじゃじゃ馬娘には気をつけておけ」

「じゃじゃ馬娘？　巴様の事ですか？」

大和の脳裏に、自己主張が強いあの快活な少女の姿が浮かんた。

赤を纏う武家は五摂家に近い家に与えられる色で、西園寺家は九條家に属している。そして年齢も一つ違いと言うわけで、幼い頃は遊び相手を務めていたこともあった。

「ああ。あの娘、何かをやらかすつもりらしいぞ。嵩宰家の後ろにあいつの影がちらちらしていた。それにお前が煌武院家と親交を深めているのを快く思っていなかったからな」

「……」

大和は視線を外した。そういえば彼女ともう随分あっていない。行事でもお互いの都合で会えず仕舞いだ。

「あの娘。腕のほうは私より遥かに格下だが、頭のほうは中々に知恵が回るぞ。気を付けておけよ。大和」

「
斑鳩様」

ノブに手を掛け、扉を開けた斑鳩の背中に、大和が声を掛けた。

「最後に質問してもよろしいでしょうか？」

「何だ？」

振り返らず、斑鳩が尋ねる。

「斑鳩様は煌武院　悠陽殿下の味方ですか？」

「私はお前の味方だ」

ぱたんつと扉が閉められた。

小会議室に一人になった大和は、しばらく扉を見つめた後、深いため息をついて。

「厄介な事になってきたなあ……」

そう呟いた。

「榊総理。率直な意見を聞かせていただけますか？」

帝都城。謁見の間には政威大將軍　煌武院　悠陽が上座に座り、
下座には日本帝国内閣総理大臣　榊　是親がいた。

悠陽の手には、先日にかかれた対BETA次世代戦略兵器開発計画検討会議で提案された新兵器の詳細なデータが記載された書類があった。

「はい。殿下。正直なところ、殿下と同じく私もどう判断を付けるべきなのか、まだ迷っているところです」

「そうですか……私も、これほどの兵器となるとそう簡単に決断するわけにはいきませんから……」

悠陽は手に持つ書類に視線を落とした。ここ数日、悠陽はおるか榊総理でさえ、同じ案件に思い煩わせていた。

対BETA次世代戦略兵器開発計画検討会議は光州作戦を経て、BETAの物量を改めて危険視した大和が提案した新兵器を検討する会議であり、その会議で提案された新兵器は全部で三つ。

一つは性能を落とさず、大幅なコストダウンに成功した新型AL弾。大規模な面制圧を可能とするミサイル攻撃や艦船の艦砲射撃を邪魔する光線級はBETAの種の中でも最も厄介な存在である。故に対BETA戦闘において、重金属雲を発生させ、レーザーを減衰させるAL弾は必要不可欠な兵器であり、AL弾のコストダウンに成功した事は軍関係者のみならず、榊首相や大蔵省も喜んだ。必要性の高い兵器のコストダウンは莫大な戦費の低下に繋がるからだ。さらに言うなら、この兵器は外交上の新たな切り札にもなりうる。どこの戦場でも必ず需要があるからだ

二つ目に提案された兵器は特殊焼夷弾「テルミット+」。アルミ粉と酸化鉄で構成されたテルミット剤に特殊溶液を加える事で、約六〇〇〇度と言う核兵器並の高温を発生させる兵器だ。これは特

殊溶液を加えたテルミット剤の容量によって効果範囲を調整できる為、艦船のVLS（垂直ミサイル発射管）や戦術機にも搭載可能である。

（ここまでは問題ありません。問題はここからですね）

ページを捲る手が止まる。今まで出てきた兵器は拍手喝采で歓迎すべき兵器だろう。だが最後の一つが問題だった。

三つ目に提案された兵器の名はNN兵器。人類が手にしたG弾に次ぐ最強最悪の力、『核』を利用した新型戦略核兵器だった

既存の核兵器よりもさらに威力を高めた上、致命的な放射能汚染を極限まで抑えたこのNN兵器は、ただ単に対BETA戦略の観点から見れば、前述の二つの兵器と同じく歓迎すべき兵器であることは間違いない。だがこれほど強力な新兵器となると、人類社会はそう簡単には受け入れられない。

「西園寺中佐の話では急ピッチで進めば、二年から三年の内に完成できるとの事ですが、専門家の意見も同じなのですね？」

「御意。私個人で専門家達と相談した結果、西園寺中佐が提案した計画内容が順調に進めば、長くて三年半との事です」

悠陽が頷き、再度書類に視線を落とす。

（それにしても……）

と、榊総理は戦慄にも似た困惑の呟きを内心に漏らした。

様々な案件を抱え、日々忙しい毎日を送っている筈の西園寺大和が、一体いつどこで核関連の専門家達以上の原子核理論を身に着け、実現可能な新理論　　レーザー水爆　　を生み出せたのか。

いやそれ以前に感じる事がある。榊　首相は西園寺　大和と言う存在に恐怖を感じていた。勿論、防御的な、生存的な恐怖ではない。言うなれば危機感から来る恐怖だった。

世界でも類を見ない勢いで経済と軍備が整えられていく日本帝国。最前線国家でありながら食料自給率の高い数字を維持し、国民の生活は後方支援国家並に潤い、難民の密入国が徐々に増えている。そして、技術革命と言うべき彼のような新技術によって生み出された兵器は、右肩上がりで輸出され、ライセンス権利と共に莫大な外貨が流れ込んでくる。

（全ては……彼から始まった）

確認するように榊首相は胸中で呟く。

国家からの視点から見れば、彼は間違い無く至宝と言うべき存在だ。それは今の帝国が如実に証明している。だが敵視する国家、そして未来はどうだろうか。

「軍や議会はなんと？」

悠陽の言葉に、榊首相は意識を内から外へと戻した。

「紛糾しております。意見も見事に真つ二つに割れています」

「でしょうね」

予想通りの言葉に、悠陽は頷いた。

開発は十分に出来る。予算も捻出出来る。場所も確保できる。だが戦略兵器の開発はそれらの問題以上に、国内世論や同盟国、周辺国家の理解が必要だった。

国内世論は問題ないだろう。既に目の前にBETAと言う強大で恐ろしい敵がいる。だが同盟国や周辺国家はどうだろうか。

「周辺国の事はさておいて、これ以上の対米関係の悪化は避けたいところですね」

「はい。少なくとも私達にはまだ、米軍の戦力が必要です」

確かに、帝国軍は四年前までに比べて格段に充実していると言える。だが帝国軍だけで、ユーラシア大陸を支配する幾万幾億のBETAから、日本本土の長大な海岸線に防衛線を構築して守れるかと問われれば、悠陽と榊首相は守れないと断言する。少なくとも、日本本土が最終防衛線となっている間は、極東国連軍、そして米軍の戦力は必要だ。

だが、今現在。日本と米国の間に、少しずつだが亀裂が生じてきている。

日本の優れた技術を求めて各国から注文が殺到している上、次期主力戦術機開発を日本に打診している国家もあるのだ。

その結果、米国の兵器市場は徐々にダメージを受け始めている。そして米国は偏り始めた世界規模の兵器市場を元に戻すべく、日本

には技術の公開と西園寺 大和の国連軍出向を高圧的に命令し、各国には食料や兵器などの輸出制限をちらつかせて奔走している。

もしここで、米国が保有する最強の戦略兵器たるG弾に威力では及ばないが、致命的な後遺症が無いN兵器開発に着手すれば、米国との関係に、深刻な亀裂を生じさせるだろう。米国がどのようなアクションを取ってくるか、想像はつく。

さらに言うなら、周辺国のほうも問題だった。ソ連と中華統一戦線もまた反対の意思を示すだろう。彼らとは戦後の極東地域での発言力と軍事バランス、そして領海の問題が理由だ。

「榊総理。政治や外交的問題を脇に置いたとして、私はこのN兵器は必要な兵器だと思っています」

少なくとも通常の方法より、戦略兵器で敵の大部分を薙ぎ払っておけば、将兵の死傷者は少なくすむ。

「同感です。ですが、付属する問題は無視出来ません。国内外と問わず……」

「分かっています」

榊総理の言いたい事を理解して、悠陽は大きく息を吐いた。国外も厄介だが、国内も厄介なのだ。

「とにかくもう一度、皆を集めて検討しましょう。皆を集めてください」

「分かりました」

榊総理は一礼し、一先ず謁見の間を出た。

「総理」

「大山君。直ぐに閣僚を集めてくれ。殿下を交えて例の議題について検討する」

「分かりました」

去つていく部下の姿を見送り、榊総理は軽く体を伸ばし、虚空を見上げた。

「全ては鬼札……か」

それも自分達を傷つける可能性があるほどの。これから先、さらに難しくなる外交と内政に榊総理は未だ衰えぬ聡明な頭で思案した。

今でも、あの時は事は鮮明に覚えている。

放たれる無数の砲火。絶え間なく耳朵を打つ砲撃音。錯綜する無線。響き渡る怒号と悲鳴。滴り落ちる汗と乱れる呼吸。

地平線を埋め尽くす数のBETAが、土砂崩れの如く迫ってくる

る。戦車級の波が防御陣地を飲み込み、要撃級の前腕が、突撃級の前面装甲殻が、要塞級の触手が、人類の刃を次々と叩き折っていく。

迫り来る地獄としか言いようのない光景だった。だが、MBF-TYPE98F「武御雷」を操る篁 唯依に絶望や恐怖はなかった。

いや、恐怖は確かにあった。だがそれ以上に唯依の心を占めていたのは希望だった。

突如として、唯依の視界に赤い閃光が奔る。脳がそれを認識した次の瞬間には、無数の肉片と体液が宙を舞った。

醜悪な肉片と体液に彩られ、幾度の突撃を繰り返して尚、被弾することなく隊列へと帰還する真紅の「武御雷」。ただでさえ目に付く存在だが、今はさらにその存在感を周りに知らしめている。両手に携える巨大な戦斧は、人類を無秩序に殺して来たBETAへの断罪の刃であり、それは疾風怒濤の如く、縦横無尽に振り下ろされる。

「……あつ……」

ドクンツと唯依の心臓が大きく高鳴り、言い様のない高揚感に支配された。吐息が漏れ、操縦桿を握る手に力が入った。

己を害しようとするモノは言うに及ばず、己の眼前を遮るモノ、己の意思を邪魔するモノは、真紅の閃光と共に斬り刻まれ、吹き飛ばされていく。

まるで戦神だ。

唯依は小さく呟いた。

『ストライク大隊は右翼、バームズ、アイス、シーグルズ隊は左翼、中央はブラッディ、ロンド、アーノルズで当たる。全機、BETAを殺すのではなく、足止めを優先しろ！ 撤退中の支援砲撃部隊と機甲大隊は可能な範囲で支援をしろ。安心しろ。皆、生き残れる！ 今、ここにいる仲間を信じる。自分自身を、そしてオレを信じる！』

『『『了解！！』』』

嬉々とした受諾の意思を感じる衛士達の声が響く。

誰が想像出来ようか。

ほんの数十分前、この活力に満ちた声を放つ衛士達の半数が、絶望に彩られた姿があったことを。

己を導いてくれる指揮官が、苦楽を共にした仲間がBETAに殺され、己自身も後を追う寸前だったところを、彼は救い出し、臨時に自分の指揮下に入れて、部隊を編成した。その数は徐々に膨れ上がり、今や戦術機だけでも二個大隊を超えようとしていた。

そして今や彼は 帝国斯衛軍西園寺 大和少佐は、その存在と卓越した指揮、未来を見越しているような鋭い観察眼で、救い出した衛士達の絶対の信頼を獲得していた。

唯依も含めて、彼らはある共通の感情を秘めていた。

この人に付いていけば恐れることはない。それは願いでも希望ではなく、確信だった。

『アイス5よりサイオンジ少佐へ。私が言うのも何ですけど、どうですか。国連軍に来てくれませんか？ どうにも国連のくそつたれの能無し野郎の下で戦うより、貴方の元で戦うほうが何倍も具合がいいみたいですから！』

『ほう。驚いた一介の少尉が少佐を勧誘してくるとは。そんな軽口を叩けるのなら、まだまだ戦えるようだな少尉？ ちなみに君の勧誘を受けた場合、何かプレゼントでもあるのかな？』

『そうですねえ……あつ、私、つてのはどうですか　　つてくたばれこの皺野郎おおおお！』

『アーノルズ3よりアイス5へ。残念だったな。少佐はグラマラスな女性が好きらしい。少佐、我が部隊の花が三輪、是非とも少佐と親密な関係になりたいと申し出ておりますが、如何いたしましょうか？』

『それは身に余る光栄だな……ストライク大隊は遅滞戦闘を行いなから一キロ後退せよ。ロンド、アーノルド隊、これより私とブラッディ03が突入し、引つ掻き回してくる。出来る限り敵を行動不能にしろ！』

唯依の心臓を大きく高鳴った。

『イエツサー。少佐のご命令とあれば！』

『アーノルド隊。仰せのままに！』

『篁少尉』

何故かこの時だけ、『唯依』と呼んでほしかった。自分から軍務中は『篁少尉』と呼ぶようにお願いしたはずなのに。だがその疑問を考えている暇は無い。もうすぐ自分は、この世で最も危険で最も安全で、最も素晴らしい殺戮劇場の、ただ一人のパートナーであり観客となるのだ。

「はっ！」

『行くぞ。付いて来い』

唯依の口元に、自然と笑みを広がった。時間にすればそれほどないだろう。だがこの間だけ、自分はこの人を独占できる。

「了解！」

恐怖は完全に消えた。そして希望も小さくなった。心を大きく占めたのは歓喜と興奮だった。

真紅の「武御雷」が再び先陣を切り、その背中を追うように山吹色の「武御雷」が往く。

立ちはだかるは、数十倍の敵。虐殺と死の壁。だが何を恐れる必要がある。たかが数十倍の敵だ。

真紅の閃光が爆ぜる。弾け飛ぶ虐殺の壁。

「……っ！」

ぞくりつと、全身に快楽にも似た何かが奔り、体が熱くなった気がした。

「唯依」

「っ、はい！」

「どうした？　ぼーっとするなんて珍しいな？」

薄暗い部屋。その中央に置かれた大和お手製の戦略シミュレーションテーブルを挟んで、大和と唯依が向き合っていた。

「も、申し訳ありません。以後、気をつけます」

唯依は深く頭を下げた後、自分の頬を軽く叩いた。愚か者。目の前に集中しろ、と自分を叱咤した。

「ん。じゃあ、授業を続けようか」

大和はさほど気にした様子は無く、話を続けた。戦略シミュレーションテーブルには、光州作戦の作戦地域である朝鮮半島の地図が表示され、帝国軍、国連軍、中華統一戦線軍、BETA群がそれぞれのアイコンで表示されている。

今、大和がやっていることは実際の作戦を元に、唯依に戦術を

教えているところだ。

大和の方針としては、唯依には大和直属部隊の指揮官になって欲しいと考えていた。原作でも彼女は戦術機研究所所属の精鋭部隊ホワイト・ファングス中隊の指揮官を務めていた上、光州作戦前にキャピタルを注ぎ込んで強化したチート能力、指揮官：Sの観点から見ても、十分に指揮官としての才能があると確認している。

「以上の点から、A地点の防衛はあと数十分、持たすことが可能です」

大和が出した例題に、唯依はここ数日で学んだことを活用して、作戦を提案した。

唯依の飲み込みの速さは素晴らしい物だった。和紙に水が染み込む様に、次々と大和の戦術　つまりは、チート能力による人類史上最高の戦術理論　を吸収していた。

「うん。上出来だ。ところで何か気づいたことはあるかな？」

「はい。と言いますか再認識です。やはり致命的なほどの戦力の差です。こちらがどれだけ優れた地形と兵器を確保していたとしても、後手に回ってしまいます」

「正解。BETAの最大の武器は強靱な生命力でも環境対応力、レーザー攻撃でもない。その物量だ。戦の基本は敵よりも多くの兵を集める事に限る。やつらはその基本に忠実と来た。厄介な敵だよまったく……」

こつこつとシミュレーションテーブルを叩く。

「寡兵を持って大軍を討つ。歴史上、その方法で勝利を得た戦いは多くあった。だが、BETA相手ではそれが通じない。何せ、人間が想定できる数を大きく上回っているんだからな」

「はい」

それは実戦でも、今行ったシミュレーションでも嫌と言うほど実感した。本当に厄介な事この上ない。BETAは、ひたすら前進するだけの戦術しか使わないが、それでもどれだけ穴を開けても、その物量で直ぐに塞がれてしまう。

「状況は絶望的だ。だが、それでもオレ達は勝たねばならない。分かるな唯依」

「はい」

「よろしい。今日はここまでにしよう。それにしても、唯依は吸収が速くて教え甲斐があるよ。もしオレが戦術理論の教授なら百点満点を上げるところだな」

大和が手元のコンソールを操作して、部屋の照明を点灯させた。

「では、レポートを提出したほうがいいですか？ 西園寺教授？」

「勘弁してくれ。今でも山のような書類と格闘しているんだからさ」

肩をすくめて言った大和。唯依は小さく笑った後、大和と共に

部屋を出た。

「中佐はこれからどちらに？」

「河崎重工。「F-15」の件で呼ばれているんだ」

唯依が少し思案する。

「それは確か……河崎重工で進めているSMFを内蔵した「陽炎」の改修計画ですね」

セミムバブルフレーム

「ああ。正確には強化改修計画だけどね。富嶽は「武御雷」の生産を担当して、光菱は海軍専用戦術機開発計画を担当して、河崎は外貨獲得を目的として日本製の「F-15」を担当しているからな。はあ……それにしても体がいくつあっても足りないなあ」

「中佐は帝国にとって必要な人ですから。少し休まれてから行かれてはどうですか？」

「そうしたいけど、河崎も含めて三大メーカーには色々と便宜を図ってくれているからね。まあ、頑張るさ」

大和は苦笑して答えた。

（後、帰りには遠田技研と有澤重工にも顔を出しておかないとな。例の機体もそろそろ仕上がるし……調整と実機テストもしておかないと……）

「お体だけは気をつけてください。中佐が倒れたら帝国の一大事です」

「そいつは言い過ぎだな。でも、気をつけるよ。唯依はこれからどうするんだ？」

「私はシミュレーションルームに行きます。もっと鍛錬を積まなくては、中佐のお役に立てませんから。では、失礼します西園寺中佐」

「ああ……つとそういえば唯依」

「はい？」

シミュレーションルームに向かおうとしていた唯依が振り返る。

「今、気づいたんだけど、今日は怒らないんだな」

「はい？」

何のことだろうか。唯依は小さく首をかしげた。

「気づいてない？ 今日はずっと唯依って呼んでいるのに、一度も注意してこないな」

「あつ……」

そういえばどうして注意しなかったのだろうか。公私の区別はきちんと付けている筈なのに。

だが、唯依は薄々だが自分の気持ちに気づいていた。要は篁唯依は名前で呼んで欲しいのだ。

唯依はその事実、頬を少し赤く染めた。

「何か深刻な悩み事でもあるのか？ オレに相談しにくいなら、巖谷大佐にでも話してみたら？」

対してそんな唯依の気持ちにまったく気づかない大和は、心配そうに言った。

「いえ……大丈夫です。中佐。その……呼び方の件ですが

」

この際だ。言ってしまえ。と心の中の誰かが告げ、唯依は意を決して声に出した。

「中佐」

「あつ、伊隅中尉」

だが、唯依の決心はあっさりと邪魔された。

玄関へと続く廊下からこちらに向かって近づいてきたのは、塩川中尉から秘書業務を引き継いだ伊隅やよい中尉だった。

「お時間が迫っています。お急ぎを」

「分かりました。じゃあまた明日な唯依 じゃなかった

篁少尉」

大和がやよいと共に玄関へと向かった。その途上、何か目を通

書類があるのか、やよいが何かを話しながら、大和に書類を手渡していた。

「あつ……」

唯依は思わず手を伸ばしたが、ゆつくりとその手を戻した。そして何かを堪える様に視線を巡らした後、唯依はシュミレーションルームへと足を進めた。

「こちらが塩川中尉から送られてきました人材リストです」

「ありがとう」

前後を護衛車に囲まれた車中。大和はやよいから手渡された新たな書類に目を通し始めた。

（相変わらずいい仕事をしてくれな。塩川中尉は）

大和の秘書官をやよいへと引き継いだ塩川中尉は今、大和の目となり耳となつて政界や財界、そして軍の動向を探ってくれている。正直、大和自身のコネで手に入れる情報よりも早く、それでいて正確なので大和は非常に重宝していた。

（そして伊隅やよい中尉もまた良い仕事をしてくれる）

隣に座るやよいをちらりと見る。業務能力は塩川中尉に及ばないものの、何かを気が利く上、淹れてくれるお茶やコーヒーが塩川中尉よりはるかにうまいのは素晴らしい。やはり秘書官の必要な技能の一つとして、お茶やコーヒーを旨く淹れるスキルも重要だと考えるようになっていた。

と、帝国軍に今年入隊する訓練生の名簿を見ていた時だった。大和は思わず「んっ？」と声を漏らし、ページを手早く捲った。

「どうかされましたか？」

「ちよつと待ってもらえますか？」

まさかな、と思いながら、大和がページを捲ること数秒。ようやく目当てのページを開き、貼り付けられている写真を見て、大和は心底驚いた。

いや、これは十分に考えられる可能性だったのだ。戦う社長リンスの有澤隆文がいたのだ。他のキャラクターがいてもおかしくない。

「ふふっ……」

思わず大和の口元に笑みを浮かんだ。この際、過程はいいだろう。彼女を見つけられたのはこの上ない僥倖だ。それに彼女は間違いないく、自分が目指す”世界最優”の部隊に相応しい原石だ。

「まさかこの世界にもいるとな 紅月 カレン……」

証明写真なのに、きつとこちらを睨む様に映っている彼女の顔

とは対照的に、大和は満足げに頷いた。

第十五話 真相、悠陽と榊総理、そして唯依の気持ち（後書き）

どうも皆様。お久しぶりです。最近恐ろしく不定期更新になっているのでございます。

まずは戦略兵器に関する様々なアイディアを出してくださった皆様に、感謝の言葉を述べさせていただきます。ありがとうございます。

さて、本当にネタをまとめて、物語を作るって難しいですね。何度書き直した事か。小説の難しさを改めて実感しました。加えて五年愛用したPCが謎の故障により、データが飛んでしまつて、秘蔵のデータと共に書いていた作品も死亡。それでさらにやる気がなくなつて、今に至ります。

まあ消えてしまったものを仕方ない。それでも完結を目指して頑張ります。

この先、色々とおかしいだらこれ！」と言う部分も出てきますが、暖かい目で応援をお願いします。

さて次回ではチート能力のことと原作キャラに加えて、カレンを登場させる予定です。カレンは絶対に登場させたいと思つていました。だって、「弾けるBETAああー！！」とか言わせたいし、でれつとさせたいし、唯依と競わせたいし、紅蓮はやっぱりカレンだろうとかまあ色々と考えていた次第です。

あつ、ちなみに人間を完璧に超越していらつしやる朱雀は出す予定はありません。私は彼が嫌いですから。ルルーシュは出せたらいい

いなあとか思ってます。

．．．．．それにしても恋愛要素を書くのって難しいなあ．．．
．．．。

まあ、こんな分けの分からんあとがきを書いてしまっているんですが、これからも頑張って創作を続けていこうと思いますので、
よろしく願いします。

第十六話 白い刃とチートな能力の再確認（前書き）

前話でカレンを登場させることを予告していましたが、次話に持ち越します。

そしてその次話ではどばつと原作キャラが登場する予定となっております。

では、第十六話 どうぞ～

第十六話 白い刃とチートな能力の再確認

一九九八年三月二十九日一一〇五時 帝国軍技術廠戦術機技術開発研究所 シミュレータールーム

「っ！」

完全に弄ばれている。帝軍内でも最精鋭部隊と誉れ高い富士教導隊に並ぶとされている戦術機技術開発研究所所属の白い刃部隊ホワイト・エッジの隊長、永瀬 京中尉は唇を噛み締めた。

後一步。後一步のところでもレテイクルから外れてしまう。仲間との連携を利用して巧妙な罠を仕掛けても、敵はまるで全てを見透かしているかのように真紅の機体を翻し、視界から消えてしまう。

こちらはMBF・TYPE94「夕雲」。向こうは斯衛軍正式採用の次世代戦術機MBF・TYPE98F「武御雷」。スペック差は明白だが今回のシミュレーターに限り、「武御雷」は「夕雲」と同じスペックに調整されている。と言うことは、自分がこれだけ敵を捕らえることが出来ず、そして照準に入れないのは単純に技量の差だと言う事か。

「ホワイト・エッジ1よりホワイト・エッジ5。目標の右より

」！

『ぐあっ！？』

「エッジ5?!」

エッジ5の、「夕雲」の頭部が突如として飛んだ。「武御雷」の両碗側面に装着されたアンカー射出兵器「飛燕爪牙」の一撃だ。戦場は都市部。これだけ障害物や遮蔽物が多い中、俊敏な機動を行いながら、ブースター付きワイヤーで繋がれた射出兵器を飛ばし、寸分違わず「夕雲」の首を穿ったその技術。永瀬中尉は戦慄を覚えずに入られなかった。

エッジ5を片付けた「武御雷」はすぐさま、残っているもう片方の飛燕爪牙を発射してビルの壁面にアンカーを打ち込み、ワイヤーを巻くのと合わせて跳躍ユニットを噴射させる。そして上がり切る前に手元に戻したもう一方の飛燕爪牙を再度射出して、別のビルの壁へ打ち込み、移動する。

『くそつ。まるで猿じゃねえか!』

部下の忌々しげな言葉が漏れる。

残っている白い刃中隊の面々が各々の場所から突撃砲を乱射し、無数の火線を宙に奔らせる。が、その不規則で予想が出来ない機動は、弾丸は当たることなく虚空へと吸い込まれていく。

「ホワイト・エッジ1より各機。このままでは私達の面目は丸潰れだ! 何としてでも落とすぞ!」

『『『了解!』』』

永瀬中尉にしても、部下にしてもこのままやられるわけにいかなかった。我々は富士教導隊にも匹敵する白い刃部隊。その部隊が

たった一機の敵相手に、武器を使われずに全滅させられたなんて冗談ではない。

そう。真紅の「武御雷」は今だ背中に背負った97式振動刀も突撃砲も使っていない。今までの戦闘で五機が撃墜されたが、その全てが両手足を使った格闘攻撃か飛燕爪牙でやられている。

（ それにしても、『真紅の閃光』とはよく言ったものね）

味方機と連携しながら、永瀬中尉は齒がゆい思いと共に、賞賛を口にした。

彼の二つ名。誰が付けたか知らないが、中々に良いネーミングセンスだ。真紅の影を捉えても直ぐにその視界から消え、突然現れたと思えば、いつの間にか撃墜判定を受けている。まるで閃光。基本に忠実な、それでいて途轍もない高度な次元で行われているヒットアンドウェイ戦闘。

（おそらく私達は勝てない。でも一矢報いてみせる！）

大通りの中央に真紅の「武御雷」が着地する。その姿はどこからでも掛かって来いと言わんばかりに、威風堂々としている。だが白い刃中隊の衛士達は容易に踏み込めなかった。何故なら真紅の「武御雷」を改めて直視した瞬間 イメージが白い刃中隊の脳裏に飛び込んできたのだ。それはもちろん、自分達がどのようにやられるか、と言う予定調和のイメージ。

「 ホワイト・エッジ0より全機へ。私に続け！」

意を決し、永瀬中尉の「夕雲」が先陣を切る。指揮官が先頭に立つなど愚の骨頂と言ふべき行いだ、部下達が真紅の「武御雷」から放たれる気に飲み込まれている以上、片足でもいいから抜け出す切欠が必要だ。故の先陣、故の突進だった。

永瀬中尉の勇敢な行動は功を奏した。部下達が動き出す。作戦はうまくいった。

突撃砲を捨て、97式振動刀を背中から抜きながら跳躍ユニットを全開にして近づく。見る見るうちに真紅の影が近づき、自分達がやられるイメージが明確に、それでいて激烈に叩き込んでくる。

だがイメージはあくまでもイメージだ。現実ではない。それに敵の操縦技術がどれだけ馬鹿げていても、同じ人間だ。ならば敵がミスをする可能性もあるだろう。

「はっ……」

永瀬中尉は自らを嘲笑した。敵のミスに期待するなど新米の衛士がすることだ。だがそれに期待しなければ、この敵に一矢報いる事も難しいだろう。それほどまでに自分とアレとの差はあるのだ。

開始から約十五分と十二秒後。白い刃中隊十二機は撃墜され、壊滅した。真紅の「武御雷」にはミスはなかったが、振動刀を使わせることに成功したから永瀬中尉は一矢、報いることは出来た。

「ホワイト・エッジ中隊。西園寺 大和中佐に対し敬礼！」

シミュレーターが終わり、隣の待機室に移動した永瀬中尉率いる白い刃中隊は敬礼して、『真紅の閃光』と言う二つ名を持つ西園寺 大和中佐を迎えた。

「ん。まずはホワイト・エッジ中隊の衛士諸君。新兵装のシミュレーターテストに協力してもらってありがとう。心から感謝している。それにしても、流石は白い刃中隊だ。中々に手こずらせてくれた」

その言葉に全員が眉を潜めた。手こずらせてくれた？ 誰がどう見ても中佐の圧勝だったでは無いか。おかげで自分達の誇りは見事に砕けたというのに。

「……中佐。私の見る限り、中佐は楽に私達を撃墜したように思いますが？」

「それは違うな永瀬中尉。私は焦っていた。少なくとも富士教導隊一個中隊より君達のほうが強い」

「中佐は富士教導隊とも戦ったのですか？」

「条件は少し違うがな。お互い「夕雲」で一对十二。所要時間は十分ちよいだったかな？」

怒るとか憎いとかの話を超えて、呆れて声が出ない白い刃中隊の面々。あまりにも馬鹿げている。どうやればこの人物に勝てるのか、想像が付かなかった。

「　　ところで中佐。あの新兵装……飛燕爪牙でしたか？
アレはいつごろ実戦装備されるのでしょうか？」

「おや、使ってみたいか永瀬中尉？」

「私も含めて、中隊の皆が使ってみたいと思っています。随分とトリッキーな使い方をされて撃墜されましたから私達は」

永瀬中尉は最後の戦闘を思い出す。あれが本当に戦術機同士の戦闘だったのか、今でも信じられなかった。

何故なら大和は、飛燕爪牙のワイヤーを「夕雲」に巻きつけ、西部開拓時代のカウボーイのように振り回して別の「夕雲」にぶついたり、破片を利用して、即席の西洋武器、鉄球を鎖の先につけて振り回すモーニングスターを作り出し、撃破していたからだ。

「発想の転換だよ。戦術機が人の形をしている以上、人間に出来ることはほとんど出来るさ。まあ、それじゃあ使って見るか？」

「えっ？」

大和は隠し持っていたディスクを永瀬中尉に投げた。

「これは？」

「飛燕爪牙のシミュレーションデータ。実はシミュレーション試験と共に白い刃中隊に評価試験を依頼するつもりだったんだ。その様子だと受けてもらえそうだな」

おおー。と部下達から声が漏れた。反応が良いようだ。

「論ずるに及ばずのようですね。分かりました。ご依頼のほう、お受けさせていただきます」

「ありがとうございます永瀬中尉」

敬礼した永瀬中尉に、大和は答礼する。

「さて、私はこれで失礼する。あつ、永瀬中尉。すまないが貴女だけ残ってくれ」

「はい。白い刃中隊、西園寺中佐に対し敬礼！ 解散！」

部屋を出て行く衛士達。少し早いが昼食を取りに行くのだろう。

「
永瀬中尉」

永瀬中尉と二人つきりになったのを見計らって、大和は話しかけた。

「はい。何でしょうか中佐」

「単刀直入に言おう。私の部隊に来ないか？」

「えっ……?!」

突然のオファーに永瀬中尉は文字通り、目を白黒させて驚いた。

「貴女のプロフィールを見せて貰ったが、素晴らしい指揮能力と操縦技術だ。加えて人望も厚い。どうか私の部隊に来て、私を支

えて欲しい。頼む」

そう言っで、大和は頭を下げた。流石の永瀬中尉は慌てたが、その言葉と動作には真摯さがにじみ出ている。

「顔を上げてください中佐！ その……少し考えさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「ああ。そうだな。いささか急だったか。だが出来れば三月中に返事が欲しい。それでいいか？」

「はい」

「ありがとう。返事を待っているよ」

大和は敬礼して、部屋を退出した。

見送った永瀬中尉は確かめるように、こつ呟いた。

「私が……あの人に部隊に……」

「……ぶはあああああ！」

待機室を出てしばらく。廊下の左右を見渡し、人気が無いことを確認した大和は大きく息を吐いた。

「　　おおおお……感動したよ興奮したよ！　あのケイ・ナガセに会えるなんて……くううううう！」

大和は感動に震えていた。あの名作と名高いA　E　COM A　5から、最終局面で「もう少しだけブレイズの2番機でいさせて……」と言う気丈な彼女がつい漏らした女性的な一面を見て、一気に虜になった大和にしてみれば、彼女との出会いはまさに天にも昇る気持ちだった。もしここが廊下でなければ「いやああ！！　ケイ・ナガセと話しちゃったああ！！」、「羨ましいだろうとおまえらああ！！」と言って、ニヤニヤ顔にゴロゴロと転がり回っていただろう。

「もし彼女がオレの部隊に来て、名台詞を言われたら……オレは耐えられるだろうか……むふふふふ……！」

傍から見れば完璧に怪しい人間にしか見えない大和。しかしそんなのお構いなし。気持ちが見事に体に表現され、うきつき気分のスキップで地下格納庫へと目指した。

人の気配を感じた直後、大和はすぐさま体裁を整え、佐官として貫禄を周囲に示していた。この辺りの変わり様は実に見事だった。

「ようこそ西園寺中佐」

三十代後半の若い技師が携帯用端末を片手に挨拶をした。

「ご苦労様です」

戦術機技術開発研究所の第三格納庫。研究所が持つ格納庫の中でも一番広いスペースを持つ第三格納庫には、米国からある程度、分解して海上輸送された戦術航空機動要塞「XG-70b」が格納されていた。但しスペースの都合上、元の状態に組み上げることが出来ず、分解されたまま並んでいた。

「解析のほうはどうですか？」

本当なら大和直属の研究機関である特殊技術開発室に運びたいところだが、流石にこれだけの巨大な兵器を収める格納庫は持っていない。結果、戦術機技術開発研究所の格納庫を間借りする形になっている。

「概ね終了しました。西園寺中佐の予想通り、主機関は見事に抜かれていました。おかげで起動させるのも苦労しましたよ」

技師は肩をすくめて言った。

大和にしてはそれは予想通りの展開だ。それに「XG-70b」の主機関であるML機関△アコック・レヒテがあつたとしても、燃料たる 그레이・イレヴンが無ければ意味は無い。

「新型機関の開発具合は？」

「タイムスケジュール通りです。動力班は今頃、設計図片手に熱い議論を交わしているころでしょう。来週ぐらいには試作一号機の製作に入ります」

「各種兵装は？」

「そちらも概ね順調ですが……中佐」

不意に技師が大和に近づいてきた。その顔は何と云うか、納得していないような、信じられないような……とにかく複雑な顔だった。

「何ですか？」

「計画書を拝見した時から思っていたことなんです……本気ですか？」

まるで大和の正気を疑うような顔と声で尋ねる技師。大和はむっとした表情を浮かべた。

「だから何が、ですか？」

「いや、ですから……本気で有澤重工の社長さんが作った”アレ”をこいつに積む気ですか？ 如何せんあれは何と言いますか……趣味に走り過ぎていると言いますか、色々と馬鹿げていると申しますか……」

何を言い出すかと思えば、と大和は思わず不満を顔に出した。アレを馬鹿にすると云うのか。アレほど有澤重工の浪漫と趣味が入りまくっている武器はないと言っのに。

「そうですか？ 私はなかなかいい兵器だと思いました。が、あれ一つあるだけで軍団規模のBETA相手にも十分な弾幕を張れ

ますからね」

「……あれは”弾幕”と言うより”爆幕”と言う表現が正しいですよ……」

技師は嘆息交じりに答えた後、持っていた端末に視線を落とし、

「まあその辺りの話は置いて……こいつの試運転はまだまだ先か……」

大和は視線を上によった。大和の前にあるのは「XG-70b」の胴体部分、つまり絶大な威力を誇る荷電粒子砲を内蔵する部分だ。両腕は切り離され、三胴型の船のような脚部は隣に固定されている。

「仕方ないですよ。研究所の電力の大半を回さなきゃ動かせない大食らいですからね。主機関が完成するまでは個々のテストのみで対応するしかないでしょう」

技師の言葉に大和は頷く。

（何はともあれ、出来る限り早く完成させたいところだな……計画の遅滞を防ぐ為にも本土上陸戦は、ますますBETAの上陸を許すわけには行かない。呉工廠で進んでいる「高天原」は間に合うだろうか……）

大和を腕を組み、「XG-70b」を眺めながら、考えこむ。あとどのくらいの時間が残っているのだろうか。原作通りなら後三ヶ月しか残っていない。いや、もしかするとそれよりも早いかもしれない。

れない。これも全てBETA次第とは、何とも最悪な話だ。

（とにかく手札を揃えないとな……電磁投射砲の量産化も急ピッチで進めて、レーザー蒸散塗膜技術の改良に……）

大和はぶつぶつと呟いて、今後の確認を行う。

悩むなら行動する。それが大和の基本方針だ。とにかく出来る限りのことは素早くやろう。またしばらく忙しい毎日になるうがここまで来たのだ、頑張るしかない。

その後、大和は技師と今後の計画の打ち合わせを終え、特殊技術開発室への帰路に付いた。

一九九八年四月三日　〇八一〇時　帝国軍技術廠副局長室

出勤して直ぐ、大和は上着を脱いで書類の処理に取り掛かった。今日は待ちに待った特別な日だ。面倒臭い書類仕事は速めに終わらせて、万端の状態を迎え入れたい。速読で書類を読み、サインを入れていく単調作業をしばらくこなしていると、ふと、ここ最近自分のチートな能力を確認していなかったことを思い出した。

「んー……まあせっかく思い出したことだし……」

幸いなことに書類はそれほど多くない。多少、時間を割いても問題は無いだろうと判断して、大和は虚空を見上げ、「ステータス画面展開」と呟いた。

その瞬間、どういう原理で映し出されているのか、大和の目の前にチートな能力を強化できるステータス画面が展開された。

開いて直ぐ、右上に表示されているであろうキャピタルを確認した。

3 , 2 0 1 , 7 6 2 p t .

それが今現在の大和が所有する総キャピタル数だ。

「ふうゝむ……」

一瞬、大きく目を見開き喜びの表情を作ろうとした大和だったが、直ぐに眉を潜め、こつこつと持っていたペン先で机を叩きながら、唸り声を上げた。

総キャピタル数は、ついに目標としていた三〇〇万を超えた。それは喜ばしい事だ。おそらくは光州作戦の戦果、電磁投射砲の完成やら何やらで大量のポイントを獲得できたのだろう。とにかくこれで地球から遠く離れたアステロイドベルトに放置されている、神が用意したチート爆発確実な超巨大宇宙戦艦への移動が可能となったわけだ。

この世界をBETAと言う圧倒的脅威から救うには、超巨大宇宙戦艦の戦力と艦内設備は強力な武器となろう。この時代の技術力では到底実現不可能な幾多の兵器を生み出すことが出来る。本来な

ら直ぐにでも移動したかったが、大和には無視出来ないある問題があった。

「……問題はあの爺さんが用意したものなんだよなあこいつは……」

深い……途轍もなく深いため息をつく大和。

少し前に考えていたことだった。何かとミスを連発して訂正。ほぼミスしかしていないあの神が用意したものだ。この巨大宇宙戦艦にも何かあると思っても仕方ないだろう。

例えば、巨大宇宙戦艦に行つたのはいいが、起動させるには大量のキャピタルが必要です。とか。

艦内設備の使用にはキャピタルが必要です。とか。

そのある筈の艦内設備がない。とか。

とにかく考えられる様々な不手際やミスが大和の脳裏を駆け巡り、決断を躊躇わせていた。

「あゝ……やっぱりのあの爺様は駄目だ……」

大和は改めて深いため息をついた。

おかしいじゃないか。神様と言うのは、素晴らしく聡明で理知的で、それでいて慈愛に満ちているものじゃないのか。しかし自分の傍に居るのはミスばかりして、拳句の果てには何故か自信満々で「お主なら問題ない！」とか言い出す始末。ああ……何という不運。

この世に想像通りの神はいないのか。

「……一先ず、宇宙戦艦行きを延期だな」

行つて見たい気持ちをぐつと堪える。本音を言えば今すぐにでも行きたい。憧れの宇宙。そして超巨大戦艦。何とも胸が躍るキーワードだ。だがそのキーワードの中にあの爺様が入ると、激しく不安が抱いてしまう。

もし、行くならもう三〇〇万。万が一に備えて、帰りの緊急転送システム消費分を稼いでおいたほうが得策だろう。ミスが無く、直ぐに動ける状態だったとしても、キャピタルに余裕があったほうが何かと便利のはずだ。

「しかし、行つて無事にチートな兵器を作れたとして、その先はどうするかな……」

そう、問題はそれだけではない。大和の言うとおり、兵器や食料を生産出来たとして、それをどうやってこの世界で運用するのか。少なくとも既存の国家や組織では、それらの『記録』がないから余計な誤解や要らぬ疑惑を生じさせるだろう。実際にそれらの兵器を使うなら、極秘裏に運用するか、もしくはどの国家、組織にも属さない第三組織を立ち上げる必要がある。

「最初からこいつが使えれば問題なかったんだよなあ……ちくしょう。結局、あの爺様は余計なことしかしてくれないな」

再び大和はため息を吐いた。

「まあ、とりあえず三〇〇万は置いておいて今、使えるのは二

○万ちよいか……ふむ」

何かあったかな、とスキル付与の画面を開き、大和は閲覧していく。

正直言つて今現在。特にこれと言つて必要なスキルは無い。操縦関係、研究、開発関係はこまめに上げていたから、取得しているスキルのほとんどはSかAランク。

政府や軍上層部、企業との話し合いで必要な交渉技術や、今後必要になりそうなスキルも平均C以上まで上げている。

（残しておくか……いや、待てよ。オレ自身のスキルを上げておくか。訓練学校以来、ほとんどノータッチだったし……）

自分自身。つまり大和本人が発揮出来るスキルを確認する。

肉体強化：S

護身術：C

射撃：D

の三点のみ。操縦関連の膨大なスキルと比べると雲泥の差だった。

「……とりあえずこんなもんか」

画面を操作して、護身術をB、射撃をCに上げてから大和は画面を消した。どこかに移動する際は常に護衛が付いている為、自分

の身を守るならこれで十分だろうとの判断だった。しかし上がったという感覚が掴めないのも、時間が空いたら射撃場にも行くことと思った。

とその時、執務機の固定電話が鳴った。着信音から判断して、相手は伊隅中尉だ。ちなみに大和は公的な場所では伊隅中尉、私的な場所ではやよいさんと呼んでいる。塩川中尉と比べるとかなり公私の区別が緩いが

「はい。何ですかやよいさん？」

『大和君。瓜畑さんが来ているけど、通してもいいかしら？』

「ええ。構いませんよ」

受話器を戻す。部屋の扉がちりと開き、年季の入った整備服に身を包んだ瓜畑技術大尉が入ってきた。少し前に技術中尉から技術大尉へと昇進したのだ。

「お疲れ様です瓜畑さん。今日も徹夜だったんですか？」

「まあな。お前のところは居心地いいからよ。つい夢中になっちゃまうぜ」

どかっと来客用のソファに腰を下ろし、瓜畑は首を軽く回して、筋肉を解した。

特殊技術開発室は、大和の提案した様々な兵器を開発、研究する部署であると同時に大和の方針で、所属する技師や整備兵がチーム単位で集まって、自由に開発、研究することを認めている部署で

もあつた。勿論、本格的な開発、研究を行うには企画書を大和に提出して、承認のサインを取らなければならないが、特殊技術開発室に集めた技師や整備兵は瓜畑を筆頭とした、一癖も二癖もあるメンバーである。使える使えないに限らず、斬新なモノが数多生まれている。成功例としては、対要塞級近接格闘戦斧や「武御雷」の追加兵装パックの「咆雷」などが挙げられる。

「「武御雷」用の新しい追加兵装パックが昨日仕上がってな。大和、またデータ取りさせてくれ」

追加兵装パック……ああ。スラスターを増設した高機動パックの事か、と大和は内心で呟いた。

「あー……オレはちよつと時間が取れませんね。唯依に頼んでもらえませんか？」

瓜畑が不満そうに口元を歪めた。

「ああ？ 篁にか？ 仕上がったと言っても、まだまだ出力やら跳躍ユニットとの同調がうまくいってなくてな。結構暴れまわると思うから、出来ればお前にやってほしいんだが……それによ、ほら、お前って途轍もなく頑丈だろ？ だから推力限界がどこまでなのか確認したかったんだが……」

「オレは実験体扱いですか……まあ推力限界は置いといて、今の唯依なら十分に乗りこなせるでしょう」

「……そうだな。ここじゃあお前の次に操縦うまいしな篁は」

少し宙を眺めた後、瓜畑は納得したように頷いた。

「じゃあ、パックのことはそれでいいとして、大和よお。例の機体、どこで稼動試験するつもりだ？　確か、外装が来週中に仕上がる予定だろ？」

例の機体と言うのは、有澤重工で建造されている二機の戦術機の事だ。瓜畑も裏でこの戦術機開発に関わっているのだ。

「一応、歩哨やら何やら立てて斯衛軍の演習場で行おうかと思つてたんですが……思いの他、演習場のスケジュールが詰まっています……。無理なら海上でやろうかと思っています。幸い、海軍には色々と貸しがありますしね」

「ああ？　稼動試験を海でやるってか？　また何とリスクが多いことするなあおい。どこの潜水艦がうるちよろしてんぞ？」

「あくまでも最終手段としてです。勿論、オレとしては陸地でしたいんですが、軍の予定に割り込むわけにはいきませんしね……」

困ったような顔で言つた大和。

「……まあ、そういえばそうだな。とにかく連絡は速めにしてくれ。楽しみにしているからな」

「了解。ところで瓜畑さん。話は大きく変わるんですが、ちょっと見てもらいたいモノがあるんです」

大和は執務機の引き出しから、昨日引いたばかりの設計図を机に広げた。

「んー……おいおいなんだこりゃ？」

近づいてきた瓜畑が設計図を見るなり、目をぱちくりさせてそう言った。設計図の右上に書かれている形式番号から、「夕雲」の改修機であることは分かったが、「夕雲」の面影はほとんど消え、異形の姿をしている。何より目に付くのは巨大な右腕。足元まで伸びた腕と、鷲の様な鋭い鉤爪があまりにも禍々しい。

「M B F - T Y P E 9 4 - K M F - X 0 1。機体名は「紅蓮」。新技術の輻射波動機構を内蔵した戦術機です」

「……随分とバランスが偏った機体だな。その前に輻射波動機構って何だ？」

設計図を見ながら瓜畑が問う。

「マイクロ波誘導加熱ハイブリットシステムです。高周波を短いサイクルで対象物に照射。膨大な熱量を発生させて、爆発と膨張を引き起こす機構で集束させて砲撃も可能です」

「……つまりは電子レンジか。機械は元よりB E T Aにやるとんでもねえことになりそうだな。それにしても、また面白いモノを作りやがって……」

やれやれと言った感じで腕を組む瓜畑。

「感想は？」

「言っただろう。面白いモノって。んで、いつから始めるんだ？」

にやりつと瓜畑が笑う。どうやら興味津々のようだ。

「今日か明日ぐらいに各メーカーに連絡して、部品の生産を依頼します。超特急でやってもらう予定です」

「なら部品が揃うのは来月の終わりぐらいか？ 改修に使う「夕雲」の手配は？」

「既に準備できています。三日後に搬入する手はずになっています」

「用意がいいな。相変わらず……」

「紅蓮」の設計図を手早く纏める瓜畑。

「任せても良いですか？」

「ああ。いいぜ。中々に面白そうだからな。じゃあオレは格納庫に戻るわ。明日ぐらいから簞をしばらく借りるぞ」

「ええ」

「じゃあな大和」

ひらひらと手を振って、部屋を出て行く瓜畑を見送った後、大和は一息つけるために部屋の隅においてあるコーヒーマシンへと向かい、手早くコーヒーマシンをカップに注いだ。

「さて……」

コーヒを啜りながら、再び執務机に腰を下ろす。そして別の引き出しに収めていた一冊の計画書を取り出した。

しばらくその計画書を見つめた後、大和は椅子に背中を預けた。

「まあ……何だ。原作はかなり悲しかったからな。だから……オレがいるこの世界では、白銀 武や鑑 純夏を筆頭に、それぞれの幸せを掴んで欲しいな」

それは大和の切実な願いだった。

「とにかく、あんなエンディングは一度でたくさんだ。オレが目指すエンディングはハッピーエンドしかありえないからな」

大和はカップに口をつけ、後数時間後には会えるであろう、訓練兵達に思いを馳せた。

ちなみに執務机の上に置かれている計画書の表紙にはこう記されていた。

『梁 泊式史上最強の衛士育成計画』と

第十六話 白い刃とチートな能力の再確認（後書き）

どうもいんでぐらです。

今回のあとがきは皆様のご意見を聞きたい為に書きました。

次話では君望や君季からキャラが登場する予定なので、現在、両作品をプレイしながらキャラのイメージを再度掴みなおしているのですが……一番てこずらせてくれるのはあのヘタレ主人公です。本当、こいつは駄目だ。あいまいだ。プレイヤーを心底悩ませてくれる。マジで許せん。水月をあんなことなこんなことにするなんて……かあー許せん！ 奴にはこの作品で地獄を見せてくれる！

と、ご意見を伺いたいののは、そのヘタレのことなんです。

こいつを生かすべきなのか、それとも礎にしてくれようか悩んでいます（武ちゃんは死なせませんよ。もう決まっています）。生かすならあの二人のどっちかとくつつき、死んだなら大和君が搔つ攫う……なんて事考えています。

このヘタレの処遇に関して、ご意見がある方はどうぞ、ご記入をお願いします。

では、次の更新で。いんでぐらでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7803t/>

チート能力を使って世界を救うはずが.....?!

2011年11月20日13時46分発行